

ラブライブ！サンシャ
イン！！×ウルトラマ
ンZ～遥かに輝き！0か
ら1へ！！

ワラー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

輝きたい!!」

スクールアイドルμ_sに憧れる高海千歌と人々を守りたいと願う夏川ハルキ。

地球に現れる怪獣を倒す為、ウルトラマンZとして立ち上がる!!

これは輝きを探す者達とウルトラマンとして戦う者の物語

目次

第1話	輝きたい!!／ご唱和ください我	
の名を	前編	1
第2話	輝きたい!!／ご唱和ください我	
の名を	後編	12
第3話	転校生を捕まえろ!!／戦士の心	
得	前編	23
第4話	転校生を捕まえろ!!／戦士の心	
得	後編	50
第5話	ファーストステップ／生中継!	
怪獣輸送大作戦	前編	61
第6話	ファーストステップ／生中継!	
怪獣輸送大作戦	後編	84

第7話	ふたりのキモチ／二号ロボ起動	
計画	前編	100
第8話	ふたりのキモチ／二号ロボ起動	
計画	後編	118
第9話	ファースト・ジャグリング	
編		129
第10話	ファースト・ジャグリング	
後編		137
第11話	ヨハネ墮天	
前編		147
第12話	ヨハネ墮天	
後編		161
第13話	PVを作ろう／神秘の力	
編		183
第14話	PVを作ろう／神秘の力	
後		

第29話 友情ヨーソロ 後編 | 490

第30話 はばたきのとき 前編

593 第38話 メダルいただきます 前編

501

第31話 はばたきのとき 後編

515

第32話 サンシャイン!! 前編

532

第33話 サンシャイン!! 後編

545

第34話 守るべきもの 前編 |

559

第35話 守るべきもの 後編 |

569

第36話 叫ぶ命 前編 |

576

第37話 叫ぶ命 後編 |

589

第1話 輝きたい!!／ご唱和ください我の名を 前編

普通な私の日常に突然訪れた奇跡

それは東京に行っていた時だ。親友の曜ちゃんと一緒に観光を楽しんでいる時、店頭
にいたメイドさんからチラシを受け取ろうとするが、突然の風で飛ばされてしまう。近
くにあるチラシは拾うことが出来たが最後の一枚が遠くに遠くに飛んでしまい、風がお
さまった頃になんとか手に取る。

その時ふと目に入ったTV画面に映っていたものに心を動かされた。

スクールアイドル

「スクールアイドル部です!!」

私、高海千歌は浦の星高校、入学式で部活の勧誘をしている。

「春から始まる、スクールアイドル部!」

親友の曜ちゃんもチラシを配りながら勧誘をしているが中々生徒は受け取ってくれ
ない。

「あなたも、あなたも!スクールアイドルやってみませんか?輝けるアイドル!スクー

ルアイドル〜!!」

メガホンを持ち声を前以上に声を張って宣伝をするが、皆気に止める事無く立ち去ってしまう。

「千歌ちゃん…」

曜ちゃんが励ますような声をかける中、私のテンションは凄まじく下がっていった。

今日の行動を語る上で、この事も話すべきだろう。

「こんな田舎じゃ無理だつて〜」

私の姉、美渡姉ちゃんの声が1階から響いている。私はスクールアイドル、μ'sのメンバーのポーズを取り、曜ちゃんに見てもらっていた。

「本当に始めるつもり?」

曜ちゃんの質問にも即答でYesと答える。新学期が始まったら部活を立ち上げる為、プレートまで書いたのだ。部員も居ないし、曜ちゃんが水泳部をやってなければ誘っていた事も伝える。

「でもどうしてスクールアイドルなの? 今までどんな部活にも興味無いって言ってたでしょ」

曜ちゃんの疑問も当然だ。今まで夢中になれることな無くて部活もやってなかったから…

ふと現在の時刻を見ると8時半、私と曜ちゃんは猛ダツシユで実家兼、旅館である十
千万を後にした。

「スクールアイドル部です…」

時は現在、生徒も私と曜ちゃんを残したまま二人でうなだれていた。

「どうした？随分元気が無いじゃないッスカ」

声の主がした方向に一人の男の子が手を振って近づいてくる。

「ハルキ君！」

私は気持ちを切り替えて男の子、夏川ハルキ君に答える。黒髪短髪の爽やかな笑顔が特徴で曜ちゃんと同じく幼なじみだ。

「ねえ、ハルキ君もスクールアイドル部の部員集めの勧誘手伝ってよ」

私は半分涙目になりながらハルキ君に助っ人をお願いするが当の本人はピンときていない。

「なんスか、スクールアイドルって？」と聞くハルキ君に曜ちゃんが概要と私がやりたいことが出来たことを伝えてくれた。

「よし、じゃあ俺も千歌ちゃんの為に気合い入れて勧誘するか！」

と協力してくれるが見たところ新生は一人も居ない状況に肩を落としていたが、正門に入っていく女の子二人を目にする。一人は茶髪のおっとりとした印象を受ける女

の子、もう一人は赤毛の小柄な生徒であり、オレンジのリボンをつけている事から一年生なのだろう。

「美少女…」

そんな曜ちゃんの声を聞きながら私は二人を勧誘する。

「あの、スクールアイドルやりませんか！」

「ずらっ？」

茶髪の子のずらっ？という方言が気になったが勧誘を続ける。

「大会も開かれて凄く有名になるツスよ〜」

とハルキ君も勧誘をしている。しかし、返事に困っているようなので私は赤毛の子に

も話を振ってみたが…

「ぴぎゃー!!」

凄まじい奇声を発し思わず尻餅を着く。どこからこんな声が出るのかと思う中、茶髪の子から「ルビィちゃんは究極の人見知りずら」という声を耳にした。

その時バキバキと枝が折れる落から別の悲鳴が聞こえてくる。

頭の右側にお団子を作った紺色の髪の女の子だ。リボンもオレンジの為一年であることは解ったが着地時の衝撃の為か膝が笑っている。その上カバンも落ちてきて頭つぶつかり悲惨な状況であった為、大丈夫かと声を掛ける。

「ここはもしかして地上〜?」

女の子は顔をニマアと笑いながら問い、曜ちゃんとハルキ君が「うわあ…」と引き気味な声をあげる。足の状態を問うが、ヨハネだか厨二病のような返事が返ってくる。「色々大丈夫じゃない!」と結論付けていたが茶髪の子の「善子ちゃん?」という声に女の子は顔をひきつらせる。

「やっぱり善子ちゃんだ!花丸だよ?幼稚園以来だね」

と再開を喜ぶ。善子ちゃんはしらばっくれているが、花丸ちゃんが急にジャンケンをし、中指と小指だけを曲げた状態のチョコキを出したことで確信をする。ハルキ君は善子ちゃんと同じように右手でチョコキを作るが上手く出来ず手首を振って諦めていた。善子ちゃんは叫びながら

「善子言うな!私はヨハネ、ヨハネなんだから〜!」

とその場を走って立ち去る。花丸ちゃんは善子ちゃんを、ルビィちゃんは花丸ちゃんを追うような形で後にした後、私は「3人を後でスカウトに行こう」と意気込みを口にする。曜ちゃんは乾いた笑いをしながら私を見ていた。

その後、ハルキ君の携帯電話から着信音が鳴る。電話を終えたハルキ君は私達に仕事が出来たからと答え、急いで学校を後にした。

「ハルキ君が急いで学校を出ていったって事は…」

曜ちゃんが私に聞き、私も苦い顔で答える。

「怪獣…」

数年前、空想上の生物としか言われていなかった怪獣が現れそれに対抗する組織、ストレイジが設立された。ハルキ君は私達と同じ高校生でありながらストレイジに所属するパイロットでもある。怪獣の脅威から私達を守ってくれているが、ハルキ君も危険と隣り合わせの任務をこなしている。私達はどうする事も出来ずに正門から出ていく彼を見守るしか出来ないでいた。

「こんなだから、ウチはどんどん予算を削られるんだぞ!!」

長官の怒号に対し、ヘビクラ隊長が

「すみません長官！コイツも反省してるようですよ…。なつ、ハルキ」

俺、夏川ハルキの尻を後ろでつねりながら謝罪をする。

沼津に出現した怪獣、ゴメスを撃退したが同時にビルを破壊してしまい長官に絞られていた。

「ハルキ、命を守りたいっていうお前の気持ちは大切だが、せっかくだから命だけじゃなく規律も守ってくれ。」

ヘビクラ隊長の言い分も最もだが自分は怪獣の近くにいた犬を守るために戦線に出

てしまい、怪獣に対抗する為の特空機、セブンガーが倒れこみビルを大破させてしまった。

「万が一、セブンガーがお前を踏んでしまったらパイロットのヨウコに一生消えないトラウマを植え付けることになる。」

ヨウコ先輩は隊長に、もう気にしていないとフォローをしてくれているが、自分の行動のせいで先輩にトラウマを植えてしまった時の事を考えると申し訳なさで一杯になる。言いたいことを終えたのか隊長の顔に笑顔が戻り、瓦礫撤去の任務に行つてこいの命令を聞くと自分も「オッス」と答え、その場を後にした。

「あなたですの？このチラシを配っていたのは…」

ハルキ君が正門を去り、声をかけられた方向を振り返ると黒髪、おかつぱ頭の女の子が立っていた。

「いつ何時、スクールアイドルがこの浦の星に出来たのです？」

棘がある口調なのが気になるがチラシを見てくれたのもあり、私は勧誘を続ける。一年生にはどんどん声を掛けないと！

「千歌ちゃん、その人は新入生じゃなくて3年の…」

曜ちゃんが私の耳元でポソポソと何かを伝え、その言葉に私は絶句した。

「嘘、生徒会長……」

「つまり、設立の許可どころか申請すらもしていない内に勝手に部員集めをしていた訳？」

生徒会室に連行された私は先ほどの生徒会長、黒澤ダイヤさんに問われている。悪気は無く、皆もやっていたので自分も乗じてと笑いながら答える。部員の人数も自分一人と言うことも伝えるがダイヤさんは青筋を立て、眉間にシワを寄せながら手を机に叩きつける。

「とにかく、こんな不備だらけの申請書は受け取れませんわ」

私が文句を言うなか、曜ちゃんが一旦戻ろうとドア越しから助け船を渡してくる。

「じゃあ、五人集めたらまた持つてきます」

そう言つて生徒会室を出ようとするが、ダイヤさんからの返事はN.Oの一言。彼女はきっぱり言い切った。

「わたくしが生徒会長でいる限り、スクールアイドル部は認められないからです!!」

横暴すぎる返答に私の「そんな〜」と言う声が生徒会室にこだました。

「あくあ、失敗しちゃったな……。でも、どうしてスクールアイドル部はダメなんて言うんだらう……」

夕方、入学式が終わつてお母さんからの届け物を船で届けている最中、私はそんなこ

とを口にしたり。

「嫌いみたい……。」

曜ちゃんが以前、クラスの子が私と同じようにスクールアイドル部を立ち上げようとした時も断られた事を伝える。生徒会長の家は古風な家らしくスクールアイドルのようないチャラチャラしたものは嫌っているのではないかとの噂があるようだ。

船から降りて目的地に着くとウエットスーツを着たポニーテールの女の子が「遅かったね」と口にする。

私と曜ちゃんのひとつ上の幼なじみ、松浦果南の家に回覧板とみかんを届ける為に来たのだ。

「それで、果南ちゃんは学校これそう?」

曜ちゃんが果南ちゃんに聞くがお父さんの骨折と店のダイビングショップの手伝いがまだ残っている為、復学するには時間がかかるようだ。

「そうか。果南ちゃんも誘いたかったんだけど……。私、スクールアイドルやるんだ!」

果南ちゃんに伝えるが自分は3年だから難しいかなと答え、そう言いながら家から持ってきた干物を私に渡す。もう少し休学が続くから学校で何かあれば伝えて欲しいと頼まれ果南ちゃんの家を後にした。

船から降り、家に帰ろうとした時にエンジ色の髪をした女の子が服を脱ぎ水着になっているのを見つけた。

「嘘…、まだ4月だよ。」

海開きもまだで、水温も低い状況で泳ぐのかといった考えを他所に女の子は海に向かつて一直線に走っていく。私は急いで彼女を止めるが「行かなくちゃいけないの!」と聞く耳を持たない。二人でもつれている中足を滑らせ…海中に仲良くダイブした。

夕方、セブンガーに乗り瓦礫撤去の任務をこなしていた俺はヨウコ先輩からの通信に耳を疑った。

「ハルキ、沼津に隕石が接近中…。この動き、隕石じゃ無い…。怪獣!」

その通信の直後、巨大な隕石から巨大な影が現れた。朝に出現したゴメスと呼ばれる怪獣は20メートル、セブンガーの約半分の体長だが今目の前にいる怪獣は50メートル前後とセブンガーと同じくらいサイズの巨大さであった。見た目は鮫や鰐を思わせる大きな口で建物をなぎ倒している。町をこれ以上破壊される訳にはいかない為、俺はセブンガーを前進させ交戦しようとするが、ストレイジのユカ先輩から同じ場所に高熱源体が接近しているとの通信が入る。

そこに現れた熱源体は怪獣と同じくらいの全長の巨人だった。白い二つの双眼、青と

銀色の体で頭にはトサカのような突起物、胸の水晶にはアルファベットのZが付いている巨人が怪獣に向かって攻撃を仕掛けていく。最初こそ巨人が優勢に立ち回っていたが怪獣の反撃に苦戦している様子だった。周辺の被害の拡大を抑える為、改めてヘビクラ隊長に許可を申し立てる。

「十分に注意しろー！」

と隊長の言葉に「オッス！」と返し俺も巨人を援護する為に戦闘を開始する。

セブンガールのバッテリーを新しいものに交換し怪獣に突っ込むが、怪獣の力に押されてしまいビルに激突してしまう。巨人がセブンガールを引っ張りあげ、こちらと交戦の意志が無いことを再度確認すると今度は息を合わせて怪獣を殴り倒す。しかし、怪獣は素早く体制を立て直し、魚の尻尾に該当する部分から炎を噴射し、ジェット機のようにセブンガールに突撃してきた。

ヨウコ先輩から進行方向に避難所としている小学校があることを聞き、巨人にダメもとで手を貸すことを音声で伝える。巨人は言葉が通じるのか援護をしてくれるが、セブンガールのバッテリーも残り30秒という時間を許さない状況にあり、巨人の胸の水晶も青から赤に音を立てて点滅している。そんな中怪獣の体温が急上昇しているとユカ先輩からの通信が入り、怪獣の全身からミサイルが発射され

俺の意識は無くなった。

第2話 輝きたい!!／ご唱和ください我の名を 後編

「くしゅん！大丈夫？沖繩じゃないんだから…」

私、高海千歌は海で一緒にダイブしてしまったエンジ色の髪の女の子にタオルをかけてあげた。

ダイビングショップもあるのにと付け足すが女の子は海の音を聞きたかったと答えた。理由を聞くと黙ったままだった。

「分かったら、もう聞かない。海中の音ってこと？」

と話題を切り出すと女の子は笑みを浮かべ先程の理由を答えてくれた。

「私、ピアノで曲を作っているの。でも、海の曲のイメージが浮かばなくて…」

作曲を出来ることに驚いたが制服はこの辺りの高校では見かけないことからこの高校かを聞いてみることにした。女の子は東京から来ており、スクールアイドルがたくさんいることを私は知っている。

「じゃあ、スクールアイドル知ってる？東京だと有名なグループも沢山いるでしょ？」

「何の話？」

私の期待とは真逆で、今朝のハルキ君と同じような回答に思わず「へ？」と答えてし

まう。

「まさか知らないの？学校でアイドル活動をして、全国大会もあって、ドーム大会も開かれる位有名なんだよ！」

と私はスクールアイドルについて熱弁をする。知ったのはつい最近だけだと笑いながら付け足しをしたが。女の子はずっとピアノだけをしてきた事からスクールアイドルの事は疎く、私はスクールアイドル々々sの映像をスマートフォンで見せた。

「なんというか…普通？」

女の子は慌てて、芸能人みたいなイメージを持つていたから…と訂正するが私が最初にした印象と同じ事を伝える。

「あなたみたいにピアノを頑張ってきたとか、大好きな事にのめり込んできたとか、夢があるとかそんなの無くて…。」

私の今までを振り返り女の子に伝える。普通の星に生まれた「普通星人」で、どんなに変身しても普通でそれでも何かあるんじゃないかと思っていたけど、気付いたら高校二年になってた。

「そんな時、出会ったの。あの人達に！」

東京で見たスクールアイドル々々sの映像を思い出す。

「みんな普通の高校生なのにキラキラしてた。それで思ったの。私もみんなで一生懸命

練習してみんなで心を一つにしてステージに立つと、こんなにも格好良く、感動出来て、輝けるんだって!!」

気付いたら全部の曲を聞いて、動画も見て、歌も覚えた。

「そして思ったの。私もみんなと一緒に頑張つて、この人達が見た景色を目指したいって。私も輝きたいって!!」

「ありがとう。」

女の子がお礼をする。私も頑張れと、エールを送られた気がしたと言い、「スクールアイドルになれるといいわね。」と応援をしてくれた。私も嬉しくなり、お礼を言うが、お互い名前を名乗つてない事に気付き、目の前にある丘を指差し自己紹介をする。

「私は高海千歌。あそこの丘にある、浦の星高校に通う高校二年生!」

女の子は同い年であることを伝えると、自分の名前を名乗る。

「私は桜内梨子。高校は…音ノ木坂学院高校」

それは私が憧れるμ'sと同じ高校だった。

「起きなさい、地球人」

俺はその声を耳にし、目を覚まし回りを見渡すと一面真っ黒な空間にいた。怪獣と戦い、攻撃を受けてしまったことを思い出し自分の周囲を再度見渡すと後ろには一緒に

戦った巨人が見下ろしていた。

「あんたは……？」

『私はウルトラマンZ。申し訳ないがお前は死んだ』

死んだ……。自分が置かれている状況に啞然としているが、それよりも守らなければならない避難所とされている学校にいる人達も同じ末路を辿ってしまう事が容易に想像出来た。

「どうすんだ！このままじゃ避難所が!!」

『一つだけ手がある。私とお前が一つになればもう一度戦える。手を組まないか？私もお前の力が必要なのでございます。』

巨人からの手段は俺と共闘する事だった。避難所を守る為にどんな手も使うと思っていた俺はその事について即答で了承した。

だがこの時間が許されていない中、これまでのやり取りのでもどうしても気になる事があり口にしてしまう。

『言葉通じてる？』

「いや……通じてるし手を組むのにも問題はないけど、言葉遣いがちよつと変というか」

このウルトラマンZという巨人、日本語が下手クソだ。まるで日本語を最近覚えて話せるようになった外国人が言い間違えるような話し方をする。そんな俺の考えを他所

に乙は

『参ったな…、地球の言葉はウルトラ難しいぜ…。』

と呟き、いまいち締まらない。

再度、お互いが協力する事を確認すると乙の体が光輝き、黒い持ち手と青い縁取りが特徴の分度器に似た機械が俺の手元に現れた。

『その乙ライザーのトリガーを押します。』

俺はトリガーを押すと目の前に長方形の光のゲートが現れ、その中に入る。

その瞬間、一枚のカードが俺の手元に現れる。カードには俺の顔と後ろには乙のイラストが描かれており、乙ライザーの中央にセットする。その後、俺の腰に青いケースが装着され、恐る恐る開くと乙とは違うウルトラマンの横顔が描かれた3枚のメダルが入っていた。

『ゼロ師匠、セブン師匠、レオ師匠のウルトラメダルだ。ストリットにセットしちゃいなさい。師匠達の力が使える筈だ。』

師匠いっぱいいるんだなと思いつつながら俺は右手にあるウルトラメダルを乙ライザーのストリットにゼロ、セブン、レオの3人の師匠の順に入れていく。『おお！ウルトラ勘がいいな！』と乙から称賛される。

『じゃあ次はメダルをスキキャンだ』

「あのさ、急いでるんだけど……!」

丁寧に説明してくれるのは有難いが、こんなマイペースに説明をされている内に怪獣が避難所を破壊してしまうのではないかと思いいを急かす。Zはこの空間は現実世界の時間とは異なりここでの1分は外での1秒に相当するとの補足する。しかし怪獣の大きさを考えると安心は出来ない為、俺はZライザーの端をつまみ、左から右にスライドさせる。レオと呼ばれるウルトラマンをZライザーがスキャンした直後Zが巨大化し俺の後ろに現れる。

『よし!そして俺の名前を呼べ。』

「名前なんだっけ?」

『ウルトラマンZ (ゼット)!!』

「ウルトラマンZ (ゼット)?」

度忘れした俺がZの名前を言うが気合いを入れてと渴を入れられ、改めて気を引き締める。

『ご唱和ください、我の名を!ウルトラマンZ (ゼット)!!』

「ウルトラマン、Z (ゼエエツト)!!」

これで怪獣と戦える:そう思っていた俺の予想とは裏腹に何も起きない。嘘だろ?とZライザーを見るなか、『トリガー、トリガー最後に押すの』とZが付け足しトリガー

を押すという、最悪な初変身であった。

ヨウコ先輩を攻撃しようとしている怪獣に対し、ウルトラマンZとなった俺は蹴りを入れて地面に着地した。先程の見た目とは異なり頭部に二つの突起が追加されている。避難所は無事な事を確認し怪獣を迎撃する為に空手の構えを取る。

『息を合わせて戦うぞ、地球人!!』

Zの言葉に「オッス！」と答え怪獣に接近し正拳や手刀を打ち込んでいく。この形態の素早い動きなら怪獣が攻撃する前に技を打ち込むことは難しく無い。

怪獣はセブングーを攻撃した時と同じようにミサイルを撃とうとするが、Zの頭部の突起から光の刃を紐で結びヌンチャクの状態にする。ミサイルをヌンチャクで打ち落としながら怪獣を攻撃する。Zも『おお！これが宇宙拳法秘伝の神業か！ウルトラすげえ！』と驚嘆の声をあげる。

だが、怪獣も負けじと尻尾のジェットで体当たりをしビルをなぎ倒しながらそのまま空中に飛ぶ。

戦闘機の如く滞空し、Zを振り払うと口からエネルギーを貯めて体を硬直させる。怪獣に対し、こちらも切り札ともいえる光線を撃つために両腕で漢数字の二を作り、右腕は右斜め上、左腕は左斜め下にし腕を十字に組み直す。

『ゼステイウム光線!!』

攻撃を相殺する事なく押しきり、怪獣はそのまま爆発した。

怪獣を倒し一段落をしたと思っていたが乙から

『怪獣から散らばったメダルを回収してくれ』

と頼まれる。そのメダルはこの宇宙を救う希望の物らしく、『お頼み申し上げます』との言葉遣いに疑問を浮かべつつ変身を解き、瓦礫で散乱しているなかメダルを探す。足元を見渡すと円形の2つの物体を発見し、手に取る。

「乙が探しているメダルってこれか？」

1枚は頭にトサカが付いたウルトラマンのメダル、もう1枚は角の生えたウルトラマンのメダルであった。乙の師匠とは違った外見のメダルを見ながらベルトに装着されであるケースに収納すると、ヨウコ先輩の自分を呼ぶ声に返事をする。

どうやって脱出出来たのかを問われ

「あの巨人にギリギリで助けられた」と答える。悪運の強さに呆れながら本部に俺の生存報告をし、帰還した。

本部に帰還し今日起きた事を報告書としてまとめ、提出する頃にはもう0時を過ぎていた。

「もう一度?」

私は翌日の朝、曜ちゃんに生徒会長のダイヤさんにもう一度頼む事を伝える。

「諦めちゃダメなんだよ、あの人達も歌っていた。その日は絶対来るって」

憧れのスクールアイドル、μ'sの曲にある歌詞を曜ちゃんに教え、私の本気が伝わったのか入部申請書に自分の名前を記入する。

「私ね、小学校の頃から千歌ちゃんと一緒に何かやりたいなって。だから、水泳部と掛け持ちだけど…はい!」

満面の笑みを浮かべて私に用紙を渡す。絶対凄いスクールアイドルを目指すことを心に決めたが用紙を水溜まりに落としてしまい、いまいち締まらないオチになっってしまった。

「そうだ曜ちゃん、昨日の夕方のニュース見た?」

「見た見た!沼津に怪獣が現れて巨人が倒したってニュースでしょ!」

バスの中で昨日の怪獣騒ぎについて話す。あの巨人について、ハルキ君なら何か知ってるかも知れないとのことで今日学校に来てたら聞いてみようとも思っていた。怪獣が出てきた事は不安だが巨人が自分達の味方だと信じたい。だが、今の私にはある意味怪獣より不安なことにこれから直面しなくてはならなかった。

「良くこれで持つて来ようという気になりましたわね…しかも一人が二人になっただけ

ですわよ?」

生徒会室で昨日と同じ表情を浮かべながらダイヤさんは私に言う。

「簡単に引き下がったらダメと思ひまして。生徒会長は私の根性を試しているんじゃないかと!」

そんな私の意気込みをダイヤさんはバツサリと否定し、「なぜ用紙がこんなに汚れているんです…」と、ぶつくさ言っていたがスクールアイドルをやるにあたって曲は作れるのかという質問を投げかけられる。

「曲?」

私は一瞬意味が解らずフリーズしてしまいが、ダイヤさんがラブライブの基本を説明する。

「ラブライブに出場する為にはオリジナルの曲でなければならず、スクールアイドルを始める時に最初に難関になるポイントですわ。」

東京ならいざ知らず、うちの高校でそれが出来る生徒はそう簡単にいないだろうと言うダイヤさんの言葉に私も曜ちゃんも肩を落ととし生徒会室を後にした。

スクールアイドルの大変さを知ったが、やりたいことを見つけた私はこんな事で引き下がる訳にはいかないと思ひ、音楽の教科書を片手に作曲をしようと試みる。

「出来る頃には卒業してると思うよ。」

と曜ちゃんの呆れたような返答が帰ってきた。

「おはよう、千歌ちゃん、曜ちゃん！」

その声に振り向くとハルキ君が教室に入ってきた。私は昨日の怪獣と巨人について聞いたが沼津は大きな被害はあまり無く、あの巨人はウルトラマンという名前で怪獣の目的は不明だと教えてもらった。

スクールアイドル部に曜ちゃんが掛け持ちで入ってくれる事を伝える。ダメ元で再度部員になつてくれないかとハルキ君に頼むと、急な任務で正式な部員にはなれないけどマネージャーで良いならと協力をしてくれる事になった。

ホームルームの時間に担任の先生から転校生の紹介をするとの説明があり、生徒が教室に入る。

くしゃみをするエンジ色の髪の女の子、桜内梨子ちゃんであった。

「東京の音ノ木坂高校から来ました。桜内梨子です！」

（♪決めたよHand in Hand）

「奇跡だよ!!一緒にスクールアイドル、始めませんか?」

「ごめんなさい!!」

ハルキ君が椅子からずり落ち、私の奇跡が一瞬で崩れ去った。

第3話 転校生を捕まえろ!! / 戦士の心得 前編

私、桜内梨子は先日浜辺であつた女の子、高海さんからのスクールアイドル部への勧誘にうんざりしていた。休み時間、昼時、体育のランニングと何度も何度も勧誘され、夏川君がその度に謝罪をするといった事を繰り返していた。転校初日から飽きることも無く続けているが諦めてくれる兆しが一向に見られない。作曲ができる人を探しているらしいが私にはそんな事をしている暇は無い。あの日のコンクールから私のピアノへの情熱は冷めているのだから…。

俺、夏川ハルキはウルトラマンZと一体化した翌日ストレイジで今後の怪獣に対する対応を聞いていた。

「昨日現れた宇宙怪獣ゲネガーグの出現以来、地底で眠っていた怪獣達のバイタルが大きくなっている…」

「ゲネガーグが怪獣達を起こす目覚まし時計になつたって事？」

ヨウコ先輩の質問に対してユカ先輩が頷き説明を続ける。

「因果関係は不明だけど休眠している怪獣の監視を強化すべきかと…。」

ユカ先輩の説明を聞きながら怪獣被害がこれから増加していくことについて考えていると、ウルトラマンZについての対応についてのストレイジの決断について報告される。

「ウルトラマンZについてですが彼に関しても引き続き調査をつづけます。」

と敵視はされていないようで一先ず安心した。

「よし、それじゃ各員気を引き締めていくように。解散!」

と蛇倉隊長の号令がかかり隊員達が解散するなか、俺だけ隊長に呼び止められる。

「ハルキ、あれから体の調子はどうだ?」

「えっ…。特に問題はないツス。」

ウルトラマンZと一体化して傷は治り、これといって体の違和感も無い。

「そうか、何せ死にかけたんだ。異常があつたら直ぐに言えよ」

と俺の肩を叩きながら声をかける。

俺はそのまま学校に行くためストレイジを後にした。

俺は自分のバイクを走らせ学校に向かい、ホームルーム前には席についた。千歌ちゃんや曜ちゃんからウルトラマンや怪獣の事について色々聞かれたが余計な心配をかけたくない事もあり、ウルトラマンについては今のところ敵対する可能性は少ないとだけ

答えた。千歌ちゃんの今の目標であるスクールアイドル部の部員集めは難航しているみたいだが、本気でやりたいという事を改めて知りマネージャーになることも承諾した。怪獣の出現やストレイジの任務で毎回出るのは難しいかもしれないが、幼なじみのやりたいことを純粹に応援したいと思う。その後はホームルーム時に桜内さんが転校生としてやって来て千歌ちゃんがスカウトをする、桜内さんが断り俺が彼女に「ホントにごめんね」と謝るのを繰り返すといった事を昼頃まで繰り返していた。

このループも昼休憩の時間にはそれなりに収まり、俺は昼食のラーメンを食べている時、蛇倉隊長から怪獣が出現したという緊急連絡を受け俺は学校を飛び出しストレイジに向かう。バイクを走らせながら怪獣が今以上に活動をするとこんな何気ない日常も送れなくなるかもしれないと思う中、ストレイジとして、そしてウルトラマンとして皆を守りたいという思いも強くなっていった気がしていた。

ストレイジ向かった俺はセブンガーを操縦し怪獣が出現したという静岡県東の地区に着陸した。怪獣は透明になる能力を持っており対処法をユカ先輩に聞くも現時点での対策は難しいとの事だった。対応策は無くても戦わなければ町や人への被害が増えてしまう。俺は透明になる怪獣がその瞬間いたであろう場所にパンチャキックを繰り出すの手応えが全く感じられなかった。そんな中、俺の腰に着けてあるゼットライザーの事を思い出す。ウルトラマンZになればあの怪獣と対等に戦えるんじゃないか

と思った俺は、変身するためにトリガーを押す。しかし、初めて変身した時とは違いゼットライザーは何も反応はしなかった。

「Z?やるなら今だろ!!」

そんな事をぼやいたのも束の間、怪獣は棒立ちになっているセブンガーの背後を取り、背中のバッテリーを角で突く事で、電気を吸収したのだ。大きな衝撃とバッテリーの残量が空になった時に怪獣は透明になり、その場から離脱して戦いは一旦終了した。

俺はストレイジに帰投しメンバーがいる作戦室に戻る為廊下を歩いていた所、ヨウコ先輩がこっちに向かってくる。

「良かった…。アンタ本当に頑丈だね。」

「ヨウコ先輩、すみません…。」

ヨウコ先輩を心配させ、怪獣に手も足も出なかった事もあり俺は頭を下げる。

「まあ、姿が見えないんじゃないやどうしようもない。対策考えよう。」

「あざっす…。」

ヨウコ先輩がフオーロしながらその場を後にした時、ウルトラマンZに変身するための空間が現れる。そのウルトラの空間なる物に入るとウルトラマンZが立っていた。

『よう!夏川ハルキだっけ?』

「ちよつと…、さつきは何で変身出来なかったの?」

俺はゼットに変身出来なかった理由を聞く。

『ちゃんとギリギリまで頑張つて俺達の気持ちさがグツと出来上がってからじゃないとウルトラマンになれないんですよ。』

先程の戦いを思い出すと俺は心のどこかでウルトラマンになる事が前提で戦っていたのかも知れないと思いつつゼットライザーのトリガーを押ししていた。ウルトラマンになれるからといって簡単にその力を使うことは出来ないんだなと自分の中で思った後、Zの事について尋ねてみた。

『改めて自己紹介だ。俺はウルトラマンZ。M78星雲、光の国からやって来た。』

改めて彼は宇宙人なのだと言うことを確認しながらZは説明を続ける。

『俺は宇宙の平和を守る、宇宙警備隊のメンバーなんだ。今宇宙のあちこちでデビルスプリンターっていう邪悪な因子を持った怪獣が凶暴化して暴れまわる事件が多発している。先輩達の力が込められたウルトラメダルもその対応策として開発されたんだ。』

スケールが大きくてイメージしにくいのが、あのメダルはそんなにも強力な力を持っている事は理解できた。

『ところが昨日現れた怪獣、ゲネガークが光の国を襲撃してメダルやそれを使うアイテムを丸飲みして逃げ出したんだ。俺は、師匠のウルトラマンゼロと一緒に戦ったんだが師匠は四次元空間に飲み込まれ俺が一人でこの地球に来たって訳。』

やっぱりスケールが大きい…。そんな事を再度思いながらZが『ここまで変なところありまへん?』と関西弁を話してくる。そんなには違和感はないが地球の、それも日本語の方言を言う辺り光の国には絶対日本が好きなのウルトラマンがいるんじゃないかと俺は思った。

『とにかく散らばったメダルを全部回収しないと…。』

「ああ。そうだ、Zって何歳? 大事だろそういうの。これからは二人で一人なんだし。」
上下関係をはつきりしておかないとやりにくい俺がZに聞くがゼットからの返答は予想を越えた年齢であつた。

『大体、5000歳だけ…。』

「えっ、めっちゃ年上じゃん…。」
年齢差4985歳…。こんな人生の大先輩に同じ年か年下と話すような話し方で接していた。

「今までタメ口ですんませんでした!!」

『えっ…。何その言葉遣い、ウルトラ気持ち悪い! 止めて!』

Zさんの表情は変わらないがその口振りから困惑してるのが丸分かりである。

「そういう訳にはいかないんすよZさん。宜しくお願いします!」

Zさんに改めて挨拶をした後、自分の腰に着けてあるメダルケースを指差し、かなり

目立つ見た目をしている為、どうにかならないかと聞いてみる。

『これは地球人の目には見えない物質で出来ている。学校のクラスメイトやストレイジのメンバーにも全然気付かれていなかったぞ。そもそも目立っていない。』

それなら問題は無いかと納得をしてウルトラの空間を出ようとするとふと気付いた。ウルトラマンにも学校とかクラスメイトとかつてあるんだなど。

俺はウルトラの空間を出ると道着に着替えてストレイジ内の道場で一人、空手の稽古をしていた。透明になる怪獣に対応する為試行錯誤をしていると、蛇倉隊長が稽古をつけてくれるとの事で隊長と組手をする事になる。

「自分のタイミングでいいぞ。」

隊長の指示のもと俺は正拳突きや前蹴りを打ち込むが簡単に捌かれ、背負い投げをされてしまう。

「ガハッ……。もう一度お願いします。」

「いつでも来い。」

手招きをする隊長に再度掛かっていくが今度は連続で腹を突かれ、俺の大振りの打ち込みも簡単に避けられてしまう。

背中を見せてしまった俺は即座に振り向き攻撃をしようとするが、隊長の姿は見えず後ろから強烈な蹴りが突き刺さった！何度も攻撃を回避され、視界の外からの攻撃を食

らい続けているとあの怪獣と同じように対処が出来ない事を再認識させられる。

隊長が稽古を切り止めようと後ろを振り向き道場から出ようとすると所を攻撃しようとするも、水月や足に連撃を食らい、意識が飛びそうになってくる。この目の見えない状態だからこそ、蛇倉隊長の攻撃を繰り返す為の気配を読み取る事で隊長の腹に突きを打ち込み一本を取る事が出来た！

「そういう事だよ。」

隊長が俺に足払いをし、顔を覗き込んでくる。

「見えるものだけ信じるな。」

ねっとりした口調でそれだけ伝え、隊長は道場を後にした。

「稽古つけてくれてありがとうございしました！」

隊長の背中にお礼を言い俺は荒い呼吸をする。そうだ、あの怪獣を倒すためには見える物だけに囚われてはダメなんだと…。

隊員服に着替えた俺はあの透明怪獣への対抗策を蛇倉隊長、ヨウコ先輩、ユカ先輩と話し合っていた。

「以後、あの透明怪獣をネロンガと呼称します。」

ユカ先輩からネロンガと命名された怪獣は電気を補食しており、停電が起きている地区が多発していた。その場所と時間のデータから沼津にあるクリーンインフィニティ

発電所に向かっている事が判明した。

「この施設は来週テスト運用されるのですが、テストが成功すると半永久的に電気を作れる事ができる場所になります。」

「ここを制圧されたらどうなるか想像もつかない。」

ユカ先輩の説明を聞きながらヨウコ先輩が最悪の状況を想像する。

「だから、ここに到達される前に倒そう。」

「でもどうやって……?」

透明になり姿が見えない相手と戦うことの難しさを実感している俺はユカ先輩に聞き返す。先輩は「フツフツ……。」と笑いながら対応策を全員に話す。

「私が開発した電解放出弾を使う。電気を溜め込んでいる角の付け根、そこに命中させればネロンガの電気を空气中に放出出来るって事。」

「これであの怪獣と戦えると思う中、「ただし!」とユカ先輩が続けて説明を続ける。

「この弾丸は一発しか無いから。」

「一発?ただでさえ透明になるから当て辛いのに……。」

「仕方ないでしょ。時間が無いなか作つたんだから。」

ヨウコ先輩の愚痴にユカ先輩が返す中、蛇倉隊長が作戦の流れを説明する。

「だから外さないように地上部隊は索敵し、発見次第、奴に発信器をぶち込む。」

索敵は俺が担当することとなった。

「そして電解放出弾を装備したセブンガーでバッテリーを温存しつつ待機し、角の付け根に弾丸を打ち込み電気を放出させる。」

作戦名、ネロンガ電解放出作戦と蛇倉隊長が命名し作戦開始は3日後とする事が決定した。

3日後

私、高海千歌は曜ちゃんと昼休みの中庭で、sの曲を流しながらダンスの練習をしていた。

「また、駄目だったの?」

曜ちゃんが梨子ちゃんへのスカウトの成果を聞いてくる。

「うん…。でもあと一歩、あと一押しって感じかな?」

「本当かな…。」

曜ちゃんが躍りながら疑惑の目で私を見る。

「だって最初は即答でごめんなさい!だったのが最近は、……ごめんなさい。になつてきたし」

「嫌がつてるようにしか思えないけど…。」

と曜ちゃんの返しを聞きつつ、スクールアイドルとしてステージに立つ為の衣装のデザインイラストは出来たのかを聞くと完成したみたいなので一旦教室に戻る事にした。

「どう?」

ドヤ顔の曜ちゃんが見せたスケッチブックのイラストはアイドルというより駅員の格好をしている女の子をしており私は眉を潜めている。スカートを履いているものはないかを聞くとページを一枚めくり、次のイラストを見せる。

「えっ…、これも衣装と言うより制服だしもうちよつと可愛いのではない?」

と2枚目に描かれてある警察官のイラストを見ながら次のものはあるかを聞くと3枚目を開く。

「だったらこれかな? ほしい!!」

「武器持っちゃった…。」

3枚目のライフルを持った軍人のイラストを見ながら絶句する私を他所に「可愛いよね」と感想を述べる曜ちゃん。もつと可愛いスクールアイドルっぽい服は無いのかと聞くと、その質問は予想通りと言わんばかりに次のページをめくるとオレンジの衣装の女の子がスカートを履いてピースサインをしている。ツツコミどころがあるイラスト

を出しながら本命を持ってくるドリフみたいなやり取りを思いだしながら最後のイラストの可愛さに舌を巻く。

「こんな衣装作れるの?」

「大丈夫!なんとかなるなる!!」

と、即答する曜ちゃん。水泳も出来るし衣装も作れるスペックの高さに私も負けていけないと、ダイヤさんを再度説得するために生徒会室に気合いを入れて向かっていった。

「お断りしますわ!!」

「やっぱり!」

私が本日2度目の絶句をする。

「5人必要だと言った筈です。それ以前に作曲はどうなつたのです?」

ダイヤさんの質問に「それはいずれ、きつと!可能性は無量大!!」とお茶を濁す。

「でも、最初は3人しかいなくて大変だったんですね…。μ s (ユーズ) も」

ピクツ…。

「知りませんか?第二回ラブライブ優勝高校、音ノ木坂学院スクールアイドル!μ s

(ユーズ)!!」

ダイヤさんの眉のピクつきとそれを見た曜ちゃんのオロオロとした反応を他所に私

が憧れているスクールアイドルの事を話す。

「それはもしかして、μ s（ミュージーズ）の事を言っているのではありませんか？」
「えっ、もしかしてあれミュージーズって読む…」

私が今まで間違えて読んでたのを自覚した時にはもう遅い。振り返ったダイヤさんは鬼のような形相を浮かべていた。

「お黙らっしゃーい！言うに事欠いて名前を間違えるですって？ μ sはスクールアイドルにとって伝説、聖典、宇宙にも等しき生命の源ですわよ!!」

そんな事を言いながら私に迫る。生命の源？大げさ過ぎるでしょ！
「ち、近くないですか…?」

目の前に詰め寄るダイヤさん、後ろには据え置き型の腰の位置までしかないロツカーに挟まれて私は海老反りの体制になっている。背骨が折れそうなほど痛いダイヤさんの圧に曜ちゃんは若干引ききみで助けてくれない。

「その様子だと偶々見つけて軽い気持ちで真似をしてみようと思ったのですか？」
「えっ?」

軽い気持ちではないが μ sを見てスクールアイドルを始めようと思っていたので確かに偶然、当たらずとも遠からずであった。

「μ sが最初に9人で歌った曲、分かりますか？」

「え、えつと…」

最初に歌った曲?そもそもμ'sを知ったのはつい最近だし、そんなの全く分からない。
い。

「ブー、ですわ!!僕らのlive、君とのlife。通称ぼららら。」

この曲、9人での最初の曲なんだ。と思っていたがダイヤさんは続けて問題を出してくる。

「次、第二回ラブライブ予選でμ'sがA—RIZE（ア・ライズ）と一緒にステージに選んだ場所は？」

「ステージ?」

私は心の中で「分かるか!」と叫ぶ。ア・ライズって何だ?とも思ったがダメ元で囁ちやんにアイコンタクトと口パクで「何か答えて!!」と伝えるが、無理無理と猛スピードで首を振る。

「ブツブーですわ!秋葉原UTX屋上!あの伝説と言えるア・ライズとの予選ですわ!!」

ドヤ顔で答えるダイヤさんが次に出したラブライブ決勝でμ'sがアンコールをした時に歌った曲は答えられたが、曲の冒頭をスキップしている4人は誰?と言う引っかけ問題を出されてしまい、私は悪態をつく。こんなもの分かるか!!

「ブツブツブーですわ!綾瀬絵里、東条希、星空凛、西木野真姫!こんなの基本中の基本

ですわよ!!」

「凄い！生徒会長、もしかして、sのファン？」

やつと曜ちゃんが口を出すのが、ダイヤさんは当たり前と言いかけたが慌てて一般教養ですわと訂正する。

「へえ〜」

私と曜ちゃんがニヤニヤしながらダイヤさんを見つめるとこの話は終わりと言わんばかりに、

「とにかく、スクールアイドル部は認めません!!」

とダイヤさんに追い出された。

「前途多難過ぎるよ〜」

ダイヤさんに二度も部活申請を拒否され私の気分はだだ下がりだ。

「じゃあ…辞める?」

曜ちゃんの質問に私は拒否し、たかが2回失敗したからといって諦めるかと思ひ、気持ちを立て直す。ふとバス停から少し離れた場所に花丸ちゃんとルビイちゃんがいることを発見し4人で一緒にバスに乗ることにした。

「スクールアイドル?」

「うん、凄く楽しいよ！興味ない?」

私は入学式以降スカウトしたいなど思っていた事もあり花丸ちゃんとルビィちゃんを改めてスクールアイドル部に入らないか勧誘する。

「マルは図書委員の仕事があるズラ。いや、あるし…」

「そつかく。ルビィちゃんはどうか?」

委員会の仕事があるなら無理な勧誘は出来ないなど思い、ルビィちゃんに話を振る。

「あの、ルビィはその…、お姉ちゃんが…。」

「お姉ちゃん?」

私の疑問に対し、花丸ちゃんの口からルビィちゃんがはダイヤさんの妹だということを知る。

「何だか嫌いみたいだもんね、スクールアイドル。」

「はい…。」

お姉ちゃんが嫌いなスクールアイドル部に入るのには確かに気まずいのかも知れないと、二人のスカウトは一旦辞めようと考える。

「まずは、曲作りを先に考えたほうがいいかも。」

何か変わるかもしれないし、と言う曜ちゃんの意見に賛成し花丸ちゃんはどこで下車するのかを聞くと沼津までノートを届けに行くとの事だった。

「ノート?」

「はい、実は入学式の日…」

「墮天使ヨハネと契約して、あなたも私のリトルデーモンになってみない？」

幼なじみの津島善子ちゃんの自己紹介があまりにもイタク盛大に滑ってしまい、それ以来学校に来なくなってしまうらしい。そんな話を聞いている内にバスが沼津に着き花丸ちゃんは下車した。

マル、国木田花丸は千歌さんやルビイちゃんと別れ沼津にいる善子ちゃんにノートを届けに来ている。

沼津はビルがたくさん並んでいて賑やかだけど、今日はストレイジの人達が何かを警戒していて不穏な空気を感じている。

「いや、そつちにはいいッス。」

マルと年が変わらなそうな男の子の声が聞こえ、その声の主を探すと入学式の時に千歌さんと一緒にいた男の子が何か機械を持って空を眺めていた。

何をしているんだろうと考えていると、突然目の前から数十メートル先の鉄塔がメキメキと音を立てて倒れたのだ。それも透明な何がぶつかって…。

「な、何ズラ〜！」

「いきました！でもサーモグラフィに姿が写りません！」

男の子は何かを発見し、口元にあるマイクのようなもので誰かに状況を説明している。

男の子は手に持ったライフルを空に向けて発射すると、実体の無い何かが突然現れた。

ビルくらい大きくて角が生えた大きな生物、怪獣だった。

その怪獣にストレイジのロボットが大きく振りかぶりパンチを繰り出す。

バキン!!

そんな音を立てながら怪獣は地面に叩きつけられた。

だが怪獣は体制を立て直すとお返しといわんばかりに角から電気を放出してロボットを攻撃する。

「うわっ!」

ロボットが倒れた衝撃で地面が揺れマルは尻餅をついてしまう。マルの声に気付いたのか男の子が振り向き駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか! えっ、君は入学式の時の…。」

「マル、国木田花丸です! 友達にノートを届けに来て…。」

マルは簡単に事情を説明すると男の子は怪獣とは正反対の方向に走るように指示を出す。

「こちらハルキ！先ほど、同じ高校の生…民間人を発見。一旦安全な場所に避難させます！」

「了解した。民間人の避難が完了次第戦線に戻れ！」

「オッス」とハルキ君と呼ばれる男の子が上官であろう人に返事をしマルは避難する。近くにある公民館に誘導されてここでじっとするように指示をされた。

「ここでじっとしてて！」

マルは頷くとハルキ君は戦線に戻っていった。

俺は花丸ちゃんを公民館に避難させると再度隊長に通信を入れる。

「こちらハルキ、民間人の避難が完了しました。只今より戦線に復帰します。」

「了解。ユカからの情報だと、ネロンガはここに来るまでに電気を溜め込みフルパワーな状態だ。」

以前戦った時よりまだ強いのか。そんな事を考えながらネロンガにライフル弾を打ち込むがネロンガのような大きな怪獣には大した効果もなく、倒れているセブンガーに放電攻撃を浴びせている。

「ヨウコ、一旦離脱しろ！もう一発食らったら持たないぞ！！」

蛇倉隊長の指示をセブンガーのパイロットのヨウコ先輩も聞いているはずだが、シス

テムに異常があるのか動く気配がまるでない。

「ヨウコ先輩……」

俺は腰のゼットライザーを見つめる。今度こそアイツを倒してヨウコ先輩を助ける！そう思いながらトリガーを押し、ウルトラの空間に飛び込んだ。

「宇宙拳法、秘伝の神業！」

俺は初めて変身した時と同じように三枚のメダルをセットする。

「ゼロ師匠、セブン師匠、レオ師匠」

『ご唱和ください、我の名を！ウルトラマンZ!!』

「ウルトラマンZ（ゼーット!!）」

公民館に避難していたマルは倒れているロボットに攻撃しようとする怪獣に目を覆っていた。でも攻撃も爆発もしない状況に違和感を感じ、恐る恐る目を開けるとそこには……巨人がいた。

「ウルトラマン？」

3日前、怪獣を倒した巨人、ウルトラマンがロボットを抱えて立っていた。

ロボット優しく下ろし怪獣と戦うため距離を詰める。

連続で怪獣に攻撃をし、最初こそウルトラマンが優勢だったが怪獣の透明になる能力に段々と押されていつている。

「ジュワッ！」

『このままじゃヤバみを感じます。』

「相手の姿が見えないんじゃない？」

乙さんに変身した俺はネロンガの透明になる能力に、またしても苦戦を強いられていた。だが蛇倉隊長との稽古で言われた言葉を思い出す。「見える物だけ信じるな。」俺は透明になる能力を破るため、乙さんに目を閉じるように伝える。

あの稽古で隊長に一本を取った時、激痛で目が開けられない状態であった。だが相手の気配を感じとる事でどこにいて、何を仕掛けてくるのかを予測することで見えている時より分かりやすくなる。

俺は背中から来る気配を感じ、回し蹴りを繰り出すとネロンガの顔面に直撃した。

「よしー！」

『ウルトラヒット!!』

「やったー！」

怪獣の透明化に苦戦するウルトラマンだったが何かコツを掴んだのか背後にいた透

明怪獣に攻撃を当てる事に成功した。怪獣も電気を放出し攻撃しようとするが簡単に回避され、ウルトラマンの額からの光線を直に食らっている。

〃シユワツ〃

ウルトラマンは追撃といわんばかりに怪獣の背中に馬乗りになり、頭の触覚のような部分を力いっぱいへし折った！

「おお!!」

この力強い戦いにマルも少し興奮している。ウルトラマン…、名は体を現すというのはこの事だろう。そんな事を思っているとウルトラマンの胸のZマークが青から赤に点滅し始めた。何か慌てているような様子に不安を感じるが、体制を立て直したロボットが口からの弾丸を怪獣の角の付け根に向けて発射する。その直後怪獣の角の辺りから電気が出て制御できずにいる様子であった。

稽古の成果が出た俺が安心したのもつかの間、胸のランプが点滅し始める。この状態からとたんに体が怠くなり時間を許さない状況になるのだ。そんな中、体制を立て直したセブンガーがネロングの角の付け根に電解放出弾を発射する。着弾した直後、電気が制御出来ずに放出されるが、またも透明になり姿を見失ってしまう。

この一撃で決める為に俺とゼットさんは目を閉じ、ゲネガークを倒したあの光線の構えを取る。

『ゼステイウム光線!!』

背後にいるネロングの気配を感じとり振り向き様に光線を発射する。直撃したネロングは爆発し今度こそ勝つことが出来た!

「ありがとうズラー!」

花丸ちゃんが公民館のそばから手を振る。怪我も無く安心した俺は花丸ちゃんに拳を向けて空に飛んでいった。

「お疲れ。」

「オッス!」

戦いが終わり蛇倉隊長から労いの言葉を聞く俺だがうっとりとした表情のヨウコ先輩が気になりユカ先輩に何かあったのかを聞いてみる。

「なんかあの戦いの後からおかしいんだ…。遠い目をしたたり、深いため息をついたり…。もしかして好きな人でも出来たのかな?」

あの筋金入りの枯れ専のヨウコ先輩が!?!と驚く俺を他所に、ユカ先輩はウキウキとした表情でネロングの解剖に行ってくる。ユカ先輩、ちよつと怖いなど思った俺だったが、ヨウコ先輩からZさんについての話を聞かれる。

「あつ、ハルキい。ねえ、ウルトラマンZって何歳くらいかな?」

「ああ、5000歳ですよ!」

「えっ、なんで知ってるの?」

あまりにも自然に即答してしまった為、苦笑いしながら「誰かから聞いたんですよ」と言い、その場を後にした。

「5000歳か。きつとあなたの物よね?大切にします。」

ヨウコ先輩の手の中には一枚のメダルがある事をこの時の俺は知らなかった。

学校が終わって放課後、家の近くの海を眺めていた私、桜内梨子に高海さんが声をかけてくる。

「桜内さ〜ん!」

おーい!と手を振る高海さんにとって息を吐きながら無視をしていたがそんな事は構い無く、私のスカートを後ろからめくりながら「まさか、また海に入ろうとしてる?」と聞いてくる。

「してないです!!」

と私はスカートを押さえながら答える。

「あのね、こんな所まで追いかけて来ても答えは変わらないわよ!」

と、スクールアイドル部への入部を拒否する。

「えっ、違う違う通りかかっただけ。そういえば海の音、聴くことは出来た？」

と、高海さんと初めて会ったときに私が話したことを聴いてくる。あれから三日経ったが、聞くことは海の音は聴くことが出来ず質問に対して答えることが出来なかった。

「じゃあ今度の日曜日あいてる？」

「どうして？」

私の無言に察したのか日曜日に時間があるのかを聞いてくる。

「お昼にここに来てよ。海の音、聴けるかもしれないから。」

「聴けたらスクールアイドルになれって言わんでしょ？」

「うーん、だったら嬉しいけど…。その前に聞いてほしいの、歌を！」

聴けた見返りとして、スクールアイドル部に加いさせると邪推していたが高海さんの返答は違っていたものだった。

「梨子ちゃんもスクールアイドルの事、全然知らないでしょ？だから知ってもらいたい
の！ダメかな…？」

「はあ…。私、ピアノやってるって話したでしょ？」

ここからは自分の事を話さなければ分かってくれないと思いき高海さんに打ち明ける。

「小さい頃からずっとやってきたんだけど、最近いくらやっても上達しなくて、やる気も

出なくて…。」

あのコンクールの時からだ。ピアノが弾けなくなり、スランプになった時からやる気も出なくて気持ちも冷めてしまった事を思い出す。

「だから、環境を変えてみようと思って。海の音を聴ければ何かが変わるのかなって…。」

でも環境を変えても変わらなかった。どうしたらいいのか分からないと思ってる私に高海さんは「変わるよ、きつと…。」と笑いかける。

「簡単に言わないでよ!!」

と私はつい口調を荒くして言ってしまう。環境を変えても解決せずに時間だけが過ぎていく。私にはピアノしか無いことも自分自身でずっと分かっているのに…。

「簡単な事じゃ無いかもしれない、でもそんな気がする…。」

根拠の無い自信なのだろうが、高海さんの優しい笑顔を見るとさっきの怒りも収まっ
ていく気がした。

「変な人ね、あなた。とにかくスクールアイドルをやっている暇はないの。ごめんね」

そう言っただけ立ち去ろうとする私の手を掴み

「分かった。じゃあ海の音だけ聴きに行こうよ。スクールアイドル関係無しに。」

それならいいかと納得出来た私は日曜日、高海さんと一緒に海の音を聴きに行く事を

約束した。

第4話 転校生を捕まえろ!!／戦士の心得 後編

私、桜内梨子は海の音を聴く為海中を泳いでいる。高海さんと約束をしダイビングをしているが、今の所海の音は聴こえてこない。高海さんや、渡辺さん、夏川君の幼なじみである松浦先輩のアドバイスをもう一度思い出してみた。

「イメージ?」

「水中では人間の耳には音は届きにくいからね。ただ景色はこことは大違い。見えてる物からイメージする事はできると思うよ。」

想像力を働かせるということだろうかと思いつながら海中を泳いでいるが海の音が聴こえる気配は感じられず、一端海上に上がる。

「ダメ?」

渡辺さんの問いに頷き高海さんが「イメージか…。確かに難しいよね…。」と呟く。そんな中夏川君が「海中の中ってどんな様子ツスか?」と聞いてくる。

「分からないわ…。景色は真つ暗だし、何も見えなくて。」

その言葉に何か閃いたのか高海さんがもう一度潜るようにジェスチャーをする。

再度海中を泳いでいるとあの日のコンクールの事を思い出す。あの時からピアノが

弾けなくなり、鍵盤に向かっても何をしたらいいのか分からず、真つ暗な空間にいるような感覚にいつも悩んでいた。そんな事を思っていると先頭を泳いでいた高海さんと渡辺さんが真上を指差し、視線を向ける。

そこには太陽の光が海中に差し込み、周囲を明るく照らしていた。何も無い所から一つの事がきっかけで新しい物が生まれるような感覚に、私はピアノを弾く為の構えを取る。海の音が聴こえた気がした。

俺、夏川ハルキは桜内さん達が海からあがった後、果南ちゃんと他愛も無い話をしていた。

「桜内さん、晴れやかな顔してたツスね。」

「そうだね。海の音が聴けて前に進むきっかけになったなら船を出した甲斐があつたよ。」

と果南ちゃんも嬉しそうな顔をしていた。

「でもハルキ、アンタは珍しく潜らなかつたね。どうしたの？」

と俺が今回潜らない事について聞いてきた。ストレイジでの出撃や訓練が無い時は良く潜っていた事を果南ちゃんは良く知っている。

「この前から怪獣の出現が頻発しているし、いつ出撃命令が出るか分からないツスから

ね。」

と果南ちゃんに返す。水中での運動は思いの他体力を消耗する。羽目を外して遊んでいるといざという時に万全に動くことが出来ないからだ。

「そっか…。怪獣、段々と出てきているよね。ハルキやストレイジ、ウルトラマンがやっててくれるから被害は最小限になっているけど…。」

果南ちゃんが不安に思うのも無理はない。入学式からこの日曜の約一週間で二体の怪獣が出現した。今後も怪獣が現れる事は明らかだ。

「すみません。俺達がもつとしつかりしていれば…。」

俺には謝る事しか出来なかつた。怪獣の被害が原因で誰かの家や大切な物が壊されてしまう。だが眠っている怪獣を無理やり殲滅する事で周辺に大きな被害を起こしてしまう事は出来ず、ストレイジはどうしても後手に回る事しか出来ないのだ。

「いやいや、ハルキが謝ることじゃ無いよ。むしろ感謝の方が大きいんだから。学校に行きながら皆の暮らしを守る為にストレイジの隊員として頑張ってるんだし。」

「ありがとうございます…。」

果南ちゃんの言葉にお礼を言う。「でも、無理はしないでね。」と釘を刺されたが。

さて、と果南ちゃんが一端部屋の奥に行き、箱形のケースを持ってくる。

「久しぶりに…やる？持ってきて言って言ったでしょ？」

と箱から青い水龍のイラストが描かれたカードを見せてニツと笑う。
「いいツスね。」

俺も自分のポケットからケースを取り出し、全身機械で出来た三つ首龍のイラストを見せる。

俺達が小さい頃から人気のカードゲームを久々にやることにした。

翌日の学校で私は、高海さんと渡辺さんに曲作りを手伝うことを約束した。

「えええ！嘘？」

「本当に!？」

渡辺さんと高海さんが聞き返す中、私は再度協力する事を約束する。

「ありがとう…、ありがとう!!」

と高海さんが私に抱きついてくるがそれを避け、高海さんはその拍子に他のクラスメイトに抱きついてしまう。

そんな状況で夏川くんが教室に入ってきて高海さんに怪訝な目を向けていた。

「千歌ちゃん…、何してるんスか？」

「いや、ちよつといろいろあつて…。それより聞いてよ。梨子ちゃんがね！」

高歌さんが何か勘違いをしているのでは無いかと思ひ、もう一度伝える。夏川くんも

マネージャーみたいだし、丁度いい。

「待って、勘違いしてない？夏川くんも来たからもう一度言うけど、私は曲作りを手伝うって言ったのよ？スクールアイドルにはならない。」

私の言葉に高海さんは悪態を着くが渡辺さんは「無理は言えないよ」と高海さんに言う。夏川くんは私に

「でも協力ありがとうございます。作曲は俺達三人ではちよつと難しいツスから。」

とお礼を言う。私は彼に「どういたしまして。」と返すと高海さんに向き直りあるものを貰おうとする。

「じゃあ高海さん、詞を頂戴。」

「詞？」

まるで頭に？マークを浮かべたような顔をして外をみたり鞆をみたりしながら「〴〵」を探す。

夏川くんが再度怪訝な目をしているが何かに驚いたのか「うおっ！」と突然声をあげる。こつちが驚いたんですけど…。

「〴〵し〴〵って何〜」

「多分〜歌の歌詞の事だと思っ〜」

高海さんと渡辺さんのオペラのような子芝居を聞きながら落ち着きを取り戻した夏

川くんが「多分歌詞出来てないツスよ、全く。」と耳打ちする。その事を聞き私はガツクリと肩を落とした。

俺は放課後千歌ちゃんの家である旅館「十千万」に来ていた。

桜内さんの「ここ旅館でしょ？」の疑問に曜ちゃんが「時間気にせず作業できるし、バス停も近いしね」と説明している。説明している最中、旅館の中から20代半ばくらいのおっとりとした女性が出てきた。

「いらつしやい。あら曜ちゃん、相変わらず可愛いわね」と曜ちゃんを褒める。

「ハルキ君も久しぶり。ストレイジのお仕事、頑張ってるみたいね。」

「オツス。お久しぶりです、志満姉さん。」

と俺は先程の女性、志満姉さんに声をかける。

「そちらは千歌ちゃんが言っていた子？」

と千歌ちゃんに聞いている。桜内さんも志満姉さんに挨拶をし旅館に入ろうとする、その先にいる大型犬、しいたけを見ると若干顔が強ばっている。

「志満姉〜。おつ、ハルキ久しぶり！元氣だったか？」

奥から金髪のヤンキーのような見た目の美都姉が俺に向かって手を振ってきた。

「元氣ツスよ！」

と俺も軽く手を振る。その手には空っぽになったプリンのパックがあり、千歌ちゃんが怒りながら美都姉を追いかけていった。

「酷い、酷すぎるよ！志満姉が東京で買ってきた限定物のプリンなのに！」

と頬を膨らみしながら千歌ちゃんが愚痴を言う。

「それより、作詞を……」

と桜内さんが作業に取りかかろうと声を掛けた時、

「いつまでも取っておく方が悪いんですぅ〜」

と美都姉が、お前が悪いと言わんばかりに指を指し煽る。

「うるさい！」

千歌ちゃんが自分が抱いていた海老のぬいぐるみを投げるが桜内さんの顔面に辺り、美都姉の投げた浮き輪も同じく桜内さんにはまってしまふ。

曜ちゃんが「うわあ……」と悲痛な声をあげるがもう遅く、ぬいぐるみと浮き輪を払い落とした桜内さんの青筋が立った顔に全員が恐怖した。

『この子ウルトラ怖いであります。』

乙さんの声が頭の中で聴こえてくる。学校で「し」について千歌ちゃんが探している際、『酸っぱい調味料でございますか?』と声が出た時は心臓が止まるかと思った。

俺はその日の授業を聞きながら、「ウルトラの空間に入らなくても会話は出来るんす

ね。」と乙さんに訪ねると長い話になりそうな時や、変身する時に使用するものらしいとの事であった。

今は四人で作詞を考えているが、良いフレーズが思い浮かばず行き詰まっていた。「やっぱり恋の歌は無理なんじゃない?」

桜内さんがハードルが高いのでは無いかと千歌ちゃんに聞いている。

「いやだ、*スノハレ*みたいな曲を作るの!」

恋愛ソングを考えるが俺も桜内さんと同じく同意件。こういうのはある程度作詞をして慣れてから作るものでは…と思っていた。

「そうはいつでも恋愛経験無いんでしょ?」

「何で決めつけるの?」

桜内さんは「あるの?」と再び問うが無言の千歌ちゃんに経験が無い事を察し、それならちよつと難しいよと、別の歌詞を作るように提案をする。そんな中、千歌ちゃんは俺に視線を向けるが「いや、俺もちよつと無いかな…」と答える。もしかしたら乙さんならと思いテレパシーで伝えてみる。人生の大先輩だ。もしかしたら沢山…。

「乙さん!あの、つかぬ事をお聞きしますがご自身の恋愛経験について教えてもらえないでしょうか?」

『無いでございませす!』

ガクツと肩を落とす俺を曜ちゃんが「肩を落とすタイミングかなりずれてるよ!」と驚く。確かに端から見ればそうだろうな。

「*μ* sがこの曲を作った時誰かが恋愛してたってことだよな?ちよつと調べてみる。」

と千歌ちゃんは作業そつちのけでインターネットで*μ* sの事を検索している。

「なんでそうなるの?」

と桜内さんがため息をつきながら呟くと曜ちゃんのある一言から俺達3人は何かを閃いた。

「千歌ちゃん、スクールアイドルに恋してるからね!」

俺達のこれだ!というリアクションに千歌ちゃんだけピンと来ていない。

「今の話聞いてなかった?」

「スクールアイドルにドキドキする気持ちとか大好きって気持ちとか」

「発想の転換ツスよ。それなら書ける気がしないツスカ?」

俺達の言葉に千歌ちゃんも何かを閃き、凄まじい速度でノートに文字を書き進めていった。

異様な程のスピードで歌詞を作り四人で修正を加えながらたった1日で作詞が完成した。

今日の作業を終え俺は千歌ちゃんの家で晩飯をご馳走してもらい自分の家に帰宅し

た。

私、桜内梨子は自分の家に帰宅し暗い部屋の中携帯でとある動画を見ていた。

【ユメノトビラ】作詞作りの際に高海さんが参考にと書いてくれた歌詞が手元にある。彼女はそれを聴いて、*μs* のようになりたいと言っていた。その時の目はとてもキラキラしていて、自分がピアノが楽しかった時もこんな目をしていただろうなと思いきりましかった。

動画が終わり、私は部屋のピアノの鍵盤に指を置き先程の曲を弾いてみる事にした。

久々に歌いながらピアノを弾いていると外から「梨子ちゃん！」と言う声に気付き窓の外を見る。外にはお風呂から上がり、寝巻き姿の高海さんがいた。

「今の、ユメノトビラだよね？梨子ちゃん、歌ってたよね！」

自分の歌声を聴かれたのが少し恥ずかしく、はぐらかそうとする私に構わず高海さんはユメノトビラの歌詞を言う。

「高海さん、私どうしたらいいんだろう。」

そんな高海さんに自分の思いを打ち明ける。何をやっても楽しくなくて、変わらない自分の悔しさを伝える。それを聞いた高海さんは再度スクールアイドルをやってみないかと私を誘った。

「ダメよ…。このままピアノを諦める訳には…。」

「やってみて笑顔になれたら、変われたらまたピアノを弾けばいい。」

諦める事はないと言う高海さんに対し、このまま中途半端な気持ちでピアノとスクールアイドルを掛け持ちしてしまうのでは無いかと思い、私は変わらず断らざるを得なかった。

「失礼だよ、本気でやろうとしている高海さんにそんな気持ちで…。」

「梨子ちゃんの力になれるなら私は嬉しい。皆を笑顔にするのがスクールアイドルだから!」

そう言いながら高海さんは手を伸ばす。

「千歌ちゃん!!」

このままじゃ落ちてしまう。そう思った私は思わず名前を呼んでいた。私も手を伸ばし、お互い落下する事無く体を元の状態に戻す。

「さすがに届かないね…。」

諦めた私の言葉にお構い無く、千歌ちゃんの諦めるな!と言わんばかりに手を伸ばし続ける。私も必死に手を伸ばしお互いの指が触れ合った。

ここから私も変わりたい。スクールアイドルをやってみようと思った私の顔はきつとあの頃の楽しかった時と同じ顔をしていた筈だ。

第5話 ファーストステップ／生中継！ 怪獣輸送大作戦

前編

ワンツースリーフォー、ワンツースリーフォー

私、高海千歌は早朝からお馴染みのメンバー四人でダンスの練習をしていた。

「はいストッパー！」

ハルキ君の指示で一旦ダンスを切り上げ携帯で録画したダンスを見ることにした。

「どう？」

「大分、良くなってる気がするけど…。」

私と梨子ちゃんはあまりピンときていないが

「でも、ここの蹴りあげが皆弱いのとここの動きも！」

曜ちゃんの指摘に梨子ちゃんが褒める。曜ちゃんは高飛込みをしているからフォームの確認は得意であり、曜ちゃんがリズムは合っているかを聞くと梨子ちゃんが

「大体合っているけど、千歌ちゃんが少し遅れてるね。」

と答え、私は「ゴメンね」と謝る。ハルキ君も「これからこれから！」と励ましてくれているが。

皆で水分補給をしていると上空からヘリコプターの音が聞こえてきて、皆が上を向く。

「何あれ?」

梨子ちゃんの呟きに曜ちゃんが「小原家のヘリだね。」

と答える。淡島にあるホテルを経営してて、新しい理事長もその人らしいとの事を梨子ちゃんに話していた。ハルキ君も

「ストレイジのロボットの資金も提供してくれているみたいッス。」

と補足をする。まあ、理事長なんて頻繁に見る事は無いし、凄い人なんだと言う感想しか思いつかなかった。

「なんか近づいてきてないッスか?」

ハルキ君が怪訝に思うが梨子ちゃんが震えた声で「気のせいよ」と答える。

そんな考えを他所にヘリが私たちの近くに急に停止してきたのだ!

「チャオー!」

ヘリの爆音からそんな声が聞こえ、金髪の女の子が扉から出てきた。チャオー!じゃない!!

「えっ、新理事長?」

あの後学校の理事長室で金髪の女の子がこの学校の新しい理事長だと言うことを彼

女の口から伝えられる。

「Yes!でも気にせず、気軽にマリーって呼んでほしいの!」

曜ちゃんが何か言いたそうにしているがマリーと呼ばれる理事長は「紅茶飲みたい?」と聞きながら茶葉を探そうと棚を漁る。

「あの、新理事長…。」

私の呼び方に、新理事長は「マリーだよ。」と言い直しを要求され、「マリー。」と苦笑いで返す。マリーの服装について聞くと

「変かな?三年のリボンも用意したつもりだけど…。」

「理事長ですよね!?!」

私の問いにマリーはこの学校の三年生であり生徒兼、理事長との事であり例えるならカレー牛丼のようなものだそうだ。

「例えが良く分からない…。」

梨子ちゃんがどういう事?みたいなリアクションに「分からないの?」とマリーが詰め寄る。ハルキ君が「松屋のメニューみたいなもんですね!」とボケを被せてくる。松屋にあるんだ、そんなメニュー…。

「分からないに決まっています!」

とダイヤさんが相変わらずのキレ顔でマリーに口を出した。

「生徒会長?」

曜ちゃんが呟く中、マリーはダイヤさんに抱きつき頭を撫でている。

「ダイヤ久しぶり〜。随分大きくなって!」

「触らないで頂けますか?」

見た目からハーフなのかかなりスキンシップが多いなと思いながら二人の光景を見ている。

「胸は相変わらずね…。」

とマリーは唐突にダイヤさんの胸を揉みニヤニヤした顔を浮かべていた。その光景にハルキ君はガン見をし曜ちゃんに後頭部を「バシン!」と叩かれる。

「痛いじゃないツスカ!」

「凝視をするな!凝視を!!」

と二人は隣で揉めている。見るのは仕方ないかもしれないけど凝視はダメだよねと思っていると

「そこ、うるさいですわよ!」

とダイヤさんの激が飛ぶと二人ともハモって「すみません!」と直立する。息ぴったりだ。

「全く、一年の頃にいなくなっただと思っただらこんな時に戻ってきて…。一体どういうつ

もりですか？」とダイヤさんがマリーに聞くが当の本人は全く話を聞いておらず、カーテンを全開にして「シャイニー!!」と叫びながら遊んでいる。

「人の話を聞かない癖は相変わらずのようですね！」

とダイヤさんはマリーの胸ぐらを掴みながら青筋を立て、当の本人は「イツツジョーク」と言いながら小さくピースをする。

「とにかく、高校三年生が理事長だなんて冗談にも程がありますわ。」

ダイヤさんの言い分は最もだったが、マリーは鞆から一枚の紙を取り出しダイヤさんに見せる。

「そっちはジョークじゃ無いのよね。」

【任命状 小原鞠莉殿 貴殿を浦の星高校の理事長に任命します】

と書かれた任命状にマリーこと鞠莉さんの言っている事は事実だと分かったが、ダイヤさんはまだ納得出来ておらず「そんな、何で？」と鞠莉さんに問う。

「実は、この浦の星にスクールアイドルが誕生したという噂を聞いてね。」

と理事長になった経緯を話し始める。

「ダイヤに邪魔されちゃ可哀想だから、応援しにきたのデース！」

「本当ですか！」

私は嬉しくなり鞠莉さんに再度聞く。

「Yes。このマリーが来たからには心配ありません。デビューライブはアキバドームを留意したわ!」

パソコンの画面を付け、ドーム会場の写真を見せる。梨子ちゃん、曜ちゃん、ハルキ君も「おお!」というリアクションをしながらパソコンを凝視した。

「き、奇跡だよ!」

「よっしゃ〜!これでスクールアイドルの注目度も独り占めだ!!」

私とハルキ君のテンションがハイになったのもつかの間、鞠莉さんの「イツツジョーク」の声で一気に現実を引き戻された。

「ジョークの為にわざわざそんなもの用意しないで下さい。」

私は恨めしそうに鞠莉さんを見る。

「実際には…。」

そう言と鞠莉さんは私達を体育館に向かわせ、ここでライブをするように手配をするとの事であった。

「ここを満員にする事が出来れば、人数に関係なく部として承認しますよ。」

部費も使える事も伝えるが梨子ちゃんが満員に出来なかった時はどうなるのかを聞く。

「その時は解散してもらおう他ありません。」

「そんな…。」

この体育館を満員にするとなるとかなりの人数になる。だが出来なければスクールアイドルになれない事を突きつけられるが曜ちゃんの「やめる？」の一言に私はこんな事で諦めるかと思ひ、この条件を承諾する事にした。

「OK。行うとでいいのですね。」と言ひ鞠莉さんは体育館を後にする。

「そうだ、ハルキ君は少し来てくれるかしら？」とハルキ君も鞠莉さんの後を追つて体育館から出ていった。

「ちよつと待つて？この学校の生徒つて全部で何人？」

梨子ちゃんが訪ねる。その事に気づいた曜ちゃんがハツとした表情で私を見る。何か困ることもあるのだろうか？

「分からない？全校生徒を全員集めたとしても…。」

梨子ちゃんの説明に私も曜ちゃんが言おうとしている事が分かった、分かつてしまったのだ。

全校生徒を全員集めても…ここは満員にはならない事に。

体育館を後にした俺は鞠莉さんの後を着いていき、理事長室に戻つてゐる。

「あの、話つて…。」

「怪獣の事です。あなたはストレイジの隊員だということも知っていますからね。」

理事長でもあり、小原家の人間だ。ストレイジの隊員が自分の学校に在籍している事も当然知っている筈である。

「怪獣がこの二週間で二体も出現しました。それも二体とも静岡に…。」

自分の学校がある県、その中でも浦の星の近くである沼津にだ。

「怪獣は姿が確認されていないだけで日本に大量に生息している事が分かっています。あの宇宙怪獣の影響で、地球の怪獣が目覚めつつあるとの事も。」

「そうみたいですね。でもすみません、セブンガーでも怪獣を押さえきれない事も多く、俺達の技量不足のせいで…。」

怪獣を押さえきれないケースが多いのも事実であり俺は鞠莉さんに頭を下げる。

「Sorry、あまり気にしないで！あなた達ストレイジは頑張っているし、その結果で町の被害も最小限に抑えられている。そして今回セブンガーに新装備を搭載したのだから小原家も資金を提供したの！」

鞠莉さんは気にするなど言わんばかりの笑顔で新装備の資金提供もしてくれたのだ。

「本当ですか？ありがとうございます！」

俺は感謝の意味で頭を下げる。その直後俺の携帯にストレイジからの緊急出撃の知らせが入りバイクで学校を後にした。

ストレイジに到着し、セブンガーの格納庫に向かう。整備長のバコさんから出現場所

は群馬のとある高原と聞き、鞠莉さんが言っていた新装備もすでに搭載しているとの事であった。

高原に到着した俺は白いゴリラのような怪獣、コードネーム【ギガス】と交戦を開始する。パンチやタツクルなどセブンガーと同等のパワーを持った怪獣に攻めあぐねていた。

「このままじゃ…。よし、鞠莉さんとバコさんが言っていた『アレ』を使うか。」

俺は早速新装備を使うためセブンガーの腰を落とし、カメラをスナイパーモードに切り替える。

「鋼心鉄拳弾…：発射!!」

セブンガーの右手首から拳が弾丸のように発射され、ギガスの腹に突き刺さる。その拳はそのまま速度を落とす事無く延長線長にある建物を粉々にしてやっと止まった。

「ギガス、活動停止」

「よっしや〜!!」

俺は新装備の性能で怪獣を撃退出来た事によりガッツポーズを取り声をあげる。凄まじい威力に舌を巻きつつ「ありがとう鞠莉さん!!」ともお礼の言葉を口にした。そんな喜びもつかの間、蛇倉隊長の異様にテンションが低くなった声で通信が入る。

「ハルキ…、近くに観測所があるから気を付けろって言ったよな…。」
「あつ…。」

俺は倒れているギガスを退かして地面を見る。そこには粉々になった元観測所があり「すみません…。」と謝罪をする事しか出来なかった。

「なんて体たらくだ!怪我人が出なかったから良かったもの、お前達は!何かを壊さないと!!怪獣を倒せんのか!!」

「すみません!」

栗山長官のお叱りに俺と蛇倉隊長は頭を下げ謝罪をする。

「これで二号ロボの予算の為の根回しがパーになったらどうするんだ?責任とれんのか!!」

「申し訳ありませんでした!」

蛇倉隊長が頭を下げ、謝罪をしろと俺の尻を叩く。

「すみません…。今日花粉が多くて…。」

俺は盛大なくしゃみをする。

「全くお前達は…。」

とブツブツ長官が呟きながら作戦室を後にした。

俺は毎度の事ながら始末書を書き終える頃には15時を過ぎていた。

私、高海千歌は放課後帰宅する為バスに乗っている。

「どうしよう〜。」

部として認めて貰うためには体育館を満員にしなくてはならない。でもこの浦の星高校の生徒全員を集めても満員にならないという事実には頭を抱えていた。

「でも鞠莉さんの言う事も分かる。」

それくらい出来なければこの先もダメと言う事だと梨子ちゃんも言う。確かに今後ラブライブに出場して決勝に進む為にはこれは絶対にクリアしなくてはならないけど…。

「やっとな曲が出来たばかりだよ？ダンスもまだまだだし…。」

「じゃあ諦める？」

曜ちゃんのもう辞めようかという口ぶりに私は反射的に「諦めない！」と返す。

「何でそんな言い方するの？」

私には聞こえなかったが梨子ちゃんが曜ちゃんに言う。

「こう言っただけあげたほうが千歌ちゃん燃えるから。」

ニツと笑う曜ちゃんを背中に私はある秘策を思い出す。

「お願い！いるでしょ従業員。」

「そりゃ居るには居るけど。」

私は家に帰って早速秘策を実行する為、美渡姉にプリンを献上し交渉を図る。

「何人くらい?」

「本社も入れると二百人くらい?」

「二百人!この人数なら体育館も満員になるはず…。」

「あのね、私達来月の始めにスクールアイドルとしてライブを行うことにしたんだけど…。」

「プツ、スクールアイドル!?あんたが?」

吹き出す美渡姉に若干イラツとしたが我慢我慢…。交渉の為だ。

「でね、お姉ちゃんにも来てもらいたいなって!会社の人を二百人位誘って…。」

「は?」

まるで「こいつは何寝ぼけてるんだ?」と言うような表情で私を一瞥したあと美渡姉はテレビを見ながらプリンを黙々と食べている。

「満員にしないと学校の承認が貰えないの!だからお願い!!」

私が美渡姉に手を合わせ、頭を下げてお願いをする。そんな私を見て美渡姉は机にあつたマジックの蓋を開け…。

「おかしい、完璧な作戦と思つたのに…。」

額にバカチカと書かれウエットティッシュで拭きながら呟く。

「お姉さんの言う事も分かるけどね。」

と曜ちゃんがライブで着る為の衣装を縫いながら返す。

「ええっ、曜ちゃんお姉ちゃん派？そういえば梨子ちゃんは？」

梨子ちゃんの姿が見えない為曜ちゃんに聞くとお手洗いに行っているとの事であった。

そんな私達を他所に梨子ちゃんは犬のしいたけに触れないように手すりと壁に手足を着けて横移動しようとしている。S A S U K Eのようなシユールな光景を横で見ながら人を集める方法を曜ちゃんと話し合う。

「おお、しいたけ！元気だったか。」

とハルキ君が部屋に来て一緒に作戦会議を始める。そんな中、梨子ちゃんは力尽き床に体が激突していた。

翌日の放課後、私達四人は沼津駅前でライブのお知らせをする為チラシ配りをする事にした。

「東京に比べて人は少ないけど、やっぱり都会ね。」

梨子ちゃんが沼津の人の多さに呟く。確かに内浦に比べると人も多いし、ここならチラシ配りにもってこいの筈だ。

「そろそろ部活終わった人達が来る頃だよ。」

「よし、気合い入れて配ろう!」

「オッス!!」

私達は早速チラシ配りをスタートした。

「あの、お願いします!」

私のアプローチをスルーされ若干凹む。幸先悪いなあ。

「意外と難しい…。」

梨子ちゃんも少し卑屈になりかけるが、曜ちゃんの「こういうのは気合いとタイミングだよ!」と手本を見せる。

「ライブのお知らせです!宜しくお願いします!」

お喋りに夢中になっていいる女子生徒をターゲットにし、曜ちゃんはチラシを配る。

「ライブ?あなたが歌うの?」

と訪ねる女子生徒に敬礼をしながら「はい!来てください!」と早速二人に配り終えた。そんな中ハルキ君も、「浦の星高校でスクールアイドルのライブをやります。是非是非来てください!」とチラシを配っている。なんかハルキ君がチラシ配ると野球部の勧誘みたいだな…。

「凄い…。」

「よし、私も！」

と私も二人に負けていられない。チラシ配りを再開し

「ライブやります…。ぜひ!!」

私は大人しそうな女子生徒に壁ドンをしながら勧誘する。壁ドンは有無を言わさない強さがあるもんね。

女の子はチラシを貰うとダツシユで駆け出していった。

「勝ったー！」

私のガッツポーズに「勝負してどうするの！」と梨子ちゃんがツツコミを入れる。梨子ちゃんも勧誘するように発破をかける。

「あの…、ライブやります！来て!!」

壁に向かってチラシを向けていた。この子、天然なんじゃないかな…。

「何やってんの？」

「練習よ、練習！」

「練習なんてしている暇は無いの！さあ行こう！」

梨子ちゃんの背中を押してとにかくチラシを配らせる。

なんとか一人にチラシを配りそこから少しずつだが配るペースを上げて来ている。

私もチラシ配りを再開しようとした時、花丸ちゃんとルビイちゃんを見つけ手を振る。

「花丸ちゃん〜ん! そうだ、これ。」

「ライブ?」

花丸ちゃんにもチラシを配り、ルビイちゃんが「やるんですか!」と目を輝かせて答える。案の定花丸ちゃんの背中に隠れてしまっているがルビイちゃんにもチラシを渡す。

「絶対満員にしたいんだ。だから来てね。」

そう言っただけの人にもチラシを配る為その場を後にしようとするルビイちゃんからある質問をされる。

「あの、グループ名は何て言うんですか?」

「グループ…名…?」

「マズイ、決めてなかった…。」

「まさか決めてないなんて…。」

夕方の浜辺で、ダンスの練習が終わり整理体操をしている際に梨子ちゃんが呟く。

「梨子ちゃんだって忘れてた癖に。」

「とにかく早く決めなきゃ!」

「どんなのがいいのかパツと思えばない。」

「学校の名前が入ってる方がいいよね? 浦の星スクールガールズとか。」

「そのまんまじゃない！」

ストレートな名前をダメ出しされ、梨子ちゃんは何か無いかと聞く。曜ちゃんも「うだね！東京で最先端の言葉とかあるじゃないかな？」と期待を寄せる。

「え、えーつと…。三人海で知り合ったから、スリーマーメイドとか？」

「いち、にー、さん、しー」

あまりにも壊滅的なネーミングセンスの無さに私達は無視して柔軟体操を始める。梨子ちゃんはアワアワとしながら「今のは無し」と取り消しを求めていた。

「曜ちゃんは何か無い？」

柔軟体操を終え海沿いを走る中今度は曜ちゃんに名前を振ってみる。曜ちゃんは「うん…。」と唸ると何か閃いたのか回れ右をして敬礼のポーズを取り

「制服少女隊！」

とドヤ顔で言う。

「無いかない？」

「そうね…。」

人の事は言えないが曜ちゃんもネーミングセンスが無さすぎる。「ええー！」と悲痛な叫びを上げるが私達は思い付いたグループ名を片っ端から砂浜に書いてみる。波の乙女とか、みかんとか、海鮮何とかとか…。

「こういうのはやっぱり、言い出しつpegが決めるべきよね?」

「賛成!」

梨子ちゃんの提案に曜ちゃんも同調する。私に戻ってきたかと思つた矢先、浜辺に私達の筆跡とは違う物を発見し、手招きをする。

A q o u r s

「これ、何て読むの? エーキュー!」

「アキュア?」

「もしかしてアクアじゃない?」

曜ちゃんがスペルを発音し梨子ちゃんは「水つて事?」と聞き返す。

「水か…。なんか良くない? グループ名に。」

シンプルで覚えやすい! これをグループ名にしたいなど思い、二人に提案をする。このままでは、いつまでも決まらないしね。

「じゃあ決定! この出会い感謝して今日からグループ名は!」

「浦の星高校スクールアイドル、A q o u r s!」

「ゴモラ輸送作戦?」

チラシ配りが一段落したその日の夕方、ストレイジに來いと蛇倉隊長の指示を受

け、俺は今作戦室にいる。栗山長官が蛇倉隊長に作戦依頼の再確認をする。

「地球防衛軍アメリカ本部の事務次長が予算会議に出席する為、再来週出席する。その会議の際に二時間だけ時間を頂いた。」

その会議の際にストレイジのロボットの性能をアピールしろとの命令であり、静岡に生息している古代怪獣ゴモラの輸送をする事になった。

「ゴモラは静岡の北部の山で休眠中とはいえ、だだの巨大な岩と変わらないんだろう？」

と蛇倉隊長に質問をする。隊長はユカ先輩に「どうなんだ？」と聞き、ゴモラは目覚める確率は統計上では0.1%以下であり覚醒する事は0に等しいとの事であった。

「視察中の事務次長へのプレゼンには君達にも参加してもらおう。当日は絶対に失敗しないように！以上!!」

失敗は許されなことを再度伝えられ、俺達は栗山長官に礼をする。

「と言う事なので仕方がない準備を急ぐぞ。ハルキ、名誉挽回のチャンスだ。セブングーにはお前が乗れ。」

蛇倉隊長の命令に俺は小さく「オッス…。」と答えた。

「どうした？」

ヨウコ先輩が自信が無いのかと聞いてくるが俺の問題はそこではない。

「いや、俺花粉症だからゴモラがいる山の中に入るの…不安で。」

先日と同じく盛大なくしゃみをしてしまい、三人は手やバインダーで顔を被う。こんな状態で俺は作戦を成功させる事が出来るのか不安でしかなかった。

「そういえば、スクールアイドルの方はどうなの?」

ヨウコ先輩がスクールアイドルについて聞いてくる。

「オッス、メンバーも三人になって部として認めて貰う為に、再来週にライブを行うんっすよ。」

俺は駅前で配った物と同じチラシをヨウコ先輩達に見せる。

「再来週の土曜日か…。良かったね、ゴモラ輸送作戦と日にちが被らなくて。運が悪けりや日時が被ってたよ?」

「本当、奇跡ツスね。」

そんな話をしているとユカ先輩も話に参加する。

「スクールアイドルか…。ねえ、グループ名は何て言うの?」

「えっ?」

一瞬の沈黙のあと女性陣二人は眉間を押さえる。

「大丈夫?二週間って直ぐよ!」

ユカ先輩に詰め寄られるが「何とかしますよ。メンバーの子も頑張ってるし、曲も完成してダンスの練習もライブを企画する前から始めてますし…。」

と答える。ヨウコ先輩が「あんたが作戦を頑張ったらデビューライブは見に行つてあげるよ。」と言つてくれたのが救いであつた。蛇倉隊長もライブの開始日まではチラシを貼つておいても良いと許可を貰い、作戦室と格納庫にチラシを貼り家に帰宅をした。寝る前に千歌ちゃんからメールが届いており、スクールアイドルとしてのグループ名も無事に決まつたみたいであつた。

私達のグループ名も決まり、再来週のライブギリギリまで四人でチラシ配りをしながらダンスや歌の練習を続ける日々が続いている。チラシ配りの際には毎回曜ちゃんに人だかりが出来ており、全員で敬礼をして写真を撮つている。クラスメイトの子も本番当日には照明等の手伝いをしてくれるとの事であり、私達は万全の状態でステージに臨める筈だ。

「やばっ、バスの最終便もう行っちゃった!」

「ええっ!?!」

ダンスのフォーメーションについて相談していると、時計は19時を過ぎており、時々曜ちゃんは志満姉に軽トラで送つてもらふ事もしばしばあつた。

「うん、うん…。ごめんなさい。」

私、渡辺曜はバスに遅れてしまつて帰れない為、志満さんに軽トラで家まで送つて

貰っている。

「大丈夫だった？」

「はい。いい加減にしなさいって怒られちゃったけど。」

時間を忘れて夢中になっている事も何度もあり、お母さんに良く怒られている。

「本当に夢中よね…。千歌ちゃんがここまで夢中になるなんて。」

志満さんが千歌ちゃんの事について言う。「あの子ああ見えて飽きっぽいから。」と笑う志満さんに私は笑いながら

「飽きっぽいんじゃないかって、中途半端が嫌いなんですよ。やる時はちゃんとやらないと気が済まないっていうか…。」

「そっか…。それで上手くいきそうなの、ライブは？」

志満さんの質問に私は不安を感じている。

「うん、いくといいけど…。人、少ないですからね、こちら辺。」

鞠莉さんの条件を改めて思い出す。体育館を満員にする事がスクールアイドル部を認めてくれる条件だ。チラシも配り、周知は充分にされている筈だがそれでも人は来てくれるのか分らない…。

「大丈夫よ…。みんな暖かいから。」

志満さんのその一言に私は少しだけ安心感を覚え、ライブまでの残りの日数はあつと

いう間に過ぎ去った。

第6話 ファーストステップ／生中継！ 怪獣輸送大作戦 後編

俺はこの金曜日、ゴモラを輸送する為にセブンガーに搭乗している。今回の作戦は生中継かつ、アメリカの事務次長も見ている事もあり、絶対に失敗は許されない。そしてこの作戦が成功すれば少なくともヨウコ先輩はライブに来てくれる。たかが一人だがされど一人だ。

私、小原鞠莉は今回の予算会議に出席している。

「ええ、これがストレイジが誇ります、世界初対怪獣用ロボット！セブンガーであります。」

栗山長官が説明する中、ディスプレイにセブンガーが映る。

「それではセブンガーのパイロットを紹介いたします。入りましたまえ！」

長官の指示のもと、会議室に入室したのは黒髪の私と歳が近いポニーテールの女性であった。彼女は一礼し自己紹介をする。

「こんにちは、ストレイジのナカシマ・ヨウコです。よろしくお願います！」

なぜか長官の顔色が変わり、ナカシマ隊員の耳元で何かを話している。

「えっ？君がここにいてるって事はさ……。セブンガーに乗っているのは……。」

「アイツはやる時はやる男です！」

「アイツが乗ってるのか……。」と胃をさする長官を横に会議が始まった。

「セブンガーは従来の兵器では対応できないような、あらゆる場面での対怪獣用戦闘行動に、たった一機で可能でありまして……。」

「ちよつといいデスカ？」

ナカシマ隊員の説明に事務次長が質問をする。

「たった一機だけで可能といいますが、セブンガーには作戦失敗も多く、コストパフォーマンスも決して良いとは言えないんじゃないデスカ？」

事務次長の質問も最もだ。作戦時には大なり小なり被害も出るが失敗も多く、コストも莫大掛かる。この状態では予算は降りにくい。そんな中セブンガーが会議室の窓から確認でき、ゴモラを持ち上げる姿を見ることが出来る。

「近くで見ると迫力あるな……。」

「小さい頃見た日本のロボットアニメを思い出すな！」

今回の会議にはアメリカ以外の各国の事務次長も参加されている。言葉は違えどセブンガーの迫力に舌を巻いている事は発言から分かり、好感を持ってている。

「パワフルなロボットでクールデスネ！」

私もナカシマ隊員にその旨を伝え「ありがとうございます!」と返してくれた。

「あのセブンガーに乗っているのは、空手を始めとしたあらゆる格闘技の全国大会で入賞経験を持つ達人、ストレイジの夏川ハルキという男です!」

「空手、パイロットなのに空手の達人!?」

「凄いですね!事務次長!!」

パイロットへの好感度も高く、彼の凄さが分かる。だがある意味アメイジングでデンジャーな事がこれから始まるのをこの時の私達はまだ知る筈はなかった。

俺はゴモラを輸送するドローンの補助をしているが花粉も多くくしゃみを連発している。この状況はかなりキツく集中力を気力で繋げゴモラの輸送していた。そんな中、自分ではない何かのくしゃみを耳にしユカ先輩から緊急連絡が入った!

「おい、くしゃみしたぞ…。」

地上にいる蛇倉隊長がユカ先輩に見たままの感想を述べる。ユカ先輩はタブレットに表示されたゴモラのバイタルが急上昇している事を俺に大声で伝えた。

【ゴモラのバイタルが急上昇中!覚醒します!!】

ゴモラも花粉症の様で、ドローンのワイヤーを引きちぎった!

輸送中に突然目覚めたゴモラに会議室にいた事務次長達はパニックを起こしていた。「あれ、起きてるんじゃない?」

「大丈夫です! ハルキが、セブンガーが対応してくれます。落ち着いてください!」
ナカシマ隊員が対処する中私達はセブンガーとゴモラの戦いを見守る事にした。

俺は覚醒したゴモラを止める為、交戦を開始する。鼻を搔きながら苦しむゴモラに同情するが町を破壊される道理は無い。

「花粉症でイライラするのは分かるが…落ち着け!」

ゴモラに飛びかかるが鼻に付いている角の攻撃を食らい地面に激突する。体制を直し組み合うが力では先日のギガスよりも更に上回っている。一旦間合いを切りセブンガーの正拳突きを叩き込みダウンを取った。追撃を謀るため間合いを詰めるが水路に足を滑らせそのままゴモラの上にのしかかってしまう。

「なにやってるんだアイツ!」

手を広げゴモラにタツクルをかました衝撃でビルが倒壊し、栗山長官が外にいるハルキに対し文句を言う。そんな中

「Oh! カブキアタック!」

アメリカ事務次長の命名、カブキアタックで各国の事務次長も沸き立っていた。

「凄い！あんな粋な必殺技まであるのか！」

「イツツ、ワンダフル！」

私もつい、皆のテンションに当てられてしまいが歓喜に包まれたのも束の間、ゴモラの接近を止めようとしたセブンガーはその丸太のような尻尾に滅多打ちにされ機能を停止してしまう。絶対絶命の状況に皆が悲鳴を上げる中、私だけはうつ伏せになったセブンガーから光が発せられるのを目にし、ゴモラの後ろにウルトラマンが現れた。ナカシマ隊員もウルトラマンの姿を確認し援護をする為に会議室を出ていく。光の発生場所から私は何故か確信を持ってしまう。信じられないが、まさか彼がウルトラマンなのでは…私はそんなことを思わざるを得なかった。

俺は乙さんに変身し、ゴモラを迎撃する為に構えを取る。そんな中このウルトラの空間には花粉が無く空気がとてつもなく良いことに気づいた。

「なんだここ、空気いいな…。花粉全然無いじゃないですかゼットさん！」

『そんな事より来るぞハルキ！』

乙さんの指示の元、俺はゴモラを倒すため再度気を引き締め、ゴモラの頭突きを受け止める。光のヌンチャクや得意の拳法で迎撃するが驚異的なタフネスと腕力、尻尾の攻

撃に苦戦を強いられる。

ゴモラの背中側のビルからライフル音が聞こえる為ヨウコ先輩も援護をしてくれているが有効的なダメージを与えられていない様子であった。

再度ゴモラと組み合いゴモラの真反対にあるビルに叩きつけられた俺はヨウコ先輩の姿を確認する。尻餅をついただけで、さほど大きな怪我はしていないことに安堵したがヨウコ先輩の懐から転がり落ちた物に乙さんが反応する。

『あつ、あれはウルトラマンのメダル!』

「ウルトラマン?」

『俺達皆の兄さんみたいなウルトラ凄い人だ!』

そんな凄い方のメダルをなんでヨウコ先輩が持っているのかは分からないが、あれがあればゴモラの馬鹿力に対抗出来る為、ヨウコ先輩からメダルを貰うことを乙さんに提案される。

「ヨウコ先輩!そのメダルを…メダルを!」

俺は両手を使って「メダルを下さい」とジエスチャーをするがヨウコ先輩には「シュワツ、シュワツ!」としか聴こえておらず、首を傾げている。

「言葉が伝わっていない…。」

『こっとなつたら気合いとボディランゲージだ!』

「ヨウコ先輩! その、メダル! メダル!!」

俺は丸を何度も作りメダルを渡すように指示を出す。ヨウコ先輩は「丸? 持っていないよ!」と手を横に振るが諦めず、落ちている場所を指差し片手で丸印を作ることやつと伝わった。

「ひよつとして、このメダルがほしいの? Z様。」

俺は大きく頷くとヨウコ先輩がメダルを投げ、それをキャッチする。俺とZさんはメダルケースにウルトラマンのメダルが入るのを確認するとゴモラの力に対抗する為、反撃に出る。

『ウルトラフュージョンだ! 真つ赤に燃える勇気の力…。気合い入れていくぞ!!』

「オッスー!」

俺はゲネガークとの戦いの直後に回収したメダルと先程ヨウコ先輩から受け取ったウルトラマンのメダルの計三枚を取り出す。

『マン兄さん、エース兄さん、タロウ兄さんのメダルだ!!』

「真つ赤に燃える、勇気の力! マン兄さん、エース兄さん、タロウ兄さん!」

俺は三人の師匠のメダルを入れる要領で兄さん達のメダルをゼットライザーにはめ込む。

『ご唱和下さい、我の名を! ウルトラマンZ (ゼット)!!』

「ウルトラマンZ（ゼーツト）!!」

ウルトラマンZ、ベータスマッシュが誕生した!

私、小原鞠莉はゴモラに押されているウルトラマンの体が突然光出し、天空に飛翔する姿を目にしている。その直後、今までの姿とは違う色の姿となつてゴモラの顔面を蹴り飛ばしていた。

「色がチェンジした…。」

栗山長官も各国の事務次長達もウルトラマンの姿が変わつた事に驚きを隠せない様子であった。今まで確認されたものは青をベースとしトサカついたタイプであったが、目の前の姿は赤と銀色のカラーリングに覆面レスラーを思わせる隈取りのような顔、そして膨れ上がった筋肉が特徴的な姿をしていた。

赤いウルトラマンはゴモラとの組み合わせにも力負けする事無く互角以上の戦いを行っている。

「ジュウツッ!」

青いタイプとは異なりスピードは大きく劣り機敏さは失っているが見た目に違わないパワフルなパンチやキックを叩き込みゴモラを追い詰めていた。

「凄い…パワフルファイターです!」

接近では勝てない事が分かったのかゴモラは距離を取り、角から赤い光を発光させ地面に突き立てると光の柱状の光線を発射する。ウルトラマンも両腕をクロスさせそのまま上下に開くと光の刃を生成しゴモラにぶつける。

“シユワツ！”

二つの光が激突するがウルトラマンの光刃がゴモラの攻撃を押しきりゴモラを袈裟斬りにする。そのまま追撃と言わんばかりにゴモラを持ち上げ上空に放り投げると、そのまま飛翔したウルトラマンは全身を赤く発光させながらゴモラの身体にアッパーを叩き込みゴモラを粉々に粉砕した！

「Oh・グレイト!! 凄いわ、ウルトラマン!!!」

私の声を掻き消すほどの歓声が会議室全体に木霊していた。

「すみませんでした！ 作戦は失敗し、セブンガーも結局ゴモラに負けてしまって…。」

俺は…俺達ストレイジ全員は栗山長官に頭を下げる。ゼットさんになってゴモラを倒せたのだが、セブンガーだけではゴモラに手も足も出せずにいる事で二号ロボの予算は降りない事を覚悟していた。

「いや、それなんだがね…。」

栗山長官が会議での結果を報告する。ウルトラマンでも苦戦したゴモラに大健闘し

たセブンガーを直に見たアメリカ事務次長の権限で予算を出すとの事であり、今回の会議は大成功の事であったそうだ。

「確かに勝てはしなかったが勇敢な戦いっぷりだったよ！ いずれはウルトラマンを越えるロボットも作れるようなロボットを作りたいとも思っているそうだ！」

栗山長官は俺の肩を叩きストレイジ全員に

「これから期待しているぞ！」

と激励を送り作戦室を後にしようとする。

「夏川隊員、小原家の娘さんが小原家も開発費を続けて出すと言われていた。明日お礼を言いなさい。」

と鞠莉さんの家も協力してくれる事を聞き「オッス！」と答えた。

「よっしゃー！これで二号ロボが完成する!!」

ユカ先輩がはしゃぐ中、ヨウコ先輩が

「今回は大健闘だったな！約束通り明日はライブを見に行くよ。」

とライブを見てくれる約束もしてくれた。俺は今日は早めに帰宅し明日に備えて珍しく早めに寝るのであった。

ライブ当日、この日の結果でスクールアイドル部として申請が出来るかどうかが決まる運命の日が豪雨なんて…と私高海千歌は少々シヨックを受けていた。

「やっぱり慣れないわ…本当にこんなに短くて大丈夫なの？」

梨子ちゃんが衣装のスカート丈の短さに不安を覚えているが

「大丈夫だって！μ、sの最初の衣装ってこれだよ？」

とμ、sが三人だった時の衣装を見せる。

「ステージに出れば忘れるよ！」

曜ちゃんも梨子ちゃんに「ファイト！」とエールを送る。

「そろそろ始まるね！えっと、どうするんだっけ？」

「確かこうやって手を重ねて…。」

私達三人が手を重ねている所をハルキ君が見ている。曜ちゃんがハルキ君に手招きをし、梨子ちゃんも「ハルキ君も一緒に！」と合わせて四人で手を重ねる。

「手、繋ごうか…。」

私の提案に皆が頷くと重ねた手を繋げ大きな輪を作る。

「雨だね…。」

「そうツスね…。」

「皆来てくれるかな？」

「もし来てくれなかったら？」

「梨子ちゃんの最悪な結果を予想していたが私は「じゃあここで止めて終わりにする？」」

という言葉に、皆が「あり得ない」と言わんばかりに吹き出す。

「ハルキ君も任務がある中これまでありがとうね！」

私はハルキ君に改めてお礼を言う。

「いやいや、俺も、もっと手伝いたかったのに本当にすみません……」

「気にしないで。」

「ハルキ君の頑張りの分まで精一杯ライブをするから！」

ハルキ君の謝罪に対し、梨子ちゃん、曜ちゃんが答える。若干曇り顔だったその顔も笑顔になり

「オッス！皆、今日は頑張ってください！」

とエールを送ってくれた。

「じゃあ行くよ？今、全力で輝こう！アクア……」

「「サンシャイン!!」」

ハルキ君は裏方から出て、私達は舞台にスタンバイする。幕が上がりこれで部として認めて貰えるかが決まる決定的瞬間を目にした。だが……

10人前後。多くて20人…。それも学校の生徒とハルキ君が呼んでくれたであろう、ストレイジのお姉さんや上官にあたる30代くらいのお兄さんだけだった。承認は貰えないが先程言った様に止められないし、終われない。結果がどうであれ今までの事を出しきり輝きたい！そう思った私の足は自然と一步を踏み出していた。

「私達は浦の星高校スクールアイドル…セーのっ」

「…アクアです！」

「私達はその輝きと！」

「諦めない気持ちと！」

「信じる力に憧れスクールアイドルを始めました！」

梨子ちゃん、曜ちゃん、私と言葉を口にする！

「目標は…、スクールアイドル、μ'sです!!」

私は憧れのスクールアイドルの名前を口にする。

「…聞いてください!!」

私達のファーストライブが始まった!!

(♪ダイスキだったらダイジョウブ！)

俺は舞台裏から出て人数の状況に変わってない事にかなりショックを受けていた。

ストレイジのメンバーは来てくれたが他の生徒は十人過ぎ、私服の人もおらず今までのチラシ配りはなんだったのかと思う中、ステージの幕が上がってライブがスタートする。

そうだ…結果がどうであれ、俺はあの三人を見届けなければならぬ…。そんな考えであつたが曲が始まり歌が聴こえるとあまりの凄さに魅入つてしまつていた。そんな中サビに突入するとアクセシデントが発生した…。

バチツ!!!

そんな耳障りな音の中全ての電気、音源が消えて、辺りが真つ暗な状況になる。

体育館に居る全員が動揺し、ステージに立っている梨子ちゃん、曜ちゃんの表情が曇る。そんな中千歌ちゃんがサビ前からの歌詞をアカペラで歌い始め、なんとか持ち直そうと試みていた。それに続いて二人もフレーズを続ける。

「ハルキ…、こここの予備電源を使って電気を復旧させるぞ!」

蛇倉隊長の指示に俺以外のストレイジのメンバー二人が敬礼をし体育館を後にする。ヨウコ先輩が俺の手を掴み体育館を後にしながら

「あの子達の頑張りを無駄にしたいの?」

と激を飛ばす。そうだ、このライブは絶対にやりきるんだ。その事を思い出した俺は予備電源を使う為、体育館の裏側に移動する。そこには先客が配電盤を弄り電気を復旧

させようとしていたのだ。

「ダイヤさん？」

「夏川さん…どうして？」

「お嬢さん、俺達が変わろう。」

ダイヤさんも俺達と同じでこのライブをやりきりたいという思いなのだろう。蛇倉隊長の指示のもとストレイジメンバーと交代し、俺達四人は驚異的な早さで電気を復旧させてアクシデントを最小限に留めた。

電気も復旧した事を確認し、ふと道路を見ると学校に車が入り道路沿いまでの大渋滞になっており、ストレイジの整備班のメンバーも多く来ていた。何事かと思い体育館の入り口まで駆けつけると美渡姉が

「バカ千歌！あんた、開始時間間違えたでしょ!!」

と千歌ちゃんにサムズアップをしていた。

そういえばライブが始まった時には気付いていなかったが開始時間の15分前にスタートしており、人もいないのも当たり前といえそうであったのだ。ステージの三人の顔にも笑顔が戻り改めてライブが再開される！先程の歌や、sのカバー曲などを披露し大成功を納めたのだ!!

「彼女達は言いました！」

「スクールアイドルはこれからも広がっていく。どこまでだって行ける！」
「どんな夢だつて叶えられると！」

曜ちゃん、梨子ちゃん、千歌ちゃんの言葉にダイヤさんが壇上にいる三人を見上げながらあることを言う。

「これは、これまでのスクールアイドルの努力と、町の人達の善意があつての成功ですわ！勘違いしないように!!」

ダイヤさんの厳しい発言にムツとしつつもこの事実を受け止めてしまっている自分がいた。確かに彼女達三人の実力だけが全てではない。スクールアイドルの歴史は分らないが、チラシを受け取り来てくれた人や照明器具等を使ってサポートしてくれているクラスメイトなど、多くの人達の協力があつての成功だった。

「分かつてます！でもただ見ているだけじゃ始まらないって…。」

千歌ちゃんは続ける。

「今しかない瞬間だから…。だから！」

「「輝きたい!!」」

俺は思わず拍手をし、それが体育館全体に広がっていく。

このライブが、成功が最初の一步だ。そう思う中俺達スクールアイドルの四人に何か熱い気持ちが生まれていた事は言葉を交わさずとも絶対に分かったのであった。

第7話 ふたりのキモチ／二号ロボ起動計画 前編

「これでよし！ついに承認された〜！」

私、高海千歌はスクールアイドル部の部室となる部屋にプレートを取り付け喜びの声を上げる。

「それにしても、まさか本当に承認されるなんて！」

「部員足りないのにな。」

部員も足りない状態だが部として承認された事で本格的にスクールアイドルとして活動が出来るようになった。

「理事長の鞠莉さんが良いって言うならいいんじゃない？」

「良いっていうか、鞠莉さん凄いノリノリだったけど。」

そう、スクールアイドル承認の印鑑を鞠莉さんはノリノリで押していた事を思い出し、何故承認してくれたのか梨子ちゃんは疑問を浮かべていた。

「でもどうして鞠莉さんは私達の肩を持つてくれるのかしら…。」

「スクールアイドルが凄い好きなんじゃない？」

「それだけだとちよつと理由にはならないんじゃないかな？」

確かにそれだけではないかも知れないが、何にしても部として承認され、部室も貰えた為これからお世話になるこの部屋を掃除しようとする事になった。

「うわあ……。」

曜ちゃんが絶句するのも無理はない。部室の鍵を開けると辺り一面段ボールや本が埋め尽くしており泥棒が入ったかの様な状態であった。

「片付けて使えって言ってたけど……。」

「これ全部〜!!」

私の絶叫が部室の内に木霊する。ハルキ君、早く話を終えて手伝ってよ〜!

「俺だけ残してどうしたんツスカ?」

俺、夏川ハルキは鞠莉さんに残った理由を聞く。

「あなたを残したのは色々と聞きたいことがあるからです。ハルキ、いや……。ウルトラマン。」

なぜその事と思った俺は絶句してしまう。しらばつくれようにもこの状況をやり過ぎす言葉は浮かんでくる事は無く、その無言が答えと言わんばかりに鞠莉さんは「やっぱりね。」と口を開いた。

「一昨日のゴモラ輸送作戦の時、セブンガーが光ってウルトラマンが現れたの。セブン

ガーにはそんな機能は付いていないし、もしかしたらその日のパイロットであったあな
たが関係しているんじゃないかって！」

バッチリ当たっている鞠莉さんの推理に俺はウルトラマンゼットとして変身しこれ
まで戦ってきたことを白状し、この事は上層部に伝えているのかを聞く。

「その事は伝えていないし、上層部に伝える気はナツシングです。ウルトラマンの正体
が人間って事を言っても信じて貰えないしね！」

笑顔で答える鞠莉さんの顔からは嘘をついている様子も無く、この言葉を信じる事に
した。

「そうだ、スクールアイドルのマネージャーとしてこれから頑張つてね。マネージャー
は部員のサポートだけじゃない、皆を繋いでくれるものだと思ってるわ。」

そう言った鞠莉さんの顔は一瞬だけ暗くなっていた。

「あの…、それって、」

俺は少し気になり聞こうとするが「さあ、部室をクリーニングしに行きなさい！あそ
こはかなり汚れてるわよ！」

と話を切られ、俺は理事長室を後にした。

マル事、国木田花丸は図書室で委員会の仕事をしながら本を読んでいる。と言つても
もう放課後で室内には他の生徒もいない事もあり一人で自由に本に集中出来る為、この

時間は都合がいいのだ。

「やっぱり部室出来てた！」

そう言いながらクラスメイトである黒澤ルビイちゃんが図書室に入ってくる。

「スクールアイドル部、承認されたんだよ！」

「良かったね！」

嬉しそうに話すルビイちゃん。

「またライブ見られるんだ…。」

と次のライブを楽しみにしている。昨日のライブをルビイちゃんと一緒に見たが確かに凄かった。あんな風ステージに立てる彼女達は素敵だったし、ライブを続けてやってくれるならマルも見たい。スクールアイドルの事が昔から好きなルビイちゃんなら尚更だろう。そんな事を思っていると突然扉が空き誰かが入ってくる。相変わらずルビイちゃんは人見知りの為、マルの側にある扇風機の後ろに隠れてしまうが。

「こんにちはは〜！あつ、花丸ちゃん!!」

「オッス！」

昨日ステージに出てた千歌先輩、曜先輩、梨子先輩とハルキ先輩が本を抱えながら入ってきた。

「……と、ルビイちゃん!!」

千歌先輩がビシツと扇風機の後ろに隠れているルビイちゃんを指差す。

「良く分かったね…。」

マルと梨子先輩、ハルキ先輩が同時に「え?」というような顔をしてしまう。この先輩、目が悪いのかな?

「(、)くんには…。」

ルビイちゃんも顔を出し、四人にか細い声で挨拶をする。そうだ、あの日のお礼を言う機会が無かったのでハルキ先輩に改めて伝える。

「ハルキ先輩、あの時は助けて頂いて有り難うございました!」

「ああ!大丈夫ツスよ、あの日は怖い目に合わせてしまつてゴメンね。」

とハルキ先輩も返す。ストレイジの仕事もしながらこうして彼女達を手伝う先輩は凄いな…。そう思う私に梨子さんがここに来た目的を話す為、両手に抱えてる本を見せる。

「これ部室にあったんだけど、図書室の本じゃ無いかな?」

マルは山積みの本を確認する。どうやらこの本は約1年半前に借りたまま放置されていたらしい。

「多分そうです。有り難うございま「スクールアイドル部へようこそ!!」」

千歌先輩が割って入りスクールアイドル部への勧誘をしてくる。ハルキ先輩が「どう……。」と言うのもお構い無い。

「結成したし、部として承認されたし、絶対悪い様にはしませんよ……!」

そんな言い方をする勧誘で良いことは無いと思い、引き気味なマルとルビイちゃんを見た曜先輩と梨子先輩も千歌先輩を止める。

「ゴメンね……、可愛いからつい。」

「千歌ちゃん、そろそろ練習。」

曜先輩が千歌先輩を練習に行くように言い、四人は図書室を後にした。

「スクールアイドルか……。」

ルビイちゃんが四人を名残惜しそうに見ながら呟く。

「やりたいんじゃないの?」

「でも……。」

何か理由があるのだろうか、そう思いルビイちゃんに訳を聞いてみる。

「ダイヤさんが?」

「うん……。」

ダイヤさんは昔、スクールアイドルが今のルビイちゃんと同じで好きだったらしい。だが高校に入ってから経った頃からスクールアイドルを毛嫌いするようになった。

そうだ。

「本当は、ルビイも嫌いにならなくちやいけな……お姉ちゃんが嫌いなものを好きでいられないよ。」

この話は終わりと言わんばかりに今度はマルにスクールアイドルには興味ないのかと聞いてくる。

「マル!? 無い無い! 運動苦手だし、「オラ」とか言っちゃうし……」

田舎っぺ丸出しのアイドルはさすがに無い。ルビイちゃんも、マルがやらないなら自分もやらない事を伝える。お姉ちゃんの事を優先して自分のやりたいことに踏み出せないでいるルビイちゃんを見てマルは何だか複雑な気持ちでいたのだった。

俺はスクールアイドル部の練習が終わった夜、ストレイジの格納庫にある新型特空機の様子を見に来ていた。

「おお! これが二号ロボ、ウインダム……」

「セブングーより軽量でさらに人形に近い。全身にジェット噴射口を装備しているからウルトラマンZの様に自由な飛行が可能!」

セブングーがパワータイプならウインダムはスピードタイプということだろう。ユ

カ先輩の説明では新型電池も内臓しており、最大五分も稼働出来るとの事だ。

「じゃあこれで少しは怪獣と戦える時間が増えますね！」

「それで、今の状況は？」

俺が喜ぶ中、蛇倉隊長が今のウインダムの製造の状況をユカ先輩に聞く。その質問にコーヒーを持つてきたバコさんが答える。

「充電するのに後四日かかる……。」

「五分動かすのに四日ですか……。どうにかなりませんかね？」

ユカ先輩の当初の予定だともっと早く充電出来る予定だったのだが、上層部からの指示でパーツ毎に別の会社が発注をかけた事で接続が上手くいかず送電ロスが発生しているらしい。

「でもこれじゃあ肝心な時に役に立たないぜ……。」

バコさんも充電の問題に頭を悩ましており、「考えてみるよ……。」と苦い顔で答えていた。

俺はそのままストレイジを後にし、隊長やユカ先輩、ヨウコ先輩から、ライブを終えた三人に「昨日は凄かったよ」と伝えておいてくれと頼まれたのだった。

「ええっ、本当に!？」

私、黒澤ルビィはスクールアイドル部のメンバーに仮入部をする事を伝える。もちろん花丸ちゃんも一緒だ。

それを聞いた千歌先輩はテンションがハイになり飛び上がる。

「やった〜!これでラブライブ優勝だよ、レジェンドだよ!!」

そんな千歌先輩の様子を見たハルキ先輩は怪訝な顔をして「千歌ちゃん、なんか勘違いしてないツスカ?」と声をかける。

「仮入部だよ?仮入部。」

「様するにお試しって事。合えば入部するし、難しそうなら止めるし…。」

曜先輩と梨子先輩も千歌先輩に伝える。お姉ちゃんの事もある為、花丸ちゃんがルビィが仮入部をしたことは内密にして欲しいと言っている最中、千歌先輩が部員募集のポスターにルビィと花丸ちゃんの名前を大きく書いている所を三人の先輩に止められていた。

梨子先輩が色んなスクールアイドルのブログを参考にAqoursの練習メニューを作ってください、今のAqoursはダンスの練習に比重を多くした練習でいききたいみたいだ。

「そーういや、曲作りはどうするんツスカ?」

ハルキ先輩が作曲に当てる時間が無いことに気付き、梨子先輩に質問する。

「それは別に時間を見つけてやるしかないわね……。」

と返す。本物のスクールアイドルの練習が出来る事にルビイのテンションは上がったが、練習場所が決まっておらずまずは広い場所を確保しようと曜先輩からの提案があった。

「中庭もグラウンドも一杯だね……。部室もそこまで広くないし。」

「砂浜じゃダメなの？」

「今までもそうしてきたしいんじやないツスか？」

曜先輩、ハルキ先輩が提案するが移動の時間も考えると学校内で場所の確保をしたほうが良いと梨子先輩が答える。その事でルビイは心辺りがあり、先輩達に提案をする。

「あの、屋上はどうですか？ μ s はいつも屋上で練習してたみたいですよ！」

「そうか、屋上か！」

「確かにそこなら広くて思いっきりダンス出来るツスね！」

「行ってみよう！」

全員で屋上に上がってみるとルビイ達以外誰もおらず、貸し切り状態であった。ここから富士山もくつきり見えて眺めも最高だ。

「でも、日差しが強いズラ…。」

花丸ちゃんが手で日光を遮る。確かに他の場所より標高が高く、直射日光が直に來る。

「だからいいんだよ！太陽の光を一杯浴びて、海の空気を胸一杯に吸い込んで！」

「この場所が続けていけば体力も付くし練習に持つてこいの場所かもしれないツスよ。」

千歌先輩、ハルキ先輩も答える中、二人の先輩も頷く。確かにこの場所での練習に慣れる事が出来れば体力や精神力もバツチり着くかもしれない。練習場所も決まった事で全員揃えてあの言葉を言う。それはライブ前に声を揃えて叫んだ言葉だという。

「アクア〜」

「[[[[[[サンシャイン!!]]]]]]」

「ワンツースリーフォー、ワンツースリーフォー。」

ハルキ先輩がリズムを取る中、ルビィと千歌先輩がダンスの練習をする。無事にダンスもやりきり千歌先輩を振り向くとテンポがズレた千歌先輩が両手を上げてポーズを取っており、梨子先輩とハルキ先輩が口を揃えて言う。

「千歌ちゃんはやり直し」ツス」

屋上での練習をひとまず終え部室に戻り、梨子先輩が千歌先輩に作詞は出来たのかを聞くとまだ出来て無いらしく、梨子先輩からお説教を受けていた。

「今日までって約束だった筈よ？」

「思い付かなかったんだもん。」

そんなやり取りを聞きながらルビイは今日やったダンスを繰り返し練習し続けている。

「楽しいツスカ？」

ハルキ先輩の言葉にルビイは笑顔で即答する。

「はい！」

そんな中、ハルキ先輩の携帯から着信が鳴る。ストレイジからの出撃命令があり、先輩が部室を後にしようとする。

「あ、あの…。」

ルビイの言葉にハルキ先輩が振り向く。

「頑張ってください！でも、無理はしないでください…。」

「ありがとう。ルビイちゃんも花丸ちゃんも練習頑張つて！」

ルビイも花丸ちゃんも笑顔で返事を返し、ハルキ先輩は部室を後にした。

俺は毎度のようにバイクでストレイジに到着し、作戦室で怪獣と町の状況を確認す

る。今度は埼玉県に怪獣が出現したみたいだ。

「海底怪獣テレスドン。でも夜行性で地中深くに生息する筈の怪獣がどうして地上に？」

ユカ先輩が疑問に思う中、基地のアナウンスでテレスドンは北北西に向かっていている事が告げられる。

「そつちに何があるんだ？」

蛇倉隊長の疑問にユカ先輩が手に持っているタブレットで進行先を調べた所、工事が始まったばかりのジオフロントがあるそうだ。

「ジオフロント？」

「地下都市よ。」

俺の疑問にヨウコ先輩が答える。

今回はヨウコ先輩がセブンガーで出撃し、俺とユカ先輩はデータを録る為車で援護を担当する事になった。

埼玉に現れたテレスドンを迎撃する為、セブンガーも猛スピードで現地に到着する。セブンガーの手に乗せた車を素早く道路に置き戦闘を開始した。

モグラのような外見をしているがスピードは思いの他素早く、背中から押さえ込んだセブンガーに激しく抵抗する。

「このテレスドン、データより動きが素早い。」

「ヨウコ先輩、俺が市外に誘導します！」

ユカ先輩もデータ以上の素早さを見せるテレスドンに焦り、俺はヨウコ先輩を援護する為、信号弾をテレスドンの目の前に発射し威嚇をする。俺はユカ先輩を助手席に乗せ、車のアクセルを全開にし、市外に向かつて突っ走った。テレスドンの火炎や噛みつきを避けながら市外に向かうが突然の大きなサイレンの音にテレスドンは急に方向を変える。その音源であるスピーカーとその一帯を火炎で火の海にした後テレスドンは地中に潜りその戦闘は一時終了した。

「ジオフロントは壊滅し、テレスドンには逃げられた。また長官に怒られるな……。」

作戦が失敗し、蛇倉隊長が「また説教されるよ……。」と言ったニュアンスで俺達に伝える。

「まあ、明らかにセブンガーじゃ力不足だろう。」

隊長も皆に気持ちを切り替えると言わんばかりに明るい声を出していると、テンションが上がっているユカ先輩が作戦室に入ってきた。

「見て！セブンガーの手からテレスドンの表皮が採取出来ましたっ！！」

先程の戦闘で表皮が採取されたのは良いがユカ先輩はそれを冷蔵庫に保存しようとする。

「ちよつと。俺のプリンの横に置かないでくださいよ。」

ヨウコ先輩が

「また冷蔵庫にコレクションが増えた。」

と頭を抱えているが、プリンの横に真空パックで保存してある怪獣の表皮を置かれたら食べる気を無くしてしまう。

「ハルキ。これ私の冷蔵庫だから勝手に入れてると食べちゃうよ?」

とユカ先輩はプリンを一旦手に取り冷蔵庫に戻す。

「プリンもいいが…、テレスドンの解析はどうなった?」

蛇倉隊長の指示の下、作戦会議が始まった。

「テレスドンの体内には二千度の温度を持つ火炎袋があります。」

「火炎袋?」

俺の疑問にユカ先輩は「怪獣のエンジンみたいなもの。」と説明をし続きを話す。

「それがテレスドンの力の源になっていて、日中での活動を可能にしたようです。」

そしてテレスドンの目的はジオフロント工事の騒音で目覚めたと推測され、地下開発はどんどん進んでおり、都市の地下は騒音だらけで目覚めたらまた現れる可能性は十分あると蛇倉隊長も推測を口にする。

「でも隊長、今日の感じじゃ正直セブンガーでも厳しいッスよ?」

俺の質問に隊長も頭を抱え

「ウインダムが間に合えばなあ。」

と呟いていた。そんな隊長を見ながら俺はある事が頭に浮かび、ユカ先輩に聞いてみる。

「静岡は大丈夫なんツスカね？」

俺の疑問にユカ先輩はタブレットで静岡の状況を調べている。

「確かにまずいかもね。特に沼津だと地下鉄も走っているし……。」

沼津に二回も怪獣が出現したこともあり、俺は不安を隠せずにいた。

俺は一先ず家に帰宅し、ユカ先輩はウインダムの充電の改善の為徹夜をする事になったらしい。

ハルキ先輩が部室を出て校内での練習が終わった後、マル達は淡島神社の階段前に来ていた。この階段を一気に登っているのだが頂上まではかなり長く、途中で休憩を挟みながら走っているようだ。

「でもライブで何曲も踊るには、頂上まで駆け上がるスタミナが必要だし。」

梨子先輩の言う通り、スタミナを着けるには持ってこいな場所なのだろう。千歌先輩

のよいドンの掛け声でマル達全員が頂上を目指して走り出した。最初は何とか皆のペースについてこれたが体力の無さから次第に距離が離れていってしまう。それに氣付いたルビイちゃんが先輩達に「先に行つててください。」と伝え、マルと一緒にこうと誘う。でも……

「ダメだよ……。」

マルはそれを拒否しルビイちゃんに先に行く様に言う。

「花丸ちゃん……。」

「ルビイちゃんはもつと自分の気持ちを大切にしなきゃ……。自分に嘘をついて無理に人に合わせても辛いだけだよ。」

ルビイちゃんに自分の気持ちを伝える。ルビイちゃんは優しく思いやりがあるが他人に氣を使う余り、自分の気持ちもやりたいことも出来ないでいる。憧れている物も胸に閉じ込めているが、この機会を逃すとルビイちゃんはきつと後悔する。マル自身もルビイちゃんには自分らしくいられる為のきつかけが欲しいとずつと思っていた。

「ルビイちゃんはスクールアイドルになりたいんでしょ？ だつたら前に進まなきゃ！」

再度行く様に伝え、ルビイちゃんは頂上を目指して駆け上がる。その背中を見送るとマルは階段を降りながらある人に電話をかける。淡島神社の階段前に来る様に伝え、降りる頃にはその人はもう到着していた。

「何ですか？こんな所に呼び出して…。」

とルビイちゃんのお姉さん、黒澤ダイヤさんがマルに用件は何かを聞く。マルが言いたいのはたった一つ。

「あの、ルビイちゃんの話を…、ルビイちゃんのを聞いてあげてください。」
それだけ伝えるとマルはその場を後にした。

第8話 ふたりのキモチ／二号ロボ起動計画 後編

俺は朝、ストレイジからのミーティングを終え、学校に登校する前にプリンを食べた。おこうと冷蔵庫を開ける。その中に入ってあったプリンの状態が昨日と違っており、首を傾げていた。

「あれ？俺のプリン、焼きプリンになってる!？」

「電子レンジじゃあるまいし、ここに置いたの？」

ユカ先輩も冷蔵庫を覗きプリンの状態を確認する。

「ん？このアルミって…」

冷蔵庫に置いていたプリンの下にはアルミホイルが置かれてあり、そのアルミにはネロンガの角が入っていた。

「ネロンガ…焼きプリン…。」

ユカ先輩は何かを思いついた顔をし、ネロンガの角を持って格納庫に向かって走っていった。

ネロンガの角をウインダムに接続する事で充電を早める事を思いついたユカ先輩は整備班のメンバーと接続作業を進めていく。作業はウインダムに電気を送る所に入り、

俺を含め格納庫にいるメンバー全員がバイザーを装着し結果を見守る。

「レディ…ゴー!!」

ユカ先輩の掛け声と同時にウインダムに電気が送られ、その目や頭部のライトに光が灯った!

「「「おお〜〜!!」」」

整備班や俺も歓声の声を上げる。

「ネロンガの角を使うなんて考えたな!」

「時として、意外な物が役に立つ…。昨日バコさんが教えてくれたお陰ですよ。」

バコさんとユカ先輩が話す中、格納庫の二階にあるコンピュータールームにいた蛇倉隊長も「いいね…二号ロボって。」と呟いていた。蛇倉隊長はふと時計を見ると表情を一気に豹変させ、放送で俺にあることを伝える。

「ハルキ、お前学校遅刻してるぞ!もう10時だぞ!!」

「えっ?」

俺は時計を見て口をあんぐり開ける。ユカ先輩や整備班のメンバーに笑われながら俺はダツシユでストレイジの駐輪場を目指した。

『ハルキ、大遅刻でございますな…。』

乙さんは同情してくれているが今の俺にはそんな事は耳に入らずバイクを吹かし学

校を目指した。

ルビイは放課後、千歌先輩達に入部申請書を渡し改めて部員になる事になった。昨日お姉ちゃんが淡島神社にいた事はビックリしたが自分の正直な気持ちを伝え、入部を許可してくれたのだ。

「よろしくお願ひします！」

「よろしくね！」

「よろしくッス！」

ルビイは挨拶をし、練習を始める為更衣室に向かおうとしたが、梨子先輩が花丸ちゃんに来ていない事について訪ねる。昨日お姉ちゃんを淡島神社に呼んだ後そのまま帰ったのだが、それから花丸ちゃんとは今日殆ど会話をしていない。バスの時間まではまだ時間があり校外に出ている可能性は低い為、花丸ちゃんが居そうな場所はたった一つ。

「少し時間を貰っても良いですか？」

そういうとルビイは部室を出てある場所に向かう。花丸ちゃんはルビイの背中を押してくれた…。今度はルビイが花丸ちゃんの背中を押す番だ！

花丸ちゃんは案の定図書室に居てルビィは自分の本心を伝える。

「花丸ちゃん！ルビィね、花丸ちゃんの事見てた。ルビィに気を使ってスクールアイドルをやっているんじゃないかって…。ルビィの為に無理しているんじゃないかって！」

ルビィはそう思っていた。花丸ちゃんは運動もあまり得意なタイプではないし、ルビィ程では無いが知らない人と話すのも余り得意な方では無い。でも…

「練習の時も屋上に居て皆と話している時も花丸ちゃん、嬉しそうで楽しそうだった。」

花丸ちゃんとは中学からいつも一緒だったけど、昨日みたいな笑顔を見たのは初めてだった。

「それを見て思ったの。花丸ちゃんも好きなんだって！ルビィと同じ位スクールアイドルが好きなんだって!!」

「マルが？まさか…。」

花丸ちゃん自身には自覚が無いのかもしれない。だが目の前に置いてある本は作詞や作曲といった物が多く、花丸ちゃんの手の中には、sの記事が載っている雑誌もある。

「ルビィね、花丸ちゃんと一緒にスクールアイドルが出来たらってずっと思ってた！一緒に頑張れたらって!!」

「ううん、それでもマルには無理ズラ。体力も無いし、向いてないよ…。」

自信を無くしている花丸ちゃんにルビイは雑誌に載っているウエディングドレスの子について教えてあげる。

「そこに写っている凛ちゃんもね、自分はスクールアイドルに向いてないってずっと思ってたんだよ？」

「えっ？」

花丸ちゃんが驚きの声を上げる。凛ちゃんは自分が女の子らしくないというコンプレックスをずっと抱えていたが、sのメンバーが背中を押してくれた事でそれを乗り越える事が出来たのだという。

「でもスクールアイドルが好きだった、やってみたいと思った。最初はそれで良いと思うけど？」

気が付くと先輩達四人が図書室に来ており、梨子先輩の言葉にハルキ先輩も頷く。そしてルビイは今度こそ自分の一番言いたかった事を言う。

「ルビイ、スクールアイドルがやりたい！花丸ちゃんど!!」

「マルに出来るかな？」

決心が着かない花丸ちゃんに「私だってそうだよ。」と千歌先輩が言う。

「一番大切なのは出来るかどうかじゃない…。やりたいかどうかだよ！」

手を差し伸べた千歌先輩に花丸ちゃんも笑顔で握手をする。その笑顔は昨日のよう

な心からの笑顔だった!

そして花丸ちゃんも入部する事となりラブライブにエントリーする為、Aqoursの名前をランキングに登録する。現在のスクールアイドルとしてのランキングは499位。

「4999位…。」

「上に5000組もスクールアイドルがいるって事?」

「凄い数いるんツスね…。」

梨子先輩、ルビィ、ハルキ先輩がその数に圧倒される中花丸ちゃんは先程以上の笑顔で皆に「さあ、ランニング行くズラー!」と声を掛ける。

ルビィ達も先程の萎縮が一瞬で消え、皆で「オー!」と叫びながら外に飛び出した。

花丸ちゃんとルビィちゃんの二人が正式に入部し、スクールアイドル部のメンバーはランニングをしている。俺は昨日のテレスドンの事もある為、バイクに股がりながら皆が帰ってくるのを待っていた。そんな中突然の地響きと共に街中からテレスドンが再び現れた。俺は千歌ちゃんに急いで学校に戻るように電話で指示を出し、そのままストレイジに向かってバイクを走らせた。

ストレイジに到着した俺は急いでセブンガーに搭乗し、テレスドンのいる場所に猛スピードで急行する。ウインダムの充電は完了したのだがシステムの微調整にまだ時間がかかるらしく、今はセブンガーで対応するしかない。テレスドンの進行先には沼津駅があり、そこにある地下鉄や周辺施設を破壊する気なのだろう。俺はセブンガーを突っ込ませテレスドンの頭部を押しえ込む。だがテレスドンの素早い動きと力で簡単に振りほどかれてしまい、自慢の鋼芯鉄拳弾も大したダメージにはなっていないかった。そのままテレスドンの反撃と言わんばかりの頭突きを受け、セブンガーは機能停止をしまう。コックピット内部にいた俺にも衝撃を受け額から血を流してしまっているが、俺はゼットライザーを取り出しZさんに変身する。

「真っ赤に燃える勇気の力！」

俺はセブンガーをも上回る力に対抗する為、三人の兄さんの力が込められたメダルをセットする

『ご唱和ください！我の名を！ウルトラマンZ（ゼーラット!!）』

「ウルトラマン！Z（ゼーラット!!）」

Zさんに変身した俺はネロンガの顔面にラリアットを食らわせ奇襲をかける。そのまま追撃を食らわせドロップキックをお見舞いするが間合いが切れてしまった事でネロンガの火炎が勢い良く噴射し体を焼き付くす。

“ジュワツ!!”

『ウルトラ熱い!!』

俺が体勢を立て直したのもつかの間、ネロンガは体をドリルの様に回転させ上空から突撃してくる。

“ジュワツ!”

俺は体が地面に押し付けられ、反撃が出来ない状態になっていた。そんな絶体絶命な状況の中、突如銀色の機体がテレスドンめがけて突っ込んできた!

特空機の二号ロボ、ウインダムが調整を終え戦線に駆けつけてきたのだった。

「Z様、一緒に戦わせてください!」

パイロットのヨウコ先輩の声に頷き、ウインダムが間合いを詰める。両手をドリルの様に回転させて攻撃を繰り返してテレスドンを再度吹き飛ばしながらそのまま額のレーザーで追撃をする。機動力、手数ของ多きはセブンガー以上であった。

ウルトラマンZとウインダムが戦っている中、緑色の作業服を来た青年が掌にある物を見ながらニヤリと笑っている。まるでこれから面白い事をしようと考えているような…。その掌に描かれている襟巻きが生えた怪獣のメダルをテレスドンの口に目掛けて投げ入れた。その直後テレスドンの首にメダルに描かれていた怪獣と同じような襟巻きが突然生えた!

「よし、いこうぜ…。」

青年はそう呟いていた。

俺はウインダムの性能の高さに舌を巻いたのもつかの間、テレスドンの首元から襟巻きが生えた事で気を再度引き締める。その襟巻きから熱線が放射され、俺とウインダムは吹き飛ばされる。その衝撃でウインダムは一撃で機能停止にさせられてしまった…。俺は必殺のゼステイウム光線を発射するがテレスドンの目の前にバリアが張られ、その光線が反射される。

胸のカラータイマーが青から赤に点滅し、こちらも猶予が残されていない。俺は乙さんの指示の元、ウルトラフュージョンでアルファエッジに形態を変化させる。アルファエッジに変身した俺は空中から奇襲をかけるがテレスドンの襟巻きからの熱線の多さで間合いを詰めるのが困難な状況になっていった。そんな中、機能が回復したウインダムが猛スピードでテレスドンに肉薄し首元にある襟巻きを思いつき引きちぎった！

「一緒に戦うって言ったはず！」

ヨウコ先輩の気合いが入った声の中ウインダムの体全体から大量のミサイルが発射され、テレスドンに向かって打ち込まれていく。俺もここが最後のチャンスと思い、ありったけのエネルギーを込めた光線を発射した。

『ゼステイウム光線!!』

二つの強力な必殺技を食らったテレスドンも流石に耐えきれなかったのか体を爆発させ戦闘は終了した。その爆発の中、緑色の光が俺目掛けて飛び込んできてそれをキヤツチする。

「これも、光の国で作られたやつなんスか？」

ゲネガールグが奪ったメダルやライザーの一つなのではないかと思ひZさんに聞いてみる。

『いや…。これにはウルトラマンの力では無く、怪獣の力が宿っている。』

さしずめこれは怪獣メダルということかと思ひ、そのメダルをケースに収めようとする。メダルは粉々に砕け散った。

『ウルトラメダルの技術を使つて誰かが作ったんだ…。こんな物が悪用されたら大変な事になる！』

Zさんの焦つた言葉に俺も不安を抱えたまま戦いが終わった。

戦闘を終えた俺はストレイジの格納庫にあるウインダムをバコさんとユカ先輩の三人で見上げている。

「こいつ、起動電力の問題さえクリア出来れば本当に頼りになりますね！」

今日の戦いでこいつがいなければ正直負けていただろう。改めてウインダムの強さは折り紙付きであった。

「ネロンガの角や器官を再度分析して人工的に再現するつもり。そうしたら今後いつでも起動出来るはず。」

ユカ先輩も今朝以上にやる気に満ちた声を上げ、バコさんも「そりやいいな！」と同意する。

「これから宜しくな！ウインダム!!」

俺はウインダムに向かって声を掛ける。そんな中……

「あゝあ、なんか別のオモチャで遊んでみるか……」

俺、蛇倉は手の中にあるルービックキューブを放り投げ、パソコンの画面を見つめる。こんなオモチャばかりで遊ぶのも飽きてしまった。だがこいつなら、少しは楽しい事が出来そうだ。

「せいぜい俺を楽しませろよ……。ウルトラマンZ」

第9話　フアースト・ジヤグリング　前編

俺、夏川ハルキはストレイジの作戦室にあるテレビでとあるニュースを観ている。アラスカ北部で発見された謎の石器が沼津大学の人類学研究所に送られ分析されるらしい。その石器は約三万年前の氷河時代のものであり、文明発生の歴史を塗り替える大発見ではと期待されているそうだ。

「大発見ねえ…。俺には単なる石の杭にしか見えませんけど。」

その石器は槍の様な、少し形が独特な杭の様な形をしているが大したものでは無いだろうと思ひ隣にいるユカ先輩に同意を求める。だが…

「メソポタミア文明だつて五千年前だよ？だから三万年前の氷河期にこんな加工技術があるのはあり得ない訳！」

あつさりと「なんでこの凄さが解らないの？」と言わんばかりの返しに若干俺の心は傷ついていた。俺が物を知らないだけなのだろうか…。そんな事を思っているとヨウコ先輩がまだ五月にも関わらずマフラーとジャンパーを羽織つて作戦室に入ってくる。

「寒い…。何なのよこの寒さ。」

確かに今日家を出る頃は普段より少し肌寒かったが今はかなり寒くなっているそう

だ。そんな中、蛇倉隊長が場を和ませようと

「なあなあ、アツサムティー飲む？熱いけど、あつ寒（アツサム）ティー！」

など駄洒落を言うがその場にいた全員が自身の体を摩擦で暖めている。

「隊長、駄洒落が寒すぎますよ。」

とヨウコ先輩が言いながら隊長はキョトンとした顔をしていた。

「そうだハルキ。スクールアイドル部の子達に今日は練習は辞めておいた方が良くって伝えといた方がいいんじゃない？」

とユカ先輩から提案される。学校自体は休みだがこの異常気象は何かありそうだしと補足をされ、俺は携帯で全員にその事を伝えた。

「そういうえばスクールアイドルはどうなんだ？順調に進んでんのか？」

蛇倉隊長から今のスクールアイドル部の状況を聞かれる。

「順調ツスよ！新しいメンバーも二人増えましたし。」

スクールアイドルのホームページに花丸ちゃんとルビィちゃんが追加された写真が皆に見せる。花丸ちゃんが図書委員と掛け持ちをしている事を補足すると

「あんたも花丸ちゃんを見習って本を読みな。」

とユカ先輩に茶々を入れられた。

そんな中沼津上空に謎の積乱雲が発生した事が確認され、その中心に巨大な怪獣が確

認されたことをストレイジ内のアナウンスから告げられ作戦室の和やかな雰囲気が一気に引き締まった。

「怪獣は沼津駅前から南南東に向かって進行中…。」

ユカ先輩が怪獣の進行方向を口頭で述べ蛇倉隊長の指示の元、ヨウコ先輩はウインダムで出撃し俺は逃げ遅れた人の避難誘導をする事となった。

俺は沼津駅前で逃げ遅れた人を誘導しながらウインダムの戦闘を見守っている。怪獣の冷凍光線の威力にウインダムは間合いを詰める事が出来ず攻めあぐねていた。そんな中ユカ先輩からあの怪獣についての情報が通信で送られてくる。

「古代の伝承によるとあの怪獣はペギラ。アラスカの永久凍土の下に眠っていた怪獣なのに…。」

【地球温暖化の影響ってことか？】

蛇倉隊長の声も入って来て、俺も同じ事を考えていたがユカ先輩はアラスカに眠っていたという「場所と石器」に心当たりがあるらしくタブレットでペギラの伝承を検索する。

【ビンゴ！古い文献によると、天より降りたる光の槍、我らの祈りに答え魔物共を時の狭間に眠らしめん…。】

「天より降りたる光の槍？」

アラスカで発見された石器がそれに当たるとは思わなかった俺はユカ先輩に詳しいことを尋ねる。

【あの石器は怪獣を封印するために使われていたものらしい…。ペギラは二度と封印されない為にあの石器を破壊しようとしているんじゃない！】

その事が分かったユカ先輩は焦った声音で俺とウインダムを操縦しているヨウコ先輩にある事を伝える。

【ペギラの目標は沼津大学、人類学研究所!!】

【そこつて避難場所になってる所じゃないツスカ！】

「避難所を直撃されたらどれだけ被害が出るか解らない。絶対ここで食い止めるよハルキ！」

ヨウコ先輩の言葉に俺は再度気を引き締める。幸い避難は殆ど終わり、俺も戦線に参加しライフルを発砲しペギラを攻撃する。だがライフル弾の援護もウインダムの攻撃も通用せず、ペギラの冷凍光線がウインダムに直撃した。

【このままだとウインダムの油圧系統が耐えきれない…。ヨウコ、撤退して！これ以上は危ない!!】

ユカ先輩から撤退の指示をヨウコ先輩は拒否し戦闘を継続しようとする。

【ここで退く訳にはいかない。ここで怪獣を食い止めてその間に一人でも助けないと】

…。それが私の仕事だから!!」

だがウインダムが押されているのは事実…。俺はヨウコ先輩を助ける為にゼットライザーを構える。その時

「よう…。」

背後に謎の怪物が現れた。

私、ヨハネ（津島善子）は沼津駅から避難をしようとしていたがその際信じられない物を見てしまった。沼津駅近くのコスプレ専門店で限定の堕天使グッズを買ったのは良いがその帰り道に怪獣が現れ避難をしようとしたが人波に飲まれて逃げ遅れてしまふ。それどころか堕天使グッズを落として探す時間も取られてしまい避難をするのかなり遅くなってしまったのだ。そんな中私はあるストレイジの隊員と刺々しい見た目の怪人を発見し、近くの電柱に身を潜めていた。

ストレイジの隊員は良く見ると浦の星の生徒であり、スクールアイドルのライブの時に来ていた先輩だった。その先輩の左手には何やらゴツゴツした分度器のようなものが握られている。ストレイジの武器なのだろうか…。

「よう…。」

「誰だ!？」

そんな私の考えを他所にトゲトゲの怪人は先輩の手の分度器を素早く引ったくる。

「面白そうだな…。俺にも遊ばせてくれよ?」

「何すんだ!返せ!!」

奪い返そうとする先輩の足を怪人は引っかけて転ばしそのまま黒い霧煙となつて消えていった。

「どこ行きやがった…。返せ…。ゼットライザーを返せー!!」

先輩の悲痛な叫びも姿を消えた怪人には届くはずも無い。あのゼットライザーと言っていた分度器、あれはそれほどまでに大切なものなのだろうか…。そんな事を考えていたのもつかの間、怪獣の地響きで私はバランスを崩し転倒してしまふ。

「キヤアッ!」

「ハッ!大丈夫ですか?あれ、アンタは…善子ちゃん?」

先輩の善子呼びに訂正したかったがこの非常事態にそんな事を言う考えは浮かんで来ず、私はとっさにさっきの事を聞いてみる。

「ねえ、あのトゲトゲは何なの?それとゼットライザーつても…。」

私のその言葉に先輩の顔から若干血の気が引いているのが分かる。

「いつから聞いてた?」

「よう…」から…。」

私の答えた瞬間、先輩は苦虫を噛み潰したような顔をしていたが、事態は尚悪化している。怪獣の光線にロボットが氷付けにされてしまっていた。

「ヨウコ先輩!!!」

先輩は今以上に取り乱しコンクリートを素手で殴りつける。

「あいつのせい…。ゼットライザーを返せ!!」

そのまま呆然としてしまった先輩のインカムから何か音声が届いてくる。

「絶対に守る…。それが私の仕事だから…。」

その言葉を聞いた先輩は何か意を決したように立ち上がった。

「そうだ、俺だつてパイロットじゃないか!」

そう自分を鼓舞した先輩は私に向き直り

「善子ちゃん、今日見たことは絶対誰にも言わないと約束してくれ!」

そう言う一枚の紙切れに自分の電話番号を記入し「怪獣を倒したら詳しく話すよ」と言うとその場を後にした。

ハルキが善子の元を去った後、とある山でハルキを襲った怪人はゼットライザーを地面に置き持っている刀の切っ先をライザーに向ける事である事を始めようとしていた。

「星の瞬く狭間の闇よ、暗黒のパワーを我にもたらせ…。光から闇へ、闇から光へ!!」
そう言って刀を空へ向けると空から降った光がゼットライザーを包み新しいライザーを複製した。だが色はゼットライザーとは違い赤と黒。そしてメダルはウルトラマンではなく怪獣のメダルが3枚入っていた。

俺はヨウコ先輩を助けるためストレイジの格納庫にあるセブンガーに搭乗しようとしたが整備士に無茶だと止められる。

「セブンガーであいつに立ち向かうなんて無茶だ! ウィンダムでも敵わなかったんだぞ!」

「そんなのやってみなくちゃ解らないでしょ!! 先輩の命が懸かっているんです!!」
整備士を振り切りセブンガーでペギラとウィンダムの所に急行した。

第10話　ファースト・ジヤグリング　後編

「このペンギン野郎ー！」

セブンガーを操縦している俺は上空からタツクルを行いペギラに奇襲をかける。そのまま反撃を許すこと無く連続パンチで攻撃を続けるもセブンガーの技が尽きた一瞬を突かれペギラの爪がセブンガーの左腕を破壊した。

「ハルキー！早く脱出して！！」

ユカ先輩から通信が入るが俺は指示を拒否し、戦闘を続行させる。

「ヨウコ先輩は諦めなかった。人々を守る為には自分の身を省みない！あれがプロだ！！」

俺はあの怪人にライザーを盗られた時、自分は何も出来ないと思っていた。だがヨウコ先輩は自分出来ることを精一杯して人々を守るために必死になつて戦つた所を見た時、乙さんに変身出来るかどうかではなく今自分が出来る事を全力でするのがプロの姿だと強く思った。

「俺もプロでいたいんです！！」

密接しているペギラを右腕一本で引き離し、セブンガーの頭突きで互いの間合いが遠

なくなった。その間に氷付けにされたウインダムに近寄り背中中のジェットを使って機体の氷を溶かす。ウインダムの氷が溶けた事を確認した俺は急いでセブンガーから離脱しコックピットに閉じ込められているヨウコ先輩を救出し近くの公民館に横にさせた。

「ヨウコ先輩を救出しました。至急救護班をお願いします！」

俺はストレイジに通信を送りペギラを撃退する為にライフルを構えようとしたのも束の間、体制を立て直したペギラが俺とヨウコ先輩に冷凍光線を発射してきた！

「うわっ!!」

俺は反射的に腕で顔を覆うも一向に光線も冷気も来る事は無く、目の前にはあの怪人の背中が映っていた。

「お前は……」

数十分前俺からゼットライザーを奪った刺々しい赤茶色の怪人。俺はライザーを奪い返そうとするも怪人はあっさりとゼットライザーを俺に返したのだ。

「まあ落ち着けよ……。ホラ、返すぜ。」

雑に扱われた形跡も、何かが仕込まれている様子も無く一先ずほっとしたが

「待て、お前は何者だ？」

俺からライザーを奪った理由……。Zさんに変身する事が分かっているならわざわざ返す事はおかしいのではないか……。俺は目的を聞こうとするが、目の前のアイツは鼻で

笑う様な声を出し俺にある事を伝える。

「オイオイ小僧……。俺に構っている場合か？」

怪人はペギラに向かって顎をしゃくりそのまま姿を消した……。俺はペギラを倒すためゼットライザーのトリガーを押しウルトラの空間に入る。

『ハルキ、今までどうしてたんだ？』

Zさんは心配そうな声を出し理由を聞いてくる。

「すみません、ゼットライザーを奪われてたんです！」

『ウルトラやばい闇の波動を感じたぞ……！』

アイツ、やっぱり何かやったのかと思ったが今はそんな事を気にしている暇は無い。

「それより、あの怪獣を止めないと！」

Zさんも頷くと俺はウルトラメダルをゼットライザーにセットする。

「宇宙拳法、秘伝の神業！ゼロ師匠、セブン師匠、レオ師匠!!」

三人の師匠のメダルをセットし、名前を唱和する。

『ご唱和ください、我の名を！ウルトラマンZ』

「ウルトラマン……Z（ゼーット）！」

ペギラとの空中戦が始まった！

流星はアラスカからやって来た怪獣……。空中で素早く滑空するペギラに苦戦を強い

られていた。空には積乱雲が発生して視界も悪く、乙さんの額のランプから発射されるビームも頭部から繰り出す刃状の光線も悉く避けられてしまう。お互いに高度を上げ視界が見え易くなった上空でも戦況は好転する事無く、ペギラの冷凍光線が直撃してしまい、俺と乙さんは地上に叩き落とされた。

「がはっ…」

呼吸も一瞬止まり意識が途切れそうになるもそれを気力で繋ぎ止めた俺は空から光る何かを発見した。

その光る何か今朝TVで観たあの石器だった！その石器は俺達の手元に来ると同時に身の丈程の槍になりそれを手に取る。

「これは何ですか…?」

『ウルトラマンの力を感じる…！何万の時を経たウルトラの力を!!』

「そんな昔からこの地球にウルトラマンが居たんすか?」

俺はウルトラマンがこの地球にいた事に驚くも乙さん自身も良く分かっていない様子であった。だが…

『ただ、こいつの使い方は分かる…！分かっちゃいます!!』

乙さんの声と共に槍をペギラに向けて構える。槍を向けられたペギラの表情は明らかに動揺しており、その場所から離脱しようと背中を向けて飛び立とうとしている。

俺達は槍を振り回しながら穂先に炎を発生させ、それを乙の文字に描くとそれを勢い良く発射した。

『ゼットランス：ファイアー!!』

炎に包まれたペギラは爆発し、この事態は収まったと俺達は思っていた…。これは第一ラウンドに過ぎない事をこれから知ることになる。

「ほう…。」

ウルトラマンとペギラの戦いを見ていた俺はあの槍の威力に舌を巻く。まあ俺の知っているウルトラマンの足元にも及ばないが…。とりあえずこの怪人の姿では目立つ為、一先ず地球での姿に戻るとしようか。

ハルキを襲った怪人は姿を変え…、蛇倉隊長の姿に戻る。

「やるねえ…。久々に血が騒ぐぜ!!」

俺はハルキから奪ったゼットライザーを複製した闇のゼットライザーにメダルをセットする。

「ゼットンさん、パンドンさん、マガオロチ…。」

今までウルトラマン達を苦しめてきた怪獣のメダルをセットし、それを読み込むと俺

はあのセリフを叫ぶ。これを言うのも久しぶりだ…。

「お待たせしました。闇の力…お借りします!!」

右手を上には伸ばし俺は合体魔王獣、ゼツパンドンに変身する。アイツも苦戦した怪獣だ、お前達は勝つことが出来るかな？

私、津島喜子はあれから急いで家に帰り、TVの中継でウルトラマンの様子を見守る。ウルトラマンは神様ではなく人間だった事に若干のショックを感じていたが、TVでウルトラマンが映った事により、先輩はゼツトライザーを取り返す事が出来たのだと思っホツとしている。あの鳥の怪獣を倒しこれで終わったと思っていたが、別の怪獣が突然現れた時には思考が追い付かなかったが…。

その怪獣はまるで二種類の生物が合体しているような見た目をして今まで映像で見た怪獣とは明らかにヤバイと思った。火球を乱射し瞬間移動をして間合いを詰め、目からビームを発射してウルトラマンを吹っ飛ばす。そして自分の方が格上だと言わんばかりにウルトラマンを挑発する。怪獣の瞬間移動にウルトラマンは対応しているが、あの怪獣は格闘も強く防戦一方のウルトラマンは次第に追い詰められている。

「何よあの怪獣、瞬間移動も出来るし格闘も強いしチートじゃないの!!」

今まで怪獣を倒してきたウルトラマンの必殺光線も怪獣のバリアで遮断されその上、胸のランプも点滅し始めた。

「先輩、逃げて！勝てっこないわ!!」

テレビに映っているあの先輩に叫んでも伝わる事はないのに、私はそれを叫ぶこと意外の考えは浮かんで来なかった。

乙さんも知らない怪獣に俺達は苦戦を強いられている。瞬間移動に俺達以上に強い肉弾戦、槍も叩き落とされゼスティウム光線すらも通用しない…。そんな中俺達の耳に誰かが叫ぶ声が聞こえてくる。

「逃げて！あんな強い奴に勝てっこ無いわ！」

善子ちゃんが近くに寄ってきて逃げるように伝える。家に帰るように言った筈なのに、俺達の戦いを見かねて来たのだろうか…。だが俺の気持ちは変わらない。

「例え相手がどんなに強くても俺は諦めない…。俺達は怪獣退治の専門家だ！」

『そうだ、それがウルトラマンだ！ハルキ!!』

乙さんも俺に渴を入れ、再度あの怪獣に向かって構えを取る。ヨウコ先輩も諦めなかった、俺達が諦めたら町の人々が危険な目に合う。もちろんAqoursの皆も今呼

び掛けてくれている善子ちゃんもだ！そんな中戦いの最中に落とした槍が突然光輝きそれを拾う。天より降りたる光の槍……。今はこれに頼るしかない！怪獣は両手で最初以上の火球を作り俺達にぶつけようとする。俺達は槍を振り回し今度は弓を構える体勢を取りエネルギーを発射する。

『ゼットアイスアロー！』

氷の矢は火球をぶち抜き怪獣に突き刺さると一気に爆発し倒すことが出来た。

「先輩〜！」

善子ちゃんも笑顔で手を振り俺はサムズアップで答えその場を飛び立ち後にした。

戦いを終えた俺に通信機からユカ先輩の音声を送られてくる。ヨウコ先輩は病院に搬送され容態は回復に向かっている様で俺は「良かった」と安堵する。だがその通信に蛇倉隊長の声が割り入ってきた。

「こちら蛇倉、良かった良かったじゃ無い。ハルキ、出撃許可もなくセブンガーをぶっ壊したな……。分厚い始末書書いて貰うからな!!」

「すみません！」

やっぱり始末書ものだよなと思っていたがこれは自分の蒔いた種だ。すぐにストレイジに戻ろうとしたが蛇倉隊長から、先にヨウコ先輩に会ってこいとこの命令を受け、病院に向かうことになった。

「先輩！」

病院に向かおうとした時、善子ちゃんの声に俺は視線を向ける。俺は約束であるゼツトライザーの事やウルトラマンについて話そうとするが彼女は首を横に振り話さなくて良いと俺に伝える。

「この事は絶対秘密にするわ。それより今日は町を守ってくれてありがとうね！」
手を振ったときと同じ笑顔を向けられ俺も思わず笑みが零れる。

「オッス、ありがとうございませう！善子ちゃんも怪我が無さそうで良かったツス。」

「当然よ！だって私は墮天使ヨハネなのだから…。」

低音ボイスと目の横で裏ピース、そしてドヤ顔を決めた善子ちゃんだったが自分の行動が恥ずかしかつたのか顔を真っ赤にしながら「今のは忘れて！」と俺に要求する。俺は再度笑うとヨウコ先輩のいる病院に向かう為背中を向けて歩き出す。その時ふと思つたことがあり、善子ちゃんにある事を伝える。

「そうだ、花丸ちゃんが心配してたから電話するなり、学校に行つて話すなりした方が良かったかもしれないツスよ？」

そう伝えると彼女は若干苦い顔をしていたがさっきの笑顔に戻り「そこはまあ…頑張つてみるわ。」とサムズアップを返してその場を後にした。

病院にいるヨウコ先輩は普段と変わらないくらい回復しており、ストレイジに戻った

俺は昼まで始末書を書いてそのまま直帰するというハードな半日となった。

第11話 ヨハネ墮天 前編

「感じます…、精霊結界の損壊によって魔力構造が変化していくのが…。世界の崇生が天界議決により決していくのが。かの約束の地に降臨した墮天使ヨハネの魔眼がその全てを見通すのです！全てのリトルデーモンに授ける…。墮天の力を!!」

動画の生放送を終えた私、津島善子は部屋の窓を開けて絶叫した。それも墮天使フアツシヨン（ゴスロリ）のまま。

「やってしまったー！！何よ墮天使ってヨハネって何!?!リトルデーモン？サタン？居る訳無いでしょ、そんなもん!!」

高校に入学して約二ヶ月、未だに学校に行くことが出来ず不登校の日々が続いている。それもこれもあの一言が原因だ。

始業式のHRでの自己紹介

「墮天使ヨハネと契約して貴方も私のリトルデーモンになってみない?」

「うわああ！何であんな事言ったのよー!」

ドヤ顔でしかも盛大に滑ってしまった事を思い出し自室の床の上で転がりまくる。あの先輩には先日頑張って学校に行くとは言ったが、言ったのだが…

「学校行けないじゃない!!」

もう私の気持ちは折れそうになっていた。

「ああ、今日もランキングが上がってない…。」

マル、国木田花丸は千歌先輩の嘆きを聞きながらハルキ先輩と話をしていた。なんでも先日怪獣が現れた日に喜子ちゃんと会ったらしく、今日は彼女は学校に来ているのかという話になり、相変わらず学校に来ていない事を伝える。幸い喜子ちゃんに怪我は無くて安心したが曜先輩がマルの名前を言っていた事でそちらを振り向く。

「花丸ちゃん応援してます。」

「花丸ちゃんが歌っている所を早くみたいです。」

曜先輩、梨子先輩が画面に映っている文字を読み上げているがそんな事よりも…。

「これがパソコン!」

マルにはそこだ!家にはパソコンが無く使い方も良く分からない為、とても興味を惹かれてしまう。

ズルツ

「そこ!?!?」

ハルキ先輩がずっこけ、曜先輩がマジか?みたいなリアクションをしているがそんな事は関係ない。

「もしかして、これが知識の海に繋がっているという、インターネット!!」

マルの反応に千歌先輩はルビィちゃんにひそひそ何かを聞いている。

「花丸ちゃん、パソコン使った事無いの?」

「花丸ちゃんのお家、古いお寺で電化製品とかがほとんど無くて…。この前沼津に行つた時も水が自動で出る蛇口やハンドドライヤーで凄い興奮してて…。」

「そうなんだ…。」

「花丸ちゃんにストレイジの作戦室とか格納庫とか見せてあげたいツスね…。ガツシユのキャラみたいなの顔になりそう…。」

「何でガツシユなの?」

マルは千歌先輩にパソコンを触っていいか聞くと快くOKをしてくれて、一つだけ光っているボタンを押す。その瞬間画面が真っ暗になり皆がギョツとした顔をする。

「うわっ!」

「な、何したの?」

曜先輩、梨子先輩が心配する中

「一つだけ光るボタンがあるなあと思いまし…」

マルがそう言った途端、先輩二人は急いでパソコンを復旧させるためキーボードを弄る。

「マ、マル…。いけない事しました?」

曜先輩の話だと衣装のデータをパソコンに保存しているらしく、マルは半分涙目になる。千歌先輩もハルキ先輩もマルを励ましてくれていたが…。

場所は変わって学校の屋上。俺達スクールアイドル部のメンバーは練習を始めようとしたのだが…。

「おお!こんな弘法大使、空海の情報が!」

衣装のデータも無事だったパソコンを使って曜ちゃんが花丸ちゃんにインターネットの使い方を教えている。

「うん!ここで画面切り替わるからね。」

「凄いズラー!」

花丸ちゃんがパソコンに興奮している中梨子ちゃんが練習しようと指示を出す。そ

んな中

「練習も大切だけどランキングどうにかしないとだよね…。」

今のランキングは四千代、このまま続けても簡単には上がらないだろう。

「毎年スクールアイドル増えてますから…。」

ルビィちゃんが補足する中

「しかもこんな何も無い、地味！アンド地味!!アンド地味!!!なスクールアイドルだし…。」

と千歌ちゃんも肩を落とす。

「やっぱり目立たなきやダメなの?」

梨子ちゃんの言葉に曜ちゃんが「人気は大切だよ。」と返す。ラブライブについて良く分かってている訳ではないが、知名度を上げないと人気にはならない事は理解出来る。俺も曜ちゃんの言葉に頷き

「何かA q o u r sも目立つ事をすれば人気も出るんじゃないんツスか?」

と案を出してみる。千歌ちゃんも「それだ!」と言うも良いアイデアが浮かばず二人で唸っていると梨子ちゃんが助け船を出す。

「そうね…。例えば名前をもっと奇抜な物に付け直してみるとか?」

「おお、それいいツスね。インパクトのある名前なら皆興味持ってくれそうツスよ!」

梨子ちゃんの案に俺も同意しサムズアップをする。梨子ちゃんも同じ様に返して新しいグループ名を考えようとした矢先、千歌ちゃんからとあるワードが飛び出した。

「奇抜って、スリーマーメイド?」

「うっ…。」

「は?それはちよつとセンス無いんじゃない?」

梨子ちゃんが苦虫を噛んだ様な顔をし、俺は余りにもダサイ名前に素頓狂な声を上げる。千歌ちゃんか

「A q o u r s って名前になる前の候補の一つで梨子ちゃんが案を出してくれたんだよ。あつ、今は5 (ファイブ) だ!」

俺は梨子ちゃんをジト目で見ながら彼女は羞恥で顔を赤くする。ルビイちゃんは意外にもネーミングが気に入っているのかキラキラした目でその名前を呟いている。

「千歌ちゃん! その話は蒸し返さないで!!」

「あつ、でもその足じゃ踊れない。」

梨子ちゃんが狼狽える中ファイブマーメイドでは踊れない事に気付いた千歌ちゃんにルビイちゃんは

「じゃあ…、皆の応援があれば足になっちゃうとか!」

という設定を追加し、話が盛り上がる。だが曜ちゃんが

「でも代わりに声が無くなるという…。」

と人魚から人になった時のデメリットを追加され俺は頭を抱え、千歌ちゃんは「ダメじゃん!」とこのグループ名は没に。

「だからその名前は忘れてって言ってるでしょー!」

と梨子ちゃんの絶叫が木霊す中、パソコンを弄っていた花丸ちゃんが何か気付き顔を屋上の入り口に向ける。

「善子ちゃん?」

「えっ、善子ちゃん来てるんツスか?」

と花丸ちゃんに聞き返し俺も入り口に視線を向けると善子ちゃんと目が合った。

「ズラ丸、先輩…。」

「いきなり屋上から墮天してしまった。」

そんな事を言つて廊下に設置してある物入れに籠っている善子ちゃんに、花丸ちゃんは「学校来たズラか。」と一気に扉を開け声をかける。急に声をかけられた善子ちゃんはとっさに飛び出し

「来たと言うか偶々近くを通りかかったから寄つてみたと言うか…。」

と口籠る。

「いや、通りかかりついでに来てくれて良かったツスよ。」

と言う俺に対し花丸ちゃんが「いやいや、制服着て偶々近くに来たから寄ってみたは無理があるズラ…。」と突っ込む。

「どうでもいいでしょ、そんな事！それよりクラスの皆、何て言ってる…？」
「え？」

善子ちゃんの質問の意味が分からないのか首を傾げる花丸ちゃんに善子ちゃんが「私の事よ？」と付け足す。

「変な子だね」とか、ヨハネって何？とか、リトルデーモンだつて〜とか!!」
そう言う善子ちゃんに花丸ちゃんは「はは…。」と乾いた笑いで返す。

「そのリアクション…、やっぱり話題になつているのね！そうよね、あんな変な事言つたんだもん…。」

オーバーなリアクションを取りながら隠れていた物入れに戻りながら

「終わった…ラグナログ。まさにデッドオワライブ！」

と言いながら引き戸を閉め再び引きこもる。

「それ、生きるか死ぬかって意味ツスよ？」

と俺が訂正するが花丸ちゃんがクラスの皆は誰も気にしていないし、むしろなぜ来ないのかとか、怪獣の被害に遭つたりして大変な状況なのかな？という心配の声の方が多いみたいだ。

「本当ね……。天界墮天条例に誓って嘘じや無いわよね?」

と戸から顔を出した善子ちゃんが虚偽は無いかを花丸ちゃんに確かめる。

『ハルキ、地球にはそんな名前の条例があるのでございますか!?』

「うおっ!」

久しぶりにゼットさんにウルトラの空間以外で話しかけられ思わずビククリする俺に二人が顔を向けるも作り笑いで誤魔化す。

「(そんな条例、地球には無いツス……)」

とゼットさんにテレパシーで伝えながら花丸ちゃんの肯定の「ズラ。」を聞いた善子ちゃんは勢い良く物入れから飛び出しガッツポーズを決める。

「よし、まだイケる!まだやり直せる!今から普通の生徒でいければ!!」

と気合いの入った声を上げ学校に行く気になった様子であった。

「オツス今ならまだ修正出来そうツスよ!善子ちゃん!!」

「ええ!その為にもズラ丸……」

俺と善子ちゃんが互いに腕をクロスさせるクロスタッチを交わすと今度は花丸ちゃんに詰め寄りあることを頼む

「ヨハネたつてのお願いがあるの……」

「な、何ズラー!?!」

翌日私、津島善子は朝から登校しながら周りの生徒の様子を確認している。

「花丸の言っている通り、皆前の事は覚えていないようね!」

さつきクラスメイトに挨拶をしても違和感のある返され方はしていない。これなら何とかなりそうだ。

「雰囲気変わってたからビックリしちゃった。」

「皆で話してたんだよ? どうして来ないんだらうって。」

ホームルーム前にクラスメイトに話しかけられたが

「ごめんね、怪獣の被害にも合っていないし、今日から学校来るから…。宜しくね」

とフレンドリーな対応をしながら切り抜ける。そんな中私の下の名前なんだっけ? と聞かれ、他のクラスメイトからヨハネのワードが出かけていた時には流石に冷や汗が出そうになったが…。

ルビイは不登校だった津島さんが学校に来た事を隣にいる花丸ちゃんに話す。

「津島さん、学校来たんだね!」

「ズラ。マルがお願い聞いたズラ！」

何のお願いだろうと花丸ちゃんに聞いた所、津島さんは気が緩むと墮天使が顔を出すらしく、

「危なくなったら止めてと…。」

「墮天使が出ちゃう？」

何の事だろうと思っていると「津島さんって趣味とか無いの？」と言う質問を耳にする。墮天使が出る…、ルビイは数分後にその意味を知る事になるのです。

「津島さんって趣味とか無いの？」

私、津島善子はクラスメイトの何気ない質問に「特に何も無いよー。」と答えるつもりだった。だがそれを言わなかった事を直ぐに後悔する事になる。クラス溶け込むチャンスであり、ここで上手く好感度を上げることで普通の高校生になれるのではないかと思っ自分の趣味を伝える。

「う、占いをちよつと…。」

クラスの子達の黄色い歓声が響く中、「私を占ってくれる？」とリクエストをしてきた子に占いをしようとする。

「じゃあ、占ってあげるね!」

そう言った私は鞆の中から黒いローブと蠟燭を取り出し近くにいた子に火を着けてくれる?と指示をする。

「天界、魔界に蔓延る巻族達に告げます。ルシファー、アスモデウスの先導者墮天使ヨハネ…。墮天の時が来たのです!!」

時既に遅く、ノリノリで墮天使キャラを解放してしまいズラ丸以外のクラス全員がドン引きしていた。ちよつと、何でズラ丸は無表情な顔でこつちを見てるのよ!危なくなったら止めてつて昨日言ったでしょ?

「(やつてしまった…)」

私の引きつった顔を横にズラ丸が蠟燭の火を吹き消す。火災報知器が鳴らなくて本当に良かった事が不幸中の幸いだと今になって思ったのだ。

「どうして止めてくれなかったのー!」

俺、夏川ハルキは善子ちゃんがまたやらかした事を知りどう声をかけたら良いかわからないでいた。

「せっかく上手くいったのに…。」

とぼやく善子ちゃんに

「まさか、あんな物学校に持ってきているとは思わなかったスラ…。」

「どういう事?」

梨子ちゃんのピンと来ていない様な反応にルビィちゃんが

「ルビィもさつき聞いたんですけど善子ちゃん、中学時代はずつと自分は墮天使だと思
い込んでいたらしくて…。まだその頃の癖が抜けきつてないというか…。」

「厨二病を拗らせちゃったんツスね…。」

もう俺にはこんな反応しか出来ない。

「分かってる…。自分が墮天使のはず無いって、そもそもそんな物いないだし…。」

「だったらどうしてあんな物学校に持って来たの?」

梨子ちゃんの質問も最もだが善子ちゃん曰く「ヨハネのアイデンティティーみたいな物」らしい。あれが無いと自分らしく居られないみたいだがそれを話している時の笑顔と話し終わった時のハツとした時の顔がコロコロ変わりすぎて不謹慎だが笑いが出そうになる。

「実際今でもネットで占いやってますし…。」

とルビィちゃんがパソコンで善子ちゃんの占い動画を再生して皆に見せている。このタイミングで投稿まで晒されるのは流石に可愛そうだな…。

「とにかく私は普通の高校生になりたいの！何とかして!!」

ノートパソコンを勢い良く閉じ、普通の女子高生になりたいと言う事を一年生二人と俺に懇願する中、「可愛い…。」と言うメンバーが一人。

「え？」

俺と善子ちゃんがハモる中、A q o u r s のリーダーである千歌ちゃんが再びパソコンを見ながら「これだ!!」とはしゃぐ。まるで良いアイデアを思い付いたと言わんばかりに善子ちゃんにある事を誘う。

「津島善子ちゃん、いや、墮天使ヨハネちゃん…。スクールアイドルやりませんか？」

「何…?」

「ハアア…。」

当然の反応を善子ちゃんは返し、俺は千歌ちゃんに対したため息を付いた。

第12話 ヨハネ墮天 後編

私、桜内梨子は千歌ちゃんの部屋で新しい衣装を試着しているのだが…。

「この前より短い…。これでダンスしたら流石に見えるわ…。」

ゴスロリチックの服を着てダンスをするのかと思うと気分が若干ナイーブになっている。

「大丈夫!」

と千歌ちゃんがスカートを捲って、「問題無し!」みたいなリアクションをしていると

“パコン!”

「痛ったあ〜!」

“ゴン!”

千歌ちゃんを叩いたハルキ君、その後には曜ちゃんがハルキ君を流れるように叩いた所を目撃し吹き出しそうになる気持ちを押さえながら千歌ちゃんのスカートを強引に元に戻す。

「痛った!何するんすか!」

「女の子の頭を叩くな!」

「だからって今日俺が買ったマ○ジんで叩くんスカ!? しかも背表紙で!」

ハルキ君と曜ちゃんが横で口喧嘩をしている中、花丸ちゃんとルビィちゃんが二人の仲裁に入っている。こんな風に揉めているがなんだかんだ仲が良い事を知っているので気に止めていない私は思考を戻す。

「はあ…、良いのかな本当に…。」

この衣装とランキングを上げる事とは違うんじゃないかと思っているが千歌ちゃん曰く、墮天使をモチーフにしたスクールアイドルは居ないらしく、結構インパクトはあるのではないかと言う事だ。

「ゴホン…。確かに昨日までこうだったのが…、こう変わる…。」

口喧嘩を終えた曜ちゃんがファーストライブの衣装と、現在皆が着ているゴスロリを見比べる。曜ちゃん、「ほほーう」みたいな顔しないでよ。この路線で行くの賛成なの？

「確かにこの路線変更…。」

ハルキ君…、あなたから一言「ちよつとやり過ぎなんじゃないんツスカ?」って言うて!男の子目線からの意見だと説得力がきつとある!!

「インパクトがあつていいんじゃないツスカ!」

曜ちゃんにサムズアップをして肯定する。曜ちゃんも敬礼をしながらさつきまで喧嘩をしていた二人とは思えない程の笑顔と頼みの綱であつたハルキ君の意見を耳にし

た私はガクツと肩を落とす。そんな中

「うう…、なんか恥ずかしい…。」

「落ち着かないズラ…。」

とルビイちゃん、花丸ちゃんの二人は抵抗がある様な声を上げる。確かにこういう服を着る機会ほとんど無い為確かに少し恥ずかしい。

「ねえ、もう一度聞けど本当に大丈夫なの？こんな格好で歌って…」

「可愛いね〜！」

「そういう問題じゃない。」

皆のゴスロリファッションをキラキラした目で褒める千歌ちゃんに青筋が立ちそうになった私だったが善子ちゃんも同意見な様で「本当にいいの？」と確認をする。

「これでいいんだよ！ステージで堕天使の魅力を皆で思いっきり振り撒くの!!」

「堕天使の魅力…。ダメダメ、そんなのドン引きされるに決まっていますよ?」

「大丈夫だよきつと!」と言う千歌ちゃんのごり押しなアイデアに善子ちゃんもブツブツ「大人気」と呟きながら笑っている。

「協力…、してくれるみたいです。」

「オッス。」

善子ちゃんの様子にルビイちゃんが代わりに答え、私も仕方無く腹を括る。少し外の

空気を吸いたいたい為外に出ると美渡さんと千歌ちゃんの家のペットのしいたけと目が合う。私に悲劇が起こる事は言うまでもない…。

「それにしても千歌さんの部屋、漫画が沢山あるズラ！」

「確かに…。それもマ○ジンの物が多いわね。」

俺達はA q o u r sの墮天使アイドル路線で活動する事を決め、一旦休憩している時、千歌ちゃんの部屋の本棚を見た花丸ちゃんがそう呟き、善子ちゃんも話に加わる。

「あはは…。美渡姉が昔読んでた漫画を貰ってそこから色々ハマったんだよね。」

本棚を改めて見るとヤンキー先生の漫画や詐欺師の先生が主役の漫画、高校生ハッカーが主役の漫画などどれもドラマになった物が多い。

「ハルキさんはどんな漫画を読んでいるんですか？マ○ジンはあんまり読んだ事無いんですけど…。」

ルビイちゃんも話に混ざりたいのか俺に話を振ってくる。

「ボクシングの漫画とか、妖精のギルドの漫画とか、マイナーな物だと法律で裁かれない悪党を青い炎とか磁石の力を使って倒す『悪者』が主人公の漫画とかが家にあるツスよ。」

俺の持っている漫画のラインナップに曜ちゃんが

「青い炎の漫画は結構面白かったよ！中学の頃クラスの子にハルキ君、布教してたし。」
と当時の事を話す。

「善子ちゃんはハマった漫画とか無いツスか？」

善子ちゃんも漫画とか好きそうなイメージがあるし、聞いてみたいなと思いを振る。

「死神代行のとか、ノートのやつとか…。カードゲームで決闘するのとか…。デツキもあるし。」

喜子ちゃんのラインナップに俺も曜ちゃんも「おおく！」と同意する。三つの漫画もかなりハマったしデツキを持っているならいつか善子ちゃんとも遊んでみたい。

「曜ちゃんはガ○シユだっけ？好きな漫画」

と曜ちゃんが昔からハマっていた漫画について聞き

「笑いあり、涙あり、バトルもカッコいい神漫画だよ！」

と敬礼をしながらご満悦な表情をする。そんな風に盛り上がっている中

「いやー！来ないでー！！」

外に出ていた梨子ちゃんの悲鳴に皆が廊下に視線を向ける。

「こら、しいたけ！！」

美渡姉さんがしいたけを止めているが治まる気配は無く、梨子ちゃんを追いかけ回している様だった。

「大丈夫、しいたけは大人しいか…ウツ！」

そう千歌ちゃんが言いかけている時、襖が倒れてそのまま下敷きになる。その時「ピリッ」という何かが破れた様な音を聞き、まさかと思つて目線を下に向けると今日買ったマ○ジンのページがグシャグシャになつていた。

「うわっ、俺のマ○ジン!!」

まだ最初しか読んでない雑誌がご臨終し俺も思わず声を上げる。

「とりゃー……!」

普段の彼女からイメージ出来ない様な声に俺は視線を向けると外に向かつてジャンプしている梨子ちゃんがいた。

「「「「おお…、飛んだ……。」」」」

「ワン!」

俺以外の五人としいたけの鳴き声がハモリ、俺も「すげえ…。」と声を上げる。梨子ちゃんはそのまま一回転し、向かいのベランダに尻餅を着いて着地した。

「グアツ!」

そんな声を出しながらも着地した梨子ちゃんに全員が拍手をする中、Zさんが

『ハルキ、梨子がセンターになってこのジャンプのクオリティを上げたらスクールアイドルとして注目されるんじゃないか?』

と俺に聞くも

「(多分しいたけが居ないと無理と思うツスよ?)」

と無理がある方法をしないと成功しないと思ひ、Zさんにそう返す。

彼女がジャンプして帰ってきた瞬間を梨子ちゃんのお母さんにも目撃されてしまい、尻の痛みと羞恥で梨子ちゃんは泣きそうになっていた。

「じゃあ衣装宜しくね!」

「ヨーソロー!!」

梨子ちゃんとしたけの騒動の後、帰りのバスが来る時間になった為、私高海千歌はハルキ君、着替え終わった梨子ちゃんと一緒に曜ちゃんと喜子ちゃんを見送る。

「痛たた…。」

「大丈夫ツスか?」

未だ、お尻を痛がる梨子ちゃんをハルキ君は案じており、私は笑いながら様子を見守る。

「笑い事じゃ無いわよ!今度から絶対繋いでおいてよ?」

「はいはい。アハハ！」

笑い続けている私に「人が困っているのがそんなに楽しい？」とムスツとした様子で梨子ちゃんが尋ねるも私の考えはそんな事では無かった。

「違う違う、皆それぞれ個性があるんだなって。ほら私達、初めたは良いけどやっぱり地味で普通なんだなあって思ってた。」

「そんな事思ってたの？」

梨子ちゃんの意外だなあと言う様なリアクションに

「そりゃ思うよ、一応言い出しっぺだし。かといつて今の私に皆を引っ張っていける力は無いし……。」

と最後は自信無く答える。

「でも皆と話して少しずつ皆の事を知って全然地味じゃ無いつて思ったの。それぞれ個性があつて魅力的で……。だから大丈夫じゃないかな？」

そう答える私にハルキ君が「凄いツスよ……。」と返す。梨子ちゃんは「やつぱり変な人ね」と笑う。

「えー！」

「初めて会った時からそう思ってた。」

失礼な事を言う梨子ちゃんに対し誉めているのか貶しているのかを問うも「どっちも

く」とはぐらかされ地団駄を踏む。

「とにかく頑張つて行こうつて事。地味で普通の皆が集まって何が出来るのか…。ね？」

「そうツスね、頑張つていけばきつと何が変わると思うツスよ！ね？」

私にそう言つた梨子ちゃんに、ハルキ君は私達二人に「頑張ろう！」と言うニュアンスでサムズアップをする。梨子ちゃんはサムズアップを返すも、その時の二人の詳しい意図は私には分からず「まあ、いつか」と呟く。

「さて…。コンビニまで競争ー！」

と突然走り出した梨子ちゃんに私とハルキ君も駆け出す。コンビニで私はミカンのアイスを、梨子ちゃんは今日破ったマ○ジンをハルキ君に弁償し、ハルキ君や私が読んでいた漫画を読みたいという事で5冊づつ貸してお互い帰宅した。

翌日、俺達は墮天使スクールアイドルとして動画を上げる事になった。なったのだが…。

「ハイ。伊豆のビーチから登場した待望のニューカマー、ヨハネよ！皆で一緒にく墮天しない？」

「『『『『しない?』』』』」

と善子ちゃんの一声で俺達6人も目元に裏ピースをしてキメ顔でポーズを録る動画を撮影。

「やってしまった…。」

「とうか何で俺も写らなくちゃならなかったんすか?それもデ○メタルみたいな格好で!」

撮影終了後、梨子ちゃんが部室の窓際でうなだれる中俺は曜ちゃんと千歌ちゃんに今更ながら抗議する。

「だってハルキ君のも作っちゃったんだもん!格好良かったでしょ?」

「マネージャーも入った方がインパクトあるでしょ?」

「マネージャーが入った方がインパクトがあるのは分かるツスけどデ○メタルの格好はただの色物じゃ無いっすか!!」

そんな「当たり前だろ?」みたいな返答を二人ともがし、俺の抗議を完全無視をする中梨子ちゃんを除いた女子5人はサイトのランキングを見る。953位と昨日まで4000位代だったA q o u r sのランキングから一気に伸びていた。

「おお!すげえ!!」

「一気にこんなに!」

「じゃあ効果あつたつて事？」

俺、千歌ちゃん、気持ちが悪く落ち着いたであろう梨子ちゃんも加わりこのランキング上昇に驚きの声を上げる。

「コメントも沢山…。凄い!!」

ルビィちゃんが動画のコメントについて触れると画面に弾幕が出るほどの量…。

ルビィちゃん最高!

ルビィちゃんのミニスカートがとても良いです。

最初からルビィちゃん一択!

ルビィちゃんの写真が等

ルビィちゃんも満更では無い様子で「いやあ、そんな!」と恥ずかしがる。デ○メタル姿の俺に対するコメントもそれなりに多くこれがアップロードされていると思うとメチャクチャ恥ずかしくなった。

「ヨハネ様のリトルデーモン4号、黒澤ルビィです…。一番小さい悪魔…可愛がつてね!」

この墮天使スクールアイドルの動画を見た鞠莉さんは

「OH! プリティーボンバー※# \$ × ○ !!」

と最後は何を言っているのか分からない発音をしながらテンションを上げている中、ボソツと「プリティー…。」と答えたダイヤさんは

「どこがですの…。こういうものは！ハレンチと言うのですわ!!!」

と今まで以上に大激怒していた。

「え？でも今さっきプリティーって言っ…」「ギロツ!!」「スンマセン!!!」

言いかけた俺に黙れと言わんばかりに睨み付けられ反射的に謝罪をする。

「いや、そういう衣装というか…。」

「キャラというか…。」

千歌ちゃんも曜ちゃんも歯切れ悪く答える中梨子ちゃんが

「だから私はいいの？って言ったのに…。」

と二人に小声で言う。こうなる事を予想してたのか…。

「そもそも私がルビィにスクールアイドル活動を許可したのは節度をもつて節度を持って自分の意思でやりたいと言ったからです。こんな格好をして注目を集めようなどと…。そしてハルキさん、何で止める立場であるマネージャーのあなたもデ○メタルの格好で写ってますの!!」

「本当にスンマセンでした。妹さんにハレンチな格好をさせて、俺も調子に乗って動画に出てしまつて申し訳ありませんでした!!」

俺にも怒りの矛先が再度向けられ、長官に謝罪する時の様に頭を垂直に下げる。この人は怖すぎる…。そう思っている俺に乙さんも

『この子、ウルトラ怖いであります…。』

とテレパシーで俺に伝える。この部屋から今すぐ出て行きたい！

「ごめんなさい、お姉ちゃん…。」

ルビイちゃんの謝罪の言葉を聞き少し落ち着いたのか声音が普段の様な状態に近づく。

「とにかくキャラが立ってないとか、個性が無いと人気が出ないとかそういう狙いでこんな事するのは頂けませんわ！」

ダイヤさんの言いたい事は分かるが曜ちゃんは少し納得出来てない様子で「でも、一応順位は上がっているし…。」と抗議する。

「そんなもの一時だけに決まっているでしょ？」

試しに今ランキングを見てみると言うダイヤさんの言葉に俺達はパソコンの画面を見る。

「えっ!？」

現在のランキングの結果に曜ちゃんほ愕然とした声を上げる。約950位のランキングから1500位に一気に落ちていたのだった…。一気に上がった筈なのに短時間

でここまで落ちてしまう事は俺も思っていなかった。勿論他のメンバーも。

「本気で目指すのならどうするべきかも一度よく考える事ですね!」

ダイヤさんの話はこれで終わり俺達は生徒会室を後にする。その時の善子ちゃんが曇った顔をしていたのに俺は気付く事が出来なかった…。

「失敗したな。」

私、津島善子とAquoursは生徒会長の説教が終わり、千歌先輩の家の近くにある浜辺で今日の事について反省していた。

「確かにダイヤさんの言うとおりだね…。こんな事でAquoursになりたいなんて失礼だね。」

「そんなに気に病む事無いと思うっすよ?次で挽回すればいいんツスよ!」
項垂れた先輩にハルキ先輩がフォローを入れる。

「千歌先輩が悪い訳じゃ無いです。」

「そうよ…。」

黒澤さんの言葉に私も同意し視線が集まる。

「いけなかったのは墮天使…。やっぱり高校生にもなって通じないよ。」

私のせいでランキングも落ちて、生徒会長に他の皆も怒られた。

「それは違…」

千歌先輩の言葉を遮り私は続ける。

「なんか…スツキリした！明日から今度こそ普通の女子高生になれそう。」

「じゃあスクールアイドルは？」

そう尋ねる黒澤さんに「止めておく。迷惑かけそうだし…。」と答える。このままスクールアイドルを続けても私はきつとロクな事を言わないだろう。

「少しの間だけ墮天使に付き合ってくれてありがとうね。楽しかったよー！」

私は何とか笑顔を作りそのまま去ろうとする。その時

「本当に墮天使を終わらせていいんすか!?!自分が一番好きな物をこんな形で投げて後悔しないんすか?」

ハルキ先輩の言葉に一瞬立ち止まるも

「心配してくれてありがとう。でもいい機会だし、これでいいのよ。」

と振り替える事無く答えバス停に向かつて走りだす。そう、いい機会だったのよ、きつと…。

「クソツッ！こんな終わり方なんて納得出来るわけ無いだろ!!」

マル、国木田花丸は自分の手をコンクリートに叩き付けているハルキ先輩を見ながら善子ちゃんのことを思い返す。

「どうして墮天使だったんだらう?」

そう言う梨子さんの疑問にマルは幼稚園の頃の善子ちゃんのことを皆に話した。

「マル、分かる気がします…。ずっと普通だったんだと思うんです。私達と同じで余り目立たなくて…。」

小、中学校の頃の善子ちゃんはよく分からないが、きつとマルやルビイちゃんの大勢の輪の中にいるタイプでも、皆を引っ張っていくタイプでも無い気がする。

「そんな時、思いませんか?これが本当の自分なのかなって…。元々は天使みたいにキラキラしてて、何かの弾みでこうなってしまったんじゃないかって。」

マルの言葉に皆が同意する。勿論ハルキ先輩もだ。

「そっか…。」

「確かにそんな気持ち、あつた気がする。」

「オツス…。」

きつと皆が少なからず持っていた気持ちを聞きながら善子ちゃんが幼稚園の頃、良くマルに言っていた事を話す。

「私、本当は天使なの。いつか羽が生えて天に還るんだ!!」

その時の善子ちゃんはとても可愛くてキラキラしてた。でもその善子ちゃんらしさが明日から無くなる事を考えると途端に寂しくなった…。

「ねえ皆、明日協力してほしい事があるんだけどいいかな？」

千歌先輩が皆をまとめ明日の事を相談し始めた。

翌日の朝私、津島善子は部屋にある墮天使グッズを段ボールに入れゴミステーションに持って行こうとする。

「これでよし…。」

整理した部屋を思い返すと意外と墮天使以外の物が無いんだなと思いつながらゴミステーションに段ボールを置く。これで墮天使とも卒業…、そう思っている私に「墮天使ヨハネちゃん」と声をかけられその声の主は顔を向ける。

「「「スクールアイドルに入りませんか？」」」」

昨日のスクールアイドルとマネージャーのハルキ先輩が再度スカウトにやって来た。まだ朝の7時に…。

「ううん、入ってください、Aqoursに！墮天使ヨハネとして!!」

「何言っているの、昨日話したでしょ？」

墮天使を卒業しようとしている私をまだ誘おうとしているのか？ これを続けても結果は分かりきっているのに！

「いいんだよ、墮天使で！自分が好きならそれでいいんだよ!!」

千歌先輩の言葉に「ダメよ!」と否定し、私はそのまま走って逃げる。それでも追いかけるメンバーに

「生徒会長にも怒られたでしょ?」

と昨日の事を伝える。またハレンチとかキャラが立ってないと言われるのも関の山だ。

「それは私達が悪かったんだよ!善子ちゃんはいんだよ?そのまんまで!!」

「どういう意味ー?」

沼津の商店街を通過しても諦めず追ってくる。

「私ね、*Ms*がどうして伝説を作れたのか、どうしてスクールアイドルが繋がってこられたのか考えてみて分かったんだ!」

沼津駅も沼津バーガー店を過ぎてもまだ追ってくる。

「もう!いい加減にして!!」

私も流石に体力が限界になり、立ち止まって息を整える。勿論他の皆もだ。

「ステージの上で自分の好きを迷わずに魅せる事なんだよ!お客さんにどう思われるか

とか人気がどうか関係ない。自分が一番好きな姿を、輝いている姿を魅せる事なんだよ!!」

そうだ、墮天使を好きなのは今でも変わらない。それを無理矢理終わりにさせた事に本当は何一つ納得出来ない!

「だから善子ちゃん捨てちゃダメなんだよ!自分が墮天使を好きな限り!!」
皆が墮天使を認めてくれてる…。本当にいいんだろうか…。

「いいの、変な事言うわよ?」

「いいよー!」

曜先輩が肯定する。

「時々儀式とかするかもよ?」

端から見ると訳の分からない事をするかもしれない…。

「そのくらい我慢するわ。」

梨子先輩も笑いながらサムズアップをする。

「リトルデーモンになれって言うかも!!」

皆が笑うも千歌先輩が

「それは…、でも嫌だったら言う!」

と肯定的な言葉で返してくれた。そして先輩の手にある黒い羽を私に向けて

「だから…。」

私もその羽を受け取る。契約をするかの様に。

千歌先輩の笑顔に私も思わず笑顔になる。心から笑顔になれたのは凄く久しぶりな気がした。

「そうだ！墮天使グッズ!!」

ゴミステーションに置いたままだった墮天使グッズはきつと業者が持つて行ってしまっただろう…。またお小遣いを貯めて集めれば良いが愛着があった物もあったため表情が曇りそうになる。そんな時

ブロロロロロ!!

バイクの音が聞こえ、ハルキ先輩が追い付いてきた。

「ハルキ君遅いよ?」

曜先輩が言う物のハルキ先輩が

「なんで俺は昨日と同じデ○メタルフアッションでメイクまでしないとイケなかったんすか?!!こんな事千歌ちゃんはやんは言っていないし、お陰で職務質問されたんツスけど?」

友達の家でパーティーすると言う嘘を吐いて切り抜けたハルキ先輩は曜先輩をヘツドロツクしながら横腹を擦る。

「痛い痛い痛い!ワハハハハ!ごめんなさい!!」

表情がコロコロ変わる曜先輩を他所にハルキ先輩はバイクの後ろを見ると向ける。
そこには……！

「あつ！墮天使グッズ!!」

捨てた筈の墮天使グッズが全部入っていた。

「ありがとう！本当は捨てたく無かった!!本当にありがとう！」

「オッス！」

ハルキ先輩の代名詞とも呼べる言葉に私は笑顔になり、千歌先輩も

「流石リトルデーモンハルキ君！」

と目元に裏ピースをし誉める！

「そんな事よりこのリトルデーモン、ヨーソローを生け贄に捧げる必要があるツスねく
!!」

未だに続けられる痛みと笑いで顔がぐちゃぐちゃになっている曜先輩は千歌先輩に
助けを請うも

「面白そうだから続けて良し！」

との宣告を告げられ他のメンバーも笑いながら参戦する。

「ここでならきつと自分らしくいられる……。そう思った私は晴れやかな顔をしていた
事は間違いない。

「鞠莉さん！」

「どうしたのです？」

私、黒澤ダイヤは渡辺さんが悲惨な目に合っているのは知るよしも無く、鞠莉さんにパソコンに送られてきたメールはどういう意味かを問い詰める。

「あのメールは何なのです!？」

「何って、書いてある通りデス。」

そう告げる鞠莉さんの顔は曇り、私も「嘘でしょ…。」と呟く以外の言葉は思い浮かばなかった。

第13話 PVを作ろう／神秘の力 前編

「どういう事ですよ！」

私、小原鞠莉はダイヤの疑問に答えるため口を開く。先程のメールの事について生徒会長である彼女には知る権利も当然ある。

「書いてある通りよ。沼津の高校と統合して浦の星高校は廃校になる。分かっていた事でしょう？」

「それはそうですけど…。」

早かれ遅かれこうなる事を予測出来たはずだ。だが

「ただ、まだ決定ではないの。まだ待つて欲しいと私が強く言っているからね。何のために私が理事長になったと思っっているの？」

そうだ、まだ決定ではない。

「この学校は無くさない…。私にとって、どこよりも大事な場所なの。」

「方法はあるんですの？」

入学希望者はこの2年で激減している。だがそんな現状を打破出来る可能性がある物が一つだけある。

「だからスクールアイドルが必要な。あの時も言ったでしょ？私は諦めないよ…。」

私は一年生の頃を思い返す。そしてその時の気持ちは今でも変わらない。私はダイヤに手を差し伸べるも

「私は私のやり方で廃校を阻止しますわ。」

と踵を返し理事長室を後にした。

「本当、ダイヤは好きなのね。果南の事が…。」

ここにいないもう一人の顔を思い浮かべながら外の景色を見て黄昏ていた。

私、津島善子は無事学校に通い、クラスメイトと談笑している。

「そうよね！マジむかつくよね、よね…。」

「だよね、それじゃあ！」

またねーと手を振りその場を切り抜けた私は既に気疲れで机に突っ伏してしまった。

「だはあく、疲れた。普通って難しい…。」

「無理に普通にならなくても良いと思うズラ〜よ！」

そう言いながらズラ丸が堕天使のアイデンティティである黒羽を私の頭にひよいと刺す。

「深淵の深き闇から、ヨハネ墮天!!」

羽を刺された事で反射的に決めポーズを取ってしまう。

「やっぱり善子ちゃんはそうじゃないと。」

受け入れてくれるのは嬉しいが下手をするとまた自爆してしまうのではないかという一抹の不安をこの時抱えた私にルビイが慌てて教室に入ってくる。

「大変…大変だよ！学校が!!」

「統廃合!!」

俺達A q o u r sのメンバーはルビイちゃんからその話を聞き声を上げる。

「そうみたいです。沼津の学校と合併して浦の星高校は無くなるかもって…。」

「そんな!」

「いつ!?!」

曜ちゃん、梨子ちゃんの疑問には詳しい事は分からないと言うルビイちゃんだが、来年の入学希望者の数を見て存続するかどうかを決める様だ。

「今年中にどうなるかが決まるって事ツスカ…。」

そう答えた俺にルビイちゃんも頷くも下を向き俯いているメンバーが1人…。

「廃校……」

千歌ちゃんがボソツと呟く。

「「え？」」

千歌ちゃんのぞつとする様な声に俺達二年生が声を上げる。無理もない、メンバーも集まりこれから皆で頑張ろうとしている時に廃校になるかもしれないというのだ。

「ま、まだ決定じゃ無いんツスよ！」

「そうだよ！これからAqoursも人気が上がればまだチャンスはあるある！」

俺と曜ちゃんが肩を震わしている千歌ちゃんを必死にフォローする。こんな所でリーダーの彼女が折れてしまったらAqoursはマジで終わりだ！Zさんも

『心が折れてしまったのではないでございませうか？』

とテレパシーで俺に語りかける。だが千歌ちゃんの肩を震えは止まらず顔を上げた瞬間に……

「来た！ついに来た!!」

ズルツ！」

「『はっ。』」

梨子ちゃんは千歌ちゃんの発言にずり落ち、俺と曜ちゃん、テレパシーで心配していたZさんでさえも同じように疑問の声がハモる。

「統廃合つてつまり、廃校つて事だよな？学校のピンチつて事だよな！」

千歌ちゃんの廃校と言う文字通りの意味を俺達に聞き、三人共が頷く。心が折れてしまつて楽以外の感情が欠如してしまつたのかと思つていたが、思考が戻つた曜ちゃんが「心なしか嬉しそうに見えるけど……。」

と千歌ちゃんの目の前で手を振る。千歌ちゃんはそのまま部室を飛び出し周囲を一周しながら「廃校だよ！音ノ木坂と一緒にだよ！」と叫ぶ。

「不謹慎だから止めろ！」

俺の怒号に部室の全員がギョツとするも言われた本人は全く気にする様子は無い。

「これで舞台は整つたよ！私達がこの学校を救うんだよ!!」

と部室に戻つた千歌ちゃんは喜子ちゃんの手を取りながらはしゃぐ。善子ちゃんは突然の事にアワアワと狼狽えているも

「そして輝くの！あの、μ s の様に!!」

とダンスの決めポーズの構えをとらされている。

「花丸ちゃんはどう思う？」

千歌ちゃんの突飛な行動に固まつていたルビィちゃんは聞きやすい花丸ちゃんに話を振る。

「統廃合……！」

キラキラした顔で大賛成ですと言わんばかりのリアクションにルビィちゃんが「こつちも!」と声を上げる。なぜこんなにも自分の学校が無くなるという状況にも関わらず不謹慎なりアクションを取れるのだろうか…。

「合併と言うことは沼津の高校になるズラね!あの町に通えるズラね!!」

そんな事を言いながらはしやぐ花丸ちゃんに

「相変わらずね、ズラ丸…。」

善子ちゃん曰く花丸ちゃんは昔からこんな感じらしい。まあ、センサー式の水道やパソコンでテンションが上がるくらいなのだ。幼稚園の時など簡単に想像出来てしまう。

「善子ちゃんはどう思うツスカ?」

俺は念のため善子ちゃんに話を振る。

「そりゃ統合した方がいいに決まっているわ!私みたいな流行に敏感な生徒が集まっているだろうし!」

「またも廃校に賛成な生徒が1人追加…。」

「良かったズラね。中学の友達に会えるズラ!」

花丸ちゃんの「中学の頃の友達」と言う一言に善子ちゃんは冷や汗を垂らし、「統廃合絶対反対!!」と掌を返す。

「早っ!」

「アハハハ！」

俺の率直な感想にルビィちゃんが爆笑するも千歌ちゃんの机を叩く音に全員の気持ち引き締まる。

「とにかく廃校の危機が学校に迫っていると分かった以上、A q o u r s は学校を救うため…行動します！」

その気合いの入った一声に全員が同意する。

「ヨーソロー！スクールアイドルだもんね!!」

曜ちゃんの敬礼に続き、俺と梨子ちゃんも千歌ちゃんにサムズアップをする。

「でも、行動って何するつもり？」

梨子ちゃんの疑問に千歌ちゃんはフリーズし、

「え？」

と気の抜けた声を上げる。

「」「」「え？」

ダメだこのリーダー…。

翌日の放課後、私黒澤ルビィはお姉ちゃんに今日は遅くなる事を伝える為生徒会室に

来ている。

「千歌ちゃんが入学希望者を増やすためにPV作るんだって…。」

「そう…。」

素っ気なく答えるお姉ちゃんだが

「分かりましたわ。お父様とお母様に言っておきます。」

日が暮れる前には戻って来いとこの事だったが許しをもらい、部屋を出ようとしたルビィに

「どう、スクールアイドルは？」

と今のところ上手くやっていけているのか？と言うような質問を投げかけられる。

「大変だけど…楽しいよ！」

と答えたルビィに早く行きなさいと催促され、その場を後にした。

「内浦の良いところ？」

「そう！東京と違って外の人はこの町の事知らないでしょ？」

梨子ちゃんの疑問に私、高海千歌はこの町の良いところを知ってもらおうと思いい内浦を紹介するPVを作る事にした。

「Msについて調べたんすけどスクールアイドルとしてランキングに登録してラブライブに出て有名になって生徒を集める。その過程でPVも作ったみたいッスよ。」

ハルキ君が補足し、今回私達が作ったPVをネットに上げて内浦の知名度を上げるという作戦だ。

「という訳で一つ宜しく!」

まずは近くの広場で花丸ちゃんとルビイちゃんに先陣を切つて貰おうと思いカメラマンの曜ちゃんに合図を送る。

「いや、マルには無理ズラ…。いや無理!」

「ピッ…。ピギッ!」

花丸ちゃんもルビイちゃんもガチガチに緊張してしまい、ルビイちゃんに至つては逃げてる始末。

「見える!あそこよ!」

皆がルビイちゃんを探中、善子ちゃんが目の前の大木を指差す。

「違います!」

ドヤ顔で指を差す善子ちゃんに広場の看板からルビイちゃんが顔を出し、舌を出す。

「おお!なんかレベルアップしてる!」

「そんな事言ってる場合!」

喜ぶ私に梨子ちゃんがツツコミtake2に。

今度是我的実家、十千万の前で

「どうですか！この雄大な富士山、それと綺麗な海!!」

富士山、海と綺麗な絶景を写し

「更にかんがどっさり!」

画面の下から顔を出しみがきつしり詰まった箱を見せる。

「そして町には…町には…特に何も無いです!」

サムズアップをしてキツパリ答える。

「それ言ったらダメ。」

「でもカメラの下から顔出すのはいんじやないツスカ?」

曜ちゃんのダメ出しとハルキ君の意見を取り入れながらtake3へ。

「バスでちよつと行くとそこは大会!」

場所は沼津駅からスタートし敬礼をしながら曜ちゃんが登場。

「お店もたくさんあるよ!」

画面の下から顔を出し、商店街を紹介する。なんか下から顔を出すのモグラみたいで

面白いな。

「そして…そして…」

急な上り坂をハルキ君以外は必死に自転車に登る。

「自転車でちよつと登るとそこには伊豆長岡商店街が…。」

梨子ちゃんが息も絶え絶えになりながら説明をする。

「全然ちよつとじゃない…。」

「沼津で行くのだからバスで500円以上かかるし…。」

花丸ちゃん、ルビイちゃん、遅れて到着した善子ちゃんも死にそうな顔になっていた。

「とりあえずポカリ買ったからこれ飲んで!」

ハルキ君がポカリを買ってきて一先ず休憩し、take4。

「ここは内浦を守るストレイジ!」

今度はハルキ君が所属する、ストレイジの紹介。

今からストレイジ内での戦闘訓練を行う前にここでのPVを撮ろうとの事だったが…。

「セブンガーやウインダム! 防衛ロボットが怪獣の驚異から町を守ります!」

セブンガーやウインダムにカメラを向けるも

「公開禁止だからな。削除しろよ!」

と蛇倉隊長にカメラを捕られそのシーンは削除された。

「というかハルキ…。内浦の良いところを撮るんだろ？ストレイジを写してもあんまり意味無いぞ？」

と整備長のバコさんにも言われていた。そんな中

「そうだ！今団員募集してて、学校の許可が取れたらこれを貼ってほしいんだけどどうかな？」

とハルキ君の先輩であるユカさんが一枚のポスターを梨子ちゃんに渡す。

「団員募集のポスター？えっ…!？」

そう呟いた梨子ちゃんの絶句した表情に一変し、A q o u r sの皆、ハルキ君も気になつて覗く。

「何なんスカこれ!？」

ハルキ君がユカさんに抗議する。そのポスターに描かれていたのは墮天使ムービーの時にハルキ君がしていたデ○メタルファッションだったのだ。

「いや〜ハルキには内緒にしてたけどストレイジの隊員達の間で話題になつてさ！これをポスターにしても良いって隊長も言つてたし。」

「ダメに決まってるでしょ!?!何で隊長はこれが良いって思つたんスカ?！」

隊長のお墨付きを貰っているから問題ないと言うユカさんの言葉にハルキ君は蛇倉隊長に視線を向けて抗議する。

「宣伝はインパクトが必要なんだよ。ただ隊員とセブンガーやウインダムを写しても皆、興味を持つてくれないだろ？」

ハルキ君は納得出来ていないのか抗議を続けているが、蛇倉隊長の

「ストレージを映すのは出来ないが、せつかく来てくれたんだ…。内部を少し見ていくか？」

と言う一言に梨子ちゃんとルビイちゃん以外の4人が

「『見ていきます!!』」

と答えA q o u r s全員、ストレージ内部を見学する事になった。

「未来ズラ…。未来ズラー!!」

花丸ちゃんの特空機やパソコン機器の数々に、曜ちゃんがストレージの制服に興奮しまくりにあつという間に見学の時間は去った。

「そうだ、これ良かったらお土産に。ハルキの事も宜しくね。」

ヨウコさんからハルキ君を含むメンバー7人分のストレージの腕章を貰ってハルキ君と別れた。

「許可が取れなくても部屋には貼りまーす！」

見送ってくれるハルキ君やその上司の人達に手を振りながら宣言し私達はその場を後にした。

t a k e s、今度は善子ちゃんが紹介したのだが…。

「フフツ、リトルデーモンの貴方…墮天使ヨハネです。今日はこのヨハネが墮ちてきた地上を紹介してあげましょう！」

善子ちゃんが仰々しい墮天使ポーズを取りながら

「まずこれが…土!!」

工事中であろう柵に囲まれている砂山を指差しながら高笑いする善子ちゃん。これからどんな凄いことをやるのかと期待をするもの

「根本的に考え直した方がいいかも…。」

と曜ちゃんの一言に

「そう、面白くない?」

と言う私に「面白くてどうするの!」と梨子ちゃんの鋭いツツコミが入り、作戦を練り直す為喫茶店『松月』に行くことにした。

「どうして喫茶店なの?」

私、桜内梨子は皆で喫茶店『松月』でPV製作の今後をどうするかを相談している中、

善子ちゃんが喫茶店で話すことに疑問を持ち千歌ちゃんに理由を聞く。

「梨子ちゃんがしいたけが居るなら来ないって。」

「行かないとは言つてないわ！ちゃんと繋いでおいてって言っているだけ。」

しいたけが繋いでいる状態なら部屋に入ってくる事も無く怖くないが

「ここら辺だと家の中だと放し飼いの方が多いかも。」

と告げられ肩を落とす。

「そんなあ…。『ワン！』またまた〜。」

コーヒーを飲んでいる私に、どうせ千歌ちゃんが驚かそうと思つて犬の鳴き真似をしているのだらうと半ば現実逃避をした考えをしていたが再度『ワン!!』という声に飲みかけていたコーヒーが気管に入りむせてしまう。

「ゴホツ、ゴホツ…。え…。?」

振り向くと当然…犬がいた。

「うわあ!」

ルビィちゃんの可愛いというリアクションをしているが私は「ヒッ!」と悲鳴を上げる。

「こんなに小さいのに!?!」

千歌ちゃんが驚きの声を上げるも犬の大きさなど関係ない。

「その牙、そんなので噛まれたら…死!!」

欠伸をする犬の口内を見ても鋭い牙が大量に生えている。無邪気に触っている人は噛まれた時の事は何も考えないのか!

「噛まないよ。ね、わたちゃん!」

「わたちゃん」という犬を抱き抱え顔を近づける千歌ちゃんに「危ないわよ!」と忠告する。鼻噛まれるわよ!?

「そうだ! わたちゃんです少し慣れるといいよ。」

と、あろうことか私の顔にわたちゃんを近づけてきた。

「ヒッ!!」

私の悲鳴など全く気にせずハアハア息をするわたちゃん。

≡ペロツ≡

「@/%\$&・;#※」

鼻を舐められた私は声にならない悲鳴を上げトイレに駆け込んだ!

「梨子ちゃん?」

「話は聞いているから、早く進めて!!」

曜ちゃんの声にそう答えながら千歌ちゃんは善子ちゃんに動画の編集の出来を聞いてみる。

「簡単に編集したけど、お世話にも魅力的とは言えないわね…。」

と、いまいちな出来だそうだな。だとしても動画編集が出来る時点で十分凄いと思うが。

「やつぱりここだけじゃ難しいんですかね?」

ルビィちゃんの疑問に唸りながら何かを考えていた千歌ちゃんが

「じゃあ、沼津の賑やかな映像を混ぜて…、これが私達の町です! って言うのはどう?」
「そんなの詐欺でしょ!!」

どうせそんな事だろうと思った。キリが良いのか悪いのか終バスが来た事により今日は終了。千歌ちゃんと私以外はバスに乗って帰ることになった。

「結局何も決まらなかったな。例外と難しいな…、良いところを伝えるのって。」

「住めば都。住んでみないと分からない良さも沢山あると思うし。」

千歌ちゃんの言っている事は今日良く分かった。誰かに何かを伝える事は簡単ではない。きつと千歌ちゃんが憧れているsも苦労してPVを作ったのだろう。

「でも学校が無くなったらこういう毎日も無くなっちゃうんだらうね。」

「そうね…。」

今何気ない日常があつて、皆とスクールアイドルを始めたのもこの浦の星高校があつたからだ。

「スクールアイドル、頑張らなきゃー！」

千歌ちゃんがわたちちゃんを離して居なくなったのを見届け、私も顔を出す。

「フフツ……。今さら？」

少し意地悪に言う私に千歌ちゃんは

「だよね……。でも、気が付いた。無くなっちゃダメだって。私、この学校好きなんだって
！」

笑顔で言う千歌ちゃんに私も「うん！」とサムズアップをする。私も皆と出会えたこの学校が無くなって欲しくない。怪物が現れ怖い世の中になりつつあるが今の千歌ちゃんと同じ気持ちなのは間違いない。今の学校に愛着があるのだろうか……。と思いつながら私達も自分達の家に向かって帰り始めた。

俺、夏川ハルキは千歌ちゃん達Aqoursのメンバーと別れた後、隊員達と体術の稽古を行っていた。

「チエストー！」

掛け声を共にヨウコ先輩に正拳突きをするも簡単に捌かれカウンターで顔面に回し蹴りを食らいそうになる。

「いくら先輩とはいえ、手加減しないツスよ…。」

「手加減しないって言う割には…、ずいぶん息が上がってるけど?」

手招きで来いとジエスチャーをする先輩に飛び蹴りをかますも案の定止められ、顔面に突きを入れるも背後を取りながら間接技をきめてきた。

「ふう…。こんなんじやA q o u r sの子達に笑われるよ? ほしい、じゃあユカ、おいで?」

一撃も打ち込む事が出来ずユカ先輩と交代する。こんな所をA q o u r sのメンバーに見られなくて良かったと内心想うが…。

「ひくん。私がヨウコに勝てる筈無いじゃん!」

そう言いながら突っ込んでいくユカ先輩にヨウコ先輩は合気を使い、ユカ先輩をクルツと転がす。この人、間接技も合気も出来るのかよ…。そう思いながらヨウコ先輩を見る俺にバコさんが

「ハルキお前がやられた技、かけてみる?」

と自分の腕を出し声をかけてくる。

「いいんすか? じゃあ…。」

俺はさつきヨウコ先輩にやられたようにバコさんの腕を逆間接に曲げるもあつさり合気道の要領で返されてしまい転倒してしまう。

「すげえ…。どうしてそんな技を？」

他の隊員も驚嘆の声を上げる中、只の技術長じゃなかったのか…と思っている俺に
「昔、ちよつとな…。」と答える。

「来るなら来るって先に言つてよ？」

私、小原鞠莉は家のベランダで松浦果南にそう伝える。勝手に入つてくると家の者が
煩いの…。と思つている私に「廃校になるつて本当？」と果南が問う。

「ならないわ。でも、それには力が必要なの…。」

そう言いながら私は果南に一枚の用紙、復学届を渡す。「だからもう一度…果南の力
が欲しい。」

彼女の力があれば廃校の未来を変えられる。

「本気？」

復学届を受け取りそう聞く果南に

「私は果南のストーリーカードだから…。」

と自虐気味に言うも

「何の為に、私が理事長として、生徒としてこの学校に戻つて来たと思つているの？」

とそこだけは力強く伝えた。

第14話 PVを作ろう／神秘の力 後編

私、高海千歌はAqoursのメンバーと再度PVのクオリティを上げそれを鞠莉さんに見て貰っている。

「以上。がんばルビィこと、黒澤ルビィがお伝えしました。」

淡島の水族館でルビィちゃんが締め、PVが終わる。

「どうでしょうか?」

「……。」

沈黙が続きメンバー全員に緊張が走る。皆で何度も話し合い完成させたんだ。それなりの評価はもらえるかもしれない。

「……………、ハッ!」

鞠莉さんの首がカクンと動き目を覚ます。嘘でしょ?普通こんな状況で寝るの!?

「ちよつと鞠莉さん!!」

「もう、本気なのに!ちゃんと見てください!!」

ハルキ君と私が抗議するも鞠莉さんは「本気?」と私達に投げ掛ける。

「それでこのテイタラク(体たらく)ですか?」

「は？」

鞠莉さんの言葉にハルキ君は青筋を浮かべる。

「体たらく…。」

「この程度って事？と思う私に曜ちゃんも梨子ちゃんも声を上げる。

「それは流石に酷いんじゃない？」

「そうです！これだけ作るのがどれだけ大変だったと思ってるんですか！！」

「 Bannon!! 」

「そう言う二人の言葉を机を叩きながら鞠莉さんは立ち上がり「努力の量と結果は比例しません!!」と一喝する。

「大切なのはこのタウン（町）やスクール（学校）の魅力をちゃんと理解してるかデス！」

「そう言う鞠莉さんの言葉にルビィちゃんと花丸ちゃんは

「それってつまり…。」

「私達が理解してないと言うことですか？」

「ここまで作り上げた物を一蹴され、卑屈になりかける2人だったが

「じゃあ、理事長は魅力が分かかってるって事？」

と善子ちゃんが声を荒げる。

「少なくともあなた達よりは。聞きたいですか…？」

即答する鞠莉さんに私は…。

「どうして聞かなかったの？」

理事長室を出た私達に、梨子ちゃんがさつき鞠莉さんが思う答えを聞かなかったのかを訪ねる。

「なんか、聞いちやダメな気がして…。」

「何意地張ってるのよ？」

そう答える私に善子ちゃんが聞き返すも別に意地を張ってる訳ではない。

「それってとても大切な事だもん。自分で気付けなきゃ、PV作る資格なんて無いもん。」

「…確かに、そうツスね。」

私の考えにハルキ君も同意する。誰かの答えを教えて貰っても意味が無い。自分達で魅力を知る事が大切なんじゃないかなって…。

「そうかもね。」

「ズラツ。」

梨子ちゃん、花丸ちゃんも同意し私の家で作戦会議だと曜ちゃんが皆に声をかける。

「喫茶店だつてタダじゃ無いんだから梨子ちゃんもがんばルビイして！」

「そうツスよ梨子ちゃん!!」

曜ちゃん、ハルキ君が梨子ちゃんを励ますも忘れ物をした私は部室まで取りに戻る。

部室に戻った私は体育館の舞台上で1人踊っている生徒に気付き目を向ける。日本舞踊だろうか? その優雅な舞に魅了されその人の顔を見ると、なんとダイヤさんであった。

「凄いです! 私、感動しました!!」

拍手をしながら誉める私に顔を赤くしたダイヤさんは「な、何ですの!」とはぐらかす。

「ダイヤさんがスクールアイドルが嫌いなのは分かっています。でも、私達も学校が続いて欲しいって、無くなって欲しくないって思ってるんです。」

スクールアイドルの事は良く思っていないのかもしれない。でも学校が続いて欲しいって気持ちはA q o u r s の皆もダイヤさんも一緒の筈だ。だからこそ…

「一緒にやりませんか? スクールアイドル!」

1つでも思いが同じならきつと…。そう思つて誘つたのだが「残念ですけど…。」と断られてしまう。やっぱり難しいのかなと思つた私だったが

「ただ、あなた達の気持ちだけは嬉しく思いますわ。」

「お互い頑張りましょう。」と晴れやかな顔で言ったダイヤさんは体育館を後にする。今まで、怒った顔しか知らなかったが優しい顔で私達の事を応援してくれる事に驚いていた。気が付くと他のメンバーも来ており、曜ちゃんがルビイちゃんに昔のダイヤさんについて聞く。

「ルビイよりもスクールアイドルの事が大好きでした。」

「初ライブの時、停電になったツスよね？その時一番に電気を復旧させようとしたのもダイヤさんだったんすよ。」

ルビイちゃん、ハルキ君も私が知らないダイヤさんについて話す。そして床に落ちていた学校存続の署名の用紙…。私はもう一度考え直して欲しいと思い、ダイヤさんを追うも「今は言わないで！」とルビイちゃんに引き留められてしまった。

私、黒澤ダイヤはまだ一年生だった時の事を思い出していた。果南さん、鞠莉さんと一緒にスクールアイドルをしていた時の事を…。

「ダイヤ…、逃げていても何も変わりはないよ。」

私の心を読んだかの様に鞠莉さんはそう告げる。

「逃げてる訳ではありませんわ。あの時だって…。」

そうだ、逃げている訳ではない。それだけは絶対に…。

私、桜内梨子は千歌ちゃんの部屋に入るのを躊躇っている。ここまで来るのにしいたけはいなかった。いるとしたらこの部屋…。そう思い、戸を開けるも居ない事を確認し一先ずホツとする。

「それよりPVだよ。どうするの?」

善子ちゃんが今後のPVをどうしていくのかも最もだが

「確かに何も思い付いて無いズラ。」

花丸ちゃんが言った通り中々良い案が浮かばない。

「今までと似たようなものだとまた鞠莉さんに『テイタラクですか?』って言われるのがオチ…。どうすればいいんスかね?」

ハルキ君も机に突つ伏して呟く。そんな中、千歌ちゃんのお姉さんである志満さんがお茶を持つて部屋に入ってきた。

「皆で相談?」

と千歌ちゃんのベッドに腰掛けながら志満さんの問いに肯定するも「明日早いんだから今日はあんまり遅くなっちゃダメよ?」と全員に念を押す。

「明日何かあるの?」

イベントでもあるのだろうか? そう思っていた私に「海開きだよ!」と千歌ちゃんが入り口から顔を出す。そう、入り口からだ…。

「あれっ千歌ちゃん!」

曜ちゃんが声を上げるのも無理はない。皆ベッドの中に千歌ちゃんが潜っているとばかり思ってたからだ。

「じゃあ……。」

もう遅い…。 「ワン!」と声を上げ後ろを振り向くとしたけが舌を出しながら見つめていた。

「@%\$・#※☆」

ガ○シユの顔芸に負けず劣らずの表情になる私はハルキ君の「梨子ちゃん逃げろ!!」の声にダツシユで部屋を後にし、そのまま家に帰宅した。その時私の顔を見たお母さん曰く「ギャグマンガも顔負け」との事だった。

とある緑色の空間に1人の青年が大がかりな装置に書いてあるハンドルを回す。キイキイと無機質な金属音を鳴らしながら数回ハンドルを回すと装置の排出口から3

枚のメダルが落ちてくる。ゴルザ、メルバ、超（スーパー）コツヴのメダルが生成されたのを確認するとニヤリと笑う。雇った宇宙人に依頼した3体の怪獣の細胞だ。そしてコイツらと戦った経験のあるウルトラ戦士は殆どいない…。

背中に書かれている『怪研』というジャケットを翻しながら青年は左手に持ったアイテム、ゼットライザーを手にメダルをゼットする。

「超古代怪獣…、超古代竜、宇宙戦闘獣…。」

呟きながらメダルをスキャンし、ライザーからも無機質な音声の流れ、

「キエテカレカレタ…。」

青年が姿を変え、合体怪獣トライキングが三津の町に降り立った。

ブルルルル…。

梨子ちゃんが猛ダツシユで家に帰った後、蛇倉隊長から電話が掛かってきた。

「もしもし？…えっ!?!怪獣ツスカ!場所は…、三津ですね。」

復唱している俺のにルビイちゃんの「えっ…。」と言う声が耳に入る。

「どうかしたんツスカ?」

隊長に少し待ってもらいルビイちゃんの話を聞いてあげる。すると…

「ルビイのお家、三津なんです…。ど、どうしよう…。」

自分の家がある町に怪獣が出た事を知りパニックになるルビイちゃんに、電話越しに蛇倉隊長が「皆に聞こえるようにスピーカーモードにしろ」と指示を出す。

「聞こえますか？ ストレイジの蛇倉です。ルビイちゃん、三津の住民には避難勧告を発売しているから大丈夫だ。ハルキ、今どこにいる？」

俺とAqoursのメンバーの現在地を聞かれ、家の近くの旅館であると答えた。

「そうか…。ハルキは直ぐにストレイジに向かえ。他の皆は外に出ず、家族に連絡を取って事態が落ち着くまでその場にいる様にしてくれ。」

蛇倉隊長の指示にメンバー全員が返事をし、俺は十千万を後にした。

ストレイジに到着しセブンガーで出撃した俺は、先にウインダムで怪獣と交戦しているヨウコ先輩を発見する。ウインダムの攻撃を物ともしないタフネスと尋常ではない腕力の怪獣…。先日戦った“あの怪獣達”に匹敵する強さを持った怪獣を押しさえ込む為、俺もセブンガーを駆り加勢する。

「大人しくしろ！」

“グルル…キエエエー！ギシャー！！”

羽交い締めをするセブンガーに対し3つの異なる鳴き声を上げながら怪獣はセブンガーを振り払い、機体に甚大なダメージを負ってしまった。

「3体の怪獣の力を使えるのか…。」

俺、蛇倉シヨウタはストレイジの作戦室でユカと一緒に交戦している様子を見てい
る。

「照合するデータも無い…。セブンガーやウインダムでは歯が立たない。」

ユカが焦るのも最もだ。あの怪獣はそうそう見れるものでは無いし、元となった怪獣
も3体全て強力だ。だが…

「こんな時、戦士ならどう戦う?」

ユカに気付かれない様、手の内にあつた3枚のメダルを見つめながら呟く。あの怪獣
と戦っている姿を実際に目にした事は無いが3枚のメダルの内、2枚は俺も良く知る戦
士だ。

「なあ…、ウルトラマンダイナ、ガイア…。」

「くそう…。頑張れセブンガー!」

損傷が激しいセブンガーを動かしながら再度怪獣を取り押さえる。俺が囨になつて
いる間にヨウコ先輩のウインダムが攻撃すれば勝てる可能性は十分あると思ひ、正面か
ら密着する。メキメキと腕部が悲鳴を上げているが今の所怪獣の背中はガラ空きだ。

これならウインダムが背中に致命傷を与える時間を作れると思っていた…。だが怪獣の鳥の様な頭部からレーザーをゼロ距離で食らってしまった、セブンガーは大破…。その上俺はセブンガーから投げ出され背中から地面に叩きつけられてしまった。

「グフツ…。この野郎！」

俺はゼットライザーを使って変身しようとするも腰にある「それ」が無いことに気付く。

「嘘だろ…。Zさん!!」

そう叫ぶ俺を他所に怪獣はウインダムに対し腹部の顔にある口からビームを発射し戦闘不能にってしまった。ウインダムも武器であるミサイルを発射する為かなりの距離があつたにも関わらず、あの怪獣は正確にビームを撃つた。死角がない…。そう思った俺だったが突然聞こえてきた悲鳴に顔を向ける。そこには…

私、黒澤ダイヤは避難勧告を受け近くの中学校に向かつて走っている。夕飯に使う醬油が切れ買い物に行った帰りに怪獣が現れ、ストレイジのロボットもあっさりと倒されてしまった事で周囲の人達もパニックになる。そんな中私の足元にある物が飛んできた。

「なんですの…、分度器？」

片方が青い分度器の様な物を取った時、私にツインテールの女の子とセミロングの女性が声をかける。

「見つけたよ！ウルトラマンZ」

ツインテールの女性がそう尋ねる。

「はい？」

何を言っているのか理解出来ず聞き返す私に

「それを持っている事はあなたがウルトラマンでしょ？」

そう問う彼女の言葉を理解することが出来ない。これがウルトラマンと関わりがある道具なのは何となく理解出来たが、2人の異常な雰囲気を感じた私はその場所から逃走した。

「待て！」

セミロングの髪の女性が私からウルトラマンの道具を捕ろうとする。

「は、離して下さい！」

二人がかりで奪い取ろうとするが私はツインテールの女の子の手首を捻り突き飛ばす！そしてバランスを崩し尻餅を付いた彼女の姿が変わった…。

卵の様な顔に異様に大きな目玉…まるで

「ピギャー……怪獣!!」

そう叫ぶ私は腰が抜けてしまいその場に座り込んでしまう。正体を見られ、セミロンの女性も同じ様に姿を変えた怪獣は私にある事を告げる…。

「私達の姿を見た以上、生かしておけないな…。」

無機質な声でそう言うのと何処からか取り出した銃を私に向ける。死を覚悟した私に

「チエストー!」

と聞き慣れた声が木霊した。

「ダイヤさん!大丈夫ツスか?」

ストレイジの隊服を着た夏川さんが怪獣達と私の間に割って入ってきた!

「お前ら…、ピット星人だな!」

そう叫ぶと夏川さんはピット星人と呼ばれた異星人?と交戦し、あつという間に銃を奪い威嚇射撃をする。

「退け!」

そう告げる夏川さんにツインテールだったピット星人は未だ町を蹂躪する怪獣に向かって何かを投げ去っていった。そして私の手に持っているウルトラマンの道具を見ると思いもよらない一言を発したのです。

「それ、俺のなんスよ。」

そう言った夏川さんの表情に嘘を吐いている様子は微塵もなかった。

「あなたがウルトラマンなんですか!？」

と思わず大きな声を上げてしまう。ハルキさんは狼狽えながら「御守りなんツスよ
!」と誤魔化すも

「あの星人が、これを持ってている私をウルトラマンZと誤解していたんです!!」

と告げる。そう伝えられた夏川さんは観念したのか自分がウルトラマンである事を
白状した。

「すんません、黙ってて…。でもコイツだけは絶対倒しますから!」

そう宣言した夏川さんの目は力強く、私はすんなりと信じる事が出来た。

「分かりました…。頼みましたわよ!」

「オッス。ルビイちゃんは千歌ちゃんの家の皆といるから安心して下さい。後、この事
は絶対秘密に!」

ルビイの安否とウルトラマンの正体について釘を刺された私はウルトラマンとなっ
た夏川さんの背中を見つめていた。

『無くしかけるなんてウルトラ酷いぜ!ハルキ!!』

アルファエツジに変身した俺は小言を言うZさんに軽く謝罪をし、目の前の怪獣に意識を集中させる。

「チエストー！」

俺達は怪獣にスピードを生かした連撃を浴びせる。だが先ほどのセブンガーやウインダムとの戦いでコイツのタフネスは承知している。通常の攻撃では決定打を与える事は出来ない為、ここからは出し惜しみ無く行くことにした。

『「アルファバーンキック！」』

炎を纏った両足をテコンドローの様に連続で蹴りを入れる。更に間合いが一瞬離れた隙に額のビームランプからゼステイウムレーザーを発射する。そしてゼットランスアローを瞬時に呼び出し斬撃や刺突を繰り返すも、怪獣はそれら全てを捌ききつてしまい俺達の技が尽きた瞬間にある異変が起きた！

両手が変化し、右手には蟹のハサミの様な武器、左手にはまるで生物の巨大な目玉が一つ生えてきた。

「怪獣が2体増えた…。コイツ、まるで“あの時みたいないな…”。Zさん!!」

俺は目の前の怪獣の変化をみて“あの時の事”を思い出す。奴も似たような事をしていた…。コイツはやっぱ他とは違う！

『焦るなハルキー！こつちもウルトラフュージョンだ!!』

「そうだ…、俺達にもまだ手はある。気持ちを落ち着かせ、3人の兄さんのメダルをセツトする。」

「マン兄さん、エース兄さん、タロウ兄さん…、ウルトラマンZ（ゼー…ツット!!）」
ベータスマッシュに変身し、ドロップキックで奇襲を仕掛け合体怪獣を転倒させるも目玉からの光線やハサミで首を締め付けられゼロ距離の光線を直撃してしまう…。

「ジユワッ！」

「グルル…！ギシャー！キュルル！」

怪獣は咆哮すると同時に空中に猛スピードで飛翔し光線を乱射する。両手怪獣が付いた事により5つの光線が俺達を襲い、空中にいる怪獣にも触れられないまま地面に叩きつけられてしまった。

「どうした？お前の力はそんなもんか？」

俺、蛇倉シヨウタは合体怪獣ファイブキングに手も足も出ないウルトラマンZにそう声をかける。

「まあ、こんな所でやられても困るがな…。」

ため息を一つ吐き手に持った3枚のメダルを見つめながら「戦士の戦い方ってやつを見せてくれよな！」と呟きウルトラマンZに投げ渡した。

「俺の目的の為にせいでいい頑張れよ……!」

あの怪獣の猛攻に成す術もなくやられてしまっている俺達にある物が飛び込んできた。

「新しいメダル……?」

飛び込んできたウルトラメダルを見つめているが、師匠や兄さんといったウルトラマンとはまた少し違う雰囲気気の戦士についてZさんに尋ねる。

「誰ツスか、この3人?」

『師匠から聞いた事がある。それは別の次元のウルトラマン……。ティガさん、ダイナさん、ガイアさんだ!』

Zさん、俺達の地球以外にもまだウルトラマンが居たのかと思いつながらこのメダルを見る。ウルトラマン凄い居るんだな……。

『ハルキ、先輩達の変幻自在の神秘の光をお借りするんだ!!』

「オツス!」

そうだ、今はこの先輩達の力を信じるしかない!

「変幻自在……。神秘の光! ティガ先輩、ダイナ先輩、ガイア先輩!」

今までと同じように先輩達のメダルをセツトする。

『ご唱和ください我の名を! ウルトラマンZ (ゼー! ツト!!)』

「ウルトラマン…Z（ゼーラット!!）」

神秘の光を宿したウルトラマン、ウルトラマンZガンマフューチャーが誕生した!!

私、黒澤ダイヤは怪獣に倒されてしまっているハルキさん…。いや、Zさんを見て呆然としていた。今までとは桁違いの力を持った怪獣にもうダメかと思つてたがZさんの体が光輝き今までとは違ったカラーリングの姿に変化していた。

「凄い…、なんて神秘的な姿なんでしょう!」

見惚れてしまったのもつかの間、空中にいた怪獣が上空から攻めてきた。上からの攻撃に対処出来なければ状況は変わらない…。私はZさんの勝利を祈る様に見つめていた。

「ゼステイウムドライブ!」

Zさんは全身を曲げ体を起こす反動を使つて両手から赤と青の光の刃を鞭の様にしならせながら上空にいる怪獣に斬撃を浴びせた。ここからが第2ラウンドと言わんばかりに優雅に右手を伸ばしながら指を鳴らす。それはこれから始まる反撃の合図の様にも思えた。

新しい姿、ガンマフューチャーとなった俺達は光の刃を使い怪獣を撃墜する。

『さあハルキ! 反撃開始だ!!』

「オッスー！」

『ガンマイリユージョン！』

手を伸ばしながら指を鳴らすと体から3つの光が現れる。その光は3人のウルトラマンの幻となって怪獣を取り囲んだ。ガイアと呼ばれる胸にある黒いV字が印象的なウルトラマンは両手を真上から横に伸ばす動作をすると脇腹から足にかけて青いラインが入った姿に変わる。そのまま大きく振りかぶり両手を縦にスライドさせながら光線を放つ。ダイナと呼ばれる赤、銀、青の3色のウルトラマンは俺達の得意とするゼステイウム光線の様にシンプルな十字型の光線を。ティガと呼ばれる赤、銀、紫色のウルトラマンはL字の光線を怪獣の頭部、左右の武器となつている怪獣に向けてほぼ同時に発射する。3人のウルトラマンの強力な光線を受けた怪獣の各部位はポロポロになつており、この先輩達の強さに思わず舌を巻いた。

『ガンマフリーザー！』

次は先輩達の幻影を消し、振りかぶつた右手の指先から冷気を出して怪獣を氷付けにする。そのまま魔方陣の様な物を生成し怪獣の体内に小さくなって侵入する。そして……。

『ゼステイウム光線！』

怪獣の体内から俺達の必殺光線を発射し跡形も無く消滅させた。

「Zきーン！」

俺達は声の主に視線を向ける。そこにはダイヤさんが俺達の勝利を手を降つて讃えてくれていた。俺達は大きく頷くと大空に向かって飛び立ち、この過酷な戦いの幕は閉じた。

「アイツは勝てたみたいだな…。」

俺、蛇倉シヨウタはとあるビルの窓からウルトラマンZの戦いを見ていた。まあ、これくらい出来なけりゃ困るがな…。俺の本命はここに来るとある人物を捕まえる為だ。そろそろ戻ってきてもいい頃だが…、そう思った矢先お目当ての奴が足を引きずりながらこの場所に戻ってきた。

「見いつけた…。俺とも遊ぼうぜ。」

俺はこの場所に戻ってきた男の喉元に刀を向けるが臨戦体制を取った“奴”は撤退をする為距離を取ろうとする。

「シャアッ！」

当然俺も予測していた為刀で袈裟斬りにしようとしたが斬撃が浅かったのか逃げられてしまう。だが“奴”は良いものを置いて逃げてくれた。俺は床に散らばったフア

イブキングのパーツになった「怪獣メダル」を拾う。

「ゼツパンドン以外の強力なメダルだ。コイツは追々使えるだろう…。」

そしてこの部屋にはウルトラメダルの製造法が宇宙文字で記録されており、奴の目的が少し分かってきた。

「面白くなってきた…。アハハハ!!」

「そうツスカ。ヨウコ先輩は無事なんツスね!」

俺はヨウコ先輩の安否を確認し軽い脳震盪で済んだ事に安堵する。

「ハルキさん。」

そう呼んだ声の主に顔を向けるとダイヤさんが近づいてきた。

「今日は助けて頂いてありがとうございます。」

深々とお礼をするダイヤさんに俺も「オツス!」と答える。

「凄いですね。今日のウルトラマンZ。まるで魔法使いの様な戦い方でした。」

先程の戦いを見たダイヤさんが称賛する。あの形態、今までとはかなり違った戦法だったからな。

「ありがとうございます。でも重ねて言う様ですがこの事は…。」

俺の再度のお願いをダイヤさんは笑いながら了承しており、避難所に向かう彼女を見送り俺はそのままルビイちゃん達に彼女の安否を伝えるため急いでストレイジに戻りバイクを取りに戻った。

「良かった。お姉ちゃんは無事なんですわね！」

十千万に戻った俺はダイヤさんが無事な事をルビイちゃんに伝える。

「ダイヤさん、携帯を家に置いたままだったみたいで……」

ルビイちゃんに謝っておいて欲しいと言伝てを頼まれており、彼女にその事を伝え
た。

「それにしても、今日のウルトラマンZ凄かったよね〜！」

ヾ
ブツ!!

千歌ちゃんが今日の戦いを見た感想を唐突に話し、俺は飲んでいたお茶を吹き出す。
それも熱いお茶を……

「ゴホゴホ！熱つつつ!!」

「ちよつと！大丈夫？」

俺がむせと火傷で悶えている中、善子ちゃんが背中を擦る。

「うんうん、凄かったよね！光の鞭をビュンビュン振って怪獣を叩き落としたり！」

「あとあと！指を鳴らしてウルトラマンを呼んで一斉に光線をバシユって発射したり！！」

曜ちゃんと千歌ちゃんも俺達の話でヒートアップしており

「魔方陣みたいなので怪獣の中に入りもして超未来ズラ〜！」

と花丸ちゃんも興奮気味に話しに加わる。そんな中、善子ちゃんが顔を近づけて小声である事を尋ねる。

「ねえ、あの形態何なの？急に能力が開花しちゃったの？」

このメンバーで唯一Zさんの正体を知る彼女は俺にガンマフューチャーになった経緯を聞く。

「俺達は3つのメダルを使って姿を変えるんすけど、今回はこの形態になる全てのメダルがいきなり投げ込まれて来て…。」

変身に必要なウルトラメダルの事を簡潔に話す俺に善子ちゃんは俯きながら何かを考える。

「そうなのね…。私が言うのも変だけど用心しておいた方がいいかもね。メダルを3枚このタイミングで渡してきた“何か”は多分あなたの正体を知っているし、絶対味方とは限らないかもしれないだから。」

善子ちゃんの助言にお礼を言いつつ俺も同じ事を考えていた。

「善子ちゃんの言うとおり一体誰が先輩のメダルを……」

俺はふと時計を見ると20時を過ぎておりルビイちゃんを家族に会わせる為、彼女をバイクに乗せて十千万を後にする。

「ルビイちゃん、明日5時半に集合ね！」

千歌ちゃんの言うように怪獣被害の影響で海開きの準備がズレてしまったが、ルビイちゃんも行く気満々で頷いた。

「ハルキ！無事に送り届けなさいよ。」

善子ちゃんも裏ピースをしながら俺にジョークをかます。

「了解！ルビイちゃんを安全に送ります！」

敬礼をしながら返す俺に何故か曜ちゃんも笑いながら敬礼を返す。

エンジンを掛ける俺に志満姉さんが声をかけてきた。

「ハルキ君！私達夕飯まだだから戻ってきて良かつたら一緒に食べる？今日はバタバタした日だったしそのまま泊まって大丈夫よ！」

と有難いお言葉を頂戴し一泊する事も確定した。

「ねえ！帰ってきたら久しぶりにデ○エルしようよ。持ってきてね〜!!」

千歌ちゃんの要望に手を挙げて答え、ルビイちゃんの家がある三津に向かつて走り出す。無事三津の避難所に送り届け、また十千万に戻り千歌ちゃんと遅くならない程度に

遊んで一日を終えた。

「ふああああ…。」

私、桜内梨子は昨日予めセットしておいた目覚ましのスイッチを欠伸をしながら切る。元々3時半から集合だが、それが5時半になった所で眠いものは眠い。そもそも私、早起きはあまり得意では無いのに…。

「何でこんな早くから…。」

1人ブツブツと文句を言う私はベッドから落ちている掛け布団を元に戻し鏡を見る。人には言えないが寝相がかなり悪く掛け布団は毎回蹴り落ち、髪の毛は寝癖でボサボサだ。ダラダラと身支度を整えている間に眠気も引き集合場所である浜辺に向かう。

「あつ、梨子ちゃん!!」

「おはヨーソロー!!」

先に着いていた千歌ちゃん、曜ちゃんが声をかける。

「おはよう。」と二人に声をかけ、浜辺のゴミ拾いを三人で始める。遅れてストレイジのTシャツとジャケットを羽織ったハルキ君も加わり私は曜ちゃんにある事を聞く。

「ねえ、毎年海開きってこんなに人が集まるの?」

「うん。町中の人に来てよ。勿論学校の皆も！」

まだ5時半にも関わらず沢山の人が浜辺のゴミを拾っている。クラスの皆やルビィちゃん達Aqoursの一年生。ダイヤさんや鞠莉さん、淡島にいる松浦先輩も来ている。松浦先輩は船で来たのは分かるがルビィちゃんに住んでいる所って昨日怪獣が出て町の被害が今までで一番出ているそうだ。クラスメイトも三津から来ている子もこの場所に沢山居る。交通の不便や自分達の町が大変な状況であったとしても、こうして来てくれる人達を見て私は気付いた。

「ねえ、これなんじゃ無いか？この町や学校の良いところって……」

千歌ちゃん、曜ちゃん、ハルキ君もハツとした顔でお互いを見る。千歌ちゃんが何かを閃いたのか高台に登り大きな声でこの浜辺にいる人達に何かを伝える。

「あの！私達は浦の星高校でスクールアイドルをやっているAqoursです！」

流石、こういう時の千歌ちゃんの行動力は凄いなと思いつながら私は千歌ちゃんを見る。

「私達は学校を残す為に、ここに生徒を沢山集める為に！皆さんに協力して欲しい事があります!!」

そして今日一番の大きな声で

「皆の気持ちを形にする為に!!」

千歌ちゃんはここに居る人達とスカイランタンを浜辺で飛ばす事を企画する。1000個のランタンを浦の星高校の生徒で一週間かけて作り、私達が今練習している新曲に取り入れた町のPVを作る事になった！

(♪夢で夜空を照らしたい)

しっとりとした曲調とダンス、そしてサビに入り浜辺には『A q o u r s』の文字に並んだスカイランタンが夕暮れの空に一斉に浮かび上がった！

PVの撮影は大成功。私、高海千歌は夕暮れの空を見ながら呟いた。

「私、心の中でずっと叫んでいた。助けてほしい…。ここには何も無いって。」

地味で田舎で何も無い町と思っていた。

「でも違っていた。追いかけてみせるよ！ずっと…。」

その後日、私達に朗報が来る。

第15話 TOKYO／未確認物質護送指令 前編

「この前のPVが5万再生!？」

私、高海千歌は先日のPVの再生数に驚きの声を上げる。喜子ちゃんが「ランタンが綺麗だって評判になったみたい。」とパソコンのコメントを読み上げる。

「ランキングも凄いッスよーほら?」

ハルキ君がパソコンを指差し、そこに表示されている数字は…。

「99位!？」

梨子ちゃん、花丸ちゃんもこの数字に驚いている。

「来た…、来た!!それって全国でつて事でしょ?5000組近くいるスクールアイドルの内、100位以内でつて事でしょ!？」

未だ信じられず、私のテンションは爆上がりだ!

「確かに今まで4000位だった俺達Aqoursがここまで来たんだ!凄いッスよ!!」

ハルキ君もそう言いながら私と拳を合わせる。

「一時的な盛り上がりかもしれないけど、それでも凄いわよね!!」

「ランキング上昇率では1位!」

「凄いズラ!!」

梨子ちゃん、ルビィちゃん、花丸ちゃんもこの結果に大満足だ。

「なんかさ、このまま行ったらラブライブで優勝出来ちゃうかも!」

そう言う私に曜ちゃんが首を傾げる。

「優勝?」

「そんな簡単な訳無いでしょ?」

梨子ちゃんも「甘いなあ」と言うリアクションで答える。

「分かっている。でも可能性は0じゃ無いでしょ。ね、ハルキ君?」

私はハルキ君に話を振り彼も笑顔で

「そうそう!イケ…。『ギユツ』嫌…。こういう時だからこそ気を引き締めて行かなくちゃ…。」

ハルキ君にも釘を刺される始末。

「何するんスカ?」

私、桜内梨子はハルキ君が千歌ちゃんに過度に調子を着かせる事を言おうとした時、お尻をつねり無言の威圧をかけた。

「あまり千歌ちゃんを乗せたらダメよ！大会で優勝経験を持つあなたなら分かるでしょ？」

と互いに耳元でヒソヒソ話す。

ピロン[≡]

突然、私のパソコンに一通のメールが届く。それはスクールアイドル運営委員会からのメールだった。

「ルビィちゃん何て書いてあるの？」

梨子ちゃんが画面の目の前にいるルビィちゃんに尋ねる。

「ええつと…。A q o u r s の皆さん。東京スクールアイドルワールド運営委員会で
す。」

読み上げるルビィちゃんに私は東京の場所を反芻する。

「東京って…あの東にある京…。」

「「何の説明にもなっていない」ッス。」

梨子ちゃん、曜ちゃん、ハルキ君の声がハモる。この三人、息ピッタリか！

「「「「東京だ!!」」」」」

「知つての通り深夜、研究所が謎の巨大ロボットにより壊滅……。その際3つのメダルが強奪された。」

俺達のストレイジのメンバー、夏川ハルキ、ヨウコ先輩、ユカ先輩は蛇倉隊長から緊急招集を受け作戦室で話を聞いている。

「えっ？メダル!？」

思わず俺は隊長に聞き返し隊長も頷く。アルファエッジ、ベータスマッシュ、ガンマフューチャーに変身する為のメダルは合わせて9枚。それ以外にも少なくとも3枚はあるのかと思う中説明は続く。犯人のメッセージと思われる物が研究所の監視カメラに残されているらしく、ユカ先輩が作戦室のモニターに映す。

「諸君らが宇宙の秘宝を他にも隠している事は知っている。力づくで奪う事は容易い。しかし、我々は無意味な破壊は好まない。速やかに渡したほうが賢明だ。さもなければ、我々の強力なロボットによる徹底的な攻撃により諸君らの星は晒されるであろう。」

映像はここで終わる直前、ユカ先輩が画面を一時停止する。

「研究員はこの手に操られています。恐らく宇宙人かと……。」

蛇倉隊長も「だろうな…。」と同意するのを他所に俺はヨウコ先輩に「宇宙の秘宝って何ツスカね？」と聞くも「メダルの事よ」と即答。

「こいつの言うように防衛軍には他にも3つ、同じようなメダルが保管されてある。我々はこれを密かに統合先進装備研究所、〃統先研〃に移送するよう命令を受けた。」

蛇倉隊長が改めて上層部からの指示を俺達に伝える。

「メダルからは特殊なプラズマが出ていて、恐らく宇宙人はこれを感知して位置を特定していると思われます。」

ユカ先輩が宇宙人がメダルがある位置の特定をしている理由の考察をし、〃統先研〃なら地下300メートルにあらゆる干渉を遮断する部屋と強力な防衛設備がある事も補足した。防衛軍はメダルのエネルギーを応用出来ないか解析しているらしいが俺にはそんな難しい事は良く分からなかった。

「とにかく、こんな野郎に絶対奪われる訳にはいかない。何が起きようと無事送り届ける事が我々の任務だ！」

蛇倉隊長が俺達に渴を入れ、用意していた地図を広げて作戦内容の詳細を説明する。〃統先研〃は東京にあり、市街地を避けて山道を車で走行しメダルを運ぶ。山道にあるトンネルを抜けると狭い警告になっており、ロボットが出現する可能性が高いのがトンネルに入る前との事だ。蛇倉隊長の説明が終わり今度はユカ先輩がアンテナの様な金

属性の突起物を取り付けたケースを用意してきた。

「まだ開発したばかりだけど、メダルから出るプラズマはこの超電離ケースで抑えられる。敵には察知出来ない筈です。」

そして作戦開始の日程を蛇倉隊長から指示を受けるのだが…

「これから3日後の土曜日の早朝に作戦開始だ。ハルキ、お前はウインダムで出撃！ヨウコは後で来てくれ。」

「オッス！」

「了解！」

俺とヨウコ先輩は返事をするも何か大事な事があったような…。

「ああああ!!」

俺の突然の絶叫に隊長を含む3人の肩がビクツと震えた！

「どうしたの!?!いきなり!!」

ヨウコ先輩のイラツとした声も気にする余裕も無く、俺はある事を思い出した。

「そうだ、3日後に千歌ちゃん達東京に行くんだ！スクールアイドルのイベントに出る為に！」

「イベント？」

ヨウコ先輩が聞き返し俺は首を縦に振り肯定する。俺は地図を再度確認しイベント

が開催される秋葉原と作戦を行う山道の場所を見比べる。

「俺はいつ怪獣が出てても出撃出来るように残るつもりなんすけど場所も場所だから少し心配で…。」

幸い場所は山道も「統先研」も秋葉原からかなり離れていた為被害はほぼ無い事が分かり安堵する。

「それにしてもイベントがある日に作戦だなんて運がないねハルキ…。」

「オッス…。」

ユカ先輩のフォローに力無く項垂れる俺だったが、隊長から「寝泊まりする準備はしておけよ」との指示を受ける。

「この作戦が終わったら丁度いい…。A q o u r s が参加するライブを見に行つてやれ。」

「本当ツスカ!?!」

蛇倉隊長の計らいに俺も俄然やる気が出る。正直参加するのを諦めていたからビツクリだ。

「ハルキ、東京土産宜しく!」

ヨウコ先輩も笑いながらそう言い、俺は千歌ちゃんに自分も東京に行ける事への報告を電話で話した。

「東京？」

私、黒澤ダイヤは帰宅したルビィからの言葉に疑問符を浮かべる。

「うん。イベントと一緒に歌いませんか？ってメールが来て。」

携帯で調べた所、きちんとしたイベントなのは確かだった。そして全国からスクールアイドルが参加し去年入賞したグループも参加するらしい。

「千歌ちゃんは、「お小遣い前借りして行こう！」って…。でもハルキ君は行けれ無いたいで。」

そう言うルビィを他所に私は考える。東京でのイベント…。

「鞠莉さんは何と言っているの？」

「皆が良ければ理事長として許可を出すって…。」

〴〵ギリツ〴〵

私は奥歯を噛み締める。承認したのか!?彼女は!!

「お姉ちゃんはやっぱり嫌なの？ルビィがスクールアイドルを続けるの…。」

誤解をさせてしまったのか、私はルビィに伝える。

「ルビィは自分の意思でスクールアイドルを始めたのですよね？」

「うん。」

力強く頷くルビイを見る。

「だったら誰が何と言おうと関係ありません。でしょ?」

私は優しく伝える。だが…

「私はただ…。」

「ただ…?」

あの事を伝えようとしたが今はその時ではない…。もう遅いから早く寝るように伝え、私は家を出た。

「来ると思った。」

家を出た私は鞠莉さんの家であるホテルの玄関にいる。

「どういうつもりですか?あの子達を東京に行かせるかどうか?」

早すぎる…。ファーストライブやPVを完成させ、スクールアイドルとして自信が付き始めたばかりの彼女達を今の段階で送り出すのは危険だ。

「なら止めれば良いのに?ダイヤが本気で止めればあの子達、諦めるかもしれないよ。」

と鞠莉さんはいつもの笑顔で返す。

「本当は期待しているんじゃない?私達が乗り越えられなかった壁を、乗り越えてくれる事を…。」

「もしもし越えられなかったらどうなるか…、充分知っているでしょう？」

私はあの時の事を思い出す。確かに鞠莉さんの言う通り、ルビィや彼女達に期待はしている。だがそれ以上に、この壁を乗り越えられなかった事で失う物がどれだけ大きいか私も彼女も分かっている筈。

「取り返しが付かない事になるかもしれないのですよ！」

再度考え直して欲しい。そう思うも鞠莉さんの答えは…

「だからと言って避ける訳にはいかないの。本気でスクールアイドルとして、学校を救おうと考えているのなら…。」

変わらない。自分達が経験したから…、学校を救う為に必要だから…、もうスクールアイドルでは無いから彼女はそう言えるのだ。きつと…。

「変わってませんね…！」

鞠莉さんの胸ぐらを掴み吐き捨てるように言う。もう彼女と討論する事も馬鹿らしい。

「ハルキさんの電話番号を教えなさい。今すぐに！」

それだけ伝え、鞠莉さんからハルキさんの携帯番号が書かれたメモを受け取るとそのまま彼女の家を後にする。

「もしもし、ハルキさん…。今宜しいでしょうか…？」

第16話 TOKYO／未確認物質護送指令 中編

三日後

俺、夏川ハルキはウインダムを操縦し山道を走る蛇倉隊長とユカ先輩が乗る車を護衛している。

「宇宙ロボット…来たら困るなあ。」

「その割りには顔がにやけてるぞ。本当は見たいんだろ？メダルを取られない様にケースをしつかり持っておけよ。」

通信で隊長とユカ先輩の会話を聞き和やかな雰囲気になる。ユカ先輩もメダルから出るプラズマを遮断した事を通信で報告し、いよいよ作戦が開始される。

「ハルキ、気を抜くなよ…。ヨウコには別の任務があるから別行動をしてもらっている。お前だけが頼りだ！」

「オッス！来るならいつでも来いってとこッスよ！」

だからヨウコ先輩、俺達と一緒にじゃないんだ…。でも隊長も期待してくれているし、頑張らなくちゃな！

そう思った矢先、突如山道に赤褐色の光線が直撃し隊長の車はギリギリで回避する。

あんな所から落ちたら即死だ！

「お出ましか…。作戦開始だ！頼むぞハルキ!!」

【オッス！】

俺は再度気を引き締めて操縦桿を握る。車を襲ったのはウルトラマンと同じ身長金色のロボットだった。ロボットは車を押さえようとすると俺はウインダムで羽交い締めにしてそれを阻止。

【こいつ…なんてパワーだ！】

パワー型かと思いきや、ウインダムに近い機敏さも持ち合わせている。格闘戦に持ち込むも金色のロボットの方がスペックがかなり上だ。

【大人しくしやがれ！】

俺は再度ロボットを羽交い締めにし、車から遠ざけようとした時、ロボットの肩から上のパーツが人形の様に取りれてしまった…。

【は？】

俺は作戦中にも関わらず素頓狂な声を上げる。その時ロボットの胸から下のパーツが胸、腰、脚と分離しその中の一部がトンネルに入った隊長達の車目掛けて飛んで行ったのだ！

俺はロボットの頭だけは行かせまいと取り押さええるが、あろう事かその頭はウインダ

ムを持ち上げ宙吊りにしてしまふ。通信からは爆音が響いており、どうやらトンネル内部で攻撃をされているようだ。分離して攻撃、頭だけでウインダムを宙吊りにしても傷一つつかない異次元のスペックのロボットに俺は成す術も無く、振り落とされたウインダムは地上に叩き落とされた。

「ハルキ、作戦失敗だ……。ロボットに囲まれてる。」

嘘だろ……。何も出来ずに終わったのか？

メダルはロボットに奪われ、ロボットは消えてしまったそうだ。

俺は体勢を戻したウインダムを近くに停止させ隊長達に深々と頭を下げて謝罪をする。

「すみません！俺がアイツを取り逃がしたばかりに……」

「いいからいいから。」

俺はこつてり隊長に絞られると思っていたがユカ先輩のその発言に思わずきよとんとした顔をする。

「え？いいから……ダメじゃないですか！」

メダルを統先研に届けるのが俺達の任務なのに……。そう思いユカ先輩に抗議しようと思っていたが蛇倉隊長が両手を前に出し、「まあ落ち着け」と静止する。

「あのメダルは偽物だ。」

「は?」

二人は怪訝な顔をする俺を笑いながら説明を続ける。

「あのケースは電波を遮断するんじゃないやなくて、電波を出してたんだよ。」

「メダルが発するプラズマを分析して擬似的にね!」

蛇倉隊長とユカ先輩が俺に伝え、再度互いの顔を見て笑い合う。

「本物のメダルは近道を通ってヨウコが運んでる。もうそろそろ着いているだろ。」

だからヨウコ先輩は居なかったのか…。でも、

「皆して俺を騙してたんすか!?!」

少し納得いかない俺は蛇倉隊長に抗議する。教えて貰っても良かったが隊長は「陽動作戦だ。」と笑い飛ばす。

「敵を欺くにはまず味方から。それにお前は嘘が吐けない性格だ…。そして、あの口ポットを全力で止めないと陽動がバレるからな。」

確かに陽動を見抜かれたらヨウコ先輩にも負担がかかるかもしれない。「まあいいか…。」と呟く俺にユカ先輩も「良く頑張った!」とフォローを入れる。

「ヨウコはもう着いているだろう。ヨウコ、どうだ?」

蛇倉隊長は別行動をしているヨウコ先輩に連絡を取る。

私、ナカシマ・ヨウコは蛇倉隊長から通信が入り応答する。ハルキ達は上手く陽動作戦を成功させた様だ。

「こちらヨウコ、今到着しました。超電離ケース、引き渡します。」

蛇倉隊長から「宜しく頼む。」と応答があり、統先研の入口に立つ黄色い作業服の男に声を掛ける。

「ストレイジのナカシマ・ヨウコです。」

「お話しは伺っております。ご苦労様でした…。」

目深に帽子を被る男はこちらと目を合わせようとしなない。人見知りをするタイプなのだろうか…。私は一礼し

「では、受け取りのサインを…ガチャ…。」

私が書類を取り出そうと視線をケースから外した瞬間、ケースの蓋が開いた…。

「え?」

私が呆けているのもつかの間、上空から四つの飛行物体が飛翔してくる。

「ハハハハッ!!」

男が高笑いをしながら私に背中を向け逃走し始めた。

ヤバイ…、こいつの頭がおかしくないなら今飛んで来た飛行物体とアイツはグルのは

ず。ここでメダルを奪われたらあの三人の陽動作戦は水の泡だ。

「隊長！緊急事態です。作業員にケースを奪われました！！現在逃走中の作業員を追跡しています。」

「俺達も直ぐに向かう。」

緊急事態を知らせるサイレンの中、施設内にいる研究員や作業員が私と逆方向に向かって走ってくる。人混みを避けながらケースを奪った作業員を追うも段々と距離が離されていく。その時、轟音と共に四つの飛行物体が合体し金色のロボットとなって地上に着陸した。

「こちらヨウコー！ロボットにココを突き止められてしまいました！」

ロボットは目から赤褐色の光線を発射しその衝撃で私は倒れてしまう。その時…。

“シュワッ！”

上空から乙様が駆けつけた！

乙さんに変身した俺は、あのロボットと交戦する。上空からの奇襲で飛び蹴りを放つても、ロボットは数歩後ろに下がるだけで体したダメージにはなっていない様子であった。

“シュワッ！！”

間合いを詰め、手数で応戦するも分厚い装甲と器用に攻撃を捌かれ、力任せに俺達を転ばせる。ロボットは目線を地面に向け作業員を見る。アイツのメダルを回収する前にあのロボットを止めるしかない。

『ゼステイウム光線!』

俺達得意の光線を放つもロボットの装甲を一瞬溶かす程度で全く気にしていない様子であつた…。

『き、効かない!』

「嘘だろ…。」

ウルトラの空間でZさんが驚きの声を上げる。これまで多くの怪獣を倒したこの光線でもダメなのか…。そう思っているのもつかの間、ロボットは俺達を無視して目線の延長線上にいるヨウコ先輩に目からの光線を発射する!直撃したら人間なんて影も形も残らない…。俺達はヨウコ先輩背中を庇い、そのまま地面に叩きつけられた。その衝撃で先輩も作業員の男も転倒し、放り出された超電離ケースをロボットはチャンスと言わんばかりに額のランプから光線を発射し吸収しようとする。

「^ズジユワツ!

俺達もここが最後のチャンスと言わんばかりにそのケースをむしり取つた!

「やっぱりウルトラメダル！」

俺はむしり取ったメダルを見て声を上げる。見た目は今までのメダルでいう、
“先輩”に近いメダルであった。

『おお！コスモスさん、ネクスアスさん、メビウス兄さんのメダルだ！』

青、銀、赤いウルトラメダルのウルトラマンを見てZさんも驚く。

『この使い方はウルトラフュージョンじゃ無くて…。ええつと…。』

「えっ？ 忘れたんツスか!？」

使い方を忘れたZさんに俺は声を荒げる。人生の先輩に対する口の聞き方では無いがそんな事を気にする余裕は今の俺には無い。

『ウルトラ面目ない…。』

Zさんも謝罪をする中ロボットが背後から攻撃を仕掛けてくる。メダルの使い方が分からない以上、今までのメダルで戦うしかない。地面に倒れた俺達を殴るロボットに耐える中、山から下山したユカ先輩が声を掛ける。

「ウルトラマン！ そのロボットの弱点は分離する瞬間！ 接合部が剥き出しになってる!!」

そうか！ 接合部は装甲が取り付けられない。そこを叩けば勝ち目は充分にある筈だ。
『ウルトラナイスな情報だ！』

「オッス！まず押し戻しましょう。真っ赤に燃える、勇気の手で！」

俺はZライザーに三人の兄さんのメダルをセットする。

「真っ赤に燃える、勇気の手！マン兄さん、エース兄さん、タロウ兄さん！」

『ご唱和ください！我の名を！ウルトラマンZ（ゼーラット!!）』

「ウルトラマンZ（ゼーラット!!）」

ベータスマッシュに変身した俺達はロボットを押し戻し力で引き離す。ロボットと力は拮抗するが決め手に欠けてしまい膠着状態となってしまう。こちらは三分という制限があるが、多分あのロボットには活動時間の制限が無い。このままだとこちらのエネルギーが先に尽きてしまうのは明白だ。

『ダメだ！どうしよう…!!』

Zさんも焦り、俺に助言を求める。

「えっ？俺に聞くんツスカ？」

そういうえば、あのロボットは四つに別れて飛行してたな…。それなら！

「Zさん、こっちも四体に別れ…、いや無理だな。」

俺の思い付きにZさんは『それだ！』と言わんばかりに声を上げる。

『回収したメダルの使い方を思い出したぞ!』

との声に耳を貸す。

『ハルキ、三つのメダルをZライザーにセットしろ。ライトニングジェネレードだ!!』

「オッス!」

俺は先ほどのメダルをZライザーにセットする。

“コスモス、ネクサス、メビウス”

Zライザーから音声が鳴り、Zライザーを上に掲げる。

『『ライトニングジェネレード!!』』

俺達の叫びと共に上空から光の輪目掛けて四つの光柱が突き刺さりロボットのパーツを焼き付くした!!

「あのメダル、結局統先研に届けられなかったのか…。」

戦いを終えた俺達は千歌ちゃん達と待ち合わせをしている秋葉原駅でメダルの事について話している。ユカ先輩がある意味作戦失敗だよねと呟いているが蛇倉隊長が

「まあ、ウルトラマンZが持って行ったんだから仕方ない。奴なら悪用をする事は無い

だろう。」

とユカ先輩にフオローを入れる。

「長官はそれよりも、あのロボットに夢中になつてゐるみたいだ…。部品を回収するんだとよ。」

メダルは俺達がつ持っている事への若干申し訳無さがあるが、長官がああロボットに目を着ける事も氣になつてゐる。蛇倉隊長も良く分かつていないらしいが…。

「宇宙の秘宝か…。」

「どうしたんツスか？」

ボソツと呟くヨウコ先輩に声を掛けるも「何でもない。」とはぐらかされる。

「それよりもそろそろ到着するんじゃない？」

ヨウコ先輩が時計を指差し時刻を見る。時刻は10時を過ぎており「ハルキくーん！」と聞き慣れた声があると、千歌ちゃん達が手を振つて走つてきた。

任務も終わり、今度は千歌ちゃん達A q o u r sの番…。だが三日前、ダイヤさんから電話で伝えられたあの言葉を思い出す。

「東京のイベントで彼女達は壁に直面すると思います。今は詳しく伝える事は出来ませんが、ここがA q o u r sのターニングポイントになるかもしれません…。その時、出

来る事なら皆の心のケアをお願いしたいのです。」

ダイヤさんのあの言葉……。皆には伝えていないが、彼女は何かを知っている。まるで自分が経験し、大切な物を失った様な口振りに俺は不安を覚えずにはいられなかった。

第17話 TOKYO／未確認物質護送指令 後編

私、桜内梨子は秋葉原駅に着いたがこの時点で若干疲れている。久しぶりに電車に乗ったから乗り疲れもあるがそれ以上のとある出来事で気力を大分持つていかれていった。時は約三時間前に遡る。

「東京トップス、東京スカート！そして、東京シューズ!!そしてそして、東京バッグ!!!」
十千万から出た千歌ちゃんの服装を見た率直な感想…、めちゃくちゃダサイ。大きなハートのTシャツ、赤とオレンジの派手派手しいハイソックス。片方色が違う靴にダテ眼鏡……。

「何がどうしたの？」

私は声を絞りだし千歌ちゃんに訪ねる。「可愛いでしょ！」と言う彼女の言葉を無視し「東京に行くのにそんな構えなくてもいい…。」と呟きながら暖簾の内側にいる美渡さんを見る。笑いを堪えながら千歌ちゃんを見ている事から吹き込んだのは彼女と分かったが、

「梨子ちゃんの良いよ、東京にずっと居たんだから。私達静岡県民は東京に行くなんて一大イベントなんだよ！」

と両手を広げてアピールする。そんな中、

「おはようございます！」

とルビイちゃんと花丸ちゃんの声が聞こえる。二人は今の千歌ちゃんみたいで奇抜なファッションをしない筈だ。そう思い私は挨拶を返す為、声がした方向に振り向く。

「あつ、おはよ……んえ?！」

私は自分でも訳の分からない奇声になり二人を見る。

「どうでしょう……、ちゃんとしてますか?！」

ルビイちゃんの服はネズミか熊か分からない謎のイラストのプリントシャツに水玉スカート、髪の毛にはリボンが計四個着いている。千歌ちゃんよりも酷い……。これをダイヤさんが見ているもおかしくはないが、まさかこれに何も言わず送り出したのかと疑問を持ちながら眉間を押さえる。

「これで渋谷の険しい谷も大丈夫ズラ！」

花丸ちゃんに至ってはピツケルを持ちまるで鉢山に行くかの様な服装であり、私は何も考えない様にした。ダメだ、こんな所でツツコミを入れても気疲れしてしまうだけ……。それに渋谷は私達が行く場所では無いし険しくも無い。あるのはスクランブル交差点とビルだ。

「二人とも地方感丸出しだよ！」

千歌ちゃんのブーメラン発言に青筋を浮かべながら冷淡な声で「あなたもよ！」と返し、全員いつもの服装に着替えて来るように指示を出した。

「結局、いつもの服になってしまった…。」

「そつちの方が可愛いわよ。」

志満さんが運転する車の中で残念そうに呟く花丸ちゃんを缶コーヒを飲みながら慰める。WODAはやっぱり美味しいな。

「でも普段の口癖の『ズラ』は気を付けた方がいいかもね。」

地方感丸出しになるからちよつとどうかかな？と思っただから念のため伝えておく。花丸ちゃんと話している内に車は沼津駅に到着し、待ち合わせている曜ちゃんと善子ちゃんと合流する。

「天津曇りの彼方から墮天したるこの私が、魔都にて冥府より数多のリトルデーモンを召喚しましょう…。」

うわあ…、善子ちゃんの格好凄まじいな。ハルキ君から借りた漫画に出てくるウ○キオラみたいな格好してるよ…。曜ちゃんなんて完全に他人の振りしてるし、流石にこんな格好の人と歩きたくはない。通行人から写真も凄く撮られているし…。

「くっくっく…。」

「善子ちゃんも」

「やってしまいましたね。」

「善子ちゃんもすっかり墮天使ズラ！」

千歌ちゃん、ルビイちゃん、花丸ちゃんが善子ちゃんの格好を見て笑う。曜ちゃんに至つては旅行雑誌である、る〇ぶを見ながら「皆遅いよ。」と棒読みで相手をしていた。梨子ちゃん、皆あんまり東京に慣れていないから宜しくね。」

缶コーヒーを飲み干す私に志満さんはそう伝える。その時クラスメイトのむつちゃんや、よしみちゃん達が見送りに来てくれた。

「千歌く。イベント頑張つてきてね！」

「これ、クラスの皆から！」

むつちゃんとしよしみちゃんが代表してエールを送り、地元の名物、のつぽパンの差し入れを受け取る。

「それ食べて、浦校（浦の星学院高校）の凄い所、皆に見せてやって！」
むつちゃん達の期待に応えるように私達二年生が頷く。

「千歌、皆も頑張つてね！」

おっとりした声で志満さんも手を振る。

「うん！頑張る!!」

千歌ちゃんが応え、私達は秋葉原行きの電車に乗り込んだ。

二時間後、秋葉原駅に到着した私達一向は早速、東京の町並みにテンションが上がっていた。

「ここがあまねく魔の者が闊歩すると言い伝えられる約束の地、魔都東京…。」

善子ちゃんが早速墮天使キャラを解放しているが、皆スルー。

「あつ、あれスクールアイドルの広告だよね?!」

千歌ちゃんがビルのディスプレイに映るスクールアイドルの広告に声を上げる。東京にいる時はピアノしかやっていなかったから気づかなかったが、スクールアイドルの宣伝は他にも複数の場所で行われており、改めて人気のコンテンツなんだと再確認する。

「はしゃいでると地方から来たと思われちゃうよ。」

曜ちゃんの忠告にルビィちゃんも「慣れてます〜って感じにしないと…。」と若干肩に力が入ってる。千歌ちゃんもそれに同意し

「ホント原宿っていつつもこれだからマジヤバくない〜? オーツホツホツホッ!」

通行人にも笑われ、曜ちゃんにも「ここアキバ…。」と突っ込まれる始末。

「と、取り敢えずハルキ君と合流しよう。待っていると思うし…。確か駐車場にストレ

イジの人達といるってメールが来てたよ。」

私達はハルキ君と合流する為、道端にある自販機で再度W A O D A を買い、飲み歩きながら待ち合わせである駐車場を目指した。この三時間で飲んだコーヒー缶は三本、帰る頃にはカフェイン中毒になっていそうな不安が頭の中で一瞬過った。

私、高海千歌は駅の駐車場で待っているハルキ君に手を振る。

「おはよッス。無事に着いて良かったッスよ。」

「うんー東京に巨大なロボットが出たって聞いたからビツクリしたけど…、ハルキ君もストレイジの皆さんも無事で良かった！」

正直東京に行くのはちょっと不安だったけど、秋葉原は被害がほぼ出ない事をハルキ君が教えてくれたからその言葉を信じる事にした。

「ハルキはお手柄だったぞー！」

ストレイジの蛇倉隊長がハルキ君の頭を撫でながら私達に伝える。ハルキ君は恥ずかしいのか抵抗していたが。そんな中、ルビイちゃんが蛇倉隊長に声を掛ける。

「あの…、この間は指示を出してくれてありがとうございましたー！」

そういえば三津に怪獣が出た時、蛇倉隊長が指示を出してくれた事を思い出す。蛇倉隊長も「ああ。家族の皆は怪我は無かったかい？」と訪ねる。ルビイちゃんも頷くと隊

長は「なら良かった。」と優しそうな笑顔を向けていた。

「さてハルキ、俺達はそろそろ静岡に帰るぞ。」

蛇倉隊長がハルキ君に声を掛け、ユカさんとヨウコさんも止めてある車に向かう。

「皆もライブ、頑張つてね！」

「ハルキー。お土産宜しくね！」

ヨウコ先輩、ユカ先輩の言葉に私達はお礼を言い秋葉原を観光する事にした。

「うわあ！輝く〜!!」

私と曜ちゃんは秋葉原のスクールアイドルショップの店内にいる。憧れのメ
sの
メンバーのタオルやぬいぐるみなどのグッズに興奮していた。

「缶バッジもこんなに種類があるし、このポスター初めて見る！」

沼津では見ることの出来ない物ばかり…。流石スクールアイドルの聖地とも言われているアキバ。ここなら何時間でも過ごせる自信がある！

「時間無くなるわよー。」

梨子ちゃんがコーヒーを飲みながら伝えるも私はグッズ、曜ちゃんはある制服に夢中で気づかない。

「あれ、花丸とルビィとハルキは？」

善子ちゃんが回りを見ながら三人を探していたそうだが気づいたら何処かの店内に入っていた。

グッズも買い、店内を堪能した私は皆と合流しようとして店を出ようとすると

「さあ、皆で明日のライブの成功を祈って神社に行こ…あれ？」

店を出るとそこにはもう何本目かのコーヒーを飲んでいる梨子ちゃんだけ…。皆完全に自由行動をしていた。

まずはハルキ君に電話をかけて、何処に居るかを聞いてみる。ルビイちゃんと花丸ちゃんと一緒に大きなショッピングモールにいたそうだ。

「うん！大きなビルの下…。分かる？」

電話で話しているとルビイちゃん達が「すみませくん！」と走りながら駆けて来た。

「すみません、勝手に居なくなつて…。あれ、曜ちゃんと善子ちゃんは？」

謝るハルキ君も二人が何処にいるのか気になったのか梨子ちゃんに聞いている。

「二人とも場所は分かるから、もう少ししたら行くつて。」

「こういう時のもう少し程当てにならない。」

「もう…、皆勝手なんだから！」

「ハア…。しようがないわね。……ハッ!!」

梨子ちゃんの表情が変わり、お手洗いに行つてくると言いながらダッシュで駆け出し

た。

「もう、時間無くなっちゃったよ。」

梨子ちゃんがやたらと長いお手洗いから帰り、（何故か店で買ったであろう紙袋を持っていたが…。）曜ちゃんと善子ちゃんも戻るのは遅く、ハルキ君と他一年生二人はスクールアイドルショップの隣にあるゲーム専門店でカードを買ってそのままゲームセンターで遊んでいる始末…。

「せっかくだけじっくり見ようと思ったのに…。」

そう呟いた私は気づく事は無かったが梨子ちゃんが焦りながら紙袋を隠す。善子ちゃんは「ライブの為の道具なの!!」と両手に持っている、堕天使ショップと書かれた紙袋を見せ抗議する。曜ちゃんに至っては

「だって、神社に行くって言ってたから!」

と巫女さんのコスプレで戻ってきた。神社に行くからと言ってこんな着て戻る意味が分からないし「似合いますでしょうか?」とドヤ顔で敬礼をする。

「敬礼は違うと思う…。」

私の反論に同意するようにハルキ君もため息を付く。いやいや、ハルキ君も両手にプラモデルと箱詰めされてるモデルガンとか何個買ってるの!?

言いたい事は色々あるが目的地である神田明神へ続く階段に到着する。

「ここが…、 μ s がいつも練習していた！」

「長いツスね…！」

ルビイちゃん、ハルキ君が口を開く。想像以上の段数と距離…。 μ s が練習していた場所に今自分達も居ることにちよつと感動している。

「登ってみない？」

私の提案に全員が頷き同意する。いざ走ってみるとかなりキツイ。でも μ s がここを登り、ラブライブを目指していた。私達もラブライブを目指して輝きを見つけたい！そう考えていると自然と足に力が入る。息も絶え絶えになっていたが気づくと皆、階段を登りきり神社にたどり着いていた。そんな中呼吸を整えていると

(♪ *self control*)

歌が聞こえていた…。

μ s が練習していた階段を登りきった俺達は、先に登っていたであろう歌声の主に目を向ける。綺麗な歌声の中に力強さも感じる二人組の女子高生だった。一人は紺色の髪をサイドテールで結んだ女の子、もう一人は薄いエンジ色のツインテールの女の子

だ。

「こんにちは！」

サイドテールの子が千歌ちゃんに声をかける。千歌ちゃんも挨拶を返すと女の子は思い出したかのようなリアクションを取りながら「あなた達もしかして…、A q o u r s の皆さん？それと…」と千歌ちゃん達訊ねる中、俺に目線を向ける。

「A q o u r s のマネージャーをやっています。夏川ハルキです！」

「マル達、もうそんなに有名に？」

俺も改めて二人に挨拶をする横で花丸ちゃんが驚きの声を上げる。まあ、ランキング上昇率では一位だし知られていてもおかしくはないだろう。

「PV見ました。素晴らしかったです。」

「あ、ありがとうございます。」

やっぱりあのPVの影響のお陰で知名度が上がったんだなと思う中

「もしかして…、明日のイベントに参加する為に東京に？」

と千歌ちゃんに問いかける。頷く千歌ちゃんに「楽しみにしています。」と最後に声をかけ去っていく。その時サイドテールの女の子と一緒にいたツインテールの女の子が千歌ちゃん達の頭上を空中で回転しながら飛び越える。不敵に笑う彼女は振り向くと無く去っていった。

「凄いです!」

「東京の女子高生って皆こんなに凄いですラ!」

「当ったり前でしょ!東京よ?東京!!」

一年生達が驚嘆の声を上げる中、呆けている千歌ちゃんも「歌、綺麗だったな...」と呟く。

「千歌ちゃん達A q o u r sもあの二人に負けてないッスよ!自信持って!!」

励ます俺に千歌ちゃんはお礼を言い、神社でお参りをして宿泊先の宿に向かった。

私、桜内梨子は予約した宿で皆とお茶を飲みながら一息ついている。

「ふう...、落ち着くズラ。」

温泉に入り団扇で扇ぎながらリラックスしている花丸ちゃんを見て気に入ってくれたみたいで良かったと安心する。

「でも俺も部屋に入って良かったんすか?まあ、寝る時は別々ッスけど。はい、善子ちゃん番。」

「うわあ!ちよつとハルキ!何でそんなの出してターンを渡すのよ!!」

善子ちゃんとカードゲームをやりながら若干気まずそうな声を上げるハルキ君だが、

皆で遠出しても一人だけ別の部屋は可愛そうだし、同じ空間で皆と居る事もメンバーの親睦を深めるためにも大切な事だ。

「何か修学旅行みたいで楽しいね！」

「はい、攻撃！」

「ちよつと！ぬあああ!!」

道中の巫女のコスプレからバスガイド姿に着替えた曜ちゃんがご満悦そうに敬礼をする中、善子ちゃんが負けて苦悶の声を上げる。

「そうだ！お土産に買ったけど夜食用に買ったお菓子が……。あれ？無いズラ!!」

「あれ？」

「旅館のじゃ無かったの？」

花丸ちゃんが夜食用のお菓子を探していたが、てっきり旅館に常備されていた物と勘違いして曜ちゃんと私は食べてしまう。

「マルのバツクトウザびよこ饅頭!!」

「花丸ちゃん、夜食べると太るよ……。」

「ハルキ、もう一回やるわよ！ほらシャッフルしなさい!!」

「俺もう眠いんツスけど、まだやるんスか？」

一年生トリオとハルキ君が騒いでいる中、ルビイちゃんが布団を押し入れから取り出

すもバランスを崩し全員布団の下敷きになってしまう。

「うおっ！」

「きゃっ！」

下敷きになった際かなり近くにハルキ君の顔があり、お互いに恥ずかしくなって顔を背けてしまう。それにしてもハルキ君、かなり鼻筋整ってるのね…。

「ご、ごめんねハルキ君！」

「オ、オッス…。」

そんなアクシデントの中、千歌ちゃんが戻ってきたが、部屋の散らかり具合と全員畳や机に突っ伏している惨状に言葉を失っていた。

「音ノ木坂って、sの？」

布団も敷き終わり曜ちゃんが私が在学していた学校の名前を出す。

「うん、旅館の人に聞いたんだけど、この近くにあるんだって！皆で行ってみたい？」

スクールアイドルの代名詞である、sが練習し、守った学校。ファンである千歌ちゃんやルビィちゃんが行きたいと言う気持ちも分からなくもない…。

「東京の夜は物騒じゃないズラ？」

「な、何よ？怖いのか？」

花丸ちゃんや善子ちゃんは躊躇している。まあ知らない土地の夜道は不安なのは確

かに同意する。私も内浦に引越したばかりの頃は少し不安だったし。

「梨子ちゃんはどうツスカ？」

「私は……、私は遠慮しておく。先に寝てるから皆で行ってきて。」

そう言った私はコーヒーを買う為、逃げるように外に出て行った。

ハルキ君も部屋に帰り皆が寝静まった夜11時、私は未だ眠れないでいた。

「眠れないの？」

月を見ている私に千歌ちゃんが声を掛けてくる。

「千歌ちゃんも？」

首を縦に振り肯定する千歌ちゃんに私は寝る前の事を謝った。

「あの時はごめんね。なんか、空気悪くしちゃって……。」

「ううん、私の方こそ……ごめん。」

無事仲直りをし、私は転校前の音ノ木坂について話すことにした。

「音ノ木坂って伝統的に音楽が有名な高校なの。私、中学の頃ピアノの全国大会に行つたせいかな高校では結構期待されて……。」

「そうだったんだ。」

音ノ木坂には推薦で入学し放課後も学校が休みの日曜日もひたすらピアノの練習をしていた。

「音ノ木坂の事が嫌いじゃないの。ただ期待に応えなきゃって思ってたけど、大会で上手いかわなくてスランプになっちゃったんだ…。」

そして浦の星に転校し、結果的に音ノ木坂のクラスメイトや顧問の先生の期待を裏切ってしまった。

「ねえ梨子ちゃん、期待されるってどういう気持ちなんだろうね？ 沼津出る時に、むっちゃんやよしみちゃん達が見送りに来てくれたでしょ？ 皆が来てくれて凄く嬉しかったけど実はちよつぴり怖かった…。期待に応えなくちゃって、失敗出来ないぞって…。」

「千歌ちゃん…。」

期待される事は力になる反面重荷にもなる…。私はその重荷に耐えきれ無かった。今の千歌ちゃんも不安な気持ちで一杯なのかもしれない。

「ごめんね、全然関係ない話しちゃって…。」

謝る千歌ちゃんに私はありがとうと返し、明日の為に寝ることにする。今は音ノ木坂の時とは違う。喜びだけでは無く、不安を打ち明けられる仲間がいるんだ。それだけで重荷は少し軽くなる。

携帯の画面を見ると7時半。部屋のメンバーが全員熟睡しているのを見ながら私、高

☒千歌は練習着に着替え旅館の外に出てとある場所に来ていた。

「ここで初めて見たんだ…。スクールアイドルを！ sを!!」

私の始まりの場所で改めて今日のライブを頑張ろうと気合いを入れる。

「千歌ちゃん！」

振り向くと曜ちゃん、ハルキ君を含むメンバー全員が揃っていた。

「やっぱりここだったんだね！」

曜ちゃんはやっぱり分かってたんだと少し安心する。そう言えば何も言わずに出ちゃったな…。

「練習行くなり声掛けて。」

「一人で抜け駆けなんてしないでよね。」

梨子ちゃん、善子ちゃんも気合いは充分みたいだ。でも梨子ちゃん、所々寝癖が付いてる…。

「帰りに神社でお祈りするズラ！」

「だね！」

「オッス!!」

花丸ちゃんの提案にルビィちゃん、ハルキ君も同意する。そんな中大きなサウンドの中振り返った目線の先にある画面にLOVE LIVEと大きな文字が映し出された！

「ラブ…ライブ…」

「ラブライブ！今年のラブライブが発表されました!!」

私の眩きにルビィちゃんも興奮が収まらない様子であった。

「ついに来たね…。」

「どうする、千歌ちゃん？」

緊張気味の曜ちゃんの後に梨子ちゃんが悪戯っぽく訊ねるも私は

「勿論出るよ！*My*sがそうした様に、学校を救った様に!!」

そう即答し、私達7人の手を重ねて円陣を組む。

「さあ、行こう！今、全力で輝こう!!」

そうだ、このラブライブに出場して結果を出せば何かが変わるかもしれない…。輝きが見つかるかもしれないだ!!

「「「「A q o u r s サ ン シ ャ イ ン !!」」」」」

「今回のライブは会場のお客さんの投票で出場するスクールアイドルのランキングを決めることになったの!」

旅館を出てライブ会場に到着した私達はこのライブについての説明を係員から聞いている。

「上位に入れば一気に有名になるチャンスって事？」

「まあ、そういう事ね！」

曜ちゃんの疑問に係員が肯定しA q o u r sは二番目にライブをする事も告げられた。

「二番目か…。」

「前座って事ね…。」

今回出るグループの中では最下位…。でもこのライブで有名になるチャンスなんだと私は気持ち再度奮い立たせる！

「俺はマネージャーだから投票は出来ないけど、皆なら大丈夫！頑張ってください!!」

ヨウコ先輩から以前もらったストレイジの腕章（下に小さく銀字でA q o u r sと刺繍入り）を付けたハルキ君の応援に私と花丸ちゃん、ルビィちゃんが頷き、善子ちゃんと曜ちゃん、梨子ちゃんが堕天使ポーズに敬礼、サムズアップを返し私達は控え室入室した。

「緊張してる？」

「まあね…。」

控え室で今回歌う衣装に着替えた私達だったが梨子ちゃんの強張った顔を見た曜

ちゃんが訊ねている。

「じゃあ、私と一緒に敬礼！おはヨーソロー!!」

そう言った曜ちゃんに続いて梨子ちゃんも敬礼を返す。

「お、おはヨーソロー。」

「良く出来ました。緊張が解けるおまじないだよ!」

笑いかける曜ちゃんのお陰で梨子ちゃんの顔にも笑顔が戻る。ルビイちゃんも涙目になっていたが花丸ちゃんの励まして緊張も和らぎ全員いつもの調子を取り戻した。

「A q o u r s の皆さ〜ん!お願いします!!」

係員の指示に従い私達は舞台裏に入る。

「(前座がなんだ!このチャンスを物にするんだ!!)」

そう思った矢先一組のグループが後ろから近づいてきた。

「また会いましたね…。よろしくお願いします。」

「スクールアイドル…だったんですか?」

そう昨日神田明神で会った二人組だった…。

「あれ、言ってませんでしたっけ?私は鹿角聖良。この子は妹の理亜。」

姉妹は緊張など全くしていない様子で舞台に向かう。

「見えて…、私達 S a i n t S n o w (セイントスノウ)のステージを!!」

ライブが…始まった!!

第18話 くやしくないの？ 前編

「見てて…。私達、Saint Snowのステージを！」

(♪SELF CONTROL!!)

「この町1300万人の人が住んでるのよ…。」

「そうなんだ…。」

ライブが終わり、俺達は東京で有名なスカイツリーに来ていた。梨子ちゃんがこの町に住む人口を曜ちゃんに教えるも彼女は力なく返す…。

「やっぱり違うのかな？そういう所で暮らしていると…。」

沼津の人口は約19万人と東京と比べると100倍以上の人口の差。都会と田舎、その差が今回の結果になってしまったのだろうか…。

「あれが富士山かな？」

「ズラ…。」

ルビィちゃんが双眼鏡で遙か遠くに見える富士山を見て呟く。

「最終呪詛プロジェクト、ルシファーを解放! 魔力五千万のリトルデーモンを召喚!!」

黒ローブを翻しはしゃいでいる善子ちゃんにため息をつきながら「善子ちゃんは元気だね…!」とルビイちゃんが返す。

「善子じゃ無くてヨ・ハ・ネ!!」

お決まりの返しを聞きながら先日ダイヤさんが電話で話した“壁に当たる”と言う言葉を思い出す…。

「お待たせ〜! アイス買ってきたよ! はい、ルビイちゃんもハルキ君も!!」

半ば押し付ける様にアイスを渡す千歌ちゃん…。

「全力で頑張ったんだよ? 私ね、今まで歌った中で出来が一番良かったって思った。声も出てたし、ミスも少なかった。「でも…」それに!!」

梨子ちゃんの反論を拒否するように話を続ける。

「周りは周りはラブライブ本選に出場しているような人達でしょ? 優勝出来なくて当たり前だよ…。」

「何が当たり前前なんスか?」

俺は我慢が出来なくなっていた。

「前座だったから? Saint Snowや他のグループとの実力を知って、自分達が浦校の期待に応えられ無かったから不貞腐れてんスか!?!」

確かに練習の時から間近で見ていた俺も今回は普段以上の良いパフォーマンスをしていたと思う。初めての空気感に飲まれる事無くやりきっていた。でも自分達の努力を否定する様な言い方に俺は許せないでいた。

「でも千歌ちゃん、ラブライブの決勝に出ようと思つたら…、少なくとも今日出ていた人達くらい上手くならなくちゃいけないって事でしょ？」

梨子ちゃんの言い分に肯定する千歌ちゃんに続けて曜ちゃんも口を開いた。

「私ね、Saint Snowを見たときに思つたの。これがトップレベルのスクールアイドルなんだって。この位出来なきやダメなんだって…。なのに入賞すらしていなかった！あの人達のレベルでも無理なんだって…。」

曜ちゃんの言う様にSaint Snowのライブは圧巻だった。歌唱力、パワフルでキレがあるダンス。Zさんでさえもテレパシーで俺に称賛の声を送っていた。

「な、何よ？あれは偶々でしょ！天界が放った魔力によつて…」

「何が偶々なの？」

「何が魔力ズラ？」

慰めようとする善子ちゃんを茶化すルビィちゃんと花丸ちゃんを遮り、「せつかくの東京なんだし皆で楽しもう！」とスカイツリーを後にしようとする千歌ちゃんに電話の着信音が鳴った。

「ごめんね、呼び戻しちゃって!」

俺達はさつきまでライブをしていた場所に戻ると謝罪をするメガネの係員から封筒を渡される。

「なんだろう?」

「もしかして…ギヤラ?」

「卑しいズラ。」

「入賞すらしてないのに貰える訳無いじゃないツスカ。」

善子ちゃんのポケに冷たく言い放つ花丸ちゃんと俺を他所に

「正直どうしようかと思ってたけど渡す決まりだから!」

と逃げる様に去って行った。あの様子だどこの封筒の中身はA q o u r s にとってよっぽど悪い物なのは間違い無いが…。

封筒から取り出し、一枚の紙を見るとそこには今回出場したスクールアイドルに対するランキングと得票数がしるされていた。

「A q o u r s はどこズラ?」

紙は三枚…。その中の一枚にはトップ10のスクールアイドルが書かれていたがA q o u r s の名前は無かった。

「あつ、S a i n t S n o w は9位か…。」

「もう少しで入賞だったのにね…。」

千歌ちゃん、梨子ちゃんがこの結果に眩くもA q o u r sの名前が無い為次の紙に。

「()にも無い…。」

「私達、そんなに低いの…。」

ルビイちゃん、曜ちゃんも不安になる。最後の1枚にA q o u r sはあり、ランキン

グは30位

「30位…。」

「30組中で…。」

「ビリって事!？」

「わざわざ言わなくていいズラ!!」

皆動揺している中、梨子ちゃんが得票数はどのくらいかを聞く。

「ええつと…。えっ!?!得票数は0…。」

「は?嘘だろ!?!ゼロ?!」

三枚目を捲った時点でランキングでは最悪の順位は覚悟していた。でも得票数は数人は入れていると思い、這い上がれる可能性はあると言うように声を掛ける準備もしていた…。ランキング29位のスクールアイドルでさえ得票数が20人以上。

『ハルキ、ダイヤさんが言っていた “壁” って…。』

「(多分この事かも…)」

乙さんもテレパシーでダイヤさんが言っていた事を反芻する。実力の差を数字で見せつけられ俺は皆に何を言えいいのかももう分からなくなっていた…。

呆然としている千歌ちゃんに対し、「お疲れ様です!」と昨日の女の子、Saint Snowの聖良が声を掛けてきた。

「素敵な歌でとてもいいパフォーマンスだったと思います。だだ…」

その後の発言は千歌ちゃん達Aqoursの心を折るに充分な言葉だった。

「ただ、もし、sの様に…ラブライブを目指しているのだとしたら…、諦めたほうが良いかもしれません。」

「おい…。」

俺は形振り構わず彼女に詰め寄ろうとしたが曜ちゃん、梨子ちゃん、善子ちゃんに抑えつけられる。

「お前!自分達が入賞出来なかったからって、八つ当たりしてんじゃねえよ!!Aqoursがどんな思いでこのライブに出たと思ってるんだ!?!おい、こっち向けよ!何か言え!!」

「ハルキ君落ち着いて!」

「(ここで揉めても変わらないのよ!」

「アンタが私達の為に怒ってくれているのは嬉しい！だから止めなさい!!お願いよ!!」
曜ちゃん、梨子ちゃん、善子ちゃんが俺を落ち着かせようとしているが、聖良の隣にいた理亜が吐き捨てる様にある事を言い放った!

「馬鹿にしないで…。ラブライブは遊びじゃない!!」

「遊びで参加してるの思ってたのか!?お前ら何様だよ?おい待てよ!こっち来いや!!!」

この時、千歌ちゃんの青ざめた顔をしているのを俺達は気付く事が出来ず、最悪の気分のまま土産も買わずに帰りの電車に乗ったのだ。

「泣いてたね、あの子。きつと悔しかったんだね入賞出来なくて…。」

私、渡辺曜はあの後皆で電車に乗りルビィちゃんの言葉を聞きながら窓の景色を見て黄昏ている。

「だからって、ラブライブを馬鹿にしないでなんて…。」

善子ちゃんが理亜ちゃんのあの言葉を思い出し、しかめっ面をしている。

「でもそう見えたのかも…。」

「そうね。あの子達も本気だった…。」

あの子の気持ちも分からなくも無い。梨子ちゃんも同意していたが、千歌ちゃんはス

カイツリーにいた時と同じように明るく返す。

「私は良かったけどな! 精一杯やったんだもん。努力して頑張つて、東京に呼ばれた。それだけで凄い事だと思う。」

「それは…。」

「……。」

花丸ちゃんも言葉を詰まらせ、ハルキ君はあの二人に激昂して以降口を開かない。「だから胸張つていいと思う。今の私達の精一杯が出来たんだから。」

無理に笑う千歌ちゃん。本当にこれで満足しているのだろうか…。

「千歌ちゃん…。」

私は思いきつて聞いてみる。

「千歌ちゃんは悔しくないの?」

「えっ?」

私の言葉に千歌ちゃんを含む全員が目線が集まった。

「もう一度言うよ? 悔しくないの?」

「そりゃあちよつとは…。でも満足だよ。皆とあそこに立てて…、私は嬉しかった。」

私は「そっか…。」と返しそれ以降沼津駅まで一言も話す事はしなかった。

沼津駅に着いた俺達はクラスメイト達から早速声をかけられる。

「お帰り〜!」

Aquoursのメンバーは無言で手を振り、今回のライブの「順位と得票数以外は」当たり前障りの無い様に皆に伝えていた。

「じゃあ、もしかして本気でラブライブ決勝を狙えるって事!？」

「えっ…。」

むつちゃんのラブライブ決勝と言う言葉に声を詰まらせる千歌ちゃん。むつちゃんの発言にクラスメイト達も「当たり前でしょ?」と言うように答え、話が盛り上がる。こんな空気の中、言える訳がない。ランキングではドベで誰一人Aquoursに票を入れてくれませんでした…。メンバーが全員が顔を背ける中、ダイヤさんがルビィちゃんを迎えに来てくれた。

「お帰りなさい。」

「お、お姉ちゃん…。うっ、ううっ…。」

ルビィちゃんが号泣しながら彼女に抱きつく。

「良く頑張ったわね…。」

泣き続けるルビィちゃんの頭を優しく撫でるダイヤさんを見たクラスメイトは今回の結果がどうだったのかを察してしまった…。

俺はダイヤさんに近づき今回の事を伝える。

「惨敗でした。ダイヤさんが電話で言っていた壁とはこの事だったんすか?」

肯定し頷くダイヤさん。

「教えてください、ダイヤさんが知っている事を…。何でダイヤさんが頑なにスクールアイドルを認めないのかを…。」

ダイヤさんは二年前、まだ一年生だった頃の自分について話始めた。

第19話 くやしくないの？ 後編

「得票、0票ですか…。」

私、高海千歌はダイヤさんに今回出場したライブの結果を伝える。

「やっぱりそういう事になってしまったのですね。今のスクールアイドルの中では…。」

30組のスクールアイドルの中で結果は最下位、その上誰にも評価をしてもらえずライブを目指すのを諦めるだの、遊びじゃないだの罵声を浴びせられ、ダイヤさんにも何か言われると思っていたが以外にも優しい声音に私は内心驚いている。

「先に言っておきますけど、あなた達は決してダメだった訳では無いのです。」

ダイヤさん曰く、私達Aqoursはスクールアイドルとして充分練習を積み、見てくれる人を楽しませるに足りるパフォーマンスもしているがそれだけではダメな事も…。5000組近くいるスクールアイドルの中の100位以内に入っているものにも関わらず上位のスクールアイドルはまるで次元が違っている事も身に染みて分かっちゃった。

「7236…。今の数字か分かりますか？」

「ヨハネのリトル「違うズラ」。ツツコミ早っ!!」

ダイヤさんの数字に善子ちゃんやボケるが花丸ちゃんの普段から想像出来ない冷淡なツツコミが入った。

「んんっ……去年最終的にエントリーしたスクールアイドルの数ですわ。第1回ラブライブと比較すると10倍以上と言われていますの。」

「そんなに多いんスカ……」

ハルキ君の意見も最もだ。今の時点で約5000組、まだエントリーしていないだけで今後グループが増える事なんて火を見るより明らかなのだから。

「そもそもスクールアイドルはラブライブが開催される前から人気があつたのですわ。しかし、ラブライブの開催と共にそれは爆発的になつた……。A-RISEと、sによつてそれは揺るぎない物になり、アキバドームで決勝が行われる様になつた事でレベルの向上を生んだのです。」

そしてダイヤさんの話は続く。

「あなたが支持されなかつたのも、私達が歌えなかつたのも仕方のない事なのです……。」

ダイヤさんの口から発せられた、歌えなかつたと言う言葉に私達全員が驚きの声を上げる。

「やっぱりそうだったんスね……。」

ハルキ君だけが納得したような口調でダイヤさんに返した。

「どういう事よ？」

善子ちゃんがハルキ君に訊ねるとため息を一つ付き

「あの時の電話の事話して言いツスか？俺、隠し事するの苦手なんツスよ…。」

と何か許可を貰うもダイヤさんは肯定し、私達にある事を伝える。

「皆が東京に行く前日にダイヤさんから電話があつて、今回のライブで皆の前に大きな壁が立ち塞がるつて。そしてこの壁がA q o u r sのターニングポイントになるつて…。」

「ターニングポイント…。」

梨子ちゃんの眩きにハルキ君が頷き話を続ける。

「今回のライブで俺達が惨敗するのも分かつていた様な口振りと、スクールアイドルやラブライブに関係する知識もただのファンじゃ無い事は今までの様子で何となく分かった。ダイヤさん、アンタもしかしてスクールアイドルをやつてたんじやないツスカ？」

ハルキ君の予想はズバリ当たり、ダイヤさんはその事をあつさり認めた。

「流石にバレますか…。ハルキさんの言う通り私は一年生の時、スクールアイドルをやつていました。果南さんと鞠莉さんと一緒に…。」

その時の話をダイヤさんは昔を懐かしむ様に話し出した。

私、松浦果南は鞠莉に話をする為彼女の家である淡島ホテルにいる。相変わらずだ
だっ広い庭だ…。

「いつ以来かな？果南に呼び出されるの…。」

手に持っている懐中電灯でモールス信号を送り鞠莉を呼び出した私は早速話を切り出す事にする。

「ダイヤから聞いた。千歌達がスクールアイドルのイベントで東京に行つたって…。そしてボロ負けしちゃつたって。」

「そっか…。」

半ば予想していた様な口調に苛立ちを覚える。スクールアイドルを始めた頃はこんな事になるなんて思わなかつたのにな…。

私とダイヤと鞠莉がまだ一年生だった頃、浦の星には既に統廃合になるという噂があった。私は高校なんて卒業証書さえ貰えればどこでも良かったが親友であるダイヤや鞠莉が同じ学校に志望した事もあり、そこでもいいかなと思つたのが志望動機だった。

「スクールアイドル？」

鞠莉がダイヤの提案したワードに疑問符を浮かべる。

「そうですね！学校を廃校の危機から救うにはそれしかありませんの!!」

当時ダイヤから聞いた時、東京で廃校寸前だった高校がアイドル活動をして有名になった事で入学希望者が増え、今でも入学志望の生徒が後を絶たないという有名校になったそうだ。廃校を阻止したスクールアイドル⁴のライブを動画で見た時は私も興奮したがそこからダイヤのテンションがハイになり何本もあるDVDを徹夜で観させられた…。

「鞠莉スタイル良いし一緒にやったら絶対注目されるって!」

鞠莉もダイヤもスタイルは良いしおまけに歌も上手い。興味を持った私も参加をするが鞠莉が入ればいい線行くんじゃないかと本気で思っていた。

「Sorry…、そういうの興味無いの。」

案の定断られたがダイヤが「行け!」と言わんばかりに顎をしゃくって合図をし、私は後ろから鞠莉に抱きついた。

「離してよ〜!」

「良いって言うまでハグする!」

二人でイチャイチャしながらダイヤも交えて鞠莉を根負けさせ、私達はスクールアイ

ドルとして活動を開始していった。

「町の人も学校の人もスクールアイドルだと応援してくれたじゃない…。」

「学校でライブもやって上手く行ったしね。でも三ヶ月後、“あれ”が起こった…。」

「私達はスクールアイドルとして活動した期間はたった三ヶ月…。長くて短いアイドル活動は終わりを告げる。」

「東京?」

「アイドル活動を始めて3ヶ月後の7月。ダイヤの口から出た単語をそのまま返す。」

「そうですよ! 私達と呼ばれたんですよ!!」

「ダイヤ…。鼻息が随分 *very hard*。」

「テンション高く万歳をするダイヤを茶化す鞠莉に笑いながら、東京の大会で有名になり名前を上げる…。私達はその日から前以上に練習に力を入れ始めた。」

「でも…。私は歌えなかった…。内浦とは違う巨大な会場の空気感に圧倒され、他のグループと私達ののパフォーマンスの差に私は歌う前から打ちのめされてしまった。」

「外の人に見て貰うとか、ラブライブで優勝して学校を救うとか…。そんなの絶対無理な

んだよ！」

「だから諦めろって言うの？」

あの時のライブで分かった筈なのに鞠莉はまだ食い付いてくる。

「私はそうするべきだと思う。」

そう言い、去ろうとする私に鞠莉は両手を広げてハグを求めてくる。こんな話をして
いる最中にハグなんてする気持ちは微塵も起きず私は鞠莉の横を通り過ぎた。

「誰かが傷付く前に……」

身の丈に合わない目標を目指した私達の結果がこれだ。千歌達は結果がどうであれ
歌えただけ全然マシ。でも今回の事で彼女達の心に傷を負う位ならもう諦めて欲しい
……。

「私は……諦めない。必ず取り戻すの、あの時を！果南とダイヤと失ったあの時を！！私に
とって宝物だったあの時を……」

鞠莉の叫びが庭に木霊し、私は逃げる様にその場を去った。

私、高海千歌は家に帰り帰りを待っていたしいたけの顎を撫でている。

「早くお風呂入っちゃいなよ〜！」

美渡姉の声に空返事を返す私を梨子ちゃんとハルキ君が不安そうに見つめる。

ダイヤさんは歌えただけ立派で、今まで反対していたのは彼女達が味わった苦い経験をさせたくないという優しさだった事も…。

「梨子ちゃん、ハルキ君…。少し考えてみるね。私がちやんとしないと皆困っちゃうもんね…。」

本当にどうしたらいいんだろう…。駅から車に乗る前、曜ちゃんから言われた言葉を思い出した。

「千歌ちゃん…。辞める? スクールアイドル…。」

その言葉で私の頭は一瞬真っ白になった。ハルキ君が思わず曜ちゃんの胸ぐらを掴んで「いい加減にしろよ? お前…。」と私を庇ってくれたけど…。

「このまま続けても、何も変わらないのかな? 輝きなんて無いのかな…?」

そう呟いた私は結局お風呂にも入る気も寝る気にもなれず時間だけが過ぎていった。

私、桜内梨子はあるから寝る気にならずベランダで曇り空をずっと眺めている…。ダイヤさんの経験を聞き、リーダーである千歌ちゃんがスクールアイドルを続けていくかどうかでA q o u r sの今後が変わる文字通りターニングポイントになるのだ。部屋

に戻ろうとした時、視界に何か動く物を発見し目を凝らしてみる。

「あれ…。千歌ちゃん?」

昨日の服のまま、無表情で海岸を目指す千歌ちゃん。私はハルキ君にダメ元で電話を掛けながら玄関を目指した。

「もしもし、梨子ちゃん? どうしたんスか?」

「ハルキ君! 千歌ちゃんが!! 海に!!!」

このままでと千歌ちゃんが自殺してしまうんじゃないかと思った私は海岸を目指す。ハルキ君も合流した時には彼女の姿はもう見えなかった!

「あのバカ千歌!」

ハルキ君が海に向かって駆け出す。

「千歌ちゃん! 千歌ちゃん!!」

私の声に一拍置き千歌ちゃんが浅瀬から顔を出して

「あれ? 梨子ちゃん?」

と間の抜けた声を出していた。

「バカ千歌! お前!!」

あの短時間でかなり遠い所まで泳いでいたハルキ君が青筋を浮かべ怒りまくる。

「もう! 一体何してたの!!」

本気で心配した私は思わず声を荒げる。

「あはは…、何か見えないかなって…。」

「え?」

「はあ?」

千歌ちゃんの回答に私達二人は呆れた声を上げ一先ず話を聞くことにする。

「ほら、梨子ちゃん海の音を探して潜ってたでしょ? だから私も何か見えないかなって…。」

「……、それで?」

私は千歌ちゃんに問う。

「何も見えなかった…。でもね、だから思ったんだ。続けなきゃって。私、まだ何も見えていないんだって。先にあるものが何なのか…。」

昨日と同じような悔しさを押し殺した顔のまま、千歌ちゃんは続ける。

「このまま続けても0なのか、1になるのか、10になるのか…。ここで止めたら全部分らないままだって…。」

そう言った千歌ちゃんは何かを決意した顔でスクールアイドルを続ける事を伝える。

「だから私は続けるよ、スクールアイドル。だってまだ0だもん。」

0と言う言葉を何度も繰り返す千歌ちゃん…。そうだ、あのライブでの結果は最下

位、そして誰にも支持されないという0という字…。

「0なんだよ…。あれだけ皆で練習して、歌も衣装もPVも作って、頑張って頑張って皆にいい歌聞いて欲しいって。クラスの皆の期待にも答えたいって思ってた…。」

段々と千歌ちゃんの声が震えていく…。

「スクールアイドルとして輝きたいって…。」

そう呟いた彼女は大粒の涙をこぼしながら自分の膝を叩きこれでもかと言うくらい叫びだした。

「なのに0だったんだよ!?悔しいじゃん!!」

「千歌ちゃん…。」

ハルキ君も震えた声で呟く中、千歌ちゃんは本音をぶちまける。

「差が凄いとかが、昔とは違うとかそんなのどうでもいい!悔しい!!ラブライブは諦めろとか遊びじゃないとか言われて、もの凄く腹が立ったし悔しかった!!やっぱ私…悔しいんだよ…。」

私は自然と千歌ちゃんに近づき後ろから抱き締める。

「良かった…、やっと素直になれたね…。」

「だって私が泣いたら皆落ち込むでしょ…。今まで頑張ったのに、せつかくスクールアイドルやってくれたのに悲しくなっちゃうでしょ?だから…、だから…!」

私は千歌ちゃんを強く抱き締める。こんなに私達の事を思ってくれているリーダーなんて他に居ない!

「バカね…。皆千歌ちゃんの為にスクールアイドルやってる訳じゃないの…。自分で決めたのよ。」

ふと私達以外の気配を感じ、後ろを向く。

「私も曜ちゃんもルビィちゃんも、花丸ちゃんも、もちろん善子ちゃんも、ハルキ君も。」
「オッス!」

ハルキ君も頷き、浜辺にいるメンバー全員が千歌ちゃんに向かって手を振っている。

「千歌ちゃんは感じた事を素直にぶつけて、声に出して。」

全員が千歌ちゃんの周りに集まってくる。その時、千歌ちゃんは責が切れたかの様に泣き出した。

「うわああああああん!!」

そして私も今回の事で一つ目指したいものがある。

「私、思うの…。今から0を100には出来ないかもしれない…。でももしかしたら1にする事は出来ると思う。私もそれが知りたい!!」

これが私の知りたい事。今が底なら這い上がりたいたい! そう思い声に出した私を千歌ちゃんはいつもの満面の笑みで「うん!」と返した。

「すげえ…。俺、要らねえんじやねえかな？」

笑顔になった千歌ちゃんとは真逆にハルキ君の目には普段からは想像出来ない悲しい顔をしていた。

「俺、ダイヤさんにあの時電話で皆の心のケアもして欲しいって頼まれてたんツス…。でも結局気の効いた言葉も言えなくて…。何の為のマネージャーなんだろう…。」

良くも悪くも真面目なハルキ君だからこそう声を掛けていいか分からなかったのかも知れない…。でもこれだけは言える。私はハルキ君の肩を掴み、伝える。

「そんな事言わないで！Saint Snowに向かつて言い返したハルキ君は凄いと思った。私が、皆が思っても言えなかった言葉を言ってくれた時嬉しかった!!」

「でも…。」

自信を喪失しているハルキ君に千歌ちゃん、曜ちゃんも力強く頷く。

「ステージには居なくてもハルキ君も一緒。私はそう思ってる！」

「Saint Snowに言った時も、私に怒った時も、ハルキ君は誰かの為に何かを言える優しい気持ちがある。だから自信を持って!!」

そう言った二人に続き一年生がハルキ君背中を軽く叩く。それは彼に対する信頼の証の様にも見えた。

「皆…。ありがとうございます!!」

ハルキ君は改めてお礼をし、曜ちゃんに昨日の事を謝りお互いに仲直りをする。

「さあ皆家に行つて温泉に入ろう! レッツ 「ああ! 千歌ちゃん:。」 ふえ?」

ルビイちゃんが突然大きな声を出し、千歌ちゃんが本日二度目の頓狂な声を上げる。

「あの…、もう遅いんですけど…:、服が:。」

「えつ…? 服…:、あああー!!」

ルビイちゃんの指摘ももう遅く、白いカッターシャツから下着が透けていた!

「嘘?! じゃあハルキ君見てたの!?! ねえ!!」

怒る千歌ちゃんをなだめる私だったが曜ちゃんが

「梨子ちゃんも人の事言えるの? それ?」

と私を指差す。

「○□△※☆×」

私も自分の服を再確認し、寝巻きのまま海に入った事に今更ながら気付いた。

「ハルキ君!!」

「いやいや、不可抗力! どうしようも無いじゃないツスカ!」

ハルキ君の言い訳に花丸ちゃんと善子ちゃんがため息を付く。

「こんな女の子の胸ぐらを掴むエロマネージャーにはお仕置きが必要かもね:。」

と曜ちゃんが笑いながらハルキ君を海に沈めようとする。私達ももう開き直り全員

でハルキ君に制裁を加えた。

「ヤバいやばい沈む……アハハハっ！揉むな！頭を叩くな!!」

顔を海水に付けたり脇腹を擦ったり頭を叩いたりしながら皆昨日の暗い気分が嘘の様に、童心に帰ったように笑う。この瞬間から本当の意味で *A q o u r s* が始まったのかも知れない。ここから1にする為!!

翌日、部屋には今回の結果と、以前貰ったストレイジの腕章にある言葉を刺繍し結果用紙の隣に貼ることにした。私達の目標

0から1に!

第20話 未熟DREAMER 前編

遡ること2年前

「私、スクールアイドル…辞めようと思う。」

私、小原鞠莉は果南の口から出た言葉の意味が一瞬分からなくなっていた…。

「まだ引きずっているの？東京で歌えなかったくらいで…。」

あの日、東京で歌えなかった事は私も果南も悔しかったがそこまで重く感じる程だろうか？

「鞠莉、入学の話が来てるんでしょ？行くべきだよ…。」

何かの冗談かと思った私だったが果南は人が傷つく冗談は絶対に言わないし、この時の声音は本気そのものだった。

「ダイヤも同じ意見。もう続けても意味無いんだよ…。」

何も言わず果南と共に部室を後にするダイヤ…。あのスクールアイドルが私達の中で一番好きな彼女までもが果南を止めてくれない。

「果南！ダイヤ…!!」

私は机の上に置かれた衣装を見せて二人を引き留めようとする。この衣装で次のイ

ベントは絶対成功させたい、考え直して欲しい…。その私の願いも虚しく果南の言葉で全てが崩れてしまった。

「終わりにしよう…。」

私、ウルトラマンZは一体化しているハルキの中でA q o u r sの今後の活動を聞いている。

「夏祭り?」

「屋台も出るズラ!!」

ルビィ、花丸が地球のイベントである夏祭りにテンションをウルトラ高く上げている。

「これは…:痕跡…。僅かに残っている…:気配。」

そんな中、善子が相変わらず訳の分からない事を言いながら千歌の家である十千万の椅子に頬擦りをしている。

『ハルキ、どういう意味か分かるでございますか?』

「(俺もさっぱり…)」

善子は面白いけど時々出てくるワードはハルキでも分からないらしく、俺は毎回首を

傾げる始末。おかしい、光の国での授業でもこんな言葉は教えて貰っていないぞ…。

「どうしよう…、東京へ行つてからすっかり元に戻っちゃって…。」

ルビイが呆れながら善子を見るが花丸は黙々と沼津の名物「のつぽパン」を食べている。

「それより、しいたけちゃん本当に散歩で居ないわよね!」

犬嫌いな梨子が上がった声をしている中、曜がA q o u r sも参加するかを千歌に聞く。

「そうだよね。決めないとね…。」

千歌もカウンターに突つ伏しながら、どうするかを悩んでいる様子だった。

「沼津の花火大会ってここら辺じゃ一番のイベントなんすよ。」

ハルキが梨子に沼津の花火大会と、そこから依頼が来ている事を教える。確かにA q

O u r sを知つて貰うにはウルトラ良い機会かもしれない。

「でも花火大会まであまり練習時間が無いよね…。」

ルビイが花火大会までの日にちをカレンダーを見て呟く。

「花火大会まで今日を含めて12日…。ちよつと急な気もするよね。」

「私は、今は練習を優先した方がいいと思うけど。」

曜、梨子は今回は見送る方針なのか…。確かにハルキと一体化して約3ヶ月が経った

が地球の一週間はあつという間だ。その上1日の半分以上は勉強をして放課後に練習をする為、スクールアイドルに当てる為の時間はほんの僅かだ。

「千歌ちゃんはどうする〜?」

曜が千歌に夏祭りに参加するかを聞くと彼女は「出たい」と宣言。

「今の私達の全力を見てもらう。それでダメだったら、また頑張る。それを繰り返すしか無いんじゃないかな?」

その考えに皆が賛同しA q o u r sの夏祭り参加が決定した。

『ハルキ、今みたいなのを「鶴の一声」って言うんだよな?』

「Zさん、良くそんなことわざ知ってますね!」

よし、昔授業で習った言葉は合っていたみたいだ。

「千歌ちゃん変わったね!」

「そうね。」

「0を1にしたい…。目標が決まったから前よりも熱が入ってるツスよね!」

曜、梨子、ハルキの言葉に俺も頷いている。東京でのA q o u r sの惨敗から千歌を立ち直らせた「0から1へ」と言う言葉…。A q o u r s全員の原動力になったのだなと俺は改めて確信したのであった。

「それにしても…果南ちゃん、どうしてスクールアイドル辞めちゃったんだろう?」

千歌がダイヤさんと鞠莉と一緒にスクールアイドルをやっていた果南の名前を口にする。

「生徒会長が言ってたでしょ？東京のイベントで歌えなかったからだって。」

あの時、どうやら果南はセンターだったそうだが大きな舞台上で失敗してしまった事が彼女の中で傷になっているのではないのだろうか…。

「でも、それで諦めるような性格じゃ無いと思う。ね！ハルキ君!!」

「そうツスよね…。なんか果南ちゃんらしくないツスよね…。」

幼なじみの千歌やハルキも彼女らしくない行動に疑問を持っていた。

「俺と千歌ちゃん、果南ちゃんは小さい頃からいつも一緒に遊んで…。千歌ちゃん、初めて高台から海に飛び込んだ時の事覚えてるツスカ？」

「うん。飛び込みを怖がっていた私に、「ここで辞めると後悔するよ。」って果南ちゃんが言ってくれたの。」

3人の幼少期の話を聞き、果南がスクールアイドルを辞めた理由にAqoursのメンバーは疑惑を深めていた。

夏祭りに参加する事も決定し、浜辺で練習を始めるAqoursのメンバー。あの悔しい思いをした翌日から全員、練習着に“0から1に”と刺繍をしたストレイジの腕章

を付けて練習している。

「もう少しスクールアイドルをやっていた頃の事が分かれればいいんだけどね。」

やはり果南の事が気になる千歌。

「聞くまで全然知らなかったもんね…。」

曜も千歌に同意する中、何かを思い出したかの様にルビイの方を向く。それを聞いていたルビイ意外のメンバー全員もだ。

「ルビイちゃん、ダイヤさんから何か聞いてない？」

「小耳に挟んだとか？」

「ずっと一緒に家にいるのよね？何かあるはずでしょ？」

「お願い!!練習が終わったらルビイちゃんの好きなスイートポテト買ってあげるツスカら!!」

千歌、曜、梨子、そして買取しようとするハルキに問い詰められ、ルビイは泣きそうな表情をしている。

「アワアワ…。ピギイー!!」

脱兎の如く逃げるルビイに善子がダツシユで捕まえに行く。

「とりゃー!墮天使奥義!墮天龍鳳凰縛!!」

ウルトラ戦士もビックリな締め技を發揮する善子に俺もハルキも驚きの声を上げる。

「辞めるズラ。」

善子の頭を笑いながら「バシッ」と空手チョップで叩く花丸に俺はハルキにある提案をする。

『ハルキ！善子からあの技を教えて貰いましょう！この技があれば怪獣も…』

「ダサいから却下で！」

即答で没にされた。

善子に締め技をされ、A q o u r sのメンバーとハルキに取り囲まれたルビイは観念して口を開いた。

「ルビイが聞いたのは東京のライブが上手く行かなかったって位です。それからスクールアイドルの話は殆どしなくなっちゃって。だだ…。」

「『『『ただ？』』』』』」

「うわっ！」

ルビイが何か言いにくそうに言葉を濁し、俺も混じって声を上げる。ハルキの驚きに全員が怪訝な顔をしていたが…。

「鞠莉さんがお姉ちゃんと言をしに家に来た時があつて、その時お姉ちゃんが「逃げていく訳ではありませんわ。だから果南さんの事を逃げたなんて言わないで」って…。」

「「「……………」」」」

ダイヤと果南の真意が分からないまま、全員が黙り混んでしまう中、千歌の呟きだけがポツリと木霊した。

「逃げた訳じゃ無い…か。」

俺、夏川ハルキは朝5時半頃にA q o u r sのメンバー全員で果南の住んでいる淡島に来ている。

「ふあああ…。まだ眠いズラ。」

「何でこんな朝早くに走るのよ…。ふあああ…。」

花丸ちゃんと梨子ちゃんが欠伸をする中、果南ちゃんは走り出す。

「毎日こんな朝早く起きてるんですね…。」

「果南ちゃんの父さん、今怪我してるから店の手伝いをする為に早起きしてるんツスよ。」

ルビィちゃんが感心する中、俺が補足をする。まあ小さい頃から早起きして俺や千歌ちゃんを遊びに誘っていたけど。

「それより、こんな大人数で尾行したら流石にバレるわ！ううっ…、もう無理。」

「だって皆来たいって言うし…。」

梨子ちゃんが今更ながらこんな事を言うが曜ちゃんが「なら皆で行こうか!」とゴリ押しで今回の尾行を決定した。

「梨子ちゃん、朝壊滅的に弱いんだから無理に来なくて良かったんだよ?それにしても果南ちゃん早いね…。」

千歌ちゃんが軽口を叩いている間に果南ちゃんはどんどんペースを上げていく。

「ううっ…。先に行つてて…。」

「ああつ、もう!!」

道端でへばっている梨子ちゃんをおんぶしながら果南ちゃんを追う事にした。頼むから今日だけは怪獣は出て来ると祈りながら…。

俺達が尾行を開始して約30分が経過し、梨子ちゃんに引き続き一年生組が死にかけてる中、相変わらず果南ちゃんは走り続け淡島神社に向かう階段を駆け上がった。

「乙さん、一応聞くんですけど果南ちゃんは星人に操られているとかそういう事は無いんツスよね?」

マラソン選手顔負けのスタミナを持つ果南ちゃんを見た俺は乙さんに聞いて見るも

『大丈夫!果南には宇宙人が何かをしたと思われる痕跡は全く無い。全部自分の力で走っている!』

バツサリ言い切られたが、梨子ちゃんを背中に俺も淡島神社の頂上に到着し、他のメンバーも遅れて全員集まった。

梨子ちゃんを下ろした俺の袖を引っ張りながら千歌ちゃんが果南ちゃんを見ろと指を刺す。

「スゲエ……」

果南ちゃんは息を整える素振りも無く、その場でダンスをしていた。ダイナミックな動きや、優雅にその場で回転しながら楽しそうに踊る果南ちゃんに俺達全員が見惚れていた。

「綺麗……」

「オッス……」

千歌ちゃんの眩きに俺も頷く。だが、A q o u r s が参加したイベントの上位グループにも匹敵する様なダンスをする果南がスクールアイドルを辞めた事に対する理由が未だ不明だ。今のダンスは思い付きで始めたものでは無く、長い期間練習を重ねて磨いたものである事は、武道をしながらこの3ヶ月間A q o u r s マネージャーとしてパフォーマンスを見てきた俺でも分かる。

〃パチパチパチパチ！〃

俺が考えている時、どこからか拍手が聞こえる。とつさに辺りを警戒するも梨子ちゃ

んが「鞠莉さんよ。」と教えてくれた。

「復学届け、提出したのね。」

「まあね…。」

いつもの様に柔和な笑顔のまま話しかける鞠莉さんに果南ちゃんは素っ気無く返す。

「やっとなげるのを諦めた?」

そう言った鞠莉さんに果南ちゃんは眉間にシワを寄せて言い返す。

「勘違いしないで!学校を休んだのは父さんの怪我が原因。それに復学してもスクールアイドルはやらない!!」

「私の知っている果南はどんな失敗をしても笑顔で次に向かって走り出していた。成功するまで諦めなかった…。」

鞠莉さんの言う通り果南ちゃんは負けず嫌いで成功するまで何度でも挑戦する子だった。そんな彼女がたった一度の失敗程度で諦めるとは到底思えない。

「これから始めても卒業まで一年も無いんだよ?スクールアイドルのレベルは私達がやっていた頃より格段に上がっている!」

「それだけあれば充分よ!それに今は後輩もいる。」

「「「「えっ!?!」」」」」

果南ちゃん、鞠莉さんの会話の中で「後輩」と言う言葉が出た時、A q o u r s 全員

が驚きの声を上げる。

「ヤバい、鞠莉さん気づいたか!？」

『落ち着けハルキ！俺達が尾行している事に気付いていない。話で出したただけだ。』

俺の不安も杞憂に終わり安堵する中、二人の会話は続く。

「だったら千歌達に任せればいい。あの時歌えなかった私よりずっと伸び代はある。マネージャーのハルキもいるし、今回の挫折を今のメンバーは乗り越えた！どうして戻ってきたの？私は…、戻って来て欲しく無かった。」

「果南…。あ、相変わらず果南は頑固なんだか「もうやめて!」…。」

普段の果南ちゃんからは想像出来ない冷たい目で鞠莉さんを見る。震える声の鞠莉さんを一瞥し、

「もうあなたの顔…、見たく無いの。」

そう言い切った果南ちゃんは神社を後にし、鞠莉さんは呆然と立ち尽くしていた。

「酷い…。」

「可哀想ズラ…。」

果南ちゃんに対しルビイちゃんと花丸ちゃんが非難の声を上げる中、俺は先程の果南ちゃんの言動について考える。

「やっぱり何かありそうだね…。」

曜ちゃんが俺に話し「そうツスよね…。」と同意する。

「友達思いな姉貴分なんスけどね…。中学までは喧嘩もして先生達から問題児扱いされてたって言ってたけど、果南ちゃんは弱い者イジメも相手が傷つく事も絶対しなかった。手を上げて謹慎する事は何度かあったツスけどね…。相談に乗る度に話を聞くとクラスメイトが嫌がらせを受けてそれを助ける為に殴ったって言ってたから、一緒にスクールアイドルをやっていた友達にさつきみたいいな事を言うのは尚更おかしいんスよ。」

俺の言葉に曜ちゃんと千歌ちゃんも頷く中、時計を見ると船の出向時間が近づいており全員ダツシユで港に向かった。

果南ちゃんがスクールアイドルを辞めた真意が分からないまま数日が経ち私、高海千歌は朝のホームルーム前にも関わらず教室の窓際で黄昏ていた。ちなみにハルキ君はストレイジのミーティングがある為、昼から登校するとメールが来ている。

「果南ちゃん、今日から学校に来るって!」

「それで、鞠莉さんは?」

曜ちゃんが果南ちゃんが今日から復学する事を教えてくれるも、鞠莉さんがまた先日の様にスクールアイドルを再開させようとするのでは無いかと心配の声を上げる。

「んん!?!」

曜ちゃんが何かに反応するように鼻をヒクつかせる。その視線の先には一枚の制服が…。

「クンクン…。制服くく!!!」

「ダメーっ!!」

まるでボールを追いかける犬の様に制服に向かってダイブする曜ちゃん。私と梨子ちゃんは冷や汗をかきながら曜ちゃんの腰を掴み力づくで引き上げた。落ちていく制服に向かって飛び降り自殺をしましたなんていくら親友でも情けなさすぎるよ!

「いや〜!制服を見つけるとついね…。」

「ついね…。じゃないわよ!あのままだと地面まで真っ逆さまよ!真っ逆さま!!」

笑って誤魔化す曜ちゃんに梨子ちゃんが青筋を立てながら怒りまくる!この親が子供を叱る様な様子を撮影してハルキ君に送った私は曜ちゃんが持っていた制服を改めて見る。これは普通の制服じゃ無いことは直ぐに気づいた。

「これって…、スクールアイドルの?」

第21話 未熟DREAMER 後編

制服が落ちて来た直後三年生の教室に野次馬が集まっているのを知り私、高海千歌と二年生も急いでその教室へ向かう。

「離せ！離せって言ってるの!!」

「良いと言うまで離さない!!」

案の定果南ちゃんと鞠莉さんが教室のど真ん中で取っ組み合いの喧嘩をして揉めていた。

「強情も大概にしておきなさい！たった一度の失敗でいつまでもネガティブに！」

「うるさい！いつまでもはどっち!?二年前の話をしつこいんだよ!!大体今更スクールアイドルなんて…。私達、もう三年生なんだよ!!」

「二人ともお辞めなさい！皆見てますわよ!!」

二人の喧嘩を止める事が出来ずダイヤさんはアワアワと狼狽えている。今まで私達に飛ばしていた怒号はどこに行ったのか…。

「ダイヤもそう思うでしょー!!」

「止めなさい！いくら粘っても果南さんは再びスクールアイドルを始める事はありませ

んわ!!」

鞠莉さんの言葉をダイヤさんは否定する。

「あの時の失敗はそんなに引きずる事なの？千歌っち達だつて再スタートを切ろうとしてるのに何で!?!」

「千歌とは違うの!!!鞠莉には他にもやるべき事がたくさんある筈でしょ?だつたら…」

もういい…。私は野次馬を押し退け三人の前に仁王立ちをする。

「いい加減に…!!しろーろーろーろーろー!!!」

私は肺の中の空気を全て出しきる様に怒号を発する。当事者の三人以外は全員耳を塞いでいるがそんな事は関係ない!

「もう!何か良く分からない話をいつまでもずーつと!ずーつと!ずーつと!!隠して居ないでちゃんと話なさい!!!」

「千歌には関係な「あるよ!!」…。」

果南ちゃんの発言を遮り私は続ける。

「ダイヤさんも、鞠莉さんも!三人揃って放課後、部室に来て下さい。」

「えっ?私(わたくし)も?」

まるで自分は関係無い様な言い方をするダイヤさんに青筋を立てながらガンを飛ばし全員来ることを約束させる。

「ハア……」

ため息を付いた果南ちゃんはカバンを持って教室を出ようとすることも私は襟の後ろを掴む！

「果南ちゃん！逃げないでよ？」

「ぐえっ……。分かってるよ！放課後部室に行くから……。体育館の所でしょ!？」

堂々とサボる果南ちゃんを皆の目線が見送る。

「千歌ちゃん凄い……!!」

「三年生に向かって……」

「大怪物……」

曜ちゃん、ルビイちゃん、善子ちゃんが眩く中、花丸ちゃんと梨子ちゃんが汗を浮かべたまま引きつった顔をしている。

「あっ……」

やってしまったと思ったのも既に手遅れであった。

「だから、東京のイベントで歌えなくて……」

「それはダイヤさんから聞いた。」

ダイヤさんと鞠莉さん、そしてサボっていた果南ちゃんも約束通り部室に来て私達は

三年生が隠している事情を聞いている。

「何でその事言ったのよダイヤ？」

「仕方ないでしょ！」

青筋を浮かべダイヤさんに文句を言う果南ちゃんにダイヤさんも言い返す。

「でも、それだけで諦める果南ちゃんじゃ無いでしょ？」

再度話を進める私の後ろで鞠莉さんも

「そうそう、千歌っちの言う通りよ。だから何度も言ってるのに！」

と私を盾に果南ちゃんに問う。

「何か事情があるんツスよね？もう隠し続けるのもキツイんじゃないんスカ？」

ハルキ君も果南ちゃんに優しく聞くも

「そんなのは無いよ。さつき言った通り私が歌えなかっただけ……」

「ああ〜っ！イライラするっ!!」

「その気持ち良〜く分かるよ！ホント腹立つよねコイツ!!」

「勝手に鞠莉がイライラしてるだけでしょ!!」

話をはぐらかし続ける果南ちゃんに私も鞠莉さんもイライラしながら頭を掻きむしる。鞠莉さんの言う通り今の果南ちゃんにかなり腹が立っていた！なんだってこんなに隠したがるのか!!

「どうどう、三人とも落ち着いて！」

「そうだよ、カリカリしてたら尚更話が進まないって。」

ハルキ君と曜ちゃんが私達三人を宥める。そうだ、ここでイライラしてたら事情が聞けない。クールダウンだ、クールダウン。

「そういえばこの前弁天島で踊っていたような…。」

ルビイちゃんが先日果南ちゃんを尾行していた時の様子を思い出し、躍りを見られたのが恥ずかしいのか果南ちゃんは顔を真っ赤にしながらそっぽを向く。

「おお、赤くなってる！やっぱり未練あるんでしょ〜？」

煽る鞠莉さんに怒りが頂点に達したのか果南ちゃんは机を叩き、立ち上がる。

「うるさい！未練なんて無い…。とにかく私はもう嫌になったの！！スクールアイドルは絶対にやらない。」 そう吐き捨てる様に言った果南ちゃんは振り向く事無く部室から出て行った。

「……。ダイヤさん、何か知ってますよね？」

果実ちゃんが去り、梨子ちゃんがダイヤさんに対し問い詰める。

「えっ？私は何も……。」

分かりやすく狼狽えるダイヤさんに梨子ちゃんは

「じゃあ何で今朝、果南さんの肩を持ったんです？」

スクールアイドルを辞めてしまった事の真実を聞いている。

「東京のイベントで果南さんは歌えなかったのではない…。『わざと歌わなかった』のです。」

あの日まで三人、朝早くから日が沈むまで練習に明け暮れたのだ。それなのに…。

「でも、どうして…?」

「まさか…、闇の魔『ムグツ!!』」

「しーっ!」

梨子が怪訝な顔をしながら、訳の分からない事を言う善子の口を花丸が塞ぎハルキが静かにしろとジエスチャーをする。

「あなたの為ですわ。あの日、鞠莉さんは怪我をしていたでしょう。」

そうだ…、確かにあの日に限って私の右足首は怪我をしていた。だがステージで自分のパフォーマンスを披露し、ラブライブで有名になる為にも弱音を吐く事は消してしなくなかった。この時の痛みなんて根性で何とかなる物だと本気で思っていた。でも結果、果南は歌えず失格になってしまった…。

「そんな…。私はそんな事して欲しいなんて一言も…!」

ダイヤや果南には悪いがあの日イベントで失敗したとしてもまだ次がある筈だった。

「あのまま続けていたらどうなっていたと思うんですの？怪我だけで無く、事故になっていてもおかしくなかった…。」

私の為を思つての行動だったのだから未だに納得がいかない…。

「だから『逃げた訳じゃ無い』って…。」

「でもその後は？」

ルビイが納得する中、曜がイベントが終わり何故スクールアイドル事態を辞めたのかをダイヤに聞いたです。

「そうだよ。怪我が治ったら続けても良かったのに…。」

「花火大会とかスクールアイドルとして参加出来るイベントもあつた筈ツスよね？」

そうだ。幸い私の怪我は軽度の物であつたから少し休めば完治もした。ハルキの言う通り、花火大会でのライブのオフアームもあつたのだ。

「そうよ…。花火大会に向けて新しい曲も作つて、ダンスも、今朝果南が放り投げた衣装もその時に出来た完璧な物にした！なのに何で辞める必要があつたの!？」

ダイヤに迫る私に、彼女はため息を着きながら「果南さん、鞠莉の事を心配していたのですわ…。」と呟く。

「あなた、海外留学や転校の話がある度に全部断つていたでしょ？」

「そんなの当たり前でしょ!!」

私の声に後輩が肩を震わせる。昔から一緒にいる三人で一つの事をやり遂げる。果南が歌えなかったと思っていたあの時も放って置けなかったし、力になりたかった!

「果南さんは思っていたのですわ…。このままだと自分達のせいで、鞠莉さんから未来の色々な可能性が奪われてしまうのではないかと…。」

確かに一年生の頃、担任からも留学について進められ、海外の高校を卒業すれば大学の推薦も貰える事を言われていた。だが学校を救う為、スクールアイドルを始めた事を伝えた事を果南は偶然知ってしまったらしいのだ。

「まさか…、それで?」

そう呟いた私は土砂降りの雨の中、ダイヤの家を出ようとする。

「どこへ行くんですの?!」

ダイヤに制止され果南を呼び出す事を告げる。

「ぶん殴る! そんな事、一言も相談せずに!!」

強引にスクールアイドルに誘い、強引に辞めた果南に怒りが込み上げてくる。だがダイヤは未だ彼女を庇う。

「果南さんはずっとあなたの事を見てきたのです。あなたの立場も気持ちも、将来も…。誰よりも考えている。」

私は降りしきる雨の中、浦の星高校に向かって走り出している。どうして誰も彼もが何も言わないの!?! 果南はちゃんと言っていたらしいが回りくどく言っていた事にやつと今気付く。

「あっ!!」

私は派手に転倒し、擦りむいた膝に血が滲む。体制を立て直し、再び走り出そうとしたその時

「ブロロロロロ!!」

一台のバイクが止まり、ヘルメットを私に投げ渡した持ち主がバイザーを上げる。

「乗って!」

私も口角を上げてその持ち主に笑顔を向けた。

「ナイスな登場ね!ウルトラマン!!」

私、松浦果南は鞠莉に強引に呼ばれ、船と自分の愛用しているバイクを使い、スクーターアイドル部の部室に來ている。

「本音でぶつかって下さい。これが最後チャンスですから…。」

部室前で背を預けているハルキにそう言われ、すれ違う。目の前の鞠莉がずぶ濡れの

状態で立っていた。

「こんな土砂降りの中呼び出すなんて、何のつもり？ 天気が悪い中バイクで来るの結構危ないんだけど？」

私の嫌味など完全に無視し鞠莉は私を真っ直ぐ見つめる。

「いい加減話を着けようと思つて……。ダイヤからあのイベントの真実を聞いたわ。どうして何も言ってくれなかったの？ 将来の事なんか今も昔もどうでもいい！ 留学も転校も全く興味が無かった。あの日のイベントで果南が歌えなかった事を放つて置ける訳無いじゃない！ 果南が私を思う様に、私も果南を思っているんだから!!」

自分の本音をさらけ出した鞠莉は私に近づき……。

「バチン!!!」

思いつきりビンタをかました。

「私が果南を思う気持ちを甘く見ないで!!」

人に頬を叩かれるなんていつ振りだろう……。痛みの中ハルキが言った、最後のチャンス。と言う言葉が頭を過り私も思っていた本音をぶちまける。

「だったら素直にそう言つてよ！ リベンジだの負けられないだの、回りくどい言葉なんか使わずちゃんと言つてよ!!」

私は鞠莉の胸ぐらを掴みながら言葉を吐き捨てると同時に突き放した。

「だよね……。だから……。」

そう言う鞠莉は自分の頬を指差し「叩け」とジエスチャーをする。私も手を上げようとした時、鞠莉と友達になったあの日の事を思い出した。

「み、見つかったら怒られますわ!」

「平気だよ。」

小学生の頃、鞠莉が転校し淡島ホテルの娘だと知った私とダイヤは興味本意でホテルの庭に忍び込む事にした。

「んん?」

庭の噴水にいる鞠莉に気付かれダイヤを盾に隠れる私をその時の鞠莉は怪訝な顔をして見る。

「あなたは?」

そう言った鞠莉に取った行動は……。

「ハグ。ハグ……しよ?」

そう、初めて会った時も、ケンカをして仲直りをした時も取った行動はハグだった。中学までケンカも多かった私と仲が良かったダイヤと鞠莉はトラブルに巻き込まれる

事も多かった。他のクラスメイトを助ける為に暴力を振るって担任に説教をされ気が滅入っていた時も、二人が悩んでいた時も私達はハグをする、される事で絆を深めて来た事を思い出した！

「うわあああああーっ！！」

私も鞠莉も子供の様に涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら泣きまくる。その間、曇天の空が少しずつ晴れていき泣き止んだ頃には雲一つ無い青空が広がっていた。

『凄いなハルキ、こうやって地球人は絆を深めていくんだな…。』

「そうツスね…。仲直りも出来たんだ。あの三人、きつと昔みたいに戻れると思いますよ!!」

鞠莉さんと果南ちゃんが泣き止み互いの顔を見て笑い会う様子を思い出しながら俺、夏川ハルキと乙さんは話をする。

「ダイヤさんって、本当に二人の事が好きなんですわね!」

千歌ちゃんがダイヤさんに笑いかける。皆後を追い事の結末を見届けた中、鞠莉さんと果南ちゃんを頼むとお願いをしていた。

「ああ見えて二人とも繊細ですから…。」

「じゃあダイヤさんも居てくれないと！」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらダイヤさんを勧誘する千歌ちゃん。

「えっ？ 私は生徒会長ですよ！とてもそんな時間は…。」

生徒会の仕事を理由に断ろうとするダイヤさんに

「鞠莉さんと果南ちゃん、後7人もいるので!!」

生徒会の仕事も全員で手伝う事を告げられ、断る理由を無くしたダイヤさんは頬を掻きながらはにかむ。そして

「親愛なるお姉ちゃん…。ようこそA q o u r s へ!!」

ダイヤさんの衣装を持ってきたルビイちゃんが勧誘し、A q o u r s はこれで9人となった！鞠莉さんと果南ちゃんも皆に合流し円陣を組もうとした時、俺の秘密が全員に知られる事になる。

「見つけたよ！ウルトラマンZ。」

俺はその言葉を聞いた瞬間心臓が止まる様な感覚に襲われた。全員の視線が俺に刺さる中、俺の正体を知っている声の主に顔を向ける。

「お前ら…。ピット星人!!」

そう、三津でダイヤさんを襲ったピット星人の二人組だった。人間に擬態した星人が

本来の姿を現し、全員が青い顔をしている。

「お前の事は調べさせてもらったよ、夏川ハルキ！この地球の防衛ロボットが到着するのに時間が掛かる筈だ。ファイブキングも倒されてしまいこの地球に用は無いが、去りついでに廃校になるかもしれない学校をこの場で物理的に終わらせてやろう。」

そう言いながらピット星人が指を鳴らしもう一人が自身の脇に抱えていた大きなカプセルの蓋を開く。

「バリバリバリバリ!!」

大きな稲光と共にカプセルの中身が巨大化し一体の怪獣が現れた！

「このエレキングで破壊させてやる。壊されない様にせいぜい頑張るんだな！ハハハハハッ！」

牛のような模様にも目の代わりにアンテナを着けた黄色い怪獣、「エレキング」を呼び出したピット星人は自身の宇宙船に乗り姿を消してしまった。

エレキングを迎撃する為、俺はゼットライザーを取り出す。その時

「ねえ…、あの星人の言った事本当なの？ハルキ君がウルトラマンだって…。」

千歌ちゃんの震える声に俺は無言で頷く。

「俺の事、怖いッスか？ウルトラマンとして戦ってる俺は半分人間じゃ無いんツスよ。」

Zさんと一体化し、ウルトラマンとして怪獣と戦っている俺は普通の人間とは違う

∴。初めて変身した時から覚悟はしていた事だったが、共に戦うストレイジの隊員とは違い、千歌ちゃん達は戦いと無関係の一般人。俺の秘密を彼女達が知ってしまった、危険に巻き込んでしまう事を極力避けたかった。だが∴。

「ちよつと怖いよ∴。でもそれ以上にハルキ君が傷ついちゃうのが一番怖い！」

千歌ちゃんの嘘の無い言葉に俺は笑みをこぼす。他の皆も同じ意見だと言わんばかりに頷いてくれた。その中で、秘密を知ってる善子ちゃん、鞠莉さん、ダイヤさんが口を開く。

「大丈夫！アンタを悪く言うヤツがいればこの堕天使ヨハネがぶつ飛ばしてあげるわ！」

「そうそう！本当に怖かったら例え信じて貰えなくてもマリーはストレイジに言つてたと思うし！」

「皆、あなたとウルトラマンさんに助けて貰って感謝しているのです。自身を持って下さる。」

三人の言葉に俺はいつも以上に気持ちが高まっているのを感じる。

「先輩、頑張ルビィ！」

「マルたちは信じてるズラ！」

「あんな怪獣、ボコボコにしちゃえ！」

「勝ったらハグしてあげるからね。」

「逆に逃げ帰っちゃったら……、どうしようかな?」

ルビィちゃん、花丸ちゃん、曜ちゃん、果南ちゃんが応援し、梨子ちゃんが両手をワキワキ動かしながら茶化す中俺は再度皆に背中を向ける。

「ありがとう……。俺、絶対勝つてここに帰つて来るツスから! さあもうバレちゃったし、今回はこのまま行きましようか! Zさん!!」

『まさか、こんなに早くメンバーにバレるとはな……。今回だけだぞ?』

俺は敢えてウルトラの空間に入らずゼットライザーにメダルを入れる!

「宇宙拳法! 秘伝の神業!! ゼロ師匠、セブン師匠、レオ師匠!」

『ご唱和下さい我の名を! ウルトラマンZ (ゼーラット!!)』

「ウルトラマン……Z (ゼーラット!!)」

ウルトラマンに変身した俺達は浦の星を、A q o u r s を背にしエレキングに対し構えを取った!

「チエスツー!」

Zさんに変身した俺達は助走を着け、エレキングに先制パンチを仕掛ける。だが行動を予測していたのかエレキングは拳打を受け流し体全体を使って弾き飛ばす。

“キシャー！！”

甲高い鳴き声を上げながらエレキングは追撃と言わんばかりに長い尻尾を鞭の様に振るいながら俺達の接近を許さない。

『これじゃあ近づけない…。』

Zさんも対応が難しいのか不満を口にするが俺はヌンチャクを使用し尻尾を叩き落とす事を提案する。

“シユワツ！！”

ヌンチャクを生成し尻尾の連撃を真つ正面から叩き落とした俺達はエレキングに密接し転倒させようと体を掴む。その時、

“バリバリバリ！！”

エレキングの体から高压電流が放出され咄嗟に手を放すもその一瞬を敵が見逃す訳が無く、俺達の両手首を掴み電撃を浴びせ続ける。

“シユワツツツ！！”

『ぐあああつ！！』

電撃に苦しむ俺達をエレキングは放り投げ、口から火炎を放出し焼き付くそうとする。俺達はタイミンングギリギリで回避するも体に力が入らない。

「あの怪物、電撃以外に炎まで…。」

『あの怪獣、エレキングは本来火炎なんて吐かない…。まさかコイツ!?』

何か心当たりがあるのかZさんがウルトラの空間で俺に続きを伝える。

『昔、メビウス兄さんに聞いた事がある。セブン師匠が倒したエレキングが月の光で再生して、その個体をタロウ兄さんが倒したって!でも…。』

あんな怪獣を師匠と兄さんが戦って勝ったのかよ…。と思いつながらZさんが口籠る。

『そのエレキングは元々は電撃、再生した時は炎と“別々の攻撃”をしてた…。今みたいに一度に二つの攻撃は出来ないのをごさいますよ!』

Zさんの口調から戸惑いの感情が読み取れるが目の前のエレキングは攻撃の手を緩めない。口以外にも尻尾の先端からも炎を発射し、俺達を火だるまにしようとする距離を詰めてくる。

『もしかしてこのエレキング、人為的に改造されてるんじゃないんすか?』

俺の正体をA q o u r sのメンバー全員が居る状態で暴露させ、勝算があるかの様にエレキングを呼び出した。ウルトラマンと戦った情報をピット星人が知っているのならあの強さに合点がいく。このままだと時間制限がある俺達が圧倒的に不利だ…。胸のカラータイマーも点滅している。

「Zさん!師匠と兄さんはエレキングをどうやって倒したんツスか?」

『確か…。セブン師匠は体と首を切って、顔のアンテナを破壊、タロウ兄さんも同じくア

ンテナを潰し光線でエレキングを倒したんだ!!」

共通して言える事はエレキングの弱点はアンテナにあると結論付けた俺はZさんに提案をする。

「Zさん、ガンマフューチャーで行きましょう!アンテナを破壊します!!」

「変幻自在…。神秘の光!テイガ先輩、ダイナ先輩、ガイア先輩!」

『ご唱和下さい我の名を!ウルトラマンZ(ゼーラット!!)』

「ウルトラマン…Z(ゼーラット!!)」

「……」からが本当の戦いだ!

私、高海千歌はA q o u r sの皆とウルトラマンZになったハルキ君の戦いを見守っている。劣性に追い込まれているも変幻自在な戦いを得意とする形態に姿を変化させた。

「大丈夫かな…。」

不安に思うルビィちゃんにダイヤさんが安心させるように声をかける。

「大丈夫ですわ!あの姿になったハルキさん、…Zさんは強いものです。この目で見た私が言うんですから…。」

「そうよ、今までだってどんな強い怪獣にも打ち勝つて来たんだから！」

善子ちゃんもルビィちゃんを励ます。

「でも胸のランプが！そろそろ危ないんじゃない？」

梨子ちゃんの心配する様にウルトラマンの胸のランプが点滅し始めた。ネットでもルトラマンの戦いを見ると全て三分以内で敵を倒している。姿を変えても火炎や電撃を纏った尻尾で攻撃をされ、反撃に出られない状態のままだ。

「が、頑張れ……。頑張れー……！」

私は咄嗟に苦戦し、傷ついていくハルキ君に向かって叫んでいた。私達は見ているだけで何にも力になれないかも知れないがそれでも何かをせずにはいられなかった。

「ハルキ君！私は何も出来ないかも知れないけど、絶対勝てるって信じてるし、応援する！！」

私の叫びにメンバー全員が口元に手を当てて声をかけ始めた。

「マネージャーとしての仕事があるんだよー！！」

「ラブライブに絶対出るんだから！0から1にするために！“あの姉妹”に一泡吹かせてあげるんだから！！ハルキ君も気合いを見せなさい！！」

曜ちゃん、梨子ちゃんに続いて花丸ちゃん達一年生も声をあげる！

「ハルキ君に読んで貰いたい本が一杯あるズラー！だから頑張つてー！！」

「アンタは私のリトルデーモンなのよ？こんな所で負けるなんて許さないわ！しつかりしなさい!!」

「みんながハルキ君の勝利を信じてるの！ルビィも！Aqoursやこの町の皆も!!だから!!」

一年生達の言葉にハルキ君が視線を向け頷く。そして少しづつだが怪獣の攻撃に光線を当て主導権を取り返していった。

「ハルキさん！貴方、絶対勝つてここに帰って来る」って言ったじゃ無いですか!!言つたからには必ず約束を守りなさい!!だから頑張つて!!」

「そうだよ？貴方が居なかつたらAqoursが今ここには無いわ！果南とも仲直り出来なかつた!!花火大会のライブを成功させる為にも…、お願い勝つて!!」

「私も！せっかく鞠莉と仲直り出来て、バラバラだった三人が一つになれたのに…。私もまたスクールアイドルがやりたい！ハルキも絶対居ないとダメなんだよ!!」

ダイヤさん、鞠莉さん、果南ちゃん、も自分達の胸の内をさらけ出す。そして私達全員の声がハルキ君に届いた。

「「「「「頑張れ〜〜〜!」」」」」

その時……、流れが変わった!!!

俺、夏川ハルキは皆の応援を聞き、何か体の内から力が湧いてくるものを感じた。1人、また1人と応援がある度に動きのキレが良くなっていく。

「なんなんツスか？力が!!」

武道を経験する1人として確かに応援は力を増す要素の一つだがウルトラマンとして戦っていると限界以上の力を使う事が出来るような感覚を覚えていた。

『師匠も兄さんも先輩も、ウルトラマンは昔から人々の声を聞いて戦い抜いてきた！今の俺達と同じ様に!!ハルキ、戦ってるのは俺とお前だけじゃ無いんだ!!』

そうだ、俺と乙さんだけが戦ってるんじゃない。A q o u r sの皆も勝利を信じて声を届けてくれているんだ！

俺達はエレキングの電撃を纏った尻尾を切り落とす為、狙いを定め、居合いの構えを取る。エレキングが自身の尻尾を横に尻ぎ払った瞬間…、

『ゼステイウムドライブ!!』

両手から赤と青の光の刃ゼステイウムドライブを振り切り、尻尾を切り落とした。

「よし！乙さん、空へ!!」

俺達はエレキングの火炎が届かない空へ飛翔し指を鳴らす。

『ガンマイリリュージョン!!』

ティガ先輩とガイア先輩を呼び出し、ティガ先輩は紫色に姿を変えて光弾を、ガイア先輩は頭から光の刃をまるでゼスティウムドライブの様に発射させエレキングのアンテナを破壊した。

「止めだ！」

『よし、行くぞハルキ!!』

再度指を鳴らした俺達はダイナ先輩を呼び出し計四人で光線を発射しエレキングを焼き付くした！

「おーい!!」

視線を向けると千歌ちゃんが笑顔で手を振っている。

俺達は先輩達の幻影を消す事無く地面に着地しそのままゆっくりと光を消滅させていった。

戦いを終えた俺は浦の星高校に向かって手を振りながら走っていく。皆も手を振る者、サムズアップやVサイン、墮天使ポーズを取ったりと歓迎してくれた。

「ただいま…、皆！」

俺も笑顔で皆に答える。今回の戦いは正直キツかった。皆の応援が無ければ確実に負けていたと思える程に。

「お帰り！」

再度千歌ちゃんが笑顔で答える。

「よしよし、良く帰って来た!!」

「本当、ヒヤヒヤしたんだから!!」

果南ちゃんが俺の頭をガシガシと撫でる中、梨子ちゃんは子供を叱る様に俺の頬を引つ張る。

「い、いふあい!いふあい!!」

高校生にもなつてこんな子供扱いされる事に抵抗があつた為、俺の顔は真つ赤になつてしまつている。

「アハハ!ハルキ君、顔真つ赤!!」

「ワーオ、ハルキつたら可愛いわね!!」

ルビィちゃん、鞠莉さんが茶化す中、残り4人も便乗する。

「ハルキ君、子供扱いされるの苦手なんだよね〜! (よしよし)」

「じゃあよしよし止めて下さいよ曜ちゃん!!」

「ハルキ君、戦いで疲れてるんだから大人しくするズラ。」

「コラツ! 苦戦しまくつてたじゃないの!! あんな怪獣一撃で倒しなさいよ。オラオラオラー!」

「まあまあ、勝ったから良いじゃ無いですか。良く頑張りましたよ！（なでなで）」
曜ちゃん、ダイヤさんに追加で頭を撫でられ、善子ちゃんには腹を軽く小突かれ、戦いの疲労と羞恥で俺は鼻血を出してしまった。

数日後花火大会まで怪獣の出現は確認される事は無く、9人となったAqoursの発ステージが始まった。

（♪未熟DREAMER）

「それにしてもAqoursか…。」

ライブも拍手合切で大成功を納め、見に来てくれたストレイジの隊員や蛇倉隊長から、たこ焼きの差し入れを食べながら果南ちゃんが懐かしむ様に呟く。

「私達がスクールアイドルをやっていた時のグループ名もAqoursだったのデース！！」

ええっ！マジかよ。凄い偶然もあるんだなと思っていると果南ちゃんがケラケラ笑いながら続きを話す。

「私もそう思ってたんだけど、千歌達も私も鞠莉もまんまと乗せられたんだよ！」

そう言いながら果南ちゃんの目線の先にいる人物を皆で見つめる。

「誰かさんに。」

皆の視線に気づいた。誰かさん。は顔を真っ赤にしながらそっぽを向き、同じ色をしたリングォ飴を丸かじりした。

第22話 “地球” 来訪 前編

9人となったA q o u r sが花火大会でのライブを終えて3日後、俺達は部室の大掃除を行っていた。

「それにしても埃が結構溜まってるなあ〜！」

俺、夏川ハルキは部室惨状を目の当たりにし愚痴をこぼす。女の子が使っている部屋ってゴミとか落ちてない様な綺麗な空間だと思っていたのだが…。

「まあ部室はあるけど基本的には私達屋上で練習しているからね〜。」

曜ちゃんが隣で答える中、俺は棚に置いてあった水晶玉を発見する。

「なんだ？こんなもん棚にあったツスか？」

水晶玉を掴もうとした瞬間真横から突然手首を捕まれる。

「待ちなさい…、これは我が堕天使の神器！闇の力を持たない者が触れると災厄が降りかかるわ!!」

善子ちゃんが眉間にシワを寄せて俺に忠告をする。

「触るなって言ってるズラ。」

と花丸ちゃんが机に置いてある本をルビィちゃんと一緒に整理をしながら通訳をす

る。作詞をする為に辞書や本を図書室から借りたまま放置している事も多い為、この二人は部室と図書室を往復し続けている。

「ねえ、もう十分綺麗になったんじゃない？ 切り上げて練習しに行こうよ！ 部室に籠ってばかりじゃ時間が勿体ないよ。」

掃除が嫌なのか千歌ちゃんが机の上で突っ伏しているが彼女の頭に一冊のマ○ジンが乗っかる。

「今日は元々部室を掃除するって決めてたでしょ？ 大晦日にまとめてやるよりかは全然マシでしょ？」

梨子ちゃんが今週のマ○ジンで千歌ちゃんの頭を抑えながら掃除を再開する様に催促をする。そのマ○ジンをひよいと横から取り上げる手が…。

「まあ、千歌の言う事も分からなくは無いかね。……、知ってる漫画全然無いや。」

梨子ちゃんの漫画を取り上げた果南ちゃんが目次を見るも知ってるタイトルが無いと知り鞠莉さんに回す。

「止めてよ果南！ 今机にある漫画を reading してるんだから。ねえ、コードブ○イカーの14巻ある？ 続きが気になるわ〜！」

梨子ちゃんが部室で少しずつ読んでいた俺の漫画を鞠莉さんが読む中、突然扉が開き大きな怒号が部室全体に響いた。

「あくなくたく達々！ダラダラ、ダラダラ掃除をしても一向に終る訳が無いでしょう！！」
「『うおっ!!』」

俺とZさんは同時に驚きの声を上げ、その声の主であるダイヤさんが浦の星高校のエンジン色のジャージにプラスチックメガホンを持つというスパルタ教師の様な格好で入室してきた。部室の奥まで行きながらサボっていた果南ちゃん、鞠莉さん、千歌ちゃんに善子ちゃんの頭をメガホンで叩きながら回れ右をする。ジャージを着て暴力を行使する姿はさしずめ浦の星のヤ○クミだな…。

「いいですか！明日から夏休みに入り今以上に質の高い練習をする為にも、日々使用する部室を徹底的に綺麗にする事で…、」

ダイヤさんの長くなりそうな小言を他所に作業を進める者、相変わらずサボる者と分断された新生A q o u r s。今日は午前中で授業は終わったがこんな調子だと晩になっても終わらないなと俺が思う中、突然蛇倉隊長から電話が鳴る。

「はい！こちらハルキ！」

「こちら蛇倉！ハルキ、今何処だ？」

緊迫した声でこちらの現在位置を訪ねる隊長。今は部室でA q o u r sのメンバーという事を伝えると、沼津に怪獣と未確認の戦闘機が出現した為ストレイジに今すぐ来いとの緊急連絡を受けた。

部室を後にしストレイジの作戦室に着いた俺は、ユカ先輩から改めてメンバーに向けて説明を受ける。

「この怪獣は以前三津に現れた合体怪獣の腹部に当たる部分と酷似している事が判明しました。おそらく今画面に映っている怪獣が元になっていいると思われます。」

画面に映っている金色のトサカに大きな鎌を持った怪獣の顔はあのファイブキングにそっくりだなと思う中、蛇倉隊長が今回の怪獣出現は今までとは少し違う事を説明される。

「これまでの怪獣は宇宙から来た、地球に眠っていた怪獣が何らかの原因で目覚めた、何者かの人為的な影響で突然出現したという、3つのケースから出現している。だがこの怪獣が現れる時、沼津上空に巨大な穴が出現するという初めてのケースだ。それも未知の戦闘機が来ると言うオマケ付きでな…。」

蛇倉隊長の言う通り画面に映し出されている戦闘機はストレイジでも自衛隊でも使われていない、文字通り未知の機体だ。的確な攻撃をしながら怪獣の頭部の光弾を滑らかに回避をしている。こんな兵器を保有しているのはストレイジだけの筈なのだが…。「とにかく怪獣を迎撃する為、俺達も出撃だ。ハルキはセブンガー、ヨウコはウインダムで出撃！戦闘が終了次第、あの戦闘機のパイロットとコンタクトを取れ！」

「オッス！」

「了解！」

俺達は格納庫に向かい、セブンガーとウインダムに搭乗した際にバコさんから試作新兵器をセブンガーに取り付けた事を通信で説明される。

“ハルキ、鞠莉さんの家の技術部門からウルトラマンの攻撃を模した兵器をセブンガーに搭載した。着脱も可能だから臨機応変に使ってください！”

「オッス！存分に使いますよ!!」

鋼芯鉄拳弾といい鞠莉さんの家に感謝しなきゃなと思いつつ沼津に向かってセブンガーを飛行させた。

沼津に現れた怪獣をウインダムとセブンガーで押さえつける。あのファイブキングの元になった怪獣…、両手の鎌で攻撃をしながらこちらが間合いを取った瞬間に光弾を放つ隙の無い戦い方に俺達は苦戦を強いられていた。

「コイツ…！ヨウコ先輩、怪獣を取り押さえてください！新兵器を使います!!」

「了解！外さないでよハルキ!!」

俺は新兵器 “鋼刃鞭（コウジンベン）” を使用する為、怪獣と間合いを取りながらアタッチメントを着けた右腕を大きく振り上げる。

「鋼刃鞭…、発射!!」

振り下ろした右腕の遠心力で怪獣を袈裟斬りに切りつける。

「キシャー…!!」

攻撃を食らった怪獣は大きく体制を崩し、取り押さえていたウインダムと未知の戦闘機が追撃をする。転倒した怪獣に馬乗りをし、顔面を殴りつけるも鎌で両脇腹を切りつけ、払いのけられたウインダムは活動不能になってしまう。そして追撃をしていた戦闘機までもが光弾によって機体の体制が立てなくなり撃墜されてしまう瞬間…。

「ヤバい!!」

俺が叫んだ瞬間、赤い光が視界を覆い目の前に巨人が現れた!

「ジュワツツ!!」

赤い体をした人型のシルエツト、黒いVラインの胸の中央には青い光。それはまさに

…

「ウルトラマン…:。」

そう、俺が力を借りている先輩…:ウルトラマンガイアだった!!

俺、蛇倉ショウタは目の前の巨人に目を見開く。

「50メートル級の人型エイリアン！該当するタイプは…、ウルトラマンです!!」

ユカが興奮気味に声を上げる。あの怪獣、コックピットと未知の戦闘機が現れた事でまさかと思っていたが俺の予想は的中したみたいだ。この怪獣と戦ったのはコイツくらいだしな…。

「ハルキ、あのウルトラマンを援護しろ！」

『オッス！』

久しぶりに戦いを見てみるか。

俺はガイア先輩を援護する為戦闘に再度加わる。鋭くパンチやキックを繰り出す先輩に合わせる為、こちらもタックルを行い怪獣に畳み掛ける。

「キシャーー!!」

怪獣の鎌を回避しながら俺は再度鋼刃鞭を振るう為に右腕を上げる。だが振り上げたタイミングで光弾をコックピット付近に直撃してしまった。

「ぐああっ!!」

機体損傷の為活動不能になったセブングァーのコックピットでアラートが鳴り響く中、

俺は先輩を援護する為ゼットライザーを構えた！

「宇宙拳法、秘伝の神業！ゼロ師匠、セブン師匠、レオ師匠!!」

『ご唱和下さい我の名を！ウルトラマンZ（ゼーラット!!）』

「ウルトラマン…Z（ゼーラット!!）」

俺達はガイア先輩の隣に降り立った。

ガイア先輩にアイコンタクトを取り、俺達は先輩と一緒に構えを取る。怪獣は光弾を連射するも前に出たガイア先輩が両腕をぶつけて全て叩き落とす。今度は俺達が飛び出し、鎌が届かないギリギリな距離でヌンチャクを振るう。ヌンチャクと蹴り技の波状攻撃で攻め立てながら、上空に飛翔したガイア先輩が手裏剣状の光線を怪獣の頭部に攻撃を食らわせる。俺達以上に連携に慣れているガイア先輩が急降下しながら怪獣の喉元に飛び蹴りを叩き込む。

「ジュワーツ!!」

後方に吹き飛ばされた怪獣を横目にガイア先輩が俺達に向かって頷く。まるで「合わせろ」と言うように…。

「ハアツツ…!!ジュワーツツ!!」

体を大きく仰け反らせガイア先輩は頭部から光刃をぶつける。

『ゼステイウム光線!!』

俺達も必殺の光線を放ち怪獣は塵一つ残さず消滅した。

ガイア先輩が両腕をクロスさせ、体を消滅させるのを俺達も遅れて行い人間に戻った姿で顔を会わせる事にした。

「君が、あのウルトラマン…。」

青色のジャケツトタイプの隊員服を着た青年が俺に訪ねる。歳は俺よりも少し上だろつか…？

「オッス、ストレイジの夏川ハルキです。Zさんと一緒に戦ってます！」

俺の自己紹介に青年が柔和な笑みを浮かべながら自身について話す。

「X I G（シグ）に所属する高山我夢。ウルトラマンガイアです。」

差しのべられた手を握り戦闘機で通信を送れなかった事についての謝罪をする我夢先輩。

「あの怪獣、コツヴを追ってワームホールに入ったせいで通信系統が故障したみたいなんだ。」

「いやいや、気にしないで下さい。ワームホールって…怪獣が出てきた穴の事ツスカ？」

初歩的な事を質問する俺に頷く我夢先輩は詳細を説明する為にも俺が所属する、ストレイジに案内してほしいとお願いされる。俺は蛇倉隊長に通信を入れ、我々で夢先輩に

俺がZさんに変身している事を皆に言わない事を伝えたとストレイジに案内した。

ストレイジに帰還したハルキとヨウコを作戦室に行く様に指示を出した俺、蛇倉シヨウタは懐かしい人物に笑みを浮かべる。

「久しぶりだな高山我夢。いや、ウルトラマンガイアと言うべきかな？」

「君は…、ジャ「おっと」」

俺は我夢の言葉を突き出す事で遮る。

「ここでは蛇倉つて名前で通っている。それとこの事は他言無用にしてくれよ…。」

頷く我夢に一応の安心を覚えた俺は本題に入る事にする。

「ワームホールからコツヴがこの町に現れた。お前の世界にいる、根元的破滅招来体を送り込んできたって事でいいのか？」

我夢の世界には怪物を地球に呼び寄せる何かが存在しそれを防衛するストレイジの様な組織があると聞いた事がある。そしてコイツはその隊員である事も…。

「僕はそのコツヴを追ってワームホールに突入しこの地球に来たんだ。それにしても、この世界にも防衛隊が…。」

施設を見ながら興味深そうに呟く我夢にこの組織の事を説明する。

「この地球で対怪獣様ロボット部隊、ストレイジの隊長をしてんだ。まあ立ち話も何だから作戦室に行くか。あの戦闘機はどうしたらいい？」

親指で自分の胸を突き所属する部隊の隊長を伝えた俺は我夢が乗っていた戦闘機の対処を本人に聞く。

「ファイターEXの弾薬補充と装甲の修理をお願いしたい。プログラムの点検は僕がするからデータは見えない事を伝えてくれるかな？」

我夢の要望に了承した俺はバコさんにこの事を伝える。自動操縦でこの場所に着陸したファイターEXを格納庫ギリギリまで寄せると俺達二人は作戦室を目指した。

俺、夏川ハルキは蛇倉隊長と一緒に入室した我夢先輩から改めてここに来た経緯をストレイジのメンバーに話をする。

「それにしても別の世界の地球…、多次元宇宙って本当にあつたんだ!!」

子供の様にはしやぐユカ先輩を宥めるヨウコ先輩を見ながら俺もウルトラメダルに描かれている戦士達について思い出す。別世界のウルトラマンが本当に現れた。協力して戦える反面、これが何かの凶兆なのではないかと言う不安も持ちながら…。

「あのウルトラマンの事も知ってるんですか？」

ヨウコ先輩が我夢先輩が変身したウルトラマン…、ウルトラマンガイアについて質問をする。

「あのウルトラマン、ガイアは僕達XIGと一緒に戦ってくれたんです。ワームホールに突入した僕をガイアが追っつけてくれて…。」

嘘も方便で自身がガイアと言うことを誤魔化しながら我夢先輩の世界では、ワームホールが開く…怪獣出現の予兆になることを話した所で会議は一旦終了した。

我夢先輩はそのまま自分の戦闘機、ファイターEXの様子を見る為格納庫に向かい、俺は浦の星の制服に着替えながら怪獣の被害は軽微な事を善子ちゃんに伝えた。だがその直後、彼女の携帯から電話が掛かる。

「もしもし?。」

「ハルキさん!?もう大丈夫ですか?。」

なんとダイヤさんが善子ちゃんの携帯から電話をかけて来たのだ。

「うおっ!どうしたんすかダイヤさん?一応帰る予定ですけど…。」

「疲れている所申し訳ありませんが、お願いします!あれから掃除が終わらないんです!!」

悲痛な声で懇願するダイヤさんに鞠莉さんからの声が入る。

「ハルキー!大丈夫よ。ダイヤの説教が余りにも長いし、貴方の戦いを見てたから全く

終わってないだけ。」

「そもそも貴方は最初から片付ける気が無かったでしょ？どの口が言いますの!」

「うるさいなあ！読書に集中出来ないでしょ？今は読書の『夏』なんだよ？」

「果南さん、それ私のマ○ジン…。」

三年生のギャイギャイと口論する中にボソツと梨子ちゃんの声が混じる中、持ち主本人である善子ちゃんが

「別に来なくても大丈夫だから…。お母さんも怪我は無いつてさつき言つてたし、大掃除は何とかなるわ！じゃあお疲れ様!!」

ブツンと切れる電話の音に俺はため息を付く中、作業が一段落した我夢先輩が戻ってくる。

「お待たせ。……どうしたの、沈んだ顔して？」

我夢先輩が俺の様子を見て声をかける。もう恥もへったくれも無い！俺は頭を下げ「お願いします！ちよつと俺が行つてる学校に来てください!!」

私、桜内梨子はこの収集が付かない部室の惨状を目にしながら缶コーヒを飲んでい
る。もう皆部室の掃除をする事などどうでも良くなつてるのか終バスが来るまで自墮
落に過ごしていたのだ。まあ明日から夏休みだし、時間は沢山あるから練習始めと終り

に少しずつ片付けをすれば綺麗になるのではと思った時、部室のドアが突然開いた。

「戻りま……何であれから進んで無いんスか!？」

ハルキ君がドアを開けた瞬間しかめっ面をする。でも違和感があるのは隣の…

「ねえハルキ君、その人…ストレイジの人?」

ストレイジとは隊服は違うが同じ組織の人なのだろうかと疑問を持った私にその青年は柔和な笑顔で答える。

「初めまして、高山我夢です!」

ハルキ君と一緒に来た高山さんが加わり部室の掃除を始める私達 *A q o u r s* のメンバー。話を聞くと今日現れた怪獣とウルトラマンに関係があるらしく、泊まる宛ても無い為ハルキ君の家に数日お世話になるみたいなのだ。

「それにしてもあの赤いウルトラマン、凄いですね! 私何回か見たけどあんなに強いなんて思わなかったよ!」

図書室に本を持っていきながら千歌ちゃんが赤いウルトラマンの感想を言うと高山さんは怪訝な顔をしていた。

「ちよつと待って! ガイアを何回か見た? ここにはガイアが出たのは初めてなんじゃ?」

どういう事? あのウルトラマンはハルキ君達が呼び出してるから何回か確認されて

いる筈だけど。そしてあのウルトラマンの名前は私達も知らない…。私は一つ鎌をかけてみる事にした。

「高山さん、貴方もしかして……ウルトラマンですか？」

「えっ？」

素頓狂な声をあげて本を落とす高山さん……。どうやらビンゴの様だ。明らかに動揺し、ハルキ君も頭を抱えて掻きむしる。

「何でそんなに直ぐ気付くんツスか？勘が良すぎて怖いんスけど!!」

私の肩を掴みながら詰問するハルキ君に平謝りしながら目を反らす。そんな中、千歌ちゃんが高山さんが落とした本を拾い集め

「やったね、ハルキ君！頼もしい先輩が来てくれたじゃん!!」

と他人には言つてはいけないタブーをジャンプしながら即効でバラした!

「千歌ちゃん!!」

ハルキ君と声がハモったが時既に遅くアワアワと顔を青ざめる千歌ちゃんを隣に高山さんが驚愕した顔でハルキ君を見る。

「はい…、バレてます。3日前に……。」

ハルキ君が帰りにアイスを奢ってくれる事を条件に私達 A q o u r s のメンバーは

今までと打って変わって掃除に熱が入り30分もしない内に部屋の清掃が完了した。恐るべし食べ物の方…。

終バスまで時間があるし屋上で涼みながら私達は高山さんの話をハルキ君がアイスを買ってくるまで聞くことにしたのだ。勿論ハルキ君以外には伝えない事を条件に…。「やっぱり別の世界でも怪獣がいるのね…。」

鞠莉さんの呟きに皆が頷く。パラレルワールドが存在し、その地球でも怪獣がいる。私達が住んでいる静岡以外にもその地球では世界中に怪獣が存在し、宇宙怪獣を呼び寄せる何かがある事も…。大きすぎるスケールに混乱しそうな私だったが、ウルトラマンの力を授かった高山さんが所属している防衛隊と一緒に戦い続けているらしい。

「地球が生み出したウルトラマンか…！なんか神秘的だね…。高山さんの世界には他にもウルトラマンはいるんですか？」

ウルトラマンZと協力した時もガイアは連携して戦っていたし、何度もこの様なケースがあったのでは無いかと考えている果南ちゃんに高山さんは「鋭い！」と舌を巻きながら肯定する。

「僕がいた世界には大地の巨人ウルトラマンガイアと海の巨人ウルトラマンアグル、二人のウルトラマンがいるんだ。」

そう言いながら高山さんは自分の隊服にある掌サイズの小さなパソコンを開き、もう

一人の青いウルトラマンを見せてくれた。

「おお！こんな小さいパソコンが!!」

「言うと思ったわ、ズラ丸。」

相変わらずの反応をする花丸ちゃんに善子ちゃんがツツコミながら青いウルトラマン、アグルを見る。

「カッコいい!!」

「うわっ！手から光の剣を出してるよ!?!」

剣を振るいながら怪獣を攻め立てるアグルに興奮する曜ちゃんと千歌ちゃんに私も内心同意する。確かに今までのウルトラマンとちよつと違う、荒々しい戦い方に格好良さを感じていた。

「じゃあ今度は僕から聞こうかな？今まで聞けるタイミングが無かったけど君達はダンスか何かをやっているの?」

その質問に待つてました！と言わんばかりにダイヤさんが高らかに声を上げる。

「私達はスクールアイドル、A q u o r s ですわ!!」

「スクールアイドル?」

頭に?マークを浮かべている高山さんにルビィちゃんが

「まさか知らないんですか?スクールアイドル!?!」

と詰問する。

「落ち着いてルビイちゃん！パラレルワールドから来たのよ？」

私の説得でルビイちゃんも納得したのか高山さんに謝罪をする。

「いやいや、気にしないで。学校のアイドルって事かな？」

「まあ、そういうものです。ステージの上で歌ったり踊ったりするんですよ!!」

そう言いながら千歌ちゃんはスマートフォンで動画を出し、高山さんに見せる。

「おおー凄い……。」

画面に魅入る高山さんからも本心で感動しているのが良く分かる。このPVは好評だったし、A q o u r sを知ってもらうには丁度と私も思う。

ハルキ君も帰ってきた事で皆でアイスを食べこの日は解散。明日も高山さんの話を聞きたいとの皆の要望で昼から果南ちゃんの家でバーベキューをしながら親睦を深める事にした。幸いその日の松浦家は店は定休日で果南ちゃんを除いて全員外出をする為グツドタイムミングな様であった。

「さあ肉が焼けたよ。皆食べて!!」

私、松浦果南はA q o u r sのメンバーと高山さんと一緒にバーベキューをしてい

る。バーベキューコンロを掃除ついでに皆が彼の話も聞きたい為この機会を設けたのだ。それにしても…

「鞠莉、こんな大量のアワビと高そうな牛肉…何処から持ってきたの?」

「えっ? バーベキューをするって言つてたから取り寄せて貰ったの。お金は気にしないでいいわよ!」

さも当たり前のように答える鞠莉に絶句する私。こんな高いものパクパク食べたら後からバチが当たりそうな気がする…、多分。

「いや〜! バーベキューなんて久しぶりだよ。ずっと空の上で過ごしてたから!!」

「[[[空?!]]」

今日は一先ずハルキの服を着ている高山さんがご満悦に焼き肉とアワビの感想を言う中でサラッと「空の上」と言うパワーワードを口にした事で花丸ちゃん、ルビィ、梨子ちゃん、ハルキがビックリした様に声を上げる。

「ゴホツ、ゴホツ!!」

むせる私の背中を千歌がさすりながら私も内心同じ事を考えていた。

「僕が所属するX I Gにはエリアルベースっていう空中基地があるんだ。そこから地上を観測して異変があつたら飛行機を飛ばすんだよ。」

「すげえ! 所変わればってやつですね!!」

高山さんの地球の技術にハルキが目を輝かせている時、ジュースが無くなっている事に気付く。

「あつ、ジュース無くなっちゃったな…。」

家にはジュースはもう無いから近くのスーパーで買いに行く為、一旦その場を離れる事にする。

「僕も荷物を持つよ。1人分の飲み物を買うんだ、大変でしょ?」

高山さんも同行し、私達は目的地に向かって歩き出した。

スーパーに到着するまでの間、昨日はスクールアイドルの事をあまり話せ無かった事もあり高山さんに伝える。廃校の危機になつている学校を救う為に千歌達がスクールアイドルを始めた事…。二年間蟠りがあつた幼なじみの鞠莉と和解し、三年生は再びスクールアイドルとして復帰して全国大会であるラブライブを目指している事を伝える。

「人は必ずわかり会える…。どの世界でも同じなんだな。」

そう呟いた高山さんも自身の話をしてくれた。青いウルトラマン、アグルと最初は敵対していたが最後には分かり会う事ができ、今まで一緒に戦つてきたXIGのメンバーにガイアとして戦っていた事を知られた時もメンバー全員が受け入れてくれた事も…。

自分達の経緯を話しているとあつという間にスーパーに到着し必要な飲み物を買つていく。正直、2リットルのペットボトルを6本は一人で持つて帰るのは大変だから高

山さんがいて助かった。スーパーを出る前に私は入り口の雑誌コーナーで見知った男の子を目にした為、声をかけた。

「よっ！久しぶりヒロちゃん。」

「あっ！果南お姉ちゃん!!」

ヒロちゃんと呼んだ五歳位の男の子は釣りに来る近所のお爺さんのお孫さんであり、私が時々遊び相手をしているのだ。

「今日はお買い物？」

「うん、お母さんと来たんだ。買い物が終わるまでここで待つてるの!!」

元気に答えるヒロちゃんの両手にはウルトラマンZと合体怪獣の人形が握られていた。大方、これを使って遊びながら時間を潰していたのだろう。

「ウルトラマン好きなんだ？」

ウルトラマンとしての性なのか高山さんがヒロちゃんと目線を合わせ尋ねる。

「うん！僕、ウルトラマンZ大好きなんだ。いつか近くでウルトラマンを見たい！」

純粹な子供の願いに高山さんは微笑みながら

「その気持ちは絶対ウルトラマンに伝わってるよ。呼べば来てくれる訳じゃ無いけど、怪獣に襲われても諦めず自分が出来る精一杯の事をやりきった時にウルトラマンは来てくれる。そして応援する気持ちはウルトラマンの力になっている…。僕はそう思う

よ。」

ヒロちゃんも大きく頷き私達は今度こそスーパーを後にした。

「ちよつとクサイ台詞だったかな？」

鼻を掻きながらはにかむ高山さんが私に問うも

「説得力がありましたよ。何せ本物が言うんですから！」

と笑顔で返す。買い出しも済み皆の元に帰った私はある提案をする事にした。

「高山さん、皆で一緒に写真撮りませんか？縁あつて出会った記念に！」

「ナイスアイデア！」

「賛成！」

鞠莉に千歌、そして高山さんも同意し皆で写真撮影をする事にする。

私と高山さん、ハルキを前にし全員で写真を撮る。

「はい！チーズ!!」

自分のスマートフォンとデジカメを使い写真撮影をし、全員分の印刷を済ませる。ピンボケも無く皆も笑った笑顔の写真とその裏面に高山さん直筆の座右の銘を記入してくれた。

「さて、残りの焼き肉も全部焼こうか！」

皆もまだまだ食べたりないのが肉をグリルに置いた瞬間、ハルキの携帯から電話が鳴

る。

「こちら蛇倉…、怪獣が千葉に出現した。ハルキ、今から出動出来るか？」

こんな時に…と歯噛みする私だが今淡島に居る為到着迄に時間が掛かる事を知らせたハルキだが、高山さんが乗ってきた戦闘機を無人飛行で淡島に飛ばせばストレイジの基地まで直ぐに辿り着ける為、その場で待機を命令される。

「高山さんも行くんですよね…？」

私の言葉に肯定する高山さんを引き留める事は出来ない。元居た世界に帰るチャンスを逃す訳には行かず彼の帰りを仲間が待つている事を告げられた私は自分の部屋に駆け上がり、四隅にイルカが付いてある小さな写真立てを持って下り、高山さんに渡す。「いつ帰れるのか分らないけど、これを渡すから！戦い…、頑張ってください!!」

私の言葉に高山さんは柔和な笑顔で返す。

「ありがとう、行ってくるよ…。この世界は滅んだりしない。君が…、君達が未来を信じる限り。」

戦闘機が浜辺に着陸し、高山さんはポケットから金色の拳大程ある三角形のアイテムを見せる。これがガイアの証である事に直ぐ気付いた。

ハルキと高山さんに乗せた戦闘機はストレイジに向かって飛び立つ。その飛行機雲の先を祈る様に見つめながら…。

第23話 “地球” 来訪 後編

「怪獣は宇宙に出現したワームホールから千葉に高速で移動し、町を破壊しています。合体怪獣の系統ですが、該当する個体はありません…。」

俺、夏川ハルキはセブンガーのコックピット内でユカ先輩の現状を聞く中怪獣の様子を見る。巨大な恐竜の首から股下までビッシリとある牙の様な突起、翼竜が持つ黄金の翼を備えた怪獣だった。

「あの怪獣…。」

我夢先輩は自身のパソコンからデータを転送し怪獣について説明をする。

個体名キングオブモンスと呼ばれる怪獣は単体での肉弾戦や頭部からのビームや口からの熱線、腹部の突起での拘束を得意とする上で翼と腹部から怪獣を生み出す規格外の化け物との事だ。

「ヨウコ、接近はなるべく避けながら怪獣を生み出す翼と牙を破壊しろ！ハルキは高山さんの護衛を第一に考えながら、怪獣を近くの人に誘い出せ。いいか？お前は絶対に無理をするなよ！」

「了解!!」

「オッス！」

ヨウコ先輩、俺に続き我夢先輩が出撃した。

戦闘を開始したヨウコ先輩はキングオブモンスの翼や腹部を破壊しようとするも難航している様子であった。バズーカを装備したセブンガーで奴を山に誘ったのは良いが、ウインダムのミサイルや昨日のコツヴ戦で使用した鋼刃鞭を振るうもキングオブモンスの翼から発生するバリアで全て防がれてしまう。

「この野郎!!」

このままではウインダムのバッテリーが尽きてしまう事は火を見るより明らか…。俺も遠距離からバズーカを発射し援護をする。

「ベエエエーム!!」

キングオブモンスの横つ面に着弾しこちらに意識が向いた瞬間にヨウコ先輩のウインダムが翼を掴む。

「怪獣を生み出すならその翼を引き千切ってやるよ!!」

気合いの一声で翼をもぎ取ろうとするヨウコ先輩にユカ先輩から通信が入る。

【ヨウコ！怪獣の体内から巨大なエネルギーが発生してる！今すぐ離れて!!】

時既に遅くキングオブモンスが赤く発光し増殖した翼から1体の翼竜、バジリスがウインダムを空中で宙吊りにしながら飛翔する。

「キュエエエーッ!!」

雄叫びを上げながら空中を旋回するバジリスの背中にウインダムが必死に捕まる。だが鬱陶しそうにバジリスは体を捻りウインダムを振り落とす!

「マズイ! 制御が効かない!!」

ヨウコ先輩が叫ぶ間に落下速度が上がるウインダム。

「ヨウコ先輩!」

俺はセブンガールのブースターを全開にしウインダムをギリギリの所でキャッチする。だが最悪の事態は未だ続いていた。

「グルルル…。」

ヨウコ先輩を救出する間にキングオブモンスはもう1体の鰐の様な怪物、スキューラを既に産み出し俺達に特攻してくる。

「ヤバイ!」

明らかに水中で活動する様な見た目にも関わらず高速で突っ込んでくるスキューラに対し、回避が間に合わず直撃してしまう瞬間、

「ハルキ君!!」

我夢先輩のファイターEXのビームがスキューラの顔面に直撃した!!

「我夢先輩!!」

「高山さん!? 私達の事はいいから退避を!!」

ヨウコ先輩が避難の指示を送るも我夢先輩は3体の怪獣に攻撃を続ける。

「二人が戦っているのに、このまま黙って見ているのはもう出来ない! 僕も出来る限り援護する。」

この申し出を無下に出来なかったのか、ヨウコ先輩が再度「絶対にEXを落とさせるなよ? ハルキ!!」と指示を出し共闘を承認した。

キングオブモンスはセブンガー、バジリスはウインダム、スキューラはファイターE Xが相手をする事に。

キングオブモンスのバリアが届きにくい足元をバズーカで狙い打ちながら爆煙で敵の視界を封じ、その間にセブンガーの右フックで横つ面を殴り飛ばす事で初めてダウンを取る事に成功する。

バジリスの飛行能力に対し、ウインダムを駆るヨウコ先輩は全身のミサイルを使い牽制をし、突っ込んで来た敵を鋼刃鞭が届くギリギリの位置で振るう事でカウンターを取る。

我夢先輩が相手をするスキューラには攻撃が届かない真上からビームの集中放火を浴びせる。だがそんな俺達の攻撃を何度も食らう怪獣達では無い。数度のやり取りの中、キングオブモンスは自身の翼で爆煙が届かない範囲まで飛翔しながら頭上を取り、

頭部のビームを乱射する事でセブンガーの体制を崩す。バジリスは自身の飛行速度を更に上げ、両手の鎌でウインダムの左腕を切り落とした。

そんな中、突然ユカ先輩がこの場にいる全員に通信が入る。

【交戦している上空に新たなワームホールが出現！全員今すぐ退避して!!】

俺達は怪獣から間合いを無理矢理離し、撤退をしようとする。バッテリーも少なく、3体にも手こずる中で新たな怪獣が来ると言う三重苦になってしまおうと思われたが現れたのは俺達の予想とは違う、緑色のロボットだった。

「アドベンチャー号!!」

我夢先輩が緑色の機体に向かって叫ぶ。色々と聞きたい事はあったが、あの機体は自身のマジックハンド型のアームとレーザーで3体の怪獣を牽制する。取り敢えず味方と捉えていいのだろうか。そう思考する中、アドベンチャー号のパイロットらしき人物から通信が入る。

「こちらはX I G 〃臨時隊員〃藤宮博也だ。」

「藤宮!!」

我夢先輩の明るい声に藤宮と呼ばれた人物が「久しぶりだな。」と通信を返す。ヨウコ先輩はこの場から撤退をする旨を伝えると彼は快く承諾してくれた。だが…

〃ベエエエーム!!〃

// キュエエーーツ!! //

// グルルアーツ!! //

3体の怪獣からの総攻撃を受けてしまい特空機は大破し、ヨウコ先輩は脱出不可能となっていました。

「ヨウコ先輩!!」

俺が呼び掛けるも反応は無い……。先程の攻撃でコックピットにいるヨウコ先輩は意識を失ってしまったらしい……。

「そのロボットのパイロット、怪獣は俺と我夢が引き受ける。お前はそいつを早く救出しろ。」

「オッスー!ありがとうございます。」

藤宮さんと我夢先輩の協力もありヨウコ先輩を救出した俺は二人に一旦退却するように指示を出す。救護を要請した俺は二人と人気の無い場所で合流し、怪獣を見据える。

「もしかして、貴方が我夢先輩が言っていたもう一人の……?」

俺の疑問に藤宮さんは右腕にあるブレスを見せる。

「我夢から聞いているなら話が早い……。ウルトラマンアグルだ。」

「やっぱり……!俺はストレイジの夏川ハルキ……。ウルトラマンZさんと一緒に戦ってい

ます!!」

俺も変身アイテムであるゼットライザーを見せながら正体を告げる。

「所で、なぜ君がアドベンチャー号を?あのマシンは大破してエリアルベースには無いはず…。」

藤宮さんが乗っていたアドベンチャー号は我夢先輩が過去に操縦していたが怪獣の攻撃で残って居ないそうだったが、先輩がウォームホールに飲まれた事でエリアルベースの司令官が時空を越えるマシン「アドベンチャー号」の再設計をメカニックに依頼し、我夢先輩と関わりが深い藤宮さんがパイロットとして志願したようだ。

「消息不明になってまだ2日だが、お前が居なければ俺達の地球も危ないんで…。それに根源的破滅招来体もまだ滅んではない。」

無愛想に身を案じる藤宮さんに苦笑する俺と我夢先輩。

『ハルキ、なぜ地球の人間はこう回りくどく話す人が多いんだ?』

いつぞやの果南ちゃんや鞠莉さんの和解から疑問を持った乙さんは俺に聞く。

「人間色々と面倒臭いんですよ…。思っけても口にすると恥ずかしくて言えない事もあったりするんツスから。」

俺と乙さんが話をしているなか「でも…。」と我夢先輩が口を開く。

「あの怪獣を倒さないと僕達も元居た地球に帰れないし、この世界も滅んでしまう。」

そう言いながら自身のアイテムであるエスプレンダーを握りしめる。

「二人とも、力を貸して欲しい！」

そう申し出る我夢先輩に俺も藤宮さんも同意する。

「俺達の地球の為に…、ありがとうございませう！」

「我夢、ハルキ……、行くぜ。」

再度3体の怪獣を見据え、自身のアイテムを掲げる。

「ガイアアアアアア!!」

「アグルアアアア!!」

『ご唱和ください我の名を！ウルトラマンZ（ゼーラット!!）』

「ウルトラマン…Z（ゼーラット!!）」

3人のウルトラマンが地上に降り立った。

私、松浦果南はAquoursのメンバーと千葉に出現した怪獣とウルトラマンの戦いをスマホで見守っている。Zは翼竜の怪獣、アグルは鰐型の怪獣、ガイアはそれらを産み出した恐竜の様な怪獣と交戦を開始した。

ガイアは接近をしながら怪獣の腹部にある牙をわざと展開させ隙を作る。その瞬間右手から青色の剣を出し、そのまま右腹部にある無数の牙を力づくで叩き切った。

「ベエエエーム！」

「果南ちゃん！ハルキ君達も!!」

千歌が自分のスマホを私に見せてハルキ達、ウルトラマンZの様子を見せる。両手に鎌が付いた翼竜怪獣の斬撃を避けながら持ち前の素早さとヌンチャクでカウンターを繰り返す。

「ジュワツッ!!」

ヌンチャクで器用に相手の鎌を叩き落とし、テコンドーの要領でがら空きになった所に蹴りを叩き込む。以前目の前で戦いを見た時は相手との相性が悪かったのか攻めあぐねていたが今回は機敏な動きで怪獣を追い詰めていた。

1年生組と梨子ちゃんはアグルの戦いを見ており、鰐怪獣の大口を開けた突進をガツチリと受け止めそのまま力づくで地面に叩きつけるパワフルな戦法に興奮している。ガイアもアグルも共闘して戦う事にはかなり慣れており自分達の近くにいる他のウルトラマンを要所所で援護をしながら怪獣を追い詰めていくと思われていた…。

怪獣達も反撃と言わんばかりに恐竜と翼怪獣は自身の翼を使いながら空中からビームや光弾を発射しウルトラマン全員の行動を制限させる。その隙に飛行能力を持たない鰐怪獣がアグルからハルキ達、Zに向かって噛みつきを行う。

「ジュワツッ!!」

身体の半分程ある大きな上顎を開きZを噛み千切ろうとする怪獣にガイアとアグル

は援護をしようとするも、それを見計らった上空の2体の怪獣が隼の様に空から大木の様な足や鋭利な鎌を振るい2人を妨害する。

「大丈夫かな…。」

ルビィちゃんが心配するのも最もだ。さつきまでの戦いが嘘の様にウルトラマン達を追いつめられている。

「グアアツ…!!」

ガイアが叩き切った恐竜怪獣の腹部にある牙が1分足らずで再生し今度はアグルの身体を締め付ける。

「このままじゃアグルが攻撃出来ない…!」

梨子ちゃんが焦りの様な声を上げる中、鞠莉もガイアの苦戦している姿を見て「フアイトよ!ガイア!!」と声を上げる。

ガイアも翼竜怪獣の光弾や鎌に加え、空中からの攻撃に対応しきれていない様子だった。その上ウルトラマン全員の胸のランプが点滅し始めている。

「どうしたらいいの…。どうしたら…!」

内心パニックになっている私に高山さんが数刻前に言っていたあの言葉が頭を過ぎる。

「が…、頑張れ…。頑張れ!!」

私は画面にいる3人のウルトラマンに声援を送っていた。皆がギョツとした顔を向けるも気にする事は無くエールを送る。

「果南さん!? そんな事をしてても戦況は変わらないのですよ! ハルキさん達を間近で見たい時とは…。」

制止するダイヤの顔を見ながら私はそれを全否定した。

「そんな事はない。高山さんは言ってた! 応援する気持ちはウルトラマンの力になるって!! どんなに距離が離れていても想いは伝わるって私は信じて!!」

私の言葉に気圧されたダイヤだったが曜ちゃんも続いてウルトラマン達を応援する。

「頑張れハルキ君! そうだよね。私達が諦めてちゃ、きつと後悔するもんね!!」

曜ちゃんの声に他のメンバーも続けて応援の声を届けていく。

「アグル! 頑張つて!!」

「マル達が応援するズラ!」

「負けないで!!」

「ここを耐えればきつとチャンスが来る! もう少しよ!!」

梨子ちゃん、花丸ちゃん、ルビィちゃん、善子ちゃんがアグルを応援する。

「ハルキ君! Zも頑張れー!」

「帰ったらまだまだ肉があるんだから! そんな怪獣早く倒しちゃえ!!」

トスイングの要領で恐竜と鱷怪獣の間に投げ飛ばした！

「よし!!」

思わずガッツポーズをする私を3年生二人が笑う。そして画面の戦いも終わりを告げようとしていた。

乙はお馴染みの幾多の怪獣を倒してきた十字型の光線を鱷怪獣に。アグルは光を球状に成形し恐竜怪獣の腹部に光速で発射する。ガイアは自身の体を大きくのけ反らせ腕を縦にスライドしながら光線を発射しそれらを食らった怪獣は粉々に砕け散った！

「やった！ウルトラマンが勝った!!」

私は飛び上がる程のテンションでAqoursのメンバーとハイタッチを交わした！

「ありがとうございます！助かりました。」

俺、夏川ハルキは我夢先輩と藤宮さんにお礼を言う。

「(ちん)そー」

「ああ。これでやっと元の世界に帰れるな。」

ワームホールが閉じてしまったが藤宮さんの乗っていたアドベンチャー号にある時空を越えるシステムを使うことで元いた世界に帰る事になった。安全に帰る為2時間

だけ整備をバコさんにしてもらっている事から俺達は今は手持ち無沙汰になっている。

「あの…、ここににある工具類と不要なジャンクパーツがあつたりするかな？」

「……………」

頭に疑問符を浮かべる俺に可能ならA q o u r sのメンバーを連れてきて欲しいとの頼みを受け一時間半後にメンバー全員をストレイジ近くのバス停に連れて来させる。

「高山さん！」

果南ちゃんが嬉しそうな顔で我夢先輩に近づいてくる。こうやって走ってくる様子はいつもの頼れるお姉さんとは違い、一人の可愛い女の子だよなとバス停の時刻表に背を預けながら思ったりもした。

「良かった…、無事で本当に良かった!!」

安心した顔の果南ちゃんを見た我夢先輩は笑いながら片手に持った手提げ袋から一つの金属製のケースを渡す。

「これって…。」

「なにになに〜?」

千歌ちゃん達A q o u r sのメンバーも興味深そうにケースを見つめる。

「ガイアの変身アイテム、エスプレンドアの小物入れだ。バーベキューのお礼だよ。」

俺と部屋に置く用も合わせて11個、皆に手渡す。

「ありがとう！大切にするね!!」

千歌ちゃんが笑顔で答え果南ちゃんにもう一つ、小物入れより大きいエスプレンダーが渡される。

「我夢先輩…、この大きいやつは？」

「僕が使っているエスプレンダーと同じサイズのものだよ。女の子が持つにはちよつと無骨かもしれないけど…。」

「お前、こんな物作つてたのか…。」

藤宮さんも輪に入る中、果南ちゃんが大切そうに受け取る。

「ありがとう！元の地球でこれからも戦い、頑張ってください!!」

果南ちゃんが笑顔で我夢先輩にエールを送る。

「果南ちゃんもスクールアイドル、頑張つて。ラブライブの決勝に行けるといいね！」

お互いに握手を交し、先輩と藤宮さんは俺に向き直る。

「ハルキ君、この地球は任せた。」

「世界は違えど同じウルトラマンだ…。頼むぞ。」

2人の先輩に俺も大きく頷く。

「オッス！任せてください。」

整備も終わり先輩達が自身のマシンに乗り込んだ時、空間が歪み2つの機体が姿を

消えた所を全員で見守る。

「帰ったツスね……」

「うん……」

果南ちゃんの名残惜しい声が虚空に溶けた。

高山さんが去った翌日の早朝から私、松浦果南は学校の屋上で空を見上げ黄昏れている。昨日貰ったエスプレンダーは彼と違った銀色の光を反射させていた。

「果南ちゃん！」

気付くとハルキ達全員が屋上に集まっていた。

「練習始めましょう！暗い顔していると我夢先輩も心配するツスよ？」

そうだよね！私が暗い顔するときと心配するもんね。そう思い、空を見つめると大きな飛行機が通過する。

「ふふっ……。おーーーーーい!!」

私は思わず飛行機に向かってエスプレンダーを掲げながら叫ぶ。さっきまでの憂鬱が嘘の様に笑顔を浮かべメンバーの輪に加わった。

余談だが、部室には新しく、エスプレンダーの小物入れと皆で撮った写真が飾られる言葉が記載されていた。

“この世界は滅んだりしない。君達が未来を信じる限り。”

第24話 シャイ焠はじめました／宇宙海賊登場 前編

「暑〜〜い!!」

「ズラ〜〜!!」

「ううっ、天の業火に闇の翼が…。」

俺、夏川ハルキとAqoursのメンバーはいつもの様に屋上でダンス練習をしている。だが午前中と言うのに直射日光が当たり、千歌ちゃん、花丸ちゃん、善子ちゃんが暑さに悶えている。

『ハルキ、人間はなんで暑いのが苦手なんだろうな？寒いのは分かるのでございますが…。』

俺は空手の基本技を練習しながら乙さんがテレパシーで疑問を口にする。

「この暑さだと大体の人はダウンするもんなんツスよ。俺は慣れてるから平気ツスけどね。」

武道をしている身からすればある程度の慣れも有る為、この程度なら余裕である。

「逆に乙さんは寒いのが苦手なんスね。」

『ウルトラマンは太陽のエネルギーを力に変えているからな。でも地球ではそのエネル

ギーが届きにくいから基本的に3分間しか活動出来ないでございますよ。逆に寒い場所では普段以上に動きにくくなるから全員寒さに弱いんだ。長くなるから詳しく言わないがウルトラの星には冬が無いから基本的に温かい星なんだ。』

ウルトラマンの重要事項を聞きながら倒れている3人を見る。その傍らハイテンションな2人が…。

「さて数日過ぎましたが今は夏休み!」

「サマーバケーションと言えは…?」

ダイヤさんと鞠莉さんが普段以上にニッコニコな顔をして千歌ちゃんに問いかける。

「えつと……、夏と言えはやつぱり海だよね…?」

自信無さげに答える千歌ちゃん。俺は夏でも今年は泳ぐの難しそうだな…。急な出勤もあるから釣りで我慢するしか無いだろうし。

「夏休みはパパが帰って来るんだ!」

「マルはおばあちゃんの家…。」

「私はツーリング。」

「夏コミ!!」

「俺は釣りツスね…。後は特空機の操縦訓練。」

自分達の楽しい夏休み計画を述べる曜ちゃん、花丸ちゃん、果南ちゃんと俺にダイヤ

さんは肩をブルブル震わせ

「ブツブツ……ですわ!!」

と久しぶりに青筋を立てて激高する。

「貴女達、それでもスクールアイドルなのですか!？」

皆がビクつく中、ダイヤさんと鞠莉さん以外のメンバー全員が目線で俺に「聞け!」と訴えかける。

「…、じゃあ何なんツスか?」

俺の疑問に答える為、一度部室に戻るA q o u r s一同。そしてホワイトボードに何やら円グラフが記された模造紙を貼り付けダイヤさんの説明が始まる。

「いいですか皆さん、夏と言えば…はいルビィ?」

ダイヤさんの問いかけにルビィちゃんが即答で「ラブライブ!」と回答する。

「流石我が妹!可愛いですね、良く出来ました!!」

この若干引く様な溺愛振りに善子ちゃんが、セブンガーが描かれたストレイジの団扇を扇ぎながら

「何、この姉妹コント…。」

とぼやく。確かに今のデレデレなダイヤさんに、お決まりの頑張ルビィをするルビィ

ちゃんを見てると笑いが込み上げて来そうになる。

「コント言うな！夏といえばラブライブ！その大会が開かれる季節なのです!!」

そう言いながら先程貼った円グラフを指差し大特訓を行うとの事を宣言した。

「先ずは予選突破を目指してA q o u r sはこの特訓を行います！この円グラフは私が独自のルートで入手した⁴ sの夏合宿のスケジュールですわ!!」

良くこんな情報を入手出来たと関心する中、さつきまで暑さで悶絶していた花丸ちゃん、善子ちゃん、千歌ちゃんが死人の様な顔をしている。

「遠泳10km…。」

「ランニング15km…。」

「こんなの無理だよ…。死んじゃうよ……。」

この3人の絶句した表情の中、果南ちゃんが屋上からずっと手元にあるエスプレッダーを眺めながら

「まあ、何とかかなりそうね！」

と平然と答える。

「「えっ!?!」」

3人がまたもや絶句する中

「確かにやれない事は無いツスよね！」

と俺も果南ちゃんに同意する。

「はあ!？」

千歌ちゃんと善子ちゃんが冗談だろ?と言わんばかりの表情をしながら抗議するが、ストレイジでもこれに近いトレーニングはしている事から不可能では無いのも事実なのだ。

「そうそう!気合があれば全然出来るって!!」

と果南ちゃんも2人を励ます。

「熱いハートがあれば何でも出来ますわ!」

とダイヤさんも燃えている中、曜ちゃんがダイヤさんのテンションの高さに疑問を持つ。

「ずっと我慢していただけに今までの思いがシャイニーしたのかも。」

「ははは…。」

鞠莉さんの説明に梨子ちゃんが乾いた笑いを漏らす。まあ確かに、様々な事情があつて再開する事が出来なかったスクールアイドルを再びやれるのだ。テンションが高くなるのも分からなくは無い。

「何をゴチャゴチャと!さあ、今から外に出て始めますわよ!!」

皆外に出ると言わんばかりにドアを指差すダイヤさん。

「オッス！ん、今からオッスか!？」

俺は自分の携帯を確認する。現在の時刻は11時半、今日は13時からストレイジで特空機のシユミレーションと隊員達の格闘訓練がある事を思い出し、その旨を伝える。

「分かりましたわ！それでは特訓は明日から行います。大丈夫ですか？」

「オッス！それじゃあまた明日!!」

俺はダイヤさんに敬礼し彼女もノリノリで返したのを見てから駐輪場に向かいストレイジに向かった。

ハルキさんが部室を出たのを皮切りに曜さんが私、黒澤ダイヤに明日の特訓に出られない事を告げる。

「ダイヤさん、私と千歌ちゃんは明日の特訓には出られないんです…。ね？千歌ちゃん!」

「あ…、そうだった。自治会で出してる、海の家を手伝うように言われているのです!!」
揃って敬礼をする2人に便乗し、果南さんも参加は難しい事を伝えてきた。

「あつ、私もだ！ゴメンねダイヤ…。」

まさかの3人が抜ける事態に眉を顰める。

「そんなあ…。ハルキさんにも伝えたのですのに、特訓はどうするのですか?」

「残念ながら、そのスケジュールでは…。」

「勿論サボりたい訳では無く…。」

数秒の思考時間で考案した私の特訓プランに思わず自身の口角を上げ、その旨を伝えようとする。

「お姉ちゃん、顔が！顔が怖すぎるよ!!」

「そんな事はありませんわ！今回の特訓に全員が参加出来るように海の家での業務の間に「じゃあ…！」

私の素晴らしいプランの間に鞠莉さんが割って入る。

「昼は皆で海の家を手伝って、涼しいmorningとeveningに練習って事にすればいいんじゃない？」

「それ賛成ズラ！」

花丸さんが賛成していますがそれでは十分な練習時間が取れないと思い、私が意見しようとする…

「じゃあ夏休みだし、家で合宿にしない？」

「「「「「合宿？」」」」」」

千歌さんの提案に私達全員が疑問符を浮かべる。

「ほら、私の家は旅館でしょ？頼んで一部屋借りれば皆泊まれるし。」

このナイスな提案に曜さんや、果南さんも同意する。

「そっか！目の前が海だしね！」

「移動が無い分早朝と夕方、時間取って練習出来るもんね!!」

二人が互いに敬礼とサムズアップを返す中、この時期に急に泊まりに行つて大丈夫なのかと花丸さんが疑問に思うも

「何とかなるなる！」

と千歌さんが笑顔でVサインを作り合宿をする事が確定した。

「それでは明日の朝4時、海の家に集合ということ!!」

「えっ、4時?!」

集合時刻にギョツとする梨子さんに千歌さんが

「頑張つて起きよう!おー!!」

と拳を上げる。

今日はこれで解散する流れになり、そのまま部室を出ようとする、善子さんが床に落ちてある何かを拾う。

「この鍵…もしかしてハルキのじゃない？」

黒とシルバーの厳ついケースに付いてある鍵を見ながら呟く善子さん。

「今から戻つて来てもらうのも流石に難しいわよね…。シュミレーションつて1時か

らって言ってたし。」

「なら私が届けに行くわ。元々今日は買い物する予定だったし。」

と梨子さんが鍵を渡してと手を伸ばす。

「…、私もついて行きたいんだけどいい？運が良ければストレイジの中もまた見れるかもしれないし。」

善子さんの要望に梨子さんもOKをし、2人で足早にバス停に向かって行った。

俺、夏川ハルキはウインダムのシミュレーションを行いこれまで戦ってきた怪獣を仮想敵とした戦闘を行っている。

「くそー！ネロンガもエレキングもかなり手強い!!」

衝撃もかなりリアルに設定している為、シミュレーションでも実際の戦闘と遜色無い緊張感で訓練が出来る。

「バコン!!」

大きな衝撃と同時にコックピット内の電気が消え、画面に撃墜の二文字が映し出される。

「ヨウコ先輩ならもつと上手に立ち回れる筈なんだけどなあ…。」

ヨウコ先輩のシミュレーションを見た時には機体性能に頼りきりならず、怪獣を追い詰めていつていた。俺もZさんに極力頼る事無く戦っていかねばならないが、如せん特空機の操縦技術を上げなければ話にならない。

「(それに簡単に撃墜されるとA q o u r sの皆も心配するしな…)」

再度シミュレーションで戦う相手を設定する。今度はコツヴに設定し操縦桿を握り直した。

私、桜内梨子は善子ちゃんと一緒にストレイジに来ている。

「いらつしゃい!どうしたの?」

ハルキ君の先輩であるユカさんが要件を尋ねる。

「ハルキ君、家の鍵を部屋に置いたままにしている…。お昼からシミュレーションがあらみたいで届けに来たんです。」

ユカさんが「わざわざありがとうね!」と返し、ハルキ君の様子を見ていくかを聞く。と善子ちゃんが嬉しそうな顔をする。

「いいんですか!」

善子ちゃんの明るい笑顔にユカさんも

「直接渡してくれた方がハルキも喜ぶと思うしね。それに、特空機見たかったんでしょ？」

と、ユカさんに凶星を突かれた善子ちゃんはさつきまでの笑顔とは打って変わって顔をも真っ赤にしながらうろたえる。普段は厨二病のセリフを言うキャラなのに普段とちよつと違う反応を見る事ができ、可愛く感じてしまう私であった。

ストレイジの格納庫に特空機であるセブンガーとウインダムが佇んでおり、整備員がハルキ君に戦闘の指示を出す。

「よう！善子ちゃん、梨子ちゃん!!」

「こんにちはバコさん！うわあ…やつぱり特空機、大きくてカッコいいな!!んん？」

会釈を返す私を他所に、善子ちゃんはキラキラした目で特空機を見ながら4機のバラバラになっている機体についてバコさんに質問をする。

「ねえバコさん、あのロボットは…新型？」

バコさんも「気づいたか!」と言いながらバラバラになっている機体について説明をする。

「あの機体はコードネーム、キングジョー。善子ちゃん達が東京に行った時に鹵獲した奴でな。コイツを新型特空機として改造するんだよ。」

バコさんの説明に私も善子ちゃんも「おお!!」と驚嘆の声を上げる。あのロボットは

ハルキ君もウルトラマンZも苦戦したそうだし、仲間になればとても心強いんじゃないだろうか。整備員の一人がバコさんに現状報告をしこのロボットの性能を話している。

「いやあ、こんな重金属を使いながらウルトラマンと同等の機動性が出せるのは凄いなあ！」

「そうなんですか？」

私も少し興味が湧き整備員に尋ねる。

「そうだよ。頑丈さとスピードを兼ね備えた機体は今の技術で作るのは中々難しいからね。」

「制御系統も全く未知のテクノロジーだから…。防衛軍の上層部も目の色を変える訳だよ。」

2人の職員と話の花が咲くもそれを聞いたバコさんが少し不安な表情で「でもな…。」と口を開く。

「人間は欲が深い。この技術はまだ人類には早すぎるのかもしれない。」

この意味深な反論に私も不安になりそうになるがユカさんが明るくバコさんに言葉を返す。

「バコさん、産業革命や蒸気機関だつて当時の人類には早すぎたんですよ？でも文明はずっと豊かになってきたじゃないですか！だからこの技術もきつと未来の役に立てま

すよ。」

整備員も善子ちゃんも頷きバコさんも笑顔を見せる。

「そうだな…。そう願いたいね！」

そう言うのとバコさんは遅い昼食を取る為休憩に入った。

「ただ強い武器があるだけでも意味は無いんですね…。」

私はユカさんに先程のバコさんの不安について聞く。

「まあ、新しい物を作り出すっていうのは一歩間違えると兵器になるかもしれないからね。怪獣を倒す武器を作っているから説得力は余り無いかも知れないけど…。だからこそ、その兵器を正しく扱える様に技術者も研究者も、パイロットも日々研鑽しなくちゃいけないと思うんだ。ハルキも最近頑張ってるんだよ？夏祭り前に怪獣が出てきた日から、『出撃しても俺は簡単に撃墜されてしまうから少しでも練習したい』って言うて来て、ほぼ毎日シミュレーションしているし。」

「(夏祭り前って、ウルトラマンの正体が分かった日から…。)」

ハルキ君、ウルトラマンとして戦っているのに特空機のシミュレーションも頑張ってるんだ。いつも私達を守ってくれながら努力を惜しまず、自分と向き合っている…。

「(私はどうなんだろう…。)」

そう思った時、ユカさんから作戦室でコーヒーをご馳走してくれるとの事でハルキ君

のシユミレーションが終わるまで暫く待つ事にした。

「よっし、今日のシユミレーションも終わりつと！さっさと着替えて部室に忘れた鍵を…ん？」

私と、善子ちゃん、ユカさんが最近のスクールアイドルの近況について話をしていると独り言を言いながら作戦室にハルキ君が入ってきた。

「あれ、梨子ちゃんに善子ちゃん！どうしたんツスカ？」

この様子だとメールを見ていない事を確信した善子ちゃんは「メール見てないの？後、ヨハネよ！」とお決まりの返しを決める。

「部室に鍵を忘れていたから梨子と一緒に届けに来たの。はい！」

善子ちゃんが笑顔で鍵を渡し、ハルキ君も笑顔でお礼をする。

「わざわざありがとう！今日の部活はもう終わったんスね。」

「シユミレーションお疲れ様！明日の特訓の為に今日は早めに終わったのよ。」

私の特訓と言う言葉にユカさんと一緒にいたヨウコさんが同時に「特訓？」と疑問を投げかける。

「オッス！夏にラブライブの予備予選があつて明日からAqoursは特訓を行うんスよ！いやあ、テンション上がるなあ〜！」

まるで自分も特訓をする様な物言いをするハルキ君にヨウコさんが

「アンタはマネージャーでしょ？部員のサポートが役目じゃないの？」

と至極当然のツツコミをする。

「アハハ…。それじゃあ鍵も渡したしそろそろ帰るわね…。」

と善子ちゃんと一緒にストレイジを出ようとすると、ストレイジの隊長である蛇倉隊長が私達2人を呼び止める。

「ちよつと待て！2人共、この土砂降り」の状況で帰るのか？バスも当分来ないので…。」

「「え？」」

私達2人の声がハモリ、隊長が外の様子をモニターに映す。

「うわあ、凄い通り雨ツスね…。」

ハルキ君が絶句する程強い通り雨がアスファルトを叩く。それにバス停には傘も無く、これから1時間はバスも来ない状況に私達は雨宿りも込みでもう少し留まる事にした。

「レディ…ゴ…！」

善子ちゃんの掛け声と同時にヨウコさんとハルキ君が腕相撲をする中、私はユカさんの机にある小さなロボットのミニチュアを発見し何かを尋ねる。

「ユカさん、これ何です？」

「これ？キングジョーの前に候補に上げてた特空機。色々欠陥が発覚して没になったけど、データを処分するのは勿体ないし、グッズにして残してるの！」

その没案になった機体は何故か、怒り顔、笑い顔、泣き顔の3つの表情を三角柱に当てはめた奇つ怪なロボットであった。

「ガラオンって機体で3つの表情からビームを発射する支援型の特空機の予定だったんだけど、操作が複雑過ぎるから没に……。だから貯金箱にしてみたんだ。」

頭にコインを投入しそれを認識したガラオンがルーレットのように回転する。回転が止まり笑い顔の面が大爆笑するという、ちよつと怖い貯金箱だ。どうやらその感情の声を録音し登録するとランダムで笑い、泣き、怒りの声を出すらしい。

「まだまだあるよ〜！」

「あるんですか!？」

ユカさんがガラオン以外の候補も存在する事を告げ、ボツ案をさながら通販番組の様に出していく。今度はお腹にシャッターを付けた金色のロボットを出してきた。

「お次はこれ！クレイジーゴン!!戦闘後に出た瓦礫を回収しながら金属のみを分別する特空機。」

「最早防衛ロボットと関係無いじゃない!」

話に入ってきた善子ちゃんが思わずツツコむ。

「当然本来のストレイジの本懐と全く合っていないし、自己処理班もいるから没に。なので……」

「そう言うくとクレイジーゴンのお腹のシャッターを引き上げ地面に置く。」

「塵取りにしてみました。これはストレイジの掃除道具として一応採用されてます！」

これが採用されたのか……。このユカさんがゴリ押しして通したとしか思えない発言に眉を顰める私と善子ちゃん。

「ハルキ？この勝負にアンタが負けたらユカの没案の品を部室に持っていきな！これ以上作戦室に物が増えると困るんだよ！」

ヨウコさんとハルキ君の拮抗した勝負が続く中、彼女から賭けを要求される。

「上等ツスよ！なんなら今後ユカ先輩の没案の実験になってやりますよ？俺達Aqoursが！」

ハルキ君の口から出たAqoursが実験になるという言葉を聞いたヨウコ先輩がニヤリと笑い、力を段々と込め始める。

「ちよつと！ハルキ君頑張つて!!」

私の声援に答えるようにハルキ君も腕に力を込める。だが今までの拮抗した状況が嘘の様にハルキ君の右腕が逆方向に傾いていく。

「ハルキ！根性で何とかしなさい!! Aqoursの部室が怪獣地帯になっちゃうわよ？」

「ダイヤに怒られるわよ!」

「ちよつとプレッシャー掛けなくてくださいよ!!」

善子ちゃんの脅しも効果が無く、今尚逆転する兆しを感じられない。

「へえ、ダイヤちゃんに? そうなんだ。」

「くそう……ぬあああつ!!」

ハルキ君の気合も虚しく右腕が机に叩きつけられ…惨敗した!

「ぐあああつ!」

「終わった……」

ハルキ君の悶えている姿を目にしながら私と善子ちゃんの目が死んだ魚の様になつてしまう。

「腕がああ!」

「腕がああ! じゃ無いわよ! アンタ明日からの特訓絶対参加しなさいよ!! ランニング15kmと遠泳10kmやりなさいよ!!」

「ハルキ、そんな軟弱な腕じゃ怪獣を倒す事は出来ないよ……!」

したり顔で笑うヨウコさんの隣で、ハルキ君の頭を叩きながら善子ちゃんが怒りまくる。そんな中、ユカさんのグズ紹介はまだ続いていた。

「最後はこれ! 地中に潜む怪獣を撃退する、地中鮫ゲオザーク!」

「鮫!?!」

鮫というワードに善子ちゃんが反応する。「でも地中には地下鉄とかガス管なんかのライフラインが多い地域もあるから惜しくも没に。これの水中用も考えたんだけど今の技術では実用が難しくて…。だから寝袋にしてみました。」

一旦自分の机から離れ倉庫に行くと最近出来たであろう鮫の口から顔を出す寝袋を持ち出してきた。それもハルキ君も余裕で入る程の…。

「凄い!これは商品にしても全然良いんじゃないツスか!!これ曜ちゃんでも作れるか分からないツスね。」

腕を摩りながらハルキ君が感想を述べる中、善子ちゃんも「凄い!」と同意する。

「あのく、これはユカさんがここで寝る時に使うんです?」

「いや、ここでは寝ずに仕事する事が多いからね!」

それを聞いた善子ちゃんが

「これ譲ってください!」

とユカさんに申し出る。

「この凶悪そうな見た目と人が入った時のシニールさ!何より鮫!!めちやくちや欲しいです!!」

この鮫が好きな善子ちゃんにユカさんも二つ返事でゲオザーク寝袋を渡し、お互いご

満悦な顔をしていた。そんな中

「ファンファンファンファンファン!!」

と突然作戦室内にアラートが鳴り響く。

「ストレイジ内部に侵入者発見! 繰り返し! ストレイジ内部に侵入者発見!!」
と館内放送で状況が説明される。

「場所は…、エントランスか! ハルキ、ヨウコは至急応援に迎え!」

「了解!」

「オッス!」

ヨウコさんとハルキ君は返事をし作戦室を飛び出す。

「梨子ちゃんと善子ちゃんはここに居て、俺達の指示に従ってくれ。」

私達2人は不安な顔で頷く事しか出来なかった。

俺、夏川ハルキは侵入者が潜んでいるであろうエントランスにヨウコ先輩と居るが見たところ何が隠れている様子は見られない。

「ハルキ、そこに整備員が!」

ヨウコ先輩が整備員が倒れているのを発見し、俺達は状態を確認する。

「良かった…。全員息があるし見たところ外傷も無いみたいツス。」

「分かった…。アンタは全員を安全な場所に避難させて…。それまでは私が周囲を見ておく。」

俺は「オツス。」と短く返事をし整備員3人をエントランスの曲がり角に避難をさせる。

「ううっ…。」

全員を避難し終わる際、整備員の1人が意識を取り戻す。

「大丈夫ですか？しっかり！」

整備員は虚ろな目で唇を必死に動かし何かを伝えている。俺は唇に耳を近づけその言葉を聞くも…

「バロ…、バロ…。」

と譚言の様に言葉を発している。彼らを襲った、何かの鳴き声なのだろうか…。そう思いながらヨウコ先輩と合流した時、彼女の隣に未知の生物の背中があった！

「…おい！お前は誰だ？」

グレーの肌金色の渦巻き状の装飾を付け、青白く光る目玉をした宇宙人がヨウコ先輩の頭を鷲掴みにしていた。

「下等動物の言語を話す声帯は持ち合わせていない。我が名はバロツサ星人。お前達が

回収したロボット、キングジョーは我が宇宙船だ。返して貰おう。」

ヨウコ先輩の声で自分の名前と、ここに侵入した目的を話すバロツサ星人。あの掴んでいる手でヨウコ先輩に言わしているのか…。

「ヨウコ先輩を離せ！」

俺がライフルを向けると、バロツサ星人はヨウコ先輩を物か何かの様に雑に投げ捨てる。俺はヨウコ先輩を受け止め、ライフルを再度構え直すもバロツサ星人は視界から姿を消し、後ろから俺の襟を掴み放り投げた！

「くそっ！」

俺は素早く立ち上がり反撃に出ようとすも『待てハルキ、俺が代わろう！』と乙さんがテレパシーを送る。俺は手に持った乙ライザーで変身をし、バロツサ星人を見据える。

『奴はバロツサ星人。銀河中で破壊と略奪を繰り返し、奪った武器を自分の力として使うウルトラヤバイ海賊宇宙人だ！』

乙さんとバロツサ星人が構えを取り距離を詰める。人間サイズでの戦闘はウルトラマンである乙さんにとってかなり負担になる為、1分間が限界だ。時間がいつも以上に短い中戦が始まる。

“シユワツ！”

最初に乙さんが飛び蹴りを放つもバロツサ星人はあつさりと後を取り、何処からか取り出したのか大きな大刀を持ちながら袈裟斬りにしようとする。攻撃を回避した乙さんが反撃を繰り出そうとするも、星人は空いた手で歌舞伎の様な構えを取りながらこちらの間合いを詰めるのを拒んでくる。

「ジュワッ！」

構わず乙さんは回し蹴りを繰り出すも間合いを詰められ密着状態になり、有効打が与えられないでいた。

「キアアッ！」

バロツサ星人は足蹴りで間合いを離すと同時に大刀を振り下ろし乙さんは胸に刀傷を負う。その時、星人はマントを取り出し姿を消してしまった…。

「消えた？」

『今のは怪獣サータンの毛で覆った透明マントだ！気をつける…。』

俺も気を引き締め辺りを警戒するも後ろから蹴りを食らった事で壁に激突してしまい、変身が強制的に解けてしまった。

「ぐっ……。あつ！」

痛みに顔を歪ませながら周囲を見渡し、何かをズルズルと引きずる音に俺は耳を傾ける。

「ヨウコ先輩！」

今の状況では追うことが出来ない俺は作戦室に現状と敵の目的を知らせる。

「こちらハルキ！敵の狙いは…キンググジョーです！奴は姿を消して基地内に潜伏しています。ヨウコ先輩も攫われました!!」

私、津島善子はハルキからの通信を聞き、身を強張らせている。

「ユカ、俺はハルキと合流する。お前は梨子ちゃんと善子ちゃんの安全を第一に考えながら、敵の解析をしてくれ！」

ユカさんは全体に警戒態勢を取る為のアナウンスを流し、私達を後に下がらせながらパソコンを見ながら辺りを警戒する。

「重力波が大きく歪んでる…。この物質は何なの？」

何か腑に落ちない事があるのか数秒考えるユカさん…。その時！

「あつ！ヨウコさん!!」

梨子が作戦室に入ってきたヨウコさんに声をかける。

「大丈夫…？」

様子がおかしく目が虚ろなヨウコさん。そして体勢も何処か違和感を感じた私は思

わず

「……、何か…居るの？」

と口にする。その言葉に反応するかの様にヨウコさんから

「感の良い娘だな……。」

と抑揚の無い言葉を告げられ後から金色の渦巻き模様の宇宙人が顔を出した！

「ヒッ!!」

涙目で声を上げる私を他所に宇宙人はヨウコさんを使って交渉を凶ってくる。

「この女の命が惜しければキングジョーを返せ…。」

「…嫌よ。」

ユカさんが星人の思い通りにさせない為に要求を拒否するも

「少しでも力を入れると、コイツの頭は簡単に潰れる。地球にある林檎という果実の様

にな…。」

そう言いながらヨウコさんの頭に手を置き力を入れると彼女の顔が苦痛に歪んでゆ

く。

「お願い!!死にたくない!!!私がどうなっても良いの!!!」

「嫌っ!!」

「……うっ!!」

メリメリと不快な音を立てながらヨウコさんに言葉を言わす星人の残酷過ぎる行為に私と梨子は恐怖から目を背ける。

「もう止めて!!言う事聞くから…。」

ヨウコさんの苦痛に悶える声を聞いたユカさんが条件を飲み、キングジョーのプログラムを起動させる。

「ご苦労だった、下等動物…。もう用は無い!」

ヨウコさんを開放し自身の手にある大刀を振り上げた!!

「クッ!」

ユカさんが私と梨子を突き飛ばし斬り殺されるのを身を挺して庇おうとする!だが、どれだけ経つても肉を切り裂く音も痛みで叫ぶ絶叫も無い中、梨子が私の背中を叩く。

「善子ちゃん!見て!!死んでない!!」

気でも狂ったのかと思いつながら私は恐る恐る目を見開く。そこには!

「人の縄張りを荒らすんじゃないよ…。」

ハルキとZの正体を始めて知った時に居たあの怪人が居た!!怪人は日本刀の様な刀を使い、罅迫り合いをしながら私達との距離を引き離す。以前見た時はハルキのライザーを奪っていた筈なのに今回は私達を助けている。

「貴方は…?」

ユカさんが怪人に尋ねるも

「誰でもいい……。小娘共を連れてさっさと逃げろ！」

と手短かに告げ、星人と交戦を始めた！

「ヨウコ先輩！皆！！」

ハルキも合流しヨウコさんを抱えて作戦室の入り口に誘導する。

「お前…、トゲトゲ星人！！」

ハルキがああ怪人に眩くもユカさんから

「急いでキングジョーを止めて！電源を止めたらまだ間に合う！！」

と言伝てを預かりアイツは弾かれた様に格納庫に向った！

第25話 シヤイ煮はじめました／宇宙海賊登場 中編

俺、夏川ハルキはユカ先輩の指示でストレイジの格納庫に到着した。

「バロツサ星人は見た所居ないな…。」

目視での姿は確認出来ないものの、Zさんが言っていた透明マントを奴が所持している以上、気を緩める事は許されない。キングジョーの電源を強制的に遮断する様、バコさんにその旨を伝える。

「よう…。無事に電源は切れたみたいだな。」

声のした方向に持っていたライフルの銃口を向けた先には、先程助けてくれたトゲの星人が刀を引きずりながら近づいていた。

「また出たなトゲトゲ星人！」

唐突に現れてくるコイツにも油断は出来ない。そして俺の正体を知っている以上、いつ手に持った凶刃を振り下ろすかも分からないのだが星人はほくそ笑みながら

「変な名前で呼ぶな…。」

と静かな口調で返される。

「…お前は敵なのか？それとも味方なのか？」

敵なら俺達を助ける事をしなくても良かった筈だ。

「敵か味方かは時と場合による。」

俺達の今の状況は奴にとって都合が良い為、敢えて手を出さないという事なのだろうか。そう思う中、トゲトゲ星人は自身の左人差し指を俺に見せてくる。

「愚か者は指を見る。賢い奴は…?」

「は…?」

何かの謎掛けだろうか?と一瞬思考が停止した俺に「ハルキ!上よ!!」と階段からヨウコ先輩が声を上げる。

「キアアツ!!」

天井に張り付いていたバロツサ星人が俺に向かって刀を振り下ろして来る!!

「チツ!!」

俺は間一髪、回避をしたが追撃で腹部を蹴り飛ばされてしまった。

「ハルキ」君!」

善子ちゃん和梨子ちゃんが身を案じて叫ぶ中、ヨウコ先輩がライフルをバロツサ星人に向けて射撃をしようとする。

「駄目だヨウコ先輩!今撃ったら皆が回避出来ない!!」

ここでバロツサ星人を狙撃してもきつと回避される。その上で階段に飛び上がられ

たら先輩も民間人である善子ちゃんと梨子ちゃんも確実に斬られてしまう！

「くそっ！」

俺達はバロツサ星人がキングジョーの電源を入れる所を見ている事しか出来ず、あまつさえそのスイッチが壊されてしまった。

「アイツ好き勝手しやがって！バコさん、バロツサ星人にスイッチが壊されました。電源停止不能です!!」

俺はバコさんに状況を報告し、ヨウコ先輩と共にキングジョーの下に向かっていったバロツサ星人を追って駆け出した。

通信を聞きながら、キングジョーの現状を走りながら整理している。充填率が増しながら上腕部のパーツが合体している。あのロボットは4つのパーツで構成されている。バロツサ星人は合体したキングジョーで逃亡か、最悪この基地を破壊する可能性も考えると俺達に残された時間はもう殆ど無い！

「うっ！」

「ヨウコ先輩?!」

一緒に走っているヨウコ先輩が腕を押さえて蹲る。どうやらバロツサ星人に放り投げられた際に打ちどころが悪く腕を負傷したのだろう。その状態で皆を守る為ライフ

ルを構え続けていたのだが限界が来たみたいだ…。

「ハルキ、アンタは奴を追って！急いで!!」

ここで身を案じる事を今の先輩は望んでいない…。俺は一度領きバロツサ星人を再び追い始めた!

「こちら整備班、現在バロツサ星人に襲撃されてます。負傷者も多数出て班長もやられました!!」

整備員からの通信が入り事態は尚最悪な状況に傾いている。俺が整備員と合流した時には起動したキングジョーの足元で銃を構えたバロツサ星人が勝ち誇った様に笑い声を上げる。

「そうだ…。おい、バロツサ星人!」

「バコさん!? 一体何を…?」

左腕を負傷したバコさんが銀色の箱を持ってバロツサ星人の元に歩いていく。

「これ何だか分かるか?」

「バロ…?」

「これは最終ロック装置だ!これを解除しないとキングジョーは動かない。」

それを聞いたバロツサ星人は途端にキングジョーとの距離を離し、バコさんに向かって歩を進めていく。

「ホラ、ホラホラ……ホラっ!!」

バコさんが放り投げた最終ロック装置をバロツサ星人はダツシユで駆け出しながら拾い上げる。そして中身を確認し、スイッチを押そうとするが……。

「バロロ??」

不思議そうに首を傾げるバロツサ星人にバコさんが手に持った水筒のお茶をぶち撒けた!

「残念、それは俺の昼飯だ!!やれハルキ!!」

バコさんがくれた最後のチャンスを逃しはしない!俺は重機を機動させるコンセン
トを引っこ抜きお茶が滴るコンクリートに向けて突き刺した!!

「チエストロー!!」

高圧電流が一瞬にしてバロツサ星人に辿り着きその体之感電させる!!

「バロバロバロバロ……!」

電撃で悶えながらも逃走を図るバロツサ星人を追う為俺も外に駆け出した。
「待て!!」

逃走する中何かがチャリンと落ちる音が聞こえたがその時の俺は気に止める余裕は
微塵も無かった。

外に出たバロッサ星人は巨大化し自身が所持している大量の武器を地面に突き刺しその内の一振りの刀を担ぎながらストレイジ基地を見据えている。

「あの大量の武器でストレイジを破壊させる気か……。行きますよ乙さん!!」

俺はゼットライザーのスイッチを押し、ウルトラの空間に飛び込む。

「変幻自在、神秘の光! ティガ先輩、ダイナ先輩、ガイア先輩!!」

多くの武器や道具を使うバロッサ星人に対抗する為俺は先輩達のメダルをセットする。

『ご唱和ください我の名を! ウルトラマンZ (ゼーラット)!!』

「ウルトラマンZ (ゼーラット)!!」

変身した俺達はゼットライザーを構えバロッサ星人と向かい合う。互いに距離を詰め攻撃を仕掛けるも斬撃を与えられない状況が何度か続き、俺達は光の魔法陣を使用しバロッサ星人の刀をライザーで払い落とす!

「バロ!?!」

完全に虚を突かれたバロッサ星人は地面に突き刺した武器という武器を持ち攻撃を仕掛ける。だが……

「付け焼き刃で覚えた武術が簡単に通じる訳が無いんだよ!」

間合いに入った瞬間に回し蹴りを叩き込み星人の武器を今度は素手でへし折った!

「チエストー！」

背負い投げの要領でバロツサ星人を投げ飛ばし反撃に対する様に俺達は構えを崩さない。だが星人は予想もしなかった行動に出た！

「バロ！バロツ！バロバロ！！」

何とバロツサ星人は地面にある砂や砂利を掴み俺達に向かって投げつけて来た。

『コイツ！卑怯な手を…!!』

ピンポイントで目を狙われ俺達が悶える中、手に装着する槍を持ったバロツサ星人が突撃してくる。

「マズイー！」

蛇倉隊長との稽古で培った、気配を頼りに対応する技術を活かし槍の刺突を回避し、建設途中の施設に深々と刺さった。反撃をする為、バロツサ星人は槍を引き抜こうとするも施設を構成しているコンクリートや鉄板が引つ掛かったのか抜けないでいる。ここがチャンスと思いい俺達が拳を叩き込もうと間合いを詰めた瞬間バロツサ星人の左掌が眼前に写り、そのまま掌を回転させ俺達は目を回してしまふ。

「ジュワツツ…。」

視線を離れた隙に槍を引き抜いたバロツサ星人は俺達を蹴り飛ばし、馬乗りになりながらマウントポジションを取る。

「バロバロバロツ!!」

俺達の反撃を許さず、槍を叩きつけるバロツサ星人の前に胸のカラータイマーが点滅を始める。時間が許されず活路を開く事もままならない中

「Z様〜!!」

とヨウコ先輩の声が木霊した。

私、桜内梨子はストレイジから脱出したバロツサ星人が何かを落としたのを発見し、ユカさんがこれをパソコンで解析している。

「このメダル……」

ウルトラマンのメダルが描かれた3枚のメダルを解析するユカさん。

「重力波に干渉する物質……。原因はこれだったのね!」

作戦室での疑問が晴れたのか笑みを浮かべるユカさんの横から、ヨウコさんがメダルを持ち出し外に出ようとする。

「ヨウコ、何処行くの!?!」

「Z様に渡すのよ……ううっ!!」

メダルを渡す為走り出そうとするヨウコさんだが腕の痛みが引いていないらしく、

蹲ってしまおう。

「ヨウコさん、肩貸しますよ。このメダル、ウルトラマンに渡すんですよ?」

頷くヨウコ先輩の身体を支え二人で一緒にストレイジを出た。

外を出た時、ウルトラマンZはバロッサ星人に馬乗りになれ手に持った槍で叩きつけられている。

「Z様〜!これを使ってください!!」

私の肩に掴まりながらメダルを投げそれをウルトラマンZは見事キャッチした!

俺、夏川ハルキとZさんは槍を振り上げたバロッサ星人を蹴り飛ばしヨウコ先輩から受け取った3枚のメダルを確認する。マン兄さんの顔に良く似た2枚のメダルと大きな角が特徴的なウルトラマンのメダルが手元にあった。

「このメダルは…?」

『ジャック兄さん、ゾフィー兄さん、ウルトラの父のメダルだ!斬撃を強化する力がある。行くぞハルキ!!』

俺達は早速ゼットライザーに、この3枚のメダルをジャック兄さん、ゾフィー兄さん、ウルトラの父の順にセットした。

「チェストー!」その時、ゼットライザーの中心から光の刃が生成され再び刺突をしよう

としたバロツサ星人の槍を払い落とす！斬撃を繰り出し十分に互いの間合いを取った俺達は腕を目の前で回転させ竜巻を発生させる。

『M70竜巻閃光斬!!』

巨大な竜巻に飲み込まれた宙に飛んだバロツサ星人を、今度はリング状の刃で細切れにする。

『バロバロバロバロバロバロバロツサー』

爆発し戦いを終えた俺達はヨウコ先輩と梨子ちゃんにアイコンタクトをし、通り雨が去った青空に飛翔した。

「よっしやあー……そういえばあの海賊野郎、最期に何て言ってたんツスか？」

バロツサ星人の断末魔に疑問を持った俺はZさんに通訳を頼む。

『俺の弟達がきつと仇を討つ……だとさ。』

「海賊宇宙人なんかに負けないツスよ！何人でもかかってこい!!」

この新しいメダルと技で返り討ちにしてやろうと意気込む俺にZさんが言いにくそうに声を掛ける。

『ハルキ……、バロツサ星人は一度に卵を1万個産む。つまり弟は9999人居るって事だ……。』

訂正、やっぱりもう来ないで欲しいと掌を即効で返す俺だった。

戦いが終わり負傷者の手当も終わった格納庫でストレイジのメンバーが小休憩しながらパソコンを操作している。

「お疲れ様ツス。ヨウコ先輩もバコさんも大丈夫なんスか？」

「まあね…。梨子ちゃんが肩貸してくれたお陰でZ様にメダルを渡す事も出来たし、ありがとうね！」

ヨウコ先輩がお礼を言う中、はにかむ梨子ちゃんに俺も笑みを浮かべる。あのメダルが無ければ勝てなかったかもしれないし…。

「善子ちゃんが応急手当をしてくれたから俺も助かったよ…。他の隊員の手当もしてくれてありがとうな!!」

「フフツ、墮天使の治療能力を持つてすればこの程度、雑作も無い！」

バコさんのお礼に墮天使モードで返す善子ちゃんに皆が笑う中、俺やヨウコ先輩にこのキンググジョーを乗りこなせるか？とバコさんが質問をする。

「防衛ロボットを生かすも殺すもパイロットの腕次第だ。コイツは機動性、攻撃力も耐久力もセブンガーやウインダムと桁違いの性能になるだろうしな！」

その期待に答える為俺とヨウコ先輩は敬礼をしながら返事をする。

「ハルキ、今日は良くやった。特別に明日から3日間休みを取れ。A q o u r s のマ

ネージャーとしての仕事をしっかりやれよ。」

定時報告も忘れずにな、と蛇倉隊長から直々に休みを貰いお礼を言う俺にメンバー2人が笑う。その後ろでうっとりとした表情でダブルレットを眺めるユカ先輩にヨウコ先輩が「何見てんの？」と声を掛ける。

「画面の宇宙人様…素敵！解剖したい!!」

「ブツ!!!」

恍惚な表情でサイコな事を言うユカ先輩に俺に休暇命令を下しコーヒーを飲んでい
た蛇倉隊長が勢いよくそれを吹き出した！

「今日は何かすんません。鍵を届けに来てくれたのに宇宙人の騒動に巻き込んで怖い思
いをさせてしまっ…。」

ストレイジを出て近くのバス停にあるベンチに座っている2人に謝るも、梨子ちゃん
と善子ちゃんは「気にして無いよ。」と笑顔で返す。

「アンタは大丈夫なの？あの星人に思いつきりお腹蹴られてたじゃない。」

バロツサ星人の蹴りで若干痣が出来ていたがそこまで重症な訳では無く運動や出撃
には支障が無い事を伝える。

「なら良いけど、特訓の時は余り無理しない様にね。きつと隊長も、ハルキ君の体の事を

分かって休みを取らしたと思うし……。」

「オツス！無理の無い範囲で特訓はやりませよ。」

そう言うのと俺の腹が大きな音を立てて鳴り、この際一緒に昼飯を食べないかと提案をする。

「迷惑を掛けたお詫びもしたいし、沼津で一緒に何か食べませんか？」

「だから迷惑じゃ……、まあ私達も食べて無かったし一緒に食べようか。所で善子ちゃんはこの寝袋どうやって持って帰るの？」

「確かに、このまま担ぎながら店に入るのもね……。」

2人がゲオザーク寝袋をどうするか悩んでいるが、善子ちゃんをバイクの後ろに乗せ、彼女の家に荷物を置いてから沼津で食べることを提案する。

「ありがとう！流石私のリトルデーモン!!」

「こくら！調子に乗らないの。」

いつもの善子ちゃんのセリフに梨子ちゃんがツツコミ、一旦彼女の家を目指すべく別行動を取った。

その後たらふく昼食を食べた俺達はゲームセンターで時間を潰し夕方になると梨子ちゃんをバイクに乗せて家まで送る事に。明日は一応、ダイヤさんの指示で朝4時に浜辺に集合と梨子ちゃんからの言伝てを受けそれぞれの家路に着いた。

「明日から忙しくなるな…。」

俺の眩きにZさんもテレパシーで

『ウルトラシャイニーな特訓になるでございますよ!』

と鞠莉さんの様な言葉になったのを内心ツツコミながら普段より早く眠りについたのであった。

第26話 シヤイ煮はじめました／登場宇宙海賊 後編

快晴の空の下私、高海千歌とAqoursのメンバーは特訓と言う名の海水浴を楽しんでいた。

「晴れた〜!」

「眩し〜い!!」

ダイブする私と曜ちゃん、そして一足先に果南ちゃんがサーフィンをしている。

“バコツ!!”

「ぐっ……!」

水面から顔を出した私に鞠莉ちゃんのビーチボールが炸裂する。

「やったな〜!」

私も仕返しと言わんばかりにビーチボールを投げ返す。

「フツフツフツ……。そんなスローボールじゃ私を捉える事は出来ま「あつ! 果南ちゃん

!?!?!」

勝ち誇る鞠莉ちゃんの気を反らしボールでは無く海水を思いつきりぶっ掛けた!!

「アウチ!!」

転倒する鞠莉さんに

「梨子ちゃ〜くん！ハルキ君〜!!」

水着に着替えた梨子ちゃんとハルキ君も砂浜でジュースを飲みながら私達の様子を見ながら手を振っている。

「zzzz……。」

片やルビイちゃんは浮き輪の上で波に漂いながら気持ち良さそうに寝ている。

「いひひっ……。よーしー!」

曜ちゃんが何か悪戯を思いついたのか口元をニヤリと歪ませ海中に潜り爆睡しているルビイちゃんの脇腹を思いつきり擦った。

「ピギツ！アハハハハツ!!」

突然の刺激にパニックになったルビイちゃんは爆笑しながら転覆し曜ちゃんが救助してあげる。だが…

「曜ちゃん……!!」

今までの大人しい性格のルビイちゃんからは想像も出来ない程の剣幕で曜ちゃんを睨みつける。

「ヒッ……。じゃ、じゃあね!」

若干青ざめた曜ちゃんが脱兎の如く逃げ出しそれをルビイちゃんが追いかけるとい

う珍しすぎる光景を私達は只々見ていた。

「ルビイちゃん、怒ると怖いツスね…。」

俺、夏川ハルキは普段からは想像出来ないルビイちゃんの様子に若干引いていた。

「……ルビイは普段大人しいのですけど昼寝を邪魔されるのが何よりも嫌いなんですの。」

まあ昼寝中にあんな事されたら確かにブチ切れそうになるのも分からなくもない。そんな事を思いながら俺は首に掛けてあるインカムを使い一先ずストレイジに定時報告をする事にした。

「こちらハルキ！空も快晴で浜辺は人で賑わい、千歌ちゃん達は海を楽しんでいます。今の所異変は確認出来ません。」

「こちら蛇倉…。ストレイジでも怪獣出現の報告は確認されてない。引き続き警戒をしながら、はしやぎ過ぎない程度に合宿をしてくれ。」

俺は「オツス」と返事をし、通信を切ろうとするも花丸ちゃんがインカムをじつと見つめている事もあり、彼女に渡してみる。

「もしもし、こちらAqoursの花丸ズラ!!」

「うおつ、ビックリした！はいはい、こちら蛇倉。合宿は楽しんでますか？」

ノリノリで返す蛇倉隊長に「はいーズラ！」と答える花丸ちゃん。

「ズラ丸、パス！こちらヨハ…、善子です。昨日は色々ありがとうございます！」

【善子ちゃん、もう墮天使隠さなくても良いんじゃないか？皆から好評だぞ。まあ、昨日は怖い思いをさせてすまなかつたな。】

蛇倉隊長の改めての謝罪に今度は梨子ちゃんが答える

「いいえ、こちらこそ守って下さってありがとうございます。おかげで無事に合宿に参加出来ましたから…。ハルキ君なんて今までサングラス掛けてジューズ飲んでましたよ！ドヤ顔で。」

「梨子ちゃん!!」

しれっと俺の現状までも報告する梨子ちゃんとインカムからヨウコ先輩とユカ先輩の笑い声が聞こえる。

【ハルキ、あんた何やってんの!?!】

【そうよ！梨子ちゃん善子ちゃん、ハルキが女の子を嫌らしい目で見てたらすぐに報告してね。】

「そんな事する訳無いツスよ！」

俺が全力で否定するのを他所にダイヤさんを含む砂浜にいるAquoursのメン

バーが爆笑する。

「了解しました。昨日ユカさんから貰ったガラオンの貯金箱、合宿で使わせてもらいます。善子ちゃんも今日はゲオザークの寝袋担いで持ってきましたよ。」

「ちよつと！別に言わなくてもいいでしょ!？」

「2人共ありがとう。じゃあハルキ、忘れずに定時報告をするようにね!」

今度こそ通信が終了し定時報告を終えたがダイヤさんが今のメンバー全員の様子を見て半ば予想してたかの様に口を開く。

「今更言うのも何ですが、結局遊んでばかりですわね。」

「ハハハ…。まあこんな絶好の海日和に遊ぶなって言うのも無理な話しツスよ。多分…。」

そんな中、ダイヤさんを見ながら花丸ちゃんが冷めた目で

「ダイヤさんが言った様に、朝4時に来たらマルとハルキ君以外誰も居なかったズラ…………。」

俺は一応誰かが来ても良いように浜辺に来てたが、まさか本当に1人来てると思ってもいなかったからビックリした。

「当つたり前よ！4時から特訓とか無理に決まってるじゃない。私達が全員揃ったの9時半よ!」

善子ちゃんがビーチパラソルの下で至極当然の事を言う。

「梨子ちゃんも、まあ予想してたツスけどやっぱり来て無かったツスよね。しかも集まった時にはドベだったし…。」

「だってこの真夏に早起きするのなんて普段の練習以外じゃ不可能でしょ!?!でもハルキ君と花丸ちゃん、4時から何して暇を潰してたの?」

真冬でも同じ様な言い訳をしそうな梨子ちゃんが俺達2人が何をやってたのかを聞く。

朝4時から何をしていたかは俺、ウルトラマンZが回想をする。

「いやあー今日からAqoursの合宿!楽しみツスね〜。」

まだ午前3時、月明かりが照らされる中ハルキがテンションを上げて着替えをしていく。

『ハルキ、本当に行くのか?まだ誰も人が居ないと思うんだが…。』

昨日の梨子からは4時に集合との事だったが誰も来ない気がするのはウルトラマンである俺でも簡単に予想が出来る。バロッサ星人に蹴られた箇所は俺と一体化している影響もあるから大事にはなっていない筈だが…。

「いやいやZさん、あり得ないツスけど本当に誰かがいて一人ぼっちだったららせつかく

の合宿なのに気分が良くないじゃないツスカ。それに…」

そう言いながらハルキは押入れから大きな箱と持ち運び用の椅子を用意し、箱の中身を確認する。

「最近めつきり使って無かったツスカからね。久しぶりにやりたいんですよ、釣り。」

立派な釣り竿を取り出しA q o u r sの曲を鼻歌で歌いながら点検をする。本命はこつちでありましたか…。

「さて、準備も出来たしこれから海釣りに出発ツスよZさん!!」

『お、おう…。』

そして誰も居ない浜辺に到着し、端にある船着き場に椅子を置き腰掛ける。

「さて、何が釣れるかな。でもそのまま海に返すんすけどね。」

分からん、何故そんな無駄な行為をするのか…。地球の娯楽はウルトラ難しいと思つた中、俺は浜辺にポツンと誰かが立ち尽くしているのを発見する。

『ハルキ、ハルキ…。誰かがいるぞ!』

「まさか…:本当に誰か来たんツスカ。まだ時計を見ても4時過ぎツスよ!」

俺は浜辺の人影を凝視しその人物を確認する。その人は俺達が良く知っているあの子だった!

『あれは、花丸じゃないか!』

「?お!?!」

ハルキは釣り竿が落ちないように箱と椅子で固定し、ダッシュで花丸の元に駆けつける。

「ちよちよちよ!!」

「あつ、ハルキ君!良かったズラ。ハルキ君だけはちゃんと来てくれたズラね〜!!」
歓喜余つて飛びつく花丸をハルキが宥めながら取り敢えず自分が羽織っている服を彼女に一枚着させてあげるウルトライケメンっぷりを発揮させ、朝日が登るまで一緒に海釣りをする事にした。

「そうだハルキ君、東京で善子ちゃんとしていたカードのやつ、どうやって遊ぶのか気になるズラけど…。」

「えつ、あれツスカ?」

そういうえば東京で善子、淡島では果南と、十千万では千歌とゲームをしていたが地球の娯楽の一つなのだろうか…?」

「良かったら簡単にルール教えるツスよ。」

「本当に!?!善子ちゃんがやってたのを見てちよつと気になって。」

一旦花丸に竿を預けカードデッキを何個か取りに戻ったハルキ。そして花丸と再度合流した後朝飯を食べ終わる頃には、粗方のルールを彼女はあつという間に物にしたの

だった。

「あれをたつた4時間前後でざっくりと理解したの…!？」

善子ちゃんの絶句を聞きながら俺、夏川ハルキは花丸ちゃんの頭に手を置きながら彼女を褒めまくる。

「ハルキ君からカードデツキも譲って貰ったズラ。多分売っても大した値段にはならないからって。」

「俺もビックリしたツスよ。花丸ちゃんダンスもそうツスけど、飲み込みが早いツスね！」

基本的なルールを覚えながら魚をキャッチアンドリリースするを繰り返し、有意義な時間を過ごせたとは思う。実際俺も何回か負けてしまう位、花丸ちゃんもデツキを回せる様にはなつたのではないだろうか。

「ゴホン…。まあ特訓は後からちゃんとするとして、それより手伝いは午後からという事でしたよね？確か……。」

ダイヤさんが話を強引に戻し、店の手伝いの話を切り出すも…

「はて、そのお店は何処ですの!？」

辺りをキョロキョロ見渡し店を探す。このポンコツ感漂う動作に俺は笑いを堪えるのが精一杯であった。

「現実を見るズラ！」

「えっ!？」

「アツハツハツハ ヲバキツ!!」 痛って!!」

花丸ちゃんの一括を気の抜けた声で返すダイヤさんについて爆笑してしまい、彼女から渾身の蹴りをお見舞いされる。

「ほりよほりよ (ポロポロ) ∴。ル、ルビイちゃん本当に止めて!アハハハハハツ!!」

漸く捕まえた曜ちゃんは果南ちゃんに羽交い締めになれながら、ほっぺたを軽く引つ張られ間抜けな顔をしている。そんな中、ルビイちゃんからお返しと言わんばかりに脇腹を揉まれたり突つ突かれたりしながら擦られている酷い有様だった。

「これは今から外装を何とかしないと間に合わないじゃ∴。」

「そうですね。それに比べて隣は∴。」

果南ちゃんとルビイちゃんの眩きはご最もであり、隣はゴージャスに飾り付けられた店内で美味しそうな焼きそばやカレーをお客が食べて昼食を楽しんでいる。俺達の所は内装は座敷もあり簡単に掃除をすれば営業は出来るが如何せん外観が潰れかけた店の様な有様であり、ダイヤさんが現実から目を背けたくなるのも分からなくも無い。

「隣は都会ズラ〜！」

「ダメですわ…。」

歓喜する花丸ちゃん、項垂れるダイヤさんに活を入れるように

「都会の軍門に下るのデースか？」

鞠莉さんがドヤ顔でライブ店を指差す。

「私達はラブライブの決勝を目指しているのでしょうか？あんなチャライ店にツ！負ける訳にはいかないわ!!」

そうだった！俺達はラブライブを目指す為に特訓をするんだった。ここでくじけていたら何も出来ない。

「鞠莉さん…！貴女の言う通りですわ!!」

「つしやー!!やる気がウルトラ出てきましたよ!!!」

ダイヤさんと俺のテンションが最高潮に達し、二人でクロスタッチを交わす。

「テヘペロ!!」

俺からは見えなかったが鞠莉さんが海に浸かっているメンバーにウインクしながら舌を可愛く出していた。

「これ…何？」

私、桜内梨子はダイヤさんから渡された長方形の箱に千歌ちゃんと一緒に1つづつ入っている。

「それでこの海の家にお客を呼ぶのですわ！聞けば去年も売り上げで隣に負けていたそうではありませんか。今年は私達が救世主となるのですッ!!」

「きゅ…救世主!!」

屋根の上でふんぞり返っているダイヤさんの「救世主」と言うワードに私達2人の声ハモる中、店内の掃除と外観のリフォームを終えたハルキ君が私達に合流した。

「な…何スカ2人共、そんなガラオンみたいな格好をして。」

キョトンとする千歌ちゃんにハルキ君が店内のレジ横に置いてあるユカさんお手性の貯金箱を見せる。

「ホントだ…。私達の側面4つだけだ。」

「ダイヤ、どうしてこんなに熱くなってるの…?」

「ちよつと昔色々あつて…。」

善子ちゃんのダイヤさんに対する疑問にルビイちゃんが深堀すると言わんばかりに話をはぐらかす中、ダイヤさんが屋根から大ジャンプをして果南さんに詰め寄る。

「さあ、果南さんとハルキさんはこのチラシを！商売もスクールアイドルも大切なのは

宣伝!!」

ダイヤさんが果南さんに宣伝用のチラシを押し当てる。押し当てるのは良いが胸に当てないでください。ハルキ君がチラ見してるから…。

「ハルキさんのバツキバキに割れた腹筋と貴女のそのグツラ〜マラスな水着姿でお客様を引き寄せるのですわ!他の砂利共では女の魅力に欠けますので。」

おっさん臭いセリフを言うダイヤさんに若干引き気味な果南さん。

「なんか顔が怖いんだけど…。」

果南さんの正直な感想と千歌ちゃんの「砂利つてなあに?」の疑問に

「知らない方が良いと思う…。」

と答える私。

「果南ちゃんとは真逆の『スパーン』ぬあああつ!尻があああつ!!」

相変わらずデリカシーが無い事を言い出すハルキ君のお尻を、足だけは自由に使える私がいっきりに蹴り飛ばし悶絶させる。

「ううっ、思いの外キレイに決まりすぎて足痛い。……もしもし、こちら桜内梨子です。

ハルキ君がたつた今セクハラ発言をしました。ビーチでの異変はありません。」

「了解!こちらにも異常無しです。ハルキには3人分の海の家の料理を時間が空いたら持ってくる様に伝えておいて。」

悶絶しているハルキ君の変わりに、自身の足を抑えて片足で飛び跳ねる私が定時報告を入れ、ユカさんからの言伝てを彼に伝えておいた。

「そして鞠莉さん、曜さん、善子さん！」

「ヨハネ!!」

善子ちゃんのお決まりの返しをダイヤさんがスルーしながら3人には料理を担当して貰うと分担を割り振る。

「都会の方々に負けない料理でお客様のハートを鷲掴みにするのですわ!!」

グッとガッツポーズをするダイヤさんの熱気に当てられ、3人もテンションがみるみる上がっていく。

「面白そうだね！」

「墮天使の腕の見せ所！」

「それじゃあLet's cooking!!」

3人の右手を重ね、ガッツポーズをすると猛スピードで料理を作り始めた。

「よっ!ほっ!!」

手慣れた様子で焼きそばを作りながら同時進行でオムレツを焼いていく。

「美味しいヨキソバ! ヨーソロー!! 梨子ちゃん食べてみる?」

オムソバならぬ、曜ちゃん命名ヨキソバが完成し私が味見をする事に。

「んん!? 美味しい! これは…売れるわよ曜ちゃん!!」

程よく塩が効いた焼きそばとオムレツがマッチしてとても美味しい。その傍ら…

「クツクツクツ…。墮天使の涙……。」

善子ちゃんが不気味な笑みを浮かべながらたこ焼き器で真っ黒い何かを作っている。ダークマターか何かなの!?

「フツフツフツ…。シャイ煮……、コンプリート。」

鞠莉さんに至っては寸胴鍋で紫の湯気を浮かべせながら墮天使の涙に勝るとも劣らない邪悪な何かを作っている。二人共、心成しか恍惚な顔で作るから曜ちゃんがヨキソバを持ちながら引きつった笑みを浮かべて立ち尽くしていた。

「……………あつ、曜ちゃん! 私客引きがあるからそろそろ外に出てるね〜!!」

私はこの空間から逃げ出すようにそそくさと飛び出し千歌ちゃんと合流する。

「ああっ! 待って、頼むからここに居てよ〜!!」

もう半泣き状態の曜ちゃんを私は見捨て、ダイヤさんに「一応」料理は出来上がった事を伝える。

「さあ…これで客がドバドバと…!!」

店頭にはダイヤさんと、彼女の命令でブルーシートの上でグラビアアイドルみたいなセクシーポーズを取る果南さん、ボディビルのポーズを取るハルキ君と突っ立っている

私と千歌ちゃんと鞠莉さん以外に人っ子一人居ない状態だった…。

「なんで誰も来ないんですの!？」

愕然とするダイヤさんの背中に「こんにちは〜」とお客の声の木霊する。

「あつ、は〜い♡」

私達に青筋を立てて当たり前散らしていた先ほどとは打って変わって営業スマイルをするダイヤさん。

「ここが千歌達がやつてる海の家?」

「私ヨキソバ〜!」

同じクラスのよしみちゃんやむつちゃん、クラスメイトがほぼ全員来てくれた。どうか客は入りそうな様子になってきた。

「皆に電話したらすぐ来てくれたよ!」

千歌ちゃんが事前に電話をしてくれた事を告げそれを聞いていた果南さんと鞠莉さんがダイヤさんを見ながら爆笑する。

「最初からこうすればよかったんだね!本当ダイヤのお馬鹿さん。」

「本当、お・ば・さ・ん!」

「一文字抜けてますわ!!」

鞠莉さんの明らかにわざとな煽りに激昂したダイヤさんだったが初日としては上々

な売上だったらしく、何とか黒字に抑えることは出来た。

海の家の手伝いも終わった夕方に私、高海千歌はA q o u r sのメンバーとハルキ君とで特訓を行っている。

「流石にお店の後だどちよつとキツイね!」

「そうツスね。でも昼間よりかは暑くないし、全然イケるツスよ!」

果南ちゃんとハルキ君が若干息を上げつつもランニング15kmを走り切る中、それ以外の私達は砂浜の上で突っ伏し全滅してしまっていた。

「こ、こんな特訓を、sはやっていましたのですか…。」

「す、凄すぎる……。」

ランニングは一旦終わったが、流石に日も傾いたこの時間帯に遠泳は不可能とハルキ君に咎められ陸地で出来るトレーニングをする事になった。このまま泳ぐと私達の誰かが本当に海に沈みそうだし…。

「次は体幹をきちんと鍛えるよ。」

果南ちゃんの指示の元、ハルキ君がタイマーをセットし私達は体幹トレーニングを行う。

「今こそ…我が身に…：…うっ!!」

腕の感覚が無くなった善子ちゃんがバランスを崩し、私と花丸ちゃん、ルビイちゃんが将棋倒しの様に立て続けに上に乗っかってしまう。

「おいおい、大丈夫ツスカ!?!」

ハルキ君が心配して倒れた4人を救助しながらも、その様子を何処か楽しそうに梨子ちゃんが笑っている。

〃ザツバーー!!〃

「ううっ…冷っこい!!」

今日の練習も終わり皆で体に付いた砂をルビイちゃんが珍しく方言丸出しで水を引つ被りながら呻く。

「全く…お湯は無いですの!?!」

「何贅沢言ってるんスか?」

ハルキ君は寒さを全く感じさせずダイヤさんに正論をかます。

「ハルキ君はなんでピンピンしてるの?」

「寒稽古とか毎年やってるからこの位余裕ツスよ。」

「流石武道経験者…。」

私の疑問に即答したハルキ君に梨子ちゃんも関心の声を上げる。

「それにしても、sって凄い特訓してたんだね！」

ルビイちゃんが今回の過酷な特訓を憧れのスクールアイドルがやっていた事もあり増々、sの株を上げている。確かにハードな特訓を二日間やりきったであろう彼女達は正にレジエンドだ！

「アンタ達！他のお客さんに迷惑だから絶対騒がしくしちゃ駄目だからね？」

「分かってる〜！」

「オッスー！」

美渡姉に釘を刺され騒がしくしすぎないように私が全員に再度忠告する。そんな中鞠莉ちゃんとハルキ君の腹の虫が盛大に鳴る。

「アィムハングリー〜！ご飯まだ？」

「そうツスね！俺も腹減っちゃって…。」

もうご飯時だし皆で食べようと海の家に戻った私が苦言を呈する。

「それが…。シャイ煮と堕天使の涙全く売れて無くて……。美渡姉が余った食材は自分で処分しなさいと。」

「そんなに余ったの!?!」

梨子ちゃんの問いに私は後ろの余り物を顎でしゃくり有様を見せる。机を埋め尽く

すシャイ煮と墮天使の涙…。

「ヨキソバは見当たらないツスね？」

察しが悪いハルキ君にも分かるように

「ヨキソバだけは予想の3倍売れて、これだけで余裕の黒字になりました。」

「お、オツス…。そうだ、ストレイジの皆からも好評だったツスよ！」

私の売上の結果とストレイジのメンバーからの素直な声に曜ちゃんが頭を掻きながら照れる傍ら、善子ちゃんと鞠莉ちゃんが綺麗に腰を90度曲げて謝罪をする。

「申し訳無い！」デース！

ハルキ君が2人に「ドンマイ」とフオローを入れる中、ルビイちゃんと果南ちゃん、花丸ちゃんが二品の味が気になっている様子であった。

「それってどんな味がするんですか？」

「ちよつと興味あるね！」

「マルも食べてみたいズラ!!」

3人のその言葉を待ってましたと言わんばかりに善子ちゃんと鞠莉ちゃんが頭を上げ猛スピードでシャイ煮と墮天使の涙を温め直す。

「急に元気になったツスね…」

ハルキ君がガラオン貯金箱を弄くりながら突っ込む中、全員の眼の前に二品が並べら

れる。

「さあ、召し上がれ!!」

「「「「「い、頂きます…。」「」「」」」」

先ずは紫色の煮物、シャイ煮を恐る恐る食べる私だったがとても美味しく、全員がガツガツ食べている。

「シャイ煮美味しい!!」

「でも一体中に何が入ってるの…?」

「おおっ、アワビ入ってるじゃないツスカ!」

「お代わりズラ!!」

梨子ちゃんがアワビを器用に箸で掴みながら疑問を口にする。

「フッフッフツツ…。シャイ煮は私が世界から集めたスペシャルな食材で作ったアルティメット料理デース!!」

鞠莉さんがババーン!と具材のラインナップを公開する。真鯛やズワイガニ、アワビにサザエ、伊勢海老に一番目を引くマンボウまで入っている!!

「で、一杯いくらするんですの…?」

ダイヤさんの素朴な質問に鞠莉さんが

「さあ?10万円くらいかな?」

「ブツ!!!!!!」

このアホみたいな金額を知ったハルキ君以外のシャイ煮を食べた全員は盛大に…噎せ返った!!

「じゅ、10万!?!?」

「高すぎるよ!!」

花丸ちゃんが絶句する中、私が鞠莉さんに対し盛大に突っ込む。

「ハルキさんは何でそんなにガツガツ食べれるのです!?!」

何食わぬ顔でシャイ煮を食べ進めるハルキ君にダイヤさんが驚きと疑問が入り混じった声を上げる。

「いや、だって鞠莉さんツスよ?高い食材用意するに決まってるじゃ無いツスカ。一人暮らしの身だから有り難く食べないと…。」

当たり前のように二杯目を鞠莉さんから貰い、シャイ煮を食べ進めるハルキ君。そうだった、思い返して見れば我夢さん達とバーベキューをした時も普段中々食べれない食材ばかり出てたんだった…。

「ハア、これだから金持ちは…。」

「ハハハ…。次は墮天使の涙を。」

果南ちゃんが軽くため息を付く中、ルビイちゃんが善子ちゃんが作った墮天使の涙を

口の中に放おる。

「……………」

無言が続く、ハルキ君だけがシャイ煮を食べる咀嚼音だけが異様に大きく聞こえる様な気がする。この墮天使の涙も、もしかしてビツクリする位美味しかったりするのだろうか…。

「ル、ルビィ…?」

無言が続く中ダイヤさんが声を掛けた瞬間、ルビィちゃんが顔を真っ赤にしながら汗を吹き出しダツシユで浜辺に向かって駆け出した。

「ピギャー!辛い辛い辛い辛い辛い辛い辛い辛い辛い辛い!!」

〃モグモグ…〃

食べ続けるハルキ君を余所にルビィちゃんの反応と机の墮天使の涙を見た全員が若干顔が青くなる。

「ちよ、ちよつと!一体何を入れたんですの!?!」

ダイヤさんがドヤ顔をしている善子ちゃんに問い詰める。

「タコの変わりに大量のタバスコと唐辛子で味付けをしたこれぞ 〃墮天使の涙!!〃」

皆が墮天使の涙をちびりちびりと食べる中、善子ちゃんだけがこれを躊躇無く一口で食べる。激辛が好きなのは練習の合間に聞いていたけどまさかこれ程とは…。

「そうだ千歌ちゃん、歌詞は進んでる?」

私達2年生組が食べ終わり梨子ちゃんが作詞の進行状況を聞いてくる。

「う〜くん、中々ね……。」

「難産みたいだね。」

色々取り入れたいワードはあるけどそれを歌詞にしようとする中々良いものが出
来上がらない。

「作曲はどうツスか?」

ハルキ君もお腹が満腹になったのか話に加わり梨子ちゃんに聞くと、色々考えてい
けど歌詞のイメージから取り入れたい為、なるべく早く歌詞を作らなければいけない事
を自覚する私。

「ごめんね、毎回待たせちゃって…。」

「良い曲にしたいツスね。俺には作詞も作曲も衣装を作る事も出来ないけど、何か力に
なれる事があつたら3人とも遠慮無く言っ下さい!」

ハルキ君の言葉に私達は頷きやVサイン、敬礼等、三者三様で返事をする。そこから
は皆で余った品を皆で摘まみながら、善子ちゃんと花丸ちゃんがカードゲームをしてい
る様を応援しながら楽しんでる。

「クツクツク…、この如何なる効果も受け付けられない最強の黒き羽が居る限り私の勝ちは

揺るぎないわ。」

「じゃあそれを生贄に捧げ光の怪獣を召喚して、開○の使者を召喚するズラ。」

「……えっ!？」

いとも簡単にモンスターを引き離され、善子ちゃんが半ば現実逃避に近い様な声を上げる中、花丸ちゃんのターンはまだ続く。

「墓場に闇が3体いるからこれを召喚して特殊効果で光の怪獣を破壊するズラ。そして全員で攻撃。」

フラグを立てまくった善子ちゃんを瞬殺した花丸ちゃんが勝利の万歳をする横で果南ちゃんが驚嘆の声を上げる。

「千歌ちゃんソース切れちゃった!」

ゲームの観戦をしている私に曜ちゃんが墮天使の涙とヨキソバ改良する為のソースが足りなくなってしまう、家から取って来る事にした。

「ピアノコンクール?」

玄関前で志満姉の声が聞こえ、梨子ちゃんのお母さんと話をしているのを偶然聞いてしまった。

「ええ。案内が来たらしいんだけど、あの子出るとも出ないとも言っていないくて…。」

私も初耳のワードだったが海の家で待っている曜ちゃんを待たせちゃ悪いと思い、この事を頭の隅に置きながら自宅のソースを持って出たのだった。

私の部屋で全員（ハルキ君以外）布団を敷き雑魚寝をしながら玄関前で志満姉と梨子ちゃんのお母さんが話していたピアノコンクールについて携帯で調べてみる。

「zzz…美味しそうなマシユマロデース…。」

「ううっ…。」

「イヒヒッ…。」

鞠莉ちゃんに引っ付かれている果南ちゃんがうめき声を上げている横でユカさんから貰った鮫怪獣の寝袋に入っている善子ちゃんが不気味に笑っている。

「ピアノコンクール…、この日ってラブライブ予備予選と同じ日?」

携帯のメモに登録してあるラブライブ予備予選の日時を再確認するとやはり同じ日であり、梨子ちゃんはどこちちを選んだらうと無性に気になってしまう。

「梨子ちゃん? うわっ掛け布団全部余所に行ってるよ…。」

相変わらずの寝相の悪さに若干引きつつも梨子ちゃんを起こすためほっぺたを弄くりイタズラをする。

「梨子ちゃん? あれ起きない…。梨子ちゃん?」

耳を摘んだりブタ鼻にしたりしても全く反応せずお腹や横腹を揉みしだいた時にやっと気づき物凄い形相で睨みつけられた…。

「ウヒヒツ…。千歌ちゃん…何してるの。」

「ヒツ…。ごめんなさい。」

擦られ、笑った顔の直後に凄まじい怒気を含んだ顔に私は即謝罪し少し話がしたいと言つて浜辺に誘う。

「釣れないツスねえ…。ん？おーい！」

浜辺で釣りをしているハルキ君に声をかけられ、梨子ちゃんもマネージャのハルキ君にも伝えておきたいとの事もあり、3人分の釣り竿を用意して貰いピアノコンクールの事を話す事にした。

「ピアノコンクールとラブライブ、同じ日だけど心配しないで…。ちゃんとラブライブに出るから。」

梨子ちゃんも初めてピアノコンクールの案内が来た時はちよつとビックリしたみいで、チャンスがあつたらもう一度出たいとも思っていたそうだった。

「合宿が始まって皆と過ごして…。ここに引越してきて浦ノ星に通つて、怪獣が出て怖い思いもあつたけど、スクールアイドルが自分の中でどんどん大きくなっていった。」

A q o u r s の活動も楽しくて私やハルキ君の出会いに感謝をしてくれた。

「自分に聞いてどつちが大切なのかがすぐに答えが出た。今の私の居場所はここなんだって…。」

A q o u r s を大切に思ってくれる気持ちが凄く嬉しかった。彼女にとってピアノと同じくらい大切な筈なのに…。

「そっか…。」

「……。」

返す私と無言のまま笑顔で口角を上げるハルキ君に梨子ちゃんが笑いかける。

「今の目標は今ままで一番の曲を作って予選を突破する事。それだけ…。」

梨子ちゃんの決意を聞いた私は彼女の意見を尊重し

「梨子ちゃんがそう言うなら私は…。」

「だから早く歌詞下さい。」

尊重すると言おうとした際、歌詞の催促を促され今言うか？とお互い吹き出してしまった。

「歌詞が無いといい曲出来ないんだからね？さあ、風邪引くといけないから早く寝よう。」

私とハルキ君に戻ろうと声を掛けるも彼だけはまだ釣りを楽しみたいとの事だった。

からここに残るみたいだった。

『ハルキ…千歌と梨子が話している時、一言も口を開かなかつたけどどうしたんだ?』

俺、夏川ハルキは梨子ちゃんのピアノコンクールの事を聞きながらAqoursのマネージャーとして彼女の決断が本当に後悔しない選択なのか分からないでいた。

「Zさん、梨子ちゃんはああ言ってますけど本当にいいんすかね?」

『どういう事だ?』

せっかく自分の中で足踏みしていたピアノへのスランプを克服できる機会があるのに、それを見送る事が本当に彼女の中で後悔しない道になるのだろうかと思っている。確かにマネージャーとしては皆でラブライブに出ることが正解なのだろう。でも梨子ちゃん自身が本来やりたかった事や乗り越えたいかも知れない壁を放棄してしまつてスクールアイドルを続けることが正しいのだろうか…。俺の思いにZさんも首を捻りながら考えるも答えは出ず、2人で悶々と唸つてしまう。

「梨子ちゃんがコンクールに出場したとして昔のトラウマが出てしまった時、もしそれを克服できるかどうかで彼女の心が良い方にも悪い方にも転がってしまう気がして…。」

克服出来た時は笑顔で帰ってくる筈だ。信用していない訳では無いが克服出来なかった時、彼女はきつと笑顔にはならない。優しい梨子ちゃんが皆の為に心を擦り減らして作曲をしてしまう事は絶対にしてほしく無いし、誰もその事を望んではいないだろう。

「千歌ちゃんが前言っていたんす。皆を笑顔にするのがスクールアイドルだって。俺はステージには立てないツスけど、少なくともメンバーの皆くらいは笑顔にしたい…。」
俺一人の発言で危ない橋を渡らせ笑顔を奪う真似だけはしたく無い事は確かだった。

「梨子ちゃんとダンスの相談するけど千歌も来る?」

合宿2日目の昼に果南ちゃんからダンスの相談を持ちかけられた私、高海千歌はハルキ君と一緒に梨子ちゃんの家で作戦会議をする事にした。

「大切な物?」

「それが歌詞のテーマ?」

梨子ちゃんに私の今回の歌詞で伝えたい物を上げ、ダンスの振り付けも同時進行で進ませる。まだ出だししか完成していないから早めに作りあげて皆と負担を減らしてあげたいと思うのだが…。

「大切な物……。」

梨子ちゃんが一瞬、何か思い詰めた顔をして自室の机にある紙に視線を向ける。そこには「海に還るもの」と書かれた楽譜が置かれていた。

「(あの歌詞……)」

海の音が知りたいたと言ったあの日の事を思い出す。そもそも梨子ちゃんは曲を作る為、この内浦に来た事も……。

「梨子ちゃん、梨子ちゃんも読んでみて？」

果南ちゃんの声に梨子ちゃんも反応し、私達4人は歌詞とダンスを同時進行で時間が許すまで進めていった。

「千歌ちゃん……、晩飯前にちよつとだけ相談があるんすけど？」

作詞とダンスの粗方の目処が付いた夕方、ハルキ君から相談を持ちかけられた私は自室で少しの間話を聞くことにした。

相談を受けそれを2人の間で解決した後、海の家で善子ちゃんと鞠莉ちゃんがガツクリと肩を落としている所を見た私は今日の売上を何となく察してしまった。

「今日も売れなかったんすか？ シャイ煮唐墮天使の涙……。」

「駄目！ そんな事言ったら。」

ハルキ君の傷口に塩を塗る様な発言を静止していると厨房から曜ちゃんが「出来た!!」と声を上げる。

「自信作！船乗りカレーWizシャイ煮と愉快的墮天使の涙達。」

シャイ煮と墮天使の所を鞠莉ちゃんと善子ちゃんの声真似をしながら皆の前に凄く見た目のカレーを置く。

「凄く見た目…。」

「ううっ、ルビイ死ぬかも…。」

果南ちゃんの率直な感想に、昨日墮天使の涙を食べて酷い目にあつたルビイちゃんが絶句する。

「じゃあ梨子ちゃん！召し上がれ!!」

曜ちゃんが梨子ちゃんに毒…味見をさせ、梨子ちゃんが恐る恐るカレーを口の中に入れる。

「んん?!美味しい!!」

「えっ?!」

梨子ちゃんのその言葉に善子ちゃんと鞠莉ちゃんがいち早く反応し二人共とそそくさと食べている花丸ちゃんと一緒にカレーを掻き込む。

「OH！デリシャス!!」

「パパから教わった船乗りカレーは何にでも合うんだ！」

鞠莉ちゃんがあっぺたを押さえて絶賛する中、お父さん直伝の料理に曜ちゃん自身もご満悦の様子だった。

「これなら明日は完売ですわ……！」

そろばんを弾きながらガラオン貯金箱を回転させ、ダイヤさんが邪悪な笑みを浮かべている。この味なら確かに完売は確実だろう。

「ではこれから、ラブライブの歴史とレジエンドスクールアイドルの講義を行いますわー！」

カレーを食べ、温泉に浸かって私の部屋で布団を敷こうとした時、ダイヤさんからラブライブの説明をするから全員正座をしろと言われる。

「今からするの……？」

「うわあ!!」

「そこ！カードを収める!!」

「「すみません」ズラ!!」

早く寝させろと言わんばかりのリアクションの果南ちゃん、嬉しそうなルビィちゃん、ダイヤさんに叱られ謝罪をするハルキ君、善子ちゃん、花丸ちゃんを横で見ながら

講義が始まる。

「大体貴女達はスクールアイドルで有りながらラブライブの何たるかを知らなすぎですわ。」

先ずはA—RISEの誕生からとこれから長くなりそうな予感がしたが、微動だにしない鞠莉ちゃんに不信を持ったダイヤさんが彼女の眼前で手を振る。

「鞠莉さん、鞠莉さ〜ん、聞こえてますか?」

その時鞠莉さんの目が剥がれ落ちダイヤさんが絶叫を上げる。

「ピ…ピギャー!!」

「…これシール貼ってるだけツスね。」

気絶するダイヤさんをハルキ君が抱え、隅に寄せた時、後から寒気がした私は襖を振り返る…。

「静かにしろって言っただろ!」

美渡姉が片目でそう訴え眼光をギラつかせている。

「ヒツ…!今日はもう遅いから寝よう!」

「遅い?まだ9時だよ!」

曜ちゃんが早すぎるでしょ?と言わんばかりの反応に、私が圧を掛けて言いくるめる。

「今日は早く寝ないと旅館の神に尻子玉抜かれるんだよ!!」

「よ、ヨーツロ……」

曜ちゃんを黙らせハルキ君を除いた女子全員が猛スピードで布団を敷いて就寝をした。

スクールアイドル講義が一瞬で終わり早めの就寝をした私、桜内梨子とAqoursのメンバー達。

「目が……目があ……」

「ウヒヒ……」

「柔らかい怪獣アースzzzz」

「ウウツ……アハハハツ……zzzz」

呻くダイヤさん、笑う善子ちゃん、鞠莉さんに抱きつかれ、苦しげに悶えと笑い声を上げる果南ちゃんの四重奏のせいで中々寝付けないでいた。

「梨々子々々ちゃん!」

「コラ……」

昨日と同じ様に悪戯を仕掛けようとする千歌ちゃんを眼力で黙らせる。

「はい……。少しお願いがあるの。」

「こんな夜中に何処行くの？」

外に連れ出された私に千歌ちゃんは「良いから良いから！」と軽くスルーされながら今ではお馴染みとなった海の家に向かう。

「オツス！来たみたいツスね。」

「ハルキ君!？」

軽く敬礼をしながらハルキ君が出迎える中、海の家の中にある一台の大きなピアノを丁寧に拭いている。

「ハルキ君に頼んでもらったの。考えてみたら聞いた事無かったなって…。」

するといつの間にか千歌ちゃんの手には私がコンクールの為に作曲した楽譜があった。

「(いつの間を持ち出したのよ…。)」

私が疑問に思う中、ここなら人も居ないから弾いて欲しいとの事であった。

「梨子ちゃんが考えて、悩んで、一生懸命気持ちを込めて作った曲でしょ？聞いてみてください！」

「少しだけでいいツスから。お願いします！」

そんないい曲じゃ無いと思いつつも鍵盤の前に立ち音を奏でる。人前で弾くのは本当に久しぶりだったが、演奏する間に気分も乗り最後までミス無く終える事が出来

た。

「いい曲だね。」

「本当ツスよ……。」

率直な感想にむず痒さを覚えながらお礼を言う私。

「凄く良い曲だよ。梨子ちゃんの思いがいっぱい詰まった……。」

あの曲を完成させるのに随分時間がかかったと思いつつながら3人で空に浮かぶ月を見ている。その時2人がお互いの顔を見合わせ私にある事を告げた。

「梨子ちゃん、昨日の話を聞いて俺達思ったんすけど。」

「……ピアノコンクールに出て欲しい。」

昨日ラブライブに向けての決意を告げたのに2人共何を言ってるのだろうかとうと困惑と若干の怒りを覚えた私だったが2人の思い詰めた顔を見て何かを言うことが出来ないでいた。

「こんな事言うの変だよね……。滅茶苦茶だよね……。」

「すみません、梨子ちゃんもラブライブに向けていい曲作って予選を突破するって言ってくれたのに。」

絞り出す様に声を出す2人に「私が一緒じゃ……嫌？」と投げ掛ける。

「違うよ！一緒が良いに決まってる!!」

力強く即答する千歌ちゃんはどうしてこの提案をしたかを教えてくれた。

「スクールアイドルを続けて梨子ちゃんの中にある何が変わって…、またピアノに前向きに取り組めたら素晴らしいなって！」

ハルキ君も頷きながら

「余計なお世話かも知れないツスけど、やりたかった事や越えたかった壁を乗り越えるチャンスがあるのにそれを捨ててまでラブライブに出ることが本当に正しいのかって、昨日の話を聞いて思ってたんす。」

「でも……。」

昨日言ったように予選を突破してその先にある0を1にしたい。それを思うとラブライブに出る事が一番大切な事の筈だ。

「この町や学校や皆が大切なのは分かるよ。私もハルキ君も他のAqoursの皆もそうだもん。でも梨子ちゃんにとってピアノは同じ位大切な物なんじゃ無いの？その気持ちに答えを出してあげて……。」

「俺はライブを見に来てくれた人の前に、このAqoursの皆が笑顔になつて欲しい。勿論梨子ちゃんも。でも……。」

言い淀むハルキ君に代わって千歌ちゃんが続きを話す。

「もし、もしだよ？梨子ちゃんがピアノコンクールにハルキ君の一存で出て、失敗してし

まったく笑顔になれないしそのせいで梨子ちゃんの心に傷を付けてしまうんじゃないかと思つてたから昨日思つても言えなかつたみたい……。」

2人考えに納得をした私はもう一度考えてみる。ピアノのスランプから抜け出す為に内浦に引越して来て、そのチャンスが今巡つてきた。でもラブライブと同じ日にコンクールも開催される事を知った時、心の何処かであの日のトラウマがまた出てしまつてピアノに対する熱意が冷めてしまう事が怖かつた。本当はあの日の出来事を乗り越えたい筈なのに……。

「私、待つてるから。何処にも行かないつて……。ここで皆と待つてるつて約束するから！」

「俺もツスよ。どんな結果になつたとしても誰も離れないし否定もしない。梨子ちゃんには笑顔でいて欲しい。俺は皆も……梨子ちゃんを笑顔にしたい!!だから……。」

2人が手を差し伸べ思いの丈をぶつける。優しい2人の気持ちを知った私の目には思わず涙が溢れていた。

「本当、変な人達……。」

手を取り、そのまま2人を思いつきり抱きしめる。もう涙でぐしゃぐしゃになり、嗚咽を漏らしながらも一言しつかり伝えた。

「大好きだよ……!」

第27話 友情ヨーソロー 前編

海の家での合宿が終わって一週間後、梨子ちゃんが東京で開催されるピアノコンクールに出場するため今日から5日後に控えたラブライブ予選は8人で出ることにになった。まだ午前中にも関わらず日差しが照りつける沼津駅前です、渡辺曜とAqoursのメンバー、ハルキ君が梨子ちゃんの見送りとエールを送る。

「しっかりね！」

「頑張つて下さい！」

「お互いにね!!背中を押してくれてありがとう。千歌ちゃん、ハルキ君！」

梨子ちゃんと握手と互いに拳を合わせる千歌ちゃんとハルキ君。

「梨子ちゃん、頑張ルビー!!」

「東京に負けてはダメですよ！」

ルビーちゃんの応援の横でダイヤさんが上ずった声をあげる。

「そろそろ時間だよ？」

掲示板を見た私が電車の到着時間10分前を梨子ちゃんに告げ、果南ちゃんと鞠莉ちゃん、花丸ちゃんがエールを、善子ちゃんが無言で拳を前に出す。

改札口にチケットを通した梨子ちゃんに千歌ちゃんが大きな声で叫ぶ。

「梨子ちゃん！次のステージは絶対皆で歌おうね!!」

「うん！もちろん!!」

千歌ちゃんのエールを受け取った梨子ちゃんはその勢いに押される様にプラットホームに向かって駆け出して行った。

「さあ、練習に戻りますわよ？」

ダイヤさんの指示の下、私達は浦の星に戻り練習をする為に歩を進める。

「よし、これで予備予選で負ける訳にはいかなかったね！」

「なんか気合が入りマース！」

「じゃあ俺は部室の鍵開けるため先に行ってますね！」

果南ちゃん、鞠莉ちゃんの気合満々な声とハルキ君が先に部室を開けるため駐輪場に向かって駆け出していく。

「ねっ！千歌ちゃん!!」

梨子ちゃんのみまで頑張ろうと千歌ちゃんに声を掛けた時、千歌ちゃんの背中が何処か寂しそうに見えたのだった。

「特訓ですわ!!」

部室に全員集合し、大きく特訓と書いたホワイトの眼の前にダイヤさんが仁王立ちを

している所を俺、夏川ハルキ以外のメンバーが半ば呆れた目で見ていた。

「また…?」

「本当に好きズラ…。」

千歌ちゃん、花丸ちゃんがこの前合宿したのにまたハードな事をするのかと呆れた声で返す中、パソコンを操作していたルビィちゃんが全員に画面を見せる。

「これって…Saint Snow!」

「うわっ出た…。」

千歌ちゃんが声を上げる中、俺はポロツと毒を吐いてしまう。ラブライブを諦めろだの、遊びじゃないだと散々言ってくれたあの姉妹はどうも好きにはなれないでいた。

「先に行われた北海道予備予選をトップで優勝したって!」

ルビィちゃんが解説をする横で果南ちゃんが「これが千歌達が東京で会ったっていう姉妹のスクールアイドルねえ…」と興味深そうに呟きながら画面を見る。

画面越したが、東京のイベントよりもダンスのクオリティーが格段に上がっているのを見ると、トップでの優勝は伊達じゃ無いと敵ながら思ってしまう。

「頑張ってるんだ…!」

千歌ちゃんもSaint Snowの姉妹を見てやる気を出すも

「気持ちは分かるけど大切なのは目の前の予備予選だし、先ずはそこに集中しない?」

と目先の目標を突破する事を提案される。

「果南にしては随分堅実ね？」

鞠莉さんの茶化しに「色々勉強したからね」と悪戯っぽく返す果南ちゃん。目先の目標を決め、特訓を開始しようとダイヤさんが手を叩く。

「では、それを踏まえて…。」

「予備予選通過大特訓…開始!!」

かと思ったのだが…

「なんで…こうなるの!!!」

「文句言つてないでしっかり磨くのですわ!」

千歌ちゃんの今さっきの熱意を返せと言わんばかりの文句にダイヤさんが櫛を飛ばす。特訓しようとして屋上に行くのかと思いきや、使っていないプールの清掃をさせられているこの現状では文句の一言も言いたくなるのは俺も良く分かる。

「で、でも足元がヌルヌルしてて…ピキッ!!」

「ズラッ!」

「うおっ、危ねえ!!」

プール底のぬかるみでバランスが取れず、足を滑らせるルビィちゃんと花丸ちゃんを

俺が力尽くで支える。

「これで特訓になるの?」

千歌ちゃんの疑問に俺はある意味足腰や体幹を鍛える特訓になるのではと考えながらルビイちゃん達を見守りながらプール底をブラシで磨く。

「ルビイちゃんも花丸ちゃんも足にしっかり力入れて!」

「アンタ、一人だけ気合入れ過ぎでしょ…。」

花丸ちゃん達2人を指導する横で善子ちゃんが半ば呆れた様な声を上げる。

「まあ、ダイヤがプール掃除の手配を忘れていたから特訓と言う名目で私達が掃除をしているだけだね。」

「忘れていたのは鞠莉さんでしょ!」

鞠莉さんの煽りに反応したダイヤさんが青筋を立てながら言い返す。

「言ったよ?夏休みに入ったらプール掃除何とかしろって。」

「だから何とかしてるじゃないですか!」

「ああつ!もうこの熱い中揉めないで下さい!!」

この炎天下で喧嘩を聞くのも疲れる為、俺が間に入って仲裁をする。

「果南、生徒会長と理事長があんなので大丈夫なの?」

「私もそう思う…。」

善子ちゃんと果南ちゃんがプールの側面に背を預けながらペットボトルのお茶を飲んで小休憩していた。

「でも皆で生徒会の仕事は手伝うって約束したもんね。よし、この際プールの床をピカピカに：「そうだよ？皆しつかり磨かなきゃ！ヨーソロ!!」んん？」

千歌ちゃんが気合を入れ直そうとした時、もう一人の聞き慣れた幼なじみの声と姿に思考が止まった様な表情をする。

「デッキリブラシと言えば看板磨き！」

視線の先にいた曜ちゃんが水兵のコスプレをしながら敬礼をしている。

「いつの間にそんなもの持ってきたんすか!？」

俺の疑問に堂々の無視をした曜ちゃんがテンションを上げてジャンプするも、着地に失敗し盛大に尻もちをついてしまった。

「とつとつと…うわああっ!!」

「貴女！その格好はなんですの!?!遊んでる暇はありませんのよ!!」

何時になつたら終わるのやら…とダイヤさんが頭を抱えながらも皆でプール掃除を終らせる頃には昼の12時半を回っていたのだった。

「綺麗になったね！」

「オッス!!」

「ピッカピカになったズラ!!」

ルビイちゃんと花丸ちゃんが額の汗を拭いながら達成感に酔うもダイヤさんの「ほら見なさい? やつてやれない事は御座いませんわ!」

と言う発言に俺達全員がブーイングをする。

「ゴホン……: そうだ、ここでちよつとだけダンス練習やらない?」

果南ちゃんの提案に皆が同意し、滑つて怪我をしない事を忠告し、俺が全員に配置に着くように指示を出す。

「……あれ?」

何か違和感を覚えた俺と千歌ちゃんが声を上げ、一旦皆の構えを解かす。

「そっか、梨子ちゃんが居ないんだよね……。」

違和感の原因を知った果南ちゃんがダイヤさんにどうする? とアイコンタクトを送る。

「そうなるのと今の配置ではちよつと見栄えが良くないですわね。」

「確かに1人欠けた状態でのフォーメーションってかなり違和感あるツスね……。」

あの合宿の日に千歌ちゃん、梨子ちゃん、果南ちゃんとダンスの相談をしながら改めて基本的な振り付けや配置を教えて貰ったが現状の人数と配置ではかなり不格好に見えるてしまう。

「今から大きく修整するズラ?」

「嫌…時間が押してるから難しいね。だとすると……。」

花丸ちゃんの問いに数秒果南ちゃんが考え込む。

「梨子ちゃんの位置に誰かが変わりに入る…とか?」

梨子ちゃんの位置に入る代役…。それを俺達が思うと彼女が適任なのでは? 思いが同じなのか全員の視線が1人のメンバーに集まっていた。

「…え? んん?? 私!?!」

皆の視線と力強く頷く千歌ちゃんに気圧され、曜ちゃんが担当する事になった。

梨子の代わりを曜がする事になり私、小原鞠莉とハルキ、A g o u r s のメンバーは昼食の後屋上で早速練習をする事になった。

「ワン・ツー・スリー・フォー・ファイブ・シックス・セブン・エイト…」

「あつ! あれつ…?」

肩をぶつける千歌つちと曜。2人が離れた位置から近づく場所で何度も失敗してしまふ。

「これでもう10回目ですわね…。」

「曜ちゃんなら合うかと思っただけどな…。」

ダイヤの言う通り、この箇所を練習してもう10度目。幼なじみで千歌っちの親友である曜なら他のメンバーよりも連携が取れると私も思っていたのだが…。

「私がいけないの。同じ所で遅れちゃって…。」

「ああ、違うよ。私が歩幅を曜ちゃんに合わせられなくて…。」

互いに謝罪をし合う2人だったが

「まあ、体で覚えるしか無いよ。まだ初日だし焦らない焦らない。ハルキ、湿布持つてきてー！」

「オッス!!」

確かに焦っているのは良い物は作れない事に私も内心同意をし、湿布を2人に貼り付けたハルキが果南と交代してリズムを取る。

「じゃあ2人共行くツスよー!ワン・ツー・スリー・フォー…。」

ハルキが8を数えると今と同じ様に2人の両肩がぶつかってしまった。

「ごめん、私が今度は早く出過ぎちゃって…。ごめんね千歌ちゃん。」

「(遠慮している…)」

そう思いながら私は謝罪する曜を見るも、彼女の何がそうさせているのかは分からないでいた…。

私、渡辺曜は夕日が沈む海沿いで千歌ちゃんと練習を続けている。

「2人まだ練習してるんだね…。」

ルビィちゃんの声に同意をする1年生達の視線を背中に受けながら、ハルキ君のカウントに合わせてもう何度目かの失敗した箇所を練習しているのだが…。

「痛っ!」

またも千歌ちゃんと両肩がぶつかってしまい先に進めない状態になってしまふ。

「曜ちゃんごめんね…。どうしても梨子ちゃんと同じ様な感覚でやってしまつて…。もう一度やってみよう!」

頷きながら元の位置に戻った私が千歌ちゃんにある提案をする。

「千歌ちゃん…、もう一度 “梨子ちゃんと” 練習していた様にやってみて?」

「えっ?でも…。」

「ん?」

私の提案に戸惑う千歌ちゃんとハルキ君を急かす様に声を掛け、ダンスを再開させる。

「…せくの!ワン・ツー・スリー・フォー・ファイブ・シックス・セブン・エイト。」

私の提案でダンスをすると今までの失敗が嘘の様に綺麗に決まったのだ。

「おお！天界的合致!!」

善子ちゃんの驚嘆の声に同意する様にルビイちゃんも花丸ちゃんも拍手を送る。

「曜ちゃん、凄いな……!」

「これなら大丈夫でしょ?」

これなら次の段階に進む事ができ、千歌ちゃんも1年生も納得していたし解決したなと思っていた。そんな時千歌ちゃんの携帯から電話が鳴った。

「もしもし、千歌ちゃん?東京のスタジオに着いたから電話しようと思って……」

どうやら梨子ちゃんから電話が掛かったみたいで千歌ちゃんが楽しそうに通話をしている。

「あ、待って!皆に変わるから……。はい花丸ちゃん!!」

突然電話を渡された花丸ちゃんが挙動不審になりつつも通話をしようと試みる。

「あ、え……えつと……。もすもす?」

「もしもし、花丸ちゃん?」

ハンズフリーの状態で梨子ちゃんの声が聴こえたのかビックリする花丸ちゃん。

「何驚いてんのよ?流石にスマホくらい知ってるでしょ?」

善子ちゃんが呆れるも通話は緊張するらしく、ルビイちゃんに押し付ける。案の定ル

「ビーちゃんもダメだったが…。」

「じゃあ曜ちゃん！梨子ちゃんに話しておきたい事無い？」

屈託の無い千歌ちゃんの笑顔と携帯の画面に映る梨子ちゃんの写真に私は何を言え
ば良いのか言葉が出ないでいた。千歌ちゃんの携帯の電池が切れそうとの理由で一旦
通話を終了し、私達は今の5人でもう少しだけ練習しようと提案し、ハルキ君にカウ
ンを任せるのだった。

私、小原鞠莉とダイヤ、果南は夕日差し込む生徒会室で溜まっていた書類の山を整理
している。

「こんなな仕事を溜め込んで…。一人で抱え込んでいたんでしょ？」

「違いますわ！これはただ…。」

果南に凶星を突かれたダイヤを見ながら

「これからは私と果南が手伝ってあげましょう〜!!」

と私が部活予算案申請書の束を一掴みする。

理事長の印鑑を押しそうと思った時一枚の紙片が床に落ちた事に気が付いた。

「あれは…?」

「スクールアイドルの申請書ですわ。以前千歌さんが持つてきた。」

改めて部員一覧を見てみると最初はたったの2人しか居ないことに気付き、そのメンバーには驚きの声を上げる。

「あら？ 最初千歌つちと曜の2人だったのね。」

「意外？」

果南の問いに頷きながら

「てつきりStartは千歌つちと梨子だと思っていました！」

私の答えにダイヤも笑いながら

「確かにそう見えなくも無いですわね。今の状況からすると。」

そう、今の状況からすると“過去を知らない人が見たら、私の思いと同意見の人が多いのかも知れない。”

「本当、そうデスね……。」

昼間の曜の遠慮、その理由が何なのか少しだけ分かった気がした…。

俺、夏川ハルキは千歌ちゃんのと曜ちゃんのと練習が終わり皆が家に帰る中、曜ちゃんのダンスと電話をしようとした様子に違和感を感じていた。

「曜ちゃん！」

バイクを走らせ曜ちゃんの側に止めた俺は彼女に尋ねる。

「曜ちゃん…何かあつたんすか？」

「え…？」

顔が引きつり、曜ちゃんが戸惑った声を上げる。昼間の練習も、夕方も何かに遠慮をしている様なダンスに俺は違和感を感じていた。

「いつもの曜ちゃんらしくなかつたツスよ？…なんか凄い遠慮してたつていうか…」

俺の問いに顔を背けながら「思い過ぎしだよ…。」と答える曜ちゃんに

「顔見て答えて下さい！」

と肩を掴む。

「何である時、梨子ちゃんと同じ様にやってみてつて言つたんツス？ダンスは素人ツスけど凄い違和感を感じて…。」

まるで自分は、梨子ちゃんの代わりなのだと言わんばかりの曜ちゃんのダンスに疑問を持つてしまった俺の問いかけに彼女は増々目を逸らす。誰かの代わりと言い聞かせて自分の思いに蓋をする事が良いとは思えない。曜ちゃん自身も苦痛になるし、笑顔にならないのは俺でも分かる。

「俺で良かったら力になるツスよ？だから…」

俺のその先の言葉を曜ちゃんが震える声で

「なれないよ…。」

と突き放す。

「力になれないよ！男の子のハルキ君には!!」

目に涙を貯めながら俺には出来ない！と真正面から言い切る曜ちゃんに俺も熱くなつて言い返してしまう。

「そんな言い方しなくてもいいじゃないっスか！やつぱり今日はおかしいっスよ！」

力んだ俺の腕を振り払い、怒りのままに睨みつける曜ちゃん。

「本番まで時間が無い中で良いものを作るのにはしょうがないんだよ！千歌ちゃんは梨子ちゃんやとやっていた物が染み付いてるから私が千歌ちゃんに合わせれば問題ない!! 余計なお世話なんだよ!」

最後の一言にカチンと来た俺は青筋を立て、声を荒げてしまう。

「自分が納得出来んのかって言ってるんだよ!?!梨子ちゃんとやっていたから？違うだろ！千歌ちゃんが梨子ちゃんと電話してるのを見てやきも…「このっ…!」。」

俺の言おうとした事が彼女の地雷を踏んでしまったのか、胸ぐらを掴んだ曜ちゃんが右手を大きく振り上げる。その時だった!

「ストップ、ストップ！喧嘩は止めて!!」

鞠莉さんがバツサリと俺達2人の間に割り入り接触を断ち切った。

「ま、鞠莉ちゃん!？」

「鞠莉さん……。」

驚く俺達を余所にホツとする鞠莉さんが両者の頭に軽くチョップを食らわせる。

「喧嘩両成敗デース！ハルキ、ここは私が引き受けるわ。曜、『びゅうお』で待つてくれる?！」

笑顔で引き受けてくれる鞠莉さんにため息を付きながらも承知した曜ちゃんは足早に言われた場所に向かって行った。

「女の子同士でしか話せれない事もあるのよ?大丈夫、何とかしてみせるわ!!」

不機嫌な顔をする俺に、ウインクしながら任せて欲しいと頼む鞠莉さんに「お願いします。」とこの場を任せ、俺はストレイジのシユミレーションをしに行くためバイクを走らせた。

第28話 友情ヨーソロ 中編

ハルキ君と険悪な中、鞠莉ちゃんに展望水門「びゅうお」に行ってるように言われた私、渡辺曜は遅れて到着した彼女と話をする事になった。

「千歌ちゃんど？」

鞠莉ちゃんからの質問に同じく質問で返すと

「はい！上手く行つて無かったでしよ〜？」

ダンスで行き詰まっている事を問われた私はあの後練習をして上手く行つたと報告をした。ところが…

「NO、ダンスでは無くて…。」

「え？」

私は言われたく無い何かをこれから言われてしまうと、背中に冷たい物を感じてしまう。

「千歌っちを梨子に取られてちよつぱり…嫉妬ファイヤ〜〜が燃え上がったんじゃないの？」

「し、嫉妬!? いや…そんな事は……。」

嫉妬…、自分の中で認めたく無い感情を鞠莉ちゃんに悟られてしまい私は彼女から目を反らして誤魔化してしまう。

「ぶっちゃけトーク！する場所ですよ？」

鞠莉ちゃんが私の頬を軽く引つ張り本音を晒せと問いかける。この事は誰にも言わないし、千歌ちゃんや、梨子ちゃん、ハルキ君にも言えないでしょ？との鞠莉ちゃんの氣遣いで、私は彼女に本心を打ち明ける事を決意した。

「…私ね、昔から千歌ちゃんと一緒に何かしたいってずっと思ってたんだ。でもその内、中学になって……。」

私は水泳部に入ったが、その時の千歌ちゃんは自分のやりたい事がまだ見つかっていなかった為3年間帰宅部のままだった。でも今年に入って彼女がスクールアイドルに興味を持って、それを私と一緒にやりたいと言ってくれた時は凄く嬉しかったのだ。

「それからハルキ君がマネージャーに、次は梨子ちゃんが加わって2人で一緒に歌を作って…。気付いたら、私を合わせて10人になってた。」

正確にはZも合わせて11人という凄い人数が集まった。これだけの人数が1つの目標に向かって頑張る事は凄くと思う反面、自分自身の気付きたくない何かを自覚してしまう時があったのだ。

「それで時々思うんだ。もしかして千歌ちゃんは私と2人は嫌だったのかなって…。千

歌ちゃん、梨子ちゃんがこの学校に転校して直ぐ誘つてたから本当は私じゃ無くつて梨子ちゃんとやりたかつたのかなつて。」

10人集つて楽しそうに笑う千歌ちゃんを見て、昔は自分やハルキ君だけに向けていた笑顔をもう見る事が出来ない寂しさや、スクールアイドルを結成した当初から作曲という役割がある梨子ちゃんと千歌ちゃんが会話や作業をする事が多くなつた事で……ハルキ君が言いかけ、鞠莉ちゃんが言い切つた梨子ちゃん対する嫉妬心が自分の中で少しづつ大きくなつていったのだ。

「Why? 何故?」

自分の中の黒い感情を鞠莉ちゃんは怒る事も呆れる事もせず優しく再度問いかける。

「私、全然そんな事無いんだけど昔から要領が良いと思われている事が多いの。だからそういう子と一緒にだとやりにくいのかなつて……」

俯き、涙声になりながら自分の気持ちをさらけ出す私の正面に立つた鞠莉ちゃんが先程とは打つて変わった真剣な顔で両肩を掴む。

「何一人で決めつけてるんですか?」

「だって……」

その真剣な表情に気圧されてしまった私だが、直ぐに普段通りの明るい笑顔に戻った彼女が優しく頭を撫でる。

「曜は千歌っちの事が大好きなものでしょ？ だったら本音でぶつかった方がいいよ。好きな友達に本音を言わずに2年も無駄にしてしまった私が言うんだから間違いないよ。ありません。」

そのまま背を向け、夕焼け雲をみながら「これはハルキが果南に言ってた事なんだけど…。」と前置きをする。

「私達が仲直りした日、〃これが最後のチャンス〃 って言つたみたいなの。」

何かを失う事を彼は誰よりも望んでいないのかもねといつにも増して真剣な声で鞠莉ちゃんは告げていた。

俺、夏川ハルキは曜ちゃんの件を鞠莉さんに任せ、もうすっかり習慣になつていく特空機のシミュレーションをする為ストレイジに向かつている。そんな時だった。

「こちら蛇倉…。ハルキ、静岡の南部に怪獣が出現した。今からストレイジに急行しろ！」

蛇倉隊長からの通信を受けた俺はバイクの速度を上昇させストレイジに向う。数分で作戦室に到着した俺はセブンガー、ヨウコ先輩はウインダムに搭乗し怪獣が暴れているエリアに向かつて飛翔するのだった。

静岡南部で我が物顔で町を蹂躪する怪獣を目視した俺は、ヨウコ先輩の駆るウインダムの空中タツクルとセブンガーの鋼刃鞭を使って奇襲をかける。

「大人しく…しろ!!」

「チエストー!」

俺達の存在に気づいた怪獣はウインダムのタツクルを押し留め、それを盾にしながら鋼刃鞭を防ぐ。

“キシャーッ!”

灰色の巨体に見劣りしない大鹿の様な立派な角を持つ怪獣がウインダムを払い除け、俺の駆るセブンガーに突撃する。

「ヨウコ先輩を…。この鹿野郎!!」

自慢の角で串刺しをしようとする怪獣を、こちらもち前前の力で取り押さえる。

“キシャーッ! グルル…”

「ヤバイ、抑えきれない!!」

力が拮抗したのは最初の一瞬…、その後はジリジリと力負けをしまい後方のビルを押し倒してしまう。だが角を合気的要領で捻り怪獣を転倒させると戦線に復帰したウインダムが怪獣の腹部に肘鉄を食らわせる。だが怪獣は足を器用に使ってウインダ

ムを引き離し、尻尾を叩きつけながら追撃をする。

「くそう…。ならコイツだ！」

俺はセブンガーを中腰の姿勢にしながら右拳を突き出す。

「くらえ…！鋼芯鉄拳弾、発射!!」

セブンガー最強の武器、鋼芯鉄拳弾を発射させるも両手でそれを受け止め、踏み留まった怪獣は自慢の角から青白い雷撃を放出する！

「ぐ…ああああっ!!!」

衝撃を受け、意識が一瞬飛びそうになる。セブンガーもウインダムも損傷拡大してしまい行動不能になったのを察知したのか怪獣は地面を掘り行方を眩ませてしまった…。

戦闘が終了しコックピット内部で額を流血と打撲をした俺は医務室で治療を受け作戦室に戻る。

「ハルキー！大丈夫？」

心配したヨウコ先輩に「大丈夫ツス。」と何時もの調子で答えながらユカ先輩、蛇倉隊長も交えて作戦会議を開始する。

「以後、この怪獣をデスドラゴと呼称します。」

デスドラゴと命名された怪獣の分析で分かった事は、目に映るものを気ままに破壊す

る習性を持つ事が判明した。

「ビルも人間も、視界に入ったものは全てコイツの対象になるって事か…。」

蛇倉隊長の考察にユカ先輩が頷き、ヨウコ先輩がデスドラゴの弱点を問いかける。

「弱点は頭部の大きな角。電撃も放てる強力な武器だけど、神経も多く張り巡らされている事から弱点にもなる筈よ。」

ユカ先輩曰く角を破壊すれば戦意を喪失する、無いしは戦闘能力が格段に低下する事は確実と推測し、次の戦闘では優先的に角を狙う事を推奨する。

「キングジョーはまだ調整中の為実践投入が出来ない。ハルキ、ヨウコ、引き続きセブンガーとウインダムで再度出現したデスドラゴを迎撃しろ！」

「オッス!!」

「了解!」

蛇倉隊長の指示に返事をし、今日明日はストレイジで待機命令を受けた俺とヨウコ先輩は一旦体を休める事に専念した。

「本音をぶつけるか…。」

私、渡辺曜は昨日鞠莉ちゃんに言われた事を思い出しながら部室を目指す。昨日ハル

キ君と別れた後、静岡に怪獣が現れた事で今日は部活に來れない事を全体メールで知り、謝る事も出来ない現状に内心ブルーになっていた。

「(ここで憂鬱になっても仕方ない。ラブライブまで時間が無いんだし頑張らなくちゃ。)」

スマイルスマイル!と気持ちを切り替えドアを勢い良く開く。

「おはよう〜!!」

明るく声を掛ける私に千歌ちゃんが満面の笑みで挨拶を返しあるものを見せる。

「曜ちゃん!見て見てこれ!!」

千歌ちゃんの手首にオレンジ色の水玉がプリントされてあるシユシユが着いている事に気づく。

「うわあ〜!可愛い!!」

何処で買ったのかと聞こうとするも、千歌ちゃんから

「皆にお礼つて送ってくれたの!梨子ちゃんが!!」

梨子ちゃんの名前が出た事で私は一瞬険しい顔になってしまいそうになる。

「(梨子ちゃんが…?)」

他者から言われた嫉妬心が一段と大きくなったのを自覚しながらも、それを表情に出すまいと必死に笑みを浮かべて平静を保とうとする。

「曜ちゃんどうかしたの……?」

何か勘づいたのか千歌ちゃんが心配そうに問いかけるも慌てて

「いや…別に! 梨子ちゃんセンス良いよね!!」

と笑いながら誤魔化する。親友に本音を打ち明けられず、梨子ちゃんに嫉妬心を向けている私はどうすれば良いのかも分からず自分の動揺から来る心音が普段より何倍も大きく聴こえた。

「梨子ちゃんもコンクールでこれを着けて演奏するって。曜ちゃんのもハルキ君のもあるよ!」

右手には私が着ける水色のシユシユ、左手にはハルキ君に渡す予定のゼットライザーの刺繍が施された黒いリストバンドがあった。リストバンドは目を凝らして見ないと分からない程さり気ないデザインであり、これなら悪目立ちする事も無いだろうとは思ふものだった。

「特訓始めますわよ〜」

右手に赤いシユシユを着けたダイヤさんが練習の催促をし私は着替える為更衣室に向かおうと一旦部屋を出ようとする。

「千歌ちゃん!」

「ん?」

部室を出る前に私は彼女に言わなければならぬ。言わなければならぬのだが……
「……頑張ろうね。」

本音を伝える事も出来ず後悔してしまった自分の情けなさに苛立ち更衣室のロッカーの縁を思い切り蹴飛ばした。

練習も終わり、夕日で照り返す公園で私は何かをする事も無くコンビニで購入した缶ジュースを飲んで過ごしている。梨子ちゃんへの嫉妬心と千歌ちゃんに本音を伝える事が出来ない自分の情けなさで、普段より練習も身に入らず千歌ちゃんにダンスを合わせる形を取る方法が続けていた。

「こんな事で予備予選突破出来るのかな……。」

ただ誰かの動きを真似て人に合わすだけで予選を突破出来る程ライブは甘くないのは分かっている。だがこの現状を改善できる何かが思い浮かぶ筈も無く時間だけが過ぎていく事実に内心凄く焦っていた。

「あああつ……もう……！」

頭を軽く掻きむしり空になった缶をゴミ箱に投げ入れるも距離が足りずに手前に落ちてしまう。

「なんでこうなるんだよ……！」

拾い直した缶をゴミ箱に叩きつける様に捨てた瞬間

“キシャー……ッ!!”

爆音を響かせ大きな角を持った怪獣が出現した！

ストレイジで待機していた俺、夏川ハルキは突然鳴った警報に身体を硬直させる。

「やっぱり現れたか！」

「行くよハルキ!!」

ヨウコ先輩の指示に頷きながら格納庫に向う。ユカ先輩からデスドラゴの出現と角の破壊を優先する事を告げられ俺達はセブンガーとウインダムを発進させた。

デスドラゴは昨日と変わらず目に付くビルや建物を破壊し尽くす行動と、口からの火炎を吐きながら町を恐怖に陥れる。住民の避難はほぼ完了しており、作戦通り奴の角を破壊する為にセブンガーを前進させた。

「ヨウコ先輩、俺が前に出てデスドラゴの動きを一旦止めます！」

「了解！」

目に付く物を破壊する習性を逆に利用しセブンガーを突っ込ませる俺は、最初からフルパワーでデスドラゴを止める。パワー型のセブンガーでも分が悪いが俺の役目はデ

スドラゴの動きを抑えている間にヨウコ先輩のウインダムがあの大角を破壊するプラン。ここは意地でも押し留める！

「グルルル…。」

デスドラゴがセブンガーに集中しているのを目視したヨウコ先輩がウインダムの右腕をラリアットの要領で左手角にぶつける。

「やったツスか!？」

「いや、この角…かなり硬い!」

デスドラゴが抵抗出来ない状態でのウインダムの攻撃を物ともしない頑丈な角に唸り声を上げた俺だったが、セブンガーを振り払われそのまま長い尻尾でビルに叩きつけられてしまう。

「ハルキー!大丈夫!？」

ヨウコ先輩に無事を報告し体制を立て直した俺はこのままデスドラゴの左角を狙い続ける事を提案する。強い負荷を掛け続けると破壊出来る可能性が高くなる事も伝え、再び怪獣に肉薄した。

ウインダムの攻撃でデスドラゴの注意を反らし、その僅かな隙をセブンガーの拳を角に当てる。

「キシャー!ツ!!」

咆哮を上げながら二機を振り払うデストラゴ。だが自慢の左角は損傷が酷く後一步で破壊出来る所まで来ていた。ヨウコ先輩のウインダムが一旦距離を離し、ブースターでの加速を乗せたウインダムのドロップキックがデストラゴの角を見事叩き折った!

「良し!これであの鹿野郎も大人しく……。」

撤退してくれると安易な考えをしてしまった自分を恥ずべきだった……。角を折られたデストラゴは増々怒り狂い残った片角での電撃と口からの火炎で周囲を破壊し尽くした!

「キシャーーーーッ!グルルルアアアーーーーッッ!!」

セブンガーも大破し、ウインダムも電撃と火炎の影響で大破した事から活動停止に陥ってしまう。それどころか自身の角を折ったウインダムを破壊し尽くそうとデストラゴは歩を進めたのだ!

「ヨウコ先輩!!」

【ヨウコ!?逃げろ!オイ!!】

【ヨウコ!早く!!】

俺や蛇倉隊長、ユカ先輩がヨウコ先輩に通信を送るも反応が全く無い…。

「止めろー!!」

俺は怒りのままにゼットライザーのトリガーを押し込んだ!!

「宇宙拳法秘伝の神業！ゼロ師匠、セブン師匠、レオ師匠！！」

荒れ狂うデスドラゴに素早く対応する為、俺は3人の師匠のメダルをセットする。

『ご唱和ください我の名を！ウルトラマンZ（ゼーラット）！！』

「ウルトラマンZ（ゼーラット）！！」

変身した俺達は空中から踵落としを決めデスドラゴを地面に叩きつける。

“シユワツ！”

ウインダムの目の前で構えを取りながらデスドラゴを鋭く見据え互いに間合いを詰めるのだった！

第29話 友情ヨーソロ 後編

Zさんに変身した俺、夏川ハルキはデスドラゴに向かって走りながらその顔面に拳を叩き込む。

“シユワツ!!”

顔面にクリーンヒットしたデスドラゴはよろめきながらも殴られた衝撃を逆手に取り尻尾を叩きつける。大木に打ちつけられるような衝撃を堪えながらガラ空きになった背中に蹴りをお見舞いする俺達だったが屈強な身体を誇るデスドラゴに活路を見出だせないでいた。

『このままじゃキリが無い……。どうする!?!』

「先ずはもう片方の角を狙いましょう! Zさん!!」

ユカ先輩の作戦通りデスドラゴの残った角を破壊する為俺は兄さん達3人のメダルをセツトする。

「真つ赤に燃える勇気の力! マン兄さん、エース兄さん、タロウ兄さん!!」

『ご唱和下さい我の名を! ウルトラマンZ (ゼーラット)!!』

「ウルトラマンZ (ゼーラット)!!」

ベータスマッシュにウルトラフュージョンした俺達はデスドラゴの角を叩き折ろうとタツクルをして密着するが数秒の組合からお互いの力比べは互角と判断し、デスドラゴの鼻先を掴み勢い良く地面にぶつける。

『ジューワッ!!』

このまま角を折ろうとマウントをとり拳を振り上げた瞬間、デスドラゴは角からの電撃と口からの火炎を同時に発射してきた。

〃キシャーッ!!〃

雄叫びを上げながら丸太の様な足で蹴り飛ばされ今度は俺達が逆に馬乗りになれる。カラータイマーも点滅し活動時間が残り僅かな時

「頑張つて！立つてよ!!」

近くからの声に気づき俺達は視線を左上に向けると曜ちゃんが声を張り上げていた。

私、渡辺曜は町を破壊し尽くす怪獣に恐怖と同じ位別の感情を持つてしまっていた。

「あの怪獣、目に見える物を片っ端から壊してる。八つ当たりみたいに…。」

特空機に攻撃している時、破壊する理由も無く目についたビルなどを手当り次第破壊している怪獣に何故か同じ物を感じてしまった。規模は人間と怪獣とかなり違うが上

手く行かない自分に苛立ち、人や物に当たり散らす私と町を壊す怪獣のどこが違うんだろうと思いがら……。特空機も破壊されハルキ君がウルトラマンZに変身しても未だ活路が見いだせていない。

「（ハルキ君にも謝つてもいいし、千歌ちゃんにも本音をぶつけていい……!）」

自分の伝えたい事を何一つ伝えられないまま大切な町や友達が傷つくのは耐えられないという良心に駆られ私は全速力でウルトラマンZに：ハルキ君の下に向かつて走り出していた。

「頑張つて！ウルトラマン!!」

ハルキ君達が戦いの邪魔にならない位置から大きく声を張り上げる。

『ジュワツ……。』

私の声に気づいたのか顔を向けるハルキ君に私は言葉を続ける。

「私には謝らなければいけない……仲直りをしたい友達と、大切な事を伝えなくちゃいけない友達がいるの！応援する事しか出来ないけど、あなたにも無事に帰ってきて欲しいから……。だから」

この後、今以上の大きな声で彼らに伝える。

「頑張つて!!!」

私の応援を受け取ったのかハルキ君達は大きく頷き、力を込めた自身の右手を怪獣の

顔面に叩き込んだ!!

“キシヤーツ!”

強烈なパンチでふっ飛ばされた怪獣は痛みで数秒顔を抑え、痛みを和らげようと身を屈める。この瞬間がチャンスと捉えたハルキ君達はまるで瓦割りをするように右の角目掛けて振り下ろした。

『ジユワツツ!!』

ボギツと野太い音がした瞬間怪獣の立派な角が叩き折られる。

「やった!!」

これで怪獣も満足に戦えない筈。案の定顔を殴られた時以上に苦悶する敵にハルキ君達は光線を打ち込む。

『ゼステイウム光線!!』

直撃を受けた怪獣は木っ端微塵になりハルキ君達ウルトラマンZは私を振り返る。

「ありがとう!」

“ジユワツツ!!”

敬礼をする私にハルキ君達はサムズアップを返し空へ飛び立っていった。

戦いを終えた俺、夏川ハルキは救護班にヨウコ先輩を病院に搬送するように要請し、近くで応援していた曜ちゃんに駆けつけお礼を言う。

「曜ちゃん、さつきはありがとうございませう！あの時声を掛けてくれなかったらきつと……」

勝てなかったかも知れないと言おうとした時、曜ちゃんからジエスチャーで待ったを掛けられる。

「お礼を言うのは私の方。ありがとう、町を守ってくれて。それと……」

数秒口籠った彼女が意を決して謝罪をする。

「昨日は酷いこと言つてごめんね……」

涙を溜めながら謝る曜ちゃんに俺も同じ様に謝罪をする。

「俺の方こそ、すみません……。人の気も考えずに心無いことを言つて。」

お互いに仲直りをした時、曜ちゃん自身があの怪獣と同じ様に思ってしまった事を告白される。昨日は俺に、今日は物に当たってしまった自分とデスドラゴが重なってしまった事に……。それを聞いていた乙さんが彼女に伝えてほしい事があるそうなので俺が代弁することになった。

「人間の悪い心や感情が怪獣を生み出してしまう事があるみたいツス。ここからは俺の考えなんすけど、そういつた感情は誰でもあつて皆が怪獣になつてしまふかもしれない

…。」

乙さんの先生はそういった可能性を大きく秘めてしまう中学生を学校の先生として教えていた事も知った。でも…

「素直に本当の気持ちを伝える事、それが怪獣にならない秘訣なのかもしれないツスよね。」

ちよつと説教臭いかも知れなかったけど曜ちゃんも普段の様な明るい笑顔で俺の肩を叩く。

「かもね！千歌ちゃんと後で話したい事もあるから、その時は本音をぶつけるように頑張ってみるよ。」

そう言った曜ちゃんに俺はサムズアップを送り、残った事後処理をする為ストレイジに戻る事にした。

「ハルキ君には言ったものの…。」

怪獣騒動から家に帰り色々考えて見たものの千歌ちゃんにどう伝えていいのか分からず気がつけば夜9時を回っていた。

「本音を伝えるって、何言えば良いんだろう…。」

千歌ちゃんに壁ドンして梨子ちゃんと私のどちらが大事か問い詰めたり、か弱い女の子を装い自分の事は余り好きじゃないよね?と問いかけたり。終いにはセイウチの着ぐるみを着て千歌ちゃんに告白するという馬鹿丸出しの思考をしてしまい、頭がショート寸前であった。もう考えても仕方ないしこのまま寝るかと思いつながらベッドにダイブしたその時、枕元に放り投げてあつた携帯から電話が鳴る。

「(梨子ちゃんから…?)」

一瞬躊躇してしまうも私は電話を受け彼女と話をする。

「もしもし、何かあつた?」

「ううん、怪獣がまた出たつて聞いて心配だったのもあるけど…曜ちゃんが私のポジションで歌う事になつたつて聞いたから。」

恐らく情報の出処は千歌ちゃんだろうなと推測を立てていると、梨子ちゃんから今回のピアノコンクールで急にポジションを変更になつた事について謝られる。

「ううん、全然…」

「私の事は気にしないで…。2人でやりやすい形にしてね。」

そう言つてくれるのは嬉しかったけどもう私が千歌ちゃんに合わせる事を伝えようと一瞬言い淀む。

「無理に合わせちゃダメよ曜ちゃんには曜ちゃんらしい動きがあるんだし。」

その言葉に私はすっかり自身を無くしてしまっていた…。この時間、この段階で自分らしさを求めてしまつてはラブライブに間に合わないんじゃないかと思つているから…。

「千歌ちゃんも絶対そう思つてる。」

「そんな事無いよ……。」

梨子ちゃんの助言を否定した私の言葉は強がりなんかじゃない。自分の本音だった…。

「千歌ちゃんの隣には梨子ちゃんが一番合つてると思う。だって…千歌ちゃん、梨子ちゃんがいると嬉しそうだし…梨子ちゃんの為に頑張るつて言つてるし……。」

私は涙声になりながら、梨子ちゃんを見る千歌ちゃんの顔を思い出し、千歌ちゃんが言つていた言葉を伝える。

「…そんな事思つてたんだ。」

自分が梨子ちゃんに嫉妬をしている事を察せられたのか、はたまた呆れられたのかはこの時の私には分からなかったが今度は千歌ちゃんが梨子ちゃんに話していた事を伝えられる。

「前話してたんだよ？ 曜ちゃんの誘いをずっと断つてきて、ずっとそれが気になつてるつて…。」

そうだ、中学も高1の頃も一緒に何かをする事は無かった。

「でもスクールアイドルは絶対曜ちゃんとやりきるって!」

それを聞きしばらく話した後、家に外から私を呼ぶ声が聞こえ窓を開ける。そこには…

「千歌ちゃん!?! どうして…?」

練習着を着た千歌ちゃんが2階にいる私に大きく手を振っていた。

「練習しようと思つて!」

この時間から練習と思いながらも千歌ちゃんは一層の事大きな声で伝える。

「考えたんだけどやっぱり曜ちゃん、自分のステップでダンスをしたほうがいい。合わせるんじゃなくて、1から作り直した方がいい! 曜ちゃんと私の2人で!!」

それを聞いた私は玄関を飛び出し千歌ちゃんに視線を合わせない様、背を向けて彼女の服を手探りで触る。

「汗びっしょり…。どうしたの?」

その間に笑いながら千歌ちゃんが答える。

「バスは無いし志満姉も美渡姉も忙しいし、ハルキ君もまだストレイジに居るみたいだし…。」

だからって私の家まで相当な距離なのに自転車で来るなんて馬鹿すぎる…。

この会場に居るシュシュとリストバンドを付けた9人と東京の梨子ちゃんの手が同時に振り上がった気がした。

♪ 想いよひとつになれ

ライブをしている最中、梨子ちゃんと話した事を思い出す。なんでスクールアイドルなのか、スクールアイドルじゃなければならなかったのか…。それがあの時やつと分かった。千歌ちゃんにとって輝く事は自分一人だけじゃ無く、誰かと手を取り合い皆で一緒に輝く事。私や梨子ちゃんや、普通の皆が集って一人じゃとても作れない大きな輝きを作る…。その輝きが学校や聴いている人に伝わって広がって、繋がっていく。

それが千歌ちゃんがやりたかった事。スクールアイドルの中に見つけた…輝きなんだ！

第30話 はばたきするとき 前編

ラブライブ予備予選も無事終わった翌日の朝、松月の目の前で予選結果を待っていた私、渡辺曜とAqoursのメンバー。

「まだ分からないの?」

「全く:~:どれだけ待たせるんですの!?!」

私の携帯を見ながらソワソワする黒澤姉妹。

「あああつ!~:こういうの苦手なんだよ!!」

果南ちゃんも焦らされる事にイライラしてしまい、海岸を走っていかうとする。

「結果出たら教えるねー!」

「いいよ、別に聞きたくない!」

千歌ちゃんが後で教えると言うも結果を知りたくない果南ちゃんだが、結果が分からなくても良いのかを問われると「それも嫌!」と首を横に振る。

「(うわっ面倒くさつ:~:)」

内心そう思いながら外に置いてある自販機でジュースを買い自分も落ち着かない気持ちを一且抑える。

「あんまり食べてると太るよ?」

隣でパクパクとパンを食べている花丸ちゃんが気になるのか鞠莉ちゃんが太る事を忠告するも、本人曰く食べていないと落ち着かないとの事で今も尚食べ進めている。

「リトルデーモンの皆さん、この墮天使ヨハネとA q o u r sに魔力を、靈力を…! 全ての……力を!!」

善子ちゃんに至ってはアスファルトに鋼の錬○術師みたいな錬成陣と蠟燭を立てた中心で祈願をしているが、真横を通過した大型トラックの風圧でお約束の様に全部の灯が吹き消されてしまった。

「消すなーーーーーッ!!」

「ううつ、不吉なんだけど善子ちゃん…。」

絶叫する善子ちゃんの端で涙目になりながら呟くルビィちゃん。皆の不安がピークに達しそうな時、やっと予備予選通過グループが発表された!

「来たっ!!」

その言葉に全員が私の周りに集まり携帯を見つめる。

「ううつ、緊張する…。」

千歌ちゃんの険しい顔を横目で見ながら私も画面を見つめていたが

「A q o u r sのアですわよ?ア!ア!!ア!!」

とダイヤさんが私の頭を抑えて圧を掛けていた。

「あああつ！頭押さえないで！！通過グループは「イーズーエクスプレス」…。」

A q o u r s のアの字も無いグループ名に私達全員が肩を落とし打ちひしがれる。

「嘘…。」

「落ちた…。」

果南ちゃん、千歌ちゃんの死人の様な声を聞きながらサイトを閉じようとした時、画面に映っている※マークを注視する。

「あつ、エントリー番号順だった…。」

皆がギャグ漫画みたいにならずっこけるも気を取り直してA q o u r s の名前を探していく。頭から探して4番目に…。

「A q o u r s …。 あつた！あつたよ!!」

皆が手を上げ、喜びながら私も外のベンチに腰掛ける。これで千歌ちゃんも梨子ちゃんとの約束が果たせし、私達も次のステージで歌える。

「いや、ホツとしたホツとした！さあハルキ君にも報告しよう!!」

ストレイジにいる彼に今回の結果を報告する為、予選通過の結果をスクリーンショットした。

ストレイジでのブリーフィングを終え蛇倉隊長から早く皆の所に行つてやれとの指示を受けた俺、夏川ハルキは部室の机を占領している舟盛りに言葉を失っていた…。

「さあ、今朝取れたばかりの魚だよ！皆食べてね!!」

果南ちゃんが用意してくれた魚を早速頂く。

「いやあ旨いっす！捕れたてはやっぱり身が締まっています!!」

ブリーフィングが終つて美味しいものを食べる。これだけで沼津にいて良かったと心底思っていたのだが…。

「…何でお祝いに刺身?」

千歌ちゃんが果南ちゃんに問うも

「だって干物じゃお祝いっぽく無いかなって…。だから急いで捕れたての魚用意してきたの!!」

ドヤ顔で、褒めていいよ!とアピールをする果南ちゃんに千歌ちゃんと花丸ちゃんが引きつった笑みを浮かべる。

「千歌ちゃん、刺身嫌いなんスか?」

あんまり嫌いな食べ物が無かった覚えがあるが一応聞いてみる。まあ刺し身が苦手でも8人も居れば大きな舟盛りでもあつという間に平らげらるだろうと思っていたが

「嫌いじゃ無いけどそれ以外に他にもあるでしょ？夏みかんとか！」
「パンとか！」

自分の食べたいものを挙げる千歌ちゃんと花丸ちゃん。

「嫌…その二品じゃ刺し身の方が絶対いいツスよ！」

「そうそう！鮮度が落ちない内に早く食べよう。」

皆が刺し身を口に運びその味を絶賛する中、ルビイちゃんがノートパソコンを抱えながら猛ダツシユで部屋に駆け込んで来た。

「見てください！PVの再生回数が…!!」

そこに表示されていた再生回数はなんと約16万。前回よりも文字通り桁違いの数
字を叩き出していた！

「ええつと、前回は大体5万再生だった気がするから……。」

「3倍も増えてるズラ〜!!」

俺と花丸ちゃんが驚きで口をあぐり開ける中、ルビイちゃん曰コメントも沢山書き
込まれているとの事で

「可愛い…。」

「全国出てくるかもね。」

「これはダークホース!!」

と花丸ちゃん、ダイヤさん、果南ちゃんがコメントを読み上げる。

「良かった。今回は0じゃ無くて…。」

「そりやそうでしょ？予選突破したんだから。」

曜ちゃんが東京での結果と同じにならなくて良かったと安堵する中、善子ちゃんが当たり前だと突っ込みを入れる。

「まあ少なくとも、これで0だったものが1に出来た…。あの姉妹も少しは俺達の事を見直すんじゃないんすか？」

東京でA q o u r sを散々コケにくれたS a i n t S n o wの事を思い出す。自分の携帯であの姉妹の最新楽曲の再生数を見たところ、俺達の方が上だったし、暫くは大きな顔は出来ないだろうと踏んでいた。そんな時、千歌ちゃんの携帯から電話が鳴り応答する。

「もしもし？梨子ちゃん！」

どうやら梨子ちゃんから電話な様で、皆に聞こえるようハンズフリーにして携帯を机に置く。

「結果見たわよ？予選突破おめでとう！」

「ピアノの方は？」

千歌ちゃんの問いに梨子ちゃんもバツチリと言わんばかりの明るい声音で、無事に弾

けた事を伝えられる。

「探していた曲が弾けた気がする…！」

「良かったね!!」

「おめでとうツス！」

俺も自身の壁を乗り越えた梨子ちゃんを激励し、曜ちゃんも次は一緒に歌おうと彼女に伝える。

「次は9人で一緒に歌おうよ！全員揃ってラブライブに!!」

曜ちゃんの提案に梨子も明るく肯定し電話を終えた皆の顔はとても晴れやかな表情だった。

『ハルキ、曜が梨子に持っていた蟠りは無くなったみたいだな?』

「(みたいツスね!)」

デスドラゴを倒した翌日から千歌ちゃんと曜ちゃんのダンスも彼女達らしい動きになっていったし、良い方向に傾いたのだろう。

「今年のラブライブで有名になって浦高を存続させる…。気合が入りますわ!」

「頑張ルビー!」

ダイヤさんが浦高と書かれた扇子を広げ、ルビィちゃんと一緒に改めて気合を入れる。それを見ていた果南ちゃんも、学校説明会もバッチリやり切るしかないねと黒澤姉

妹にサムズアップを送っていた。

「説明会？」

千歌ちゃんの疑問に鞠莉さんが9月に行うことをこの場で伝えた。

「きつと今回の予備予選で学校の名前もかなり知れ渡った筈！」

「当然ツスよ！きつと説明会に参加をする受験生がドバドバと……！」

「鞠莉、今どの位参加希望者がいるの？」

ダイヤさんの言う通り、予備予選突破のネームバリューはかなり多いものになると俺も踏んでいた。善子ちゃんが鞠莉さんに現時点での説明会の参加希望者を調べてほしいと頼み、彼女も機嫌良く本校のサイトを検索する。だがその笑顔は一瞬で崩れ、愕然とした表情を浮かべていた……。

「0……。」

「「えっ？」」

俺、ダイヤさん、善子ちゃんが半ば現実逃避に近い声でもう一度鞠莉さんに問いかける。だが回答はさつきと変わる事無く、現時点の参加希望者は0人だとはつきり告げられた。

「はああつ!!？」

「嘘……、嘘でしよ!!？」

この現実には部室の空気が凍り付き、俺とダイヤさんがもう一度よく見てくれと鞠莉さんに頼む。だが再度確認しても0のまま数字が変わることが無く

「0…。」

「1人も居ないって事…。」

千歌ちゃんと曜ちゃんの問いに頷く事しか出来ない鞠莉さんの顔は誰よりも悲壮な顔をしていた。

学校説明会参加人数が0という現状をどうしたら良いのかも分からず私、高海千歌は果南ちゃんの家のウッドデッキで曜ちゃんと話をしていた。

「東京のイベントでも0、学校説明会でも0。……また0かあゝゝ。」

雲一つない青空を仰ぎつつ、0という数字に呪われているのではないかと思う中「入学希望となると話は別なのかな…。」

と、曜ちゃんも目の前にあるかき氷を突つつき、以前高山さんから貰ったエスプレッソダーを型取った小物入れにあるラムネ菓子を食べながらぼつりと呟いていた。

確かにバス通学で山の上にあつて、生徒も少ないという三重苦の高校だが良い所も沢山ある。A q o u r sと同じ位、学校にも興味を持って欲しいのだけ…。

「だってあれだけPVが再生されてるんだよ？予備予選が終わった帰りだって…。」

予備予選が終わり皆で学校に帰ろうとした時2人の女子校生がAqoursに、正確には果南ちゃんとハルキ君に声を掛けてきた。

「あの、Aqoursの果南さんと…。」

「マネージャーのハルキさんですよね？」

女子高生の問い掛けに狼狽えながらも肯定する果南ちゃんと、対象的に「オッス！」と答えるハルキ君。

「サイン下さい!!」

色紙とサインペンを渡され増々オロオロする果南ちゃんと、何故か手慣れた様子でサインと端にセブンガールのポップなイラストを書くハルキ君。

その近くでは曜ちゃんが違う高校の女生徒とツーショットを撮り、また別の場所ではルビィちゃんに握手を求めるファンから逃げ回っていた。

「お待ちなさい。」

ルビィちゃんを追いかけるファンを姉のダイヤさんが静止し

「変わりに…私が写真を撮らせてあげますわ。」

「どちら様ですか…?」

「アツハツハ！全く認知されて無いじゃないツスカ！アツハツハツハツ 〵バキツ!!」アアアツ！腹がつつ、鳩尾がああつ!!!」

認知されていないダイヤさんに、サインを書き終え爆笑したハルキ君が彼女からポディブローを叩き込まれる中々にカオスな空間が生まれていた。

「つて大人気だったのに…。」

「ダイヤさんとハルキ君の下りは要らなかつたんじゃないかな…。」

私の回想に曜ちゃんがツツコミながら、これで生徒が増えなかつたらどうすれば良いんだろうと考える。廃校が確実に決まってしまうのは明らかだ…。

「μ×sはこの時期には廃校を阻止してたんだよね？」

「えっ、そうだったけ？」

μ×sの話題を上げる曜ちゃんが、音ノ木坂を廃校から救っていた事を聞き私はビツクリして聞き返す？

「うん、学校存続がほぼ決まっていたらしいよ。」

「そうなんだ…。」

憧れの人達と同じ時期に始めたのに何も変わらない学校の現状。一体私達には何が足りていないんだろう…。

「仕方ないんじゃないかな…？この学校でスクールアイドルをやるっていうのはそれ程大変って事。」

ダイビングから帰ってきた果南ちゃんが話に加わり私を励ます。

「店も今日は予約0。東京みたいに放っておいても人が集まる所じゃ無いんだよ。」

ラムネ菓子を噛りながら、今学校でダイヤさんと鞠莉ちゃん、ハルキ君を助っ人に入れた3人が学校説明会についての見直しをしていると告げられた。

「でも、それを言い訳にしちゃ駄目だと思う…。それを承知の上で私達はスクールアイドルをやってるんだもん！」

憧れのμsの様に輝きたいし、生徒も殆ど居ない廃校寸前だけど、大好きなこの学校を救いたいという強い気持ちがあるからこれまでスクールアイドルをやってきたのだから。

家に帰った私は、部屋に貼られているμsのポスターに目を向ける。初めて彼女達を見た時は自分とそんなに変わらないって思っていた。普通の人達が頑張った結果、輝いていたんだって思っていたのに…。

「何が違うんだろう…。」

リーダーの差なのか、普通と勝手に思っていただけでそもそもオーラが違っていたの

か…。

「もう考えていても仕方がない。行ってみるか！ハルキ君は明日ストレイジの任務休みて言ってたし!!」

電話を掛けようとした時

「何処に？デートでも行くの？」

と私の真横で美渡姉が首を傾げていた。

「違うよ。ん？何で美渡姉が居るの？」

「何が違うんだらうって言ってた時から居たわよ…。」

今気付いたのかと言わんばかりの目で見られたが構うことなく皆に電話を繋げる。

「東京？」

曜ちゃんの問いかけを肯定し

「うん、見つけたいんだ。μ☒sと私達の何が違うのか。μ☒sがどうして学校を救えたのか、何が凄かったのか。それをこの目で見て皆で考えたいの！」

「そうツスね。それが分かれば学校を救える大きなヒントになるかも知れないツスから

！」

「つまり、再びあの魔都に降り立つという事ね。」

ハルキ君も善子ちゃんも賛成し

「私は1日帰るのを伸ばせば良いけど…。」

梨子ちゃんが若干慌てた様子であったが全員東京に行くことに異論は無く、明日出発することに決定した。

「よし！後は…。」

私は携帯でスクールアイドルのサイトを開き、あるグループを見つける。話を聞くにはうってつけの人に…。

第31話 はばたきするとき 後編

東京に行くことを決めた翌日に私、高海千歌とAquoursのメンバー一行は梨子ちゃんと待ち合わせをしている丸ノ内駅に到着していた。

「うわあ……やっぱり東京は賑やかだね〜！」

相変わらずの人の多さと活気に感動する中、ダイヤさんが3年生と花丸ちゃん、ハルキ君に

「皆さん心をしつかり、負けてはなりませんわ！東京に飲まれないよう……!!」

上ずった声で4人に気をしつかり持つように檄を飛ばす中、ハルキ君と花丸ちゃんだけが律儀に「オッス！」やら「ズラ！」と返事をしている。

「大丈夫だよ！襲つてきたりしないから!!」

「あなたは分かっているのですわ！東京がどれだけ恐ろしいかを……」

宥める私だったが効果は全く無く、何故ここまで東京を敵対視しているのかをルビィちゃんに聞いてみる。

「お姉ちゃん、小さい頃東京で迷子になった事があつたらしくて……」

「こちゃんこちゃんに入り混じった電車の地図を見て号泣してしまつたらしい。」

「そういえば梨子ちゃんは？」

曜ちゃんが梨子ちゃんと合流できていない事を気にして尋ねるも、梨子ちゃんからはここで待ち合わせをしているとメールを見せる。近くに居るか探してみると、コインロッカーに強引に何かを詰める梨子ちゃんの姿を目撃した。

「梨子ちゃん？」

「うわっ！千歌ちゃん!?皆も…。」

狼狽えている梨子ちゃんも気になるがロッカーの中がパンパンになるまで何を入れていたのか気になった為、取り敢えず聞いてみる事にした。

「何入れているの?」

「え〜と…、お土産とか、お土産とか、お土産とか…。」

お土産というワードを聞いた私は条件反射の様に梨子ちゃんに急接近し見せてもらおうとする。みかん味のお菓子とか、東京にしかないスクールアイドルのグッズとかがあるかも知れないと思っただが、梨子ちゃんが驚いて落としたのは予想とは全く違う何かの本だった。

「アアアアアッ!!」

女の子が出しちやいけない様な声を上げる梨子ちゃんが私の両目を塞ぎ視覚情報を強制的に遮断する。

「見えない！見えないよ！」

「何でもない！何でもないから!!」

視覚を封じられた私が梨子ちゃん以外に微かに聞いたのはハルキ君と善子ちゃんが小さな声で何かを話していた事だった。

「何なんツスか…壁クイとか壁ドンって雑誌は？」

「詮索しないであげて。梨子の沽券に関わるから…。」

「オ、オツス…。」

コインロッカーにお土産？を入れた梨子ちゃんがいつもの笑顔を取り戻し目的地に行こうと発破をかける。

「行くって言っても何処に…。」

曜ちゃんの疑問に

「タワ、ツリー、ヒルズ？」

と鞠莉ちゃんが遊ぶ気満々の場所を提案していた。

「今日は遊びに来た訳じゃ無いんだよ!先ずは神田明神に行くよ!」

私の提示した場所に「また？」とルビィちゃんが反応する。

「実は昨日、ある人に、連絡したら会ってくれるって!」

「ある人？」

花丸ちゃんとハルキ君の声がハモリ私に誰が来るのかを問うも、話を聞くにはうつつけの凄い人という事だけは断言した。

「東京、神田明神…。」

「凄い人…？まさか!？」

ルビイちゃんとダイヤさんが想像を膨らませる。

「まさか…！まさか…！！まさか…！！まさか!!!」

「お久しぶりです。」

神田明神で待っていた凄い人が私達の姿を目にし挨拶をする。

「「げっ!？」」

その姿を目撃したハルキ君、梨子ちゃん、善子ちゃんはまるで会いたく無かった人物に再開してしまった様に顔をしかめていた。

「お久しぶりです聖良さん。」

そう、話を聞くにはうつつけの人…。Saint Snowの2人であった。

「なんだあ…：…：…。」

黒澤姉妹がまるで期待して損じたかの様なリアクションをする中、鞠莉ちゃんと果南ちゃんが

「誰だと思つてたの？」

「さあ？」

とジト目で項垂れている2人を見るのだった。

俺、夏川ハルキとAqoursのメンバーはSaint SnowにUTXという大きな高校の一室に案内される。高校というより良い所のオフィスの様な内装に鞠莉さん以外のAqoursのメンバーがそわそわしながら出された紅茶を飲んでいた。

「…予備予選突破おめでとうございます。」

梨子ちゃんがるで社交辞令の様にSaint Snowの姉、聖良さんに言うもその口調から

「以前言われた事をいつまでも引きずらない！」

と鞠莉さんに咎められる。

「Sorry。PVは見たわよ！クールなパフォーマンスだったね。」

と鞠莉さんが改めて謝罪とライバルながら称賛の言葉を送っていた。彼女の大人な対応を見習い、俺も今までの事は引きずらない様に努めようと思った。

「褒めてくれなくても結構ですよ…。再生数は貴女達の方が上なんだし。」

聖良さんも今の時点で負けを認めているが

「でも、決勝では勝ちますけどね。」

と今回の敗北のリベンジをここで宣言された。

「私と理亜は、A—R—I—S—Eを見てスクールアイドルを始めようと思いました。」

あの夏合宿の日に少し調べて見たが、第1回ラブライブ優勝グループでμ'sと並ぶ有名なスクールアイドルでもある事が分かった。Saint Snowも、今のAqoursと同じ様に憧れのグループの何が凄くて自分達と何処が違うのかを考えていた事も…。

「答えは出ました?」

千歌ちゃんの違いに聖良さんも妹の理亜ちゃんも答えは出ず、だからこそラブライブで優勝して同じ景色を見るしか無いとの結論を付けたようだった。

「勝ちたいですか…?」

「えっ?」

千歌ちゃんのその問いに2人はキョトンとした顔を浮かべるも、再度このラブライブで勝ちたいかを真剣な表情で聞き返した。

「姉様…この子バカ?」

「相変わらず口悪いな!お前…。」

理亞ちゃんの一言に苛ついた俺が身を乗り出すも隣に居た鞠莉さんに席に着けと止められる。

「勝ちたく無ければ何故ラブライブに出るのです?」

「それは…。」

聖良さんの問いに言葉を詰まらせる千歌ちゃん。

「μ☒sやA—RISEは何故ラブライブに出場したのです?」

それは俺にも分からなかった。Saint Snowも千歌ちゃんも憧れの人と同じ景色を見たい思いは同じ筈なのに、両者の考えの何かが違うという違和感しか俺には感じる事しか出来なかった。

「そろそろ、今年の決勝大会が発表になります。」

壁に掛けられている時計を見た聖良さんが決勝大会に使う場所を一緒に見ないかと俺達を誘う。この学校の正門前にあるモニターで発表になるのが恒例になっているそうなのだ。

Saint Snowと一緒にUTXの正門前に来た私、桜内梨子とAqoursのメンバー。既に大勢のスクールアイドルやファンが集まり、今年の決勝大会で使われる

会場がスクリーンに表示される。その場所は…

「AKIBA DOME（アキバドーム）……。」

私が呟いた場所…、そこはラブライブでドーム大会が行われる程の大きなドーム。きつとスクールアイドルの誰もがその場所に立ちたいと願う所だった。

「本当に、あの会場でやるんだ…。」

「ちよつと…想像出来ないな……。」

決勝での会場を知ったSaint Snowは用が済んだのか早々に立ち去り、果南ちゃんと千歌ちゃんは自分達がここで歌うかも知れない実感が湧いてこないのか硬い表情のまま画面を見つめている。勿論、他の皆も。それを見た私は全員にある提案をする事にした。

「ねえ、音ノ木坂に行ってみない?」

その一言に皆が弾かれた様に私に視線を向ける。ここから近いし、前回は私の我儘で行けなかった事もあった負い目もあったから…。

「いいの?」

千歌ちゃんが確認するも、私は首を縦に頷き肯定する。

「うん!ピアノ、ちゃんと弾けたからかな?今はちよつと行ってみたいし、自分がどんな気持ちなのか知りたいの。」

自分の中にある壁を乗り越えた気がした私自身の気持ちを知りたい。皆はどうかを問うも、全員賛成との事だった。

「いいッスね。行けばμ×sとの違いが何か分かるかも知れないッスから。」

「そうだね！私も行きたいな。」

ハルキ君、果南ちゃんも同意し私達は早速音ノ木坂に向って歩を進めた。

梨子ちゃんの提案でUTXから歩いて数分、μ×sの母校である音ノ木坂に到着した私、高海千歌とAqours。

「この上にあるの…?」

「長い階段ッスね…。」

曜ちゃん、ハルキ君が緊張した表情で呟く。彼の言う通り、思った以上に段数が多い階段で学校の正門が見えない。

「ううっ、緊張する…。どうしよう、μ×sの人が居たりしたら…!?!」

「へ、平気ですわ！その時はサ、サインと写真と…握手を…。」

「ただのファンズラ…。」

曜ちゃんとハルキ君とはまた違う意味で緊張している黒澤姉妹を見た花丸ちゃんが

やんわりツツコむ中、私の足は無意識に音ノ木坂の正門に向って階段を掛け登っていた。皆が後から追ってくるのを感じながら私は一番に学校の全体像を目にする。鼻根目かもしれないけど、憧れのμsが居たというだけでとても歴史がある様に思える学校にこの時思えたのだ。廃校寸前の学校を救い、ラブライブに出て奇跡を成し遂げた彼女達を通ったこの場所が…。

「懐かしいな…。」

在学していた頃を懐かしむ様な、自分の乗り越えたかった壁を超えた事を喜ぶ様な晴れやかな顔をした梨子ちゃんの眩きに、私もつい笑顔になった。

「あの…。何か…?」

私達10人が学校を見つめているのが気になったのか音ノ木坂の女子生徒が声を掛けてきた。

「すみません、ちょっと見学してて…。」

謝罪をする曜ちゃんを察したのか女子生徒は、スクールアイドルをやっているのかを尋ねる。

「俺達、μsの事知りたくて来たんすけど…。」

ハルキ君が代わりに答えると、女子生徒も

「そういう人多いですよ。でも…。」

私達以外にもここに来るスクールアイドルは多い事を告げ、女子生徒は一拍間を空ける。

「残念ですが、ここには何も残っていないんです…。」

「えっ?」

私は一瞬、女子生徒の言葉が理解出来なかった。彼女の話では、どうやらμsは自分達の物も優勝の記念品も、形に残る物は何一つ残さず卒業したようだ。

「でも、物なんて無くても心は繋がっているから…。」

この言葉は当時のμsが残した、在校生や今後来るであろうスクールアイドルに伝えて欲しい唯一のメッセージとなっているようだ。

「(心は繋がっているから…)」

私が考えを巡らしている最中、1人の女の子がお母さんの元を離れ、私達の後ろにある階段の手摺を滑っている。

「えへへっ!!」

見てくれた?と言わんばかりの屈託の無い笑顔で私達にVサインを送り、お母さんの元に戻って行った。

「どう、何かヒントはあった?」

「うん…。ほんのちよつとだけだ。」

心の繋がりを残したμsとさつきの子。憧れの無い笑顔の女の子。憧れの人達の何が凄かったのか何となく分かった気がした。言葉に表せない小さな気付きだと自覚しながら…。

「梨子ちゃんは？ここにまた来て良かった？」

その問いに梨子ちゃんは笑顔で

「私も来て良かった。」

と肯定する。

「ここに来てはつきり分かった。私、この学校好きだったんだなって！」

笑顔で学校を見つめる梨子ちゃんに微笑み、私は改めてμsの母校である音ノ木坂に向って頭を下げる。それを見た全員、同じ様に頭を下げ感謝の言葉を述べた。

【ありがとうございました！】

音ノ木坂を後にし、電車に乗った私達は夕日に照らされながら今日の事を話している。と言っても私と3年生以外は皆寝ているけど。

「結局東京に行った意味はあったんですの？」

私は海を見ながらダイヤさんが果南ちゃんや、鞠莉ちゃんに尋ねるのを横で聞いている。

「そうだね…。μ×sの何が凄いのか、私達と何処が違うのかハッキリとは分からなかったかな……。」

「果南はどうしたら良いと思う?」

果南ちゃんにどうしたら良いかを尋ねる鞠莉ちゃんに、学校は救いたいけどSaint Snowの2人には思えないとの事だった。

「あの2人、1年の頃の私みたいで……。」

そう言いながら私と同じ様に窓から海を見て黄昏れる果南ちゃん。

「(何も残さなかったか……)」

あの生徒が言っていた事を思い返し、駅に到着した電車の扉が開く。その扉の向こうに夕焼けに照らされている大きな海を見つけた。その時、疑問に思っていた何かが分かった様な気がした私は

「ねえ、海見に行かない?皆で!!」

と寝ているメンバーを強引に起こし、一旦下車させるのだった。

電車を降り海岸で広い海を見渡すAquoursのメンバー。夕日が海を照らしながら水平線に沈む様子を見ながらμ×sの何が凄かったのかを話す。

「多分、比べちゃ駄目なんだよ。追いかけてちゃ駄目なんだよ……。μ×sもラブライブも輝

「きも……。」

何が凄いかと言う答えになっていないのは分かっているし、殆どのメンバーは首を傾げていた。

「どういう事？」

「さっぱり分かりませんわ……。」

善子ちゃんとダイヤさんの疑問に

「私は……何となく分かる。」

と果南ちゃんは私の考えに肯定してくれた。

「一番になりたいとか、誰かに勝ちたいとか、μsってそうじゃ無かったんじゃないかな？」

「勝ち負けじゃ無い……？」

梨子ちゃんの思いに疑問符を浮かべるハルキ君。2人に頷き、μsの凄い所は何も無い所を何も無い場所で自由に走った事だと思おうと述べる。

「皆の夢を叶える為に……。背中を追いかける事じゃ無く、自由に走る事。全身全霊、何も囚われずに自分達の気持ちに従って!!」

私の言葉に皆の顔が夕日に照らされて明るくなる。

「自由……。」

「Run & Run」

「自分達で決めて…、自分達の足で！」

果南ちゃんが、鞠莉ちゃん、ダイヤさんが！

「何かワクワクするズラ！」

「ルビイも！」

「全速前進だね！」

「オッス！」

花丸ちゃん、ルビイちゃん、曜ちゃん、ハルキ君が同意するも

「自由に走ったらバラバラになっちゃうんじゃない？」

「何処に走っていくの？」

皆が別々の方向に向って、グループとして成り立たなくなる事を危惧する善子ちゃんと梨子ちゃんが一つ目標を決めたほうがいいんじゃないかと提案する。当然目標は…

「私は…0を1にしたい！あの時のままで終わらせたく無い!!」

東京のイベントで思い知った他のスクールアイドルとの大きな差、学校説明会の参加人数と私達には0という数字が立ち塞がっている。今居る場所がドン底ならここから這い上がりたい。少しでも前に進んで輝きたいという強い気持ちがあると強く思っているから…。

「それでこそAqoursのリーダー、高海千歌ツスよ！」

「何か本当にこれで1つに纏まれそうな気がする！」

「遅すぎですわ。」

「皆シャイですから！」

ハルキ君、果南ちゃん、ダイヤさん、鞠莉ちゃんの言葉に皆がはにかみ、全員集まって掌を重ねる。その時曜ちゃんからある提案をされた。

「待って、掌を重ねるんじゃない？」

曜ちゃんは右手の親指と人差し指を伸ばし、皆でそれを繋いで大きな0を作り……

「0から1へ！」

と指で1を作って真上に掲げる事を提案する。満場一致で採用され、改めて皆で輪になり大きな0を作る。

「0から1へ……。今、全力で輝こう！Aqours!!」

【サーーンシャイン!!】

指先を天に掲げジャンプした皆の笑顔はとても輝いていた。果南ちゃんが言った様にAqours10人が1つに纏まった事を皆が実感するような笑顔だった。

家に帰って寝る前、私は部屋に貼っていたμ'sのポスターを剥がすことにした。私

らしく、仲間たちと目の前の景色を見て真っ直ぐに走る。それが輝くという事だから。憧れたμsの人達の背中ではなく自分だけの景色を仲間と一緒に探して走る事を決意したから！

第32話 サンシャイン!! 前編

俺、夏川ハルキとAqoursのメンバーはラブライブ地区大会に向けて新曲の振り付けを練習している。

「ワンツースリーフォー…、ルビィちゃんは今の所の移動はもう少し早く。」

「はい!!」

「善子ちゃんは気持ち急いで。」

果南ちゃんの指導の元、ルビィちゃんと善子ちゃんがステップと振り付けを修正し一旦休憩を挟む事にした。

「暑すぎズラ…。」

「今日も日差しが強いよお…。」

ぐったりと倒れる花丸ちゃんとルビィちゃんに曜ちゃんがポカリを渡す。

「ハイ！水分補給は欠かさない約束だよ。」

一方果南ちゃんはペットボトルの水をガブ飲みしながら内浦の海を眺めていた。

「今日もいい天気。」

「休まなくていいんですの？日向にしていると体力持っていけませんわよ。」

「果南はシャイニーな子だからね。」

風の子ならぬ太陽の子の果南ちゃんとは対象的に善子ちゃんがコンクリートの上でバテていた。

「大丈夫ツスカ…?」

「うぐぐぐ…。」

俺が団扇で善子ちゃんを扇いでいるのを見かねたダイヤさんが

「黒い服は辞めた方がいいとあれ程言っただけではないですか…。」

と善子ちゃんの黒ローブを脱がせながら軽く頭を小突く。

「黒は墮天使のアイデンティティ。黒が無ければ生きていけない…。」

「何言ってるのか? 熱中症になるツスよ。」

訳の分からないボケをかます善子ちゃんをダイヤさんがジト目で見ながらローブを俺に渡す。このローブ、見た目は暑苦しそうだけどメッシュ加工なんだな…。

「千歌ちゃん飲んで!」

屋上の出入り口付近で梨子ちゃんに投げ渡されたポカリを千歌ちゃんが見事にキャッチする。

「私、夏好きだな…。何か熱くなれる!」

一気飲みし、青空を見上げながら呟く千歌ちゃんに梨子ちゃんも曜ちゃんも同意する

様に笑いかける。

「よし、そろそろ再開しようか!!」

水分も取り、練習を再開しようとか千歌ちゃんが気合を入れたその時

「ぶつぶぶですわ!!」

とダイヤさんが待ったを掛けた。

「オーバーワークは禁物ですわ!」

「By果南! 皆の事も考えてね。」

鞠莉さんも忠告し

「そっか…、これから一番熱くなる時間だもんね。」

と千歌ちゃんも時刻を確認する。現在の時刻は13時半、ここから更に気温が上昇する事が分かった千歌ちゃんは手を合わせて軽く謝罪をする。

「ラブライブの地区予選も近づいて焦る気持ちも分かるけど、休みも取らないと大事になるツスよ?」

俺が千歌ちゃんを制止すると梨子ちゃんが笑いながら

「ハルキ君も『偶には』マナージャーっぽい事言うようになったね。」

とからかってくる。

「何ツスか!?! 『偶には』って!」

冷えたペットボトルを彼女の頬にグリグリと押し付けながら仕返しをする俺に「こらっ！イチャイチャしてないで2人共百円出して。」

と果南ちゃんが俺達に催促をする。

「やって来たのですね。本日のアルティメットラグナロク…。」

待つてましたと言わんばかりに闘志を燃やす善子ちゃん。

「未来が！時が…、視える!!」

拳を振り上げる彼女を見た果南ちゃんが全員に

「ジャン〜ケン〜ポン!!」

と仰々しく名前を付けた善子ちゃんとは正反対に呑気な声を上げていた。

この俺、ウルトラマンZはアルティメットラグナロクと言う名のジャンケンに惨敗し、アイスの買い出しに行かされている善子をハルキの中からご愁傷様と合掌しながら見ている。

「どうして何時も負けるのかしら…。」

「1258円です。」

ジャンケンの結果に不服を感じる善子だったが、合計金額を店員に言われた瞬間

「誰よ！高いアイス頼んだの!!」

と青筋を立てて地団駄を踏む。

「足りない額は俺が出すからそうカリカリしないで下さいよ…。」

この買い出しジャンケン、いつも善子が負けてしまいハルキのバイクに乗せて貰いながら近くのコンビニまで連れて来られている。それも彼女以外に買い出しに行つた事はこれまで一度も無いのだ…。

『ハルキ、ここまで来ると善子が可哀想になる。どうしたら良いんだ?』

「負けが見えてるのは分かつてるんツスけどね…。俺が全員の買い出し行けば皆が休めるけど善子ちゃんが「今度こそは勝つ!」ってジャンケンをしようとするじゃ無いツスカ?もう無理ツスよ…。」

俺の善子への同情も地球の諺である匙を投げられ、ハルキからも諦められている始末でありました。

「ずらあく。」

「ピギ〜。」

「ヨハア〜。」

「全然こつちに風来ないんだけど…。」

アイスの買い出しを終え、図書室にある扇風機の前を占領しながら涼んでいる一年生

に梨子が文句を言う中

「エアコン付けてくれないかな。」

と曜も設備を良くして欲しい事を口にする。ハルキの部屋にあったエアコンという物は地球人にとって必須なもののだが

「統廃合の話が出てる学校に付く訳無いでしょ！」

と梨子からウルトラ鋭いツツコミが入る。

「まあエアコンを付けたかったら入学希望者を増やすしかない事は確かツスね……」

ハルキも団扇で仰ぎながらのほほんと言う中、千歌が現時点での学校説明会の参加者は何人集まっているのかを鞠莉に聞いていた。

「参加者は今の所……」

パソコンを立ち上げ、参加者の人数を調べる鞠莉。

「今の所……？」

千歌も鞠莉の反応が気になるのか同じようにリピートする。

「今の所……」

「今の所……？」

「『今の所……？』」

やたらと間を空ける鞠莉に千歌だけでなく、俺もハルキも気になってしまう。そして

パソコンに表示された人数は…

「ゼロ〜。」

おちやらけた声音で発表する鞠莉に、千歌がガツクリと肩を落とす。

「そんなにこの学校魅力無いのかな…?」

こんなに頑張っている彼女達の為にも少しくらい興味を持ってくれる人がいて欲しいと思う俺だったが、図書室の扉が開き千歌とハルキのクラスメイト3人が入ってきた。

「あれ?むつちゃん達、どうしたの…?」

「うん、図書室に本を返しにね。」

むつちゃんが手提げに入った本を花丸に渡しながら質問を返し、いつきちゃんが今日も練習をしているのかと千歌に問う。

「うん。日差しが強いし暑いけど、毎日やってるから慣れちゃった!」

ニツと笑う千歌によしみちゃんが「凄い…」と驚く中、休憩も終わり練習を再開する為、3人に手を振りながら図書室を去って行った。

「練習、毎日やってたんだ…。」

「学校を存続させる為に…。」

むつちゃんといつきちゃんの言葉に

「本当に凄いッスよね…。」

とハルキが返す。

「でも凄くキラキラしてて、なんか眩しく見える…。」

よしみちゃんも彼女を尊敬しているような声音で言う中

「学校を存続させる為だけじゃ無い…。多分、千歌ちゃんが最後までやり切りたいて思ってた物がスクールアイドルだったんスよ。」

と、ハルキも図書室の窓から青空を眺め3人に言う。

「じゃあ俺もそろそろ行くッスから。」

千歌達に合流する為、図書室を出るハルキに「千歌達に宜しく！」とむつちゃん達の言伝を預かり屋上に向かって行った。

むつちゃん達と別れ練習を再開し、一日のメニューを全てこなした俺、夏川ハルキとAqoursのメンバー。

「ふう〜、今日も動いた動いた！」

千歌ちゃんのやり切ったというリアクションに

「でも日に日に良くなってる気がする！」

「そうツスね。素人目線だけどダンスの動きも洗練されてると思うツスよ?」

と、曜ちゃんと俺が相づちを打つ横でダイヤさんが歌の完成具合を梨子ちゃんに聞いていた。

「花丸ちゃんとハルキ君と歌詞を詰めてから、果南ちゃんとステップを決める所です。」
「ハルキ君、ストレイジの任務で忙しいのにもありがとうズラ。」

花丸ちゃんのお礼に

「オッス! 飲み物渡したり、ペースメーカーだけじゃなくて、少しは皆の力になりたいツスから!!」

と答える俺。今回初めて歌詞を考えたがかなり苦戦し、改めて千歌ちゃんの苦労が分かった気がする。

「よしよし! ハルキや梨子、花丸のお陰で聴いてる人のハートにシャイニー出来る曲が出来るわ〜!」

俺達3人の頭を撫でながら褒める鞠莉さん。毎度の事ながらこの年になって頭撫でられるのは結構恥ずかしいんだが…。

「まあ、とにかく今は疲れを取って明日に備えよう。」

果南ちゃんの指示で部屋に戻ろうとした時、屋上にむっちゃん達3人が訪ねてきた。

「あつ、いたいた…。千歌〜!!」

「あれ？むっちゃちゃん達、帰ったんじゃないの？」

俺達が屋上に行った後もAqoursの事が気になったらしく、練習が終わるまで待っていた様だった。

「千歌達さ…、夏休み中ずっとラブライブに向けて練習してたんでしょ？」

「そんなにスクールアイドルって面白いのになって…。」

よしみちゃんといつきちゃんの問いに肯定する千歌ちゃんに、むっちゃちゃんがある提案をした。

「私達も、一緒にスクールアイドルになれたりするのかなって…。学校を救う為に。」

ルビィちゃんの返しに、むっちゃちゃんも首を縦に振り肯定する。統廃合の話が出た当初は、皆最初は仕方が無い、たかが学生の自分達が頑張っても無理なんじゃないかって思っていたそう。だが皆この学校が大好きで、何もせずに廃校になったらきつと後悔すると思っている生徒が多数いる事を告げられる。千歌ちゃん達だけじゃ無く、スクールアイドルとして自分達も力になりたいと思う人が沢山いる事を、俺達はこの時知ったのだ。Aqoursのこれまでの行動が皆の心を動かした事を実感した俺達は目に涙を浮かべる。

「ううっ…。やろう！皆で!!」

千歌ちゃんの鶴の一声で浦の星全員をスクールアイドルとしてエントリーする事を決めたのだった。でも……。

「……………」

梨子ちゃんが見せた、思い詰めた顔に気付いた俺はこの時、何を伝えなかったのか聞けないでいた。

「そっか…。皆をスクールアイドルとしてステージに立たせてあげる事、出来ないんだ……………」

「うん……」

私、高海千歌は帰宅後に早速浦の星全生徒をスクールアイドルとして輝かせる為色々模索している最中だったのだが、たった今梨子ちゃんからそれが実現出来ないという悲報に肩を落としていた。梨子ちゃんが調べてくれた情報だとラブライブに参加できるのは事前にエントリーした人数までであり、メンバーの増員は認められずステージ上にかかる事も出来ない事が規定されているみたいだ。

「ごめんね。千歌ちゃん、色々考えてくれたのに……」

申し訳無さそうに謝罪をする梨子ちゃんに気にしていないことを告げる私。むしろ

ギリギリにこの事実を知る事態にならなくて良かったと思う事が不幸中の幸いだっただろう。

「あのね梨子ちゃん、今日むっちゃん達と話していて思ったんだ。何で入学希望者が0なんだろうって…。ここに居る生徒達皆、この学校が大好きなのに。素敵な場所だつて思っている筈なのに…。でもこの現状を覆せないのはその事がまだまだ伝わって無いつて事だね。」

ラブライブがどうでもいい訳では無い。でも私達の通っている学校の良さがきちんと伝わる事が出来れば0を1に出来るかも知れない。

「いや、学校の全員がステージに上がれなくても皆の熱意があれば〃0が1に変わる〃!!」

そう確信した私の言葉に口角を上げた梨子ちゃんが無言でサムズアップを送る。だが…。

「千歌ちゃん…!!」

サムズアップを送った彼女が突然、霊でも見えてる様な青ざめた表情で私の後ろを指差す。

「うわっ！お母さん!?!」

ドツキリが大成功した子供の様に笑うお母さんが梨子ちゃんに改めて自己紹介をし

た。

「初めまして高海千歌の母です。貴女が梨子ちゃんね?」

「は…初めまして。」

互いに挨拶を交わした後、東京に居る筈のお母さんが何故帰っているのかを問う私。

「いや、東京で仕事してたんだけど、千歌がスクールアイドルつての始めたから志満と美渡から見に来てつて電話が来たのよ。ハルキ君もマネージャーなんですよ?」

また余計な事を…と思いつながら

「とにかく今は梨子ちゃんと大事な話をしてるから他所に行つてて。」

とお母さんに下に降りるように言う。

「はいはい。後でハルキ君を迎えに行つてきて?今日は焼肉だから。それと千歌、今度
は……『辞めない』?」

お母さんの何かを試す様な口振りに私ははつきりと伝えた。

「辞めないよ…。今度は、今度こそは絶対…!!」

第33話 サンシャイン!! 後編

ラブライブ予選当日Aqours9人と俺、夏川ハルキは一足早く東海地区予選会場前に来ている。

「むっちゃん達来てないね…。」

「多分ここで合ってる筈なんだけど…。」

「あつ、来たツスよ!!」

待ち合わせ場所に来ないむっちゃん達を心配してか千歌ちゃんと曜ちゃんがソワソワする中、遅れてきた3人と浦高の生徒数人が来たことを2人に伝える。

「ゴメン、ちよつと道に迷っちゃって…。」

謝罪するむっちゃんに曜ちゃんがこのメンバー以外は来ているのかと問いかける。

「それなんだけど…。」

俯くよしみちゃんを見てこれ以上は来ない事を察した俺達。今日集まったメンバーはざっと14、5人でありAqoursのメンバーは少し肩を落としてしまう。

「仕方無いわよ。夏休みの予定もある筈だし…。」

「それに3年生に至っては受験勉強もあるズラ…。」

善子ちゃん、花丸ちゃんが俺達に余り気を落とすなと励ます。だが、むつちゃんがよしみちゃんとさつきちゃんの顔を見合わせ…。

「皆〜！準備は良い？」

その掛け声と共に大勢の浦高の生徒が駆け寄って来た!!

「全員で応援するって!!」

俺達A q o u r sのメンバーが驚いた顔で固まってるのを見たむつちゃんが、悪戯が成功した子供の様な笑顔を向けサムズアップをする。

「ありがとう！これなら絶対、浦高の魅力が伝わる!!」

千歌ちゃんが代表してお礼を言い、よしみちゃんとさつきちゃんが

「私達は客席から地球一、いや宇宙一の応援をしてみせるから！」

「浦高の力を他の観客に見せてあげてよ!!」

とエールを送る。

【はい!!】

俺達も気合が入った返事を返し、千歌ちゃん達はステージ衣装に着替える為、会場の更衣室に向かって歩を進めた。

『ハルキ、千歌達は大丈夫だよな…?』

Zさんがソワソワしながら俺にA q o u r sが今回のラブライブで良い結果を残せ

るかを聞いてくる。

「それは俺にも分からないツス。でも信じてますから！A q o u r s は今日の為にこれまで頑張ってきたんだ。それに今日は俺や乙さんだけじゃない、学校の皆も応援してくれている。」

信じましようよと乙さんに言いながら俺はクラスの皆と客席に向かうことにした。

「実はまだ、信じられないんだ。今こうしてここに居られる事が……。」

私、黒澤ルビイは控室で自分の胸の内を花丸ちゃんに明かす。

「おらもズラ……。高校に入った頃は正直、ルビイちゃんと中学の時みたいに図書室で本を読みながら3年間を過ごすんだらうなとばかり思ってた。スクールアイドルとして大きなステージに立つ事なんて夢みたいズラ……。」

同意見だと返す花丸ちゃん。ルビイもスクールアイドルは好きだけど、自分がステージに立つ姿なんて想像はしなかった。性格を考えても、お姉ちゃんが本当にスクールアイドルとして活動をして、それを終えてしまった時に自分なんか出来る筈が無いと殻に籠もっていただけだった。

「何馬鹿な事言ってるの!?!今こそがリアル、リアルこそが正義よ。」

緊張し、卑屈になりかけているルビイと花丸ちゃんに善子ちゃんが活を入れ思いっきり抱きしめる。

「ありがとうね…。ここで歌えるのも墮天使を受け入れてくれたAqoursの、2人のおかげよ。さあ、後はスクールアイドルとなってステージで墮天するだけ！浦高の皆の為に、一緒には立てないハルキやZの為に…。やるわよ!!」

「うん!」

「黄昏の理解者ズラ!」

ルビイも花丸ちゃんも力強く善子ちゃんに返事をする。3人何かしら自分に自信が持てないタイプかもしれない。でも「この3人と“Aqoursならきつと今の自分を変えられるんじゃないかと確信していた。

「行くわよ、墮天使ヨハネとリトルデーモン!ラブライブに…!!」

「降臨ツ!!」

善子ちゃんの掛け声と共にルビイはハルキさんがライザーを掲げるポーズを、花丸ちゃんはZさんの光線ポーズを取り、控室を後にした。

私、松浦果南はダイヤと客席からステージを見ながら話をしている。

「高校3年になってからこんな事になるなんてね……。」

「全くですわ。誰かさんがしつこいおかげですわね。」

ダイヤの返しにこの場に居ない鞠莉には感謝していると笑いながら言う

「感謝するのは私だよ…。」

と、さっきの会話を聞いていたのか鞠莉も会話に加わってきた。

「果南とダイヤが居たからスクールアイドルになって、ずっと2人が待っていてくれたから諦めずに来られたの。」

私が出っぱねても突っぱねても折れずに誘ってくれたからこそ、ここまで来れた…。鞠莉が何処かで諦めていたらスクールアイドルを再びやり直す事も、今の様に笑いながら他愛の無い話をする事も無かった筈だ。

「あの時置いてきた物を…もう一度取り戻そう。」

「勿論ですわ!」

「当然デス!」

3人でハグをし、気持ちを一つにする私達。2年前以上に強い絆で結ばれた私達から最高のパフォーマンスが出来る筈だ。

私、高海千歌とハルキ君以外の2年生がステージ裏で1年生と3年生を待っている時、梨子ちゃんが今の自分の状況を感慨深そうに話していた。

「不思議だな…内浦に引越して来た時は、こんな未来が来るなんて思ってもみなかった。」

「千歌ちゃんが居たからだね!」

梨子ちゃんは元々作曲とスランプを抜け出す事を目標にしていたが今ではA q o u r sに必要なメンバーだ。彼女と同じ様に、本当なら水泳部だけを2年生になっても続けていたであろう曜ちゃんも同意をする。

「それだけじゃ無いよ。ラブライブがあつたから、μ'sが居たから、スクールアイドルが居たから。曜ちゃんや梨子ちゃんやハルキ君が居たから今私達がここに居るんだと思う。」

曜ちゃんや梨子ちゃんを誘い、ハルキ君も協力してくれたのが始まりだったけど、その前から憧れのμ'sやこれまでの先人たちがスクールアイドルというバトンを繋いでくれたから…。夢も目標も無い普通怪獣から少し脱却出来たんじやないかと実感している。

「これからも色々な事があると思う。嬉しい事ばかりじゃ無くて、辛くて大変な事も沢山あると思う。でも私はそれを楽しみたい。全部を楽しんで皆と進んで行きたい!それがきつと輝くって事だと思うから!!」

決意した様に答える私はその言葉の意味を改めて思い返す。怪獣が現れ、理不尽に町

が壊される世の中になっている。今の学校の現状がこれから始まるライブの結果によつては変わらなにかもしれない。嬉しい事より困難な事の方がずっと多いかもしれない。でも挫けていても何も変わらないんだ。

「そうですね!」

「11人居るし!」

ダイヤさんと鞠莉さんも同意し、他のメンバーも皆が集まり大きな0を作る。ハルキ君と乙の分を私と梨子ちゃんが1つづつ追加をし

「11人だけじゃ無い……。行くよ?」

力強く準備はいい?と皆に問い0を1に変えてステージに?がる扉を開く。そうだが、11人じゃない…。今日は浦の星全校生徒の思いを背負っているんだ!!

私達Aqoursが浦の星を知ってもらう為に選んだ手段…。ミュージカルだった。

「今日は皆さんに伝えたい事があります!それは…。私達の学校の事、町の事です!」
私のこの言葉を皮切りに話を始める。

「Aqoursが生まれたのは海が広がり太陽が輝く内浦という町です。小さくて人もそんなに居ないけど、海には沢山の魚がいて一杯みかんが採れて…。温かな人で溢れる町。その町にある小さな学校が浦の星高校。そして今ここに居るのが……。全校生徒!!」

客席でカラフルなブレードを灯している場所を指差し、今日の為に来てくれた皆を紹介する。全校生徒は100人未満…。この学校以外に生徒数が少ない高校が幾つあるのか分からない。

「そこで私達はスクールアイドルを始めました。」

「秋葉原で見たμ'sの様になりたい…。同じ様に輝きたい!でも…。」

曜ちゃんが私のスクールアイドルを始めたきっかけを語る。高1の春休みに初めて見た衝撃と、自分が本当にやってみたいと思った素直な気持ちだった。

「作曲が出来なければ、ラブライブには…。出られません!!」

ダイヤさんがピシッと指を差しスクールアイドルの最初の関門である作曲が必要だと突きつける。音楽の教科書を持ち出し、何とかなるでしょうと樂觀視していたけどあの時の曜ちゃんは若干顔が引き攣っていた。

「そんな時、作曲の出来る少女…。梨子ちゃんが転校して来たのです!でもでも…。?」

「ごめんなさい!」

謝罪をする梨子ちゃんと、ガーンと擬音を発しながらずっこける私と曜ちゃんの小芝居に観客の皆が爆笑する。このシーンと同じ様に当時のハルキ君も転けていたのだ。

「東京から来た梨子ちゃんは、最初はスクールアイドルに興味が無かった。東京で辛い事があったから…。でも!」

「輝きたい!!」

私も梨子ちゃんも何かを目標に輝きたいという共通点。それがあつたからこそOursが始まったのだと今だから思うのだ。

「その思いは梨子ちゃんの中にもあつた。そして…。」

「オラ、運動苦手だし…。」

「ルビイ、スクールアイドルは好きだけど人見知りだから…。」

「墮天使ヨハネ!ここに降臨!!私の羽を広げれる場所は何処…?…?」

曜ちゃんに続き、今度は花丸ちゃん達1年生が登場する。3人共がそれぞれの悩みを持ちながら、加入してくれた。一番大切な事は出来るかではなくやりたいかどうか…。1年生だけでは無く、これは私自身にも改めて言い聞かせた言葉だったのかもしれない。

「こうして6人になった私達は歌を歌いました。町の皆と一緒に…。」

「そんな時、私達に東京のイベントに出ることになった。」

多くの人達に私達の町を知ってもらい、廃校の危機にある学校を救いたいと思って決行したPV制作。最初は魅力を理解していない為に難儀したが身近にいる人達皆の街が大好きだという事に気付き、スクールアイドル運営委員会の目に止まったのだった。

「未来ズラ〜!」

「人が一杯!!」

「ここが魔の都、東京!!」

「ここで歌うんだね…。頑張ろう!!」

当時と同じ様に1年生が東京の感想を口にする。皆が皆、翌日に行うライブの為に英気を養い、曜ちゃんが全員の気持ちを引き締める。

「でも、結果は0……。最下位。私達を応援してくれた人は0…。」

私後に他のメンバーも0を口にする。

「スクールアイドルは厳しい世界…。」

「そんな簡単では無かったです。」

ルビイちゃんと花丸ちゃんがスクールアイドルの現実を改めて伝える。PVが評価され、知名度も上がり、これなら優勝出来ると天狗になっていた私の鼻っ柱がボツキリ折られたその時の結果…。

「辞める? 辞める、千歌ちゃん…?」

私の耳元で追い打ちをかけるように曜ちゃんが囁く。私達の実力など無いも同然のパフォーマンスや上位の結果に入っても尚、悔しさに震えるスクールアイドルからも罵倒され皆の気持ちバラバラになる寸前だったあの日…。

「悔しい…。私、やっぱり悔しいんだよ! 0だったんだよ! 悔しいに決まってるじゃん

!!

あの時程本気で悔しいと思った事は生まれて初めてだった。自分の中で輝きたい、熱くなりたいと思ったものに出会ったのに何も成し遂げていないのだから。

「その時、私達に目標が出来ました。」

「0から1へ!!」

「0のまままで終わりたく無い。」

「とにかく前へ進もう。」

「目の前の0を1にしよう!」

梨子ちゃんに曜ちゃん、そして1年生が私達の決意をお腹の底から口にする。皆が悔しい思いをし、本気で今よりも上を目指したいと思ってくれたからこそ、ここまで続いているし感謝もしている。ストレイジのヨウコさんから貰った腕章に“0から1へ”と刺繍を施した物を今でも部室のホワイトボードに貼っている。その日の決意を忘れないように!

「そんな時、新たな仲間が現れました!」

「生徒会長の黒澤ダイヤですわ!」

「スクールアイドルやるんだって?」

「hallo Everybody!」

梨子ちゃんに続き今度はダイヤさん、果南ちゃん、鞠莉さんがビシツ！とポーズを決める。

「以前スクールアイドルだった3人はもう1度手を繋いで、私達は9人になりました!!」
果南ちゃんと鞠莉さんがお互いを思い合うが故のすれ違いを乗り越え、今のAquoursが勢揃い。そして梨子ちゃんは自分が乗り越える壁を、私達は初めてのライブに臨む事になった。

「こうしてライブ予備予選に出た私達。結果は見事突破!でも入学希望者は0…。」
ライブと学校の現状は別物だと言わんばかりに私達の間には0が立ち塞がる。

「忌まわしき0…。」

「また私達に突きつけられたのです…。」

善子ちゃんが言うように忌まわしく、呪いのように現れる0…。

「私達は考えました。」

「どうしたら前へ進めるか…。」

「どうしたら0を1に出来るのか…。」

果南ちゃん、ダイヤさん、鞠莉さんが苦悩する。先代のAquoursと始まりは違えど廃校を救いたいと考えていた私達。

「そして…、決めました。」

あの時から悩んだ末に私が…私達がたどり着いた結論は!!

「私達は」

「この町と」

「この学校と」

「この仲間と一緒に」

「私達だけの道を歩こうと…。」

「起きる事全てを受け止めて」

「全てを楽しもうと!」

「それが…輝く事だから!!」

曜ちゃんから鞠莉ちゃんが私達の結論を伝える。ライブの前に私自身が口にした様に、どんなに辛いことが起こってもそれを受け止めて楽しむ気概を持つ事だった。ハルキ君やZを含めた11人がA q o u r s では無い。私達の浦の星高校全員含めて、この学校のスクールアイドルなのだから!!

「輝くって楽しむ事。あの日、0だったものを1にする為に!」

私達に立ち塞がる物が0ならそれを乗り越える為に存分に足掻いてみせる。

「さあ行くよ?ー!!」

「2」「3」「4」「5」「6」「7」「8」「9」

そして…

「10」

全校生徒が高らかに10を叫ぶ。

完全なアドリブにステージにいるメンバーが1本取られたと笑う中、今度こそ私のあの掛け声をこれまでで1番の音量で言う。

「今、全力で輝こう！0から1へ!! Aquours…。」

【サンシャイン!!】

(♪ MIRAI TICKET)

そしてラブライブが終わり高校の入学希望を見た所、何と1人規模者が居ることが判明した。たった1だがされど1。今までの壁を乗り越えた事を実感し、私達はそれぞれの家に向かって帰ってゆく。

私達が0から作り上げたものって何だろう…? 形の無いものを追いかけて、迷って、怖くて、泣いて…。そんな0から逃げ出したって思っていた。でも、いつも心に灯る光がこの11人でしか出来ない事が必ずあるって信じさせてくれる。私達 Aquours はそこから生まれたんだ!! まだ叶えたい夢の一步しか踏み出せていない…。だからこそ私達の物語を叶えてみせると改めて決意を胸にしたのだった。

第34話 守るべきもの 前編

俺、夏川ハルキが今日この日をどれだけ待ちわびた事か!!!

「皆さん、お待たせしました!!これが我等の新型特空機…。キングジョー・ストレイジカスタム!!!」

!!
バロツサ星人が使っていた物を鹵獲し、俺達の兵器として作り上げた最強のロボット

「右腕には主力兵装となる、26口径750mmペダニウム粒子砲!!左腕には近接鉄拳攻撃システム、ペダニウムハンマー!!そして背部には多連装ペダニウム誘導弾発射システム!!射程距離は……何と100km!!まさに戦う武器庫!ロマンの塊!!!」

全身に多量の武器を備えた超装甲ロボット、これにときめかない男子は居ない。こんなアニメに出てくるような…否、それ以上に強そうな機体を操縦できる事に生きて良かったと実感する。

「くうう〜!格好良い!!」

「ハルキ、お前分かってるのか…?」

俺の心の声がダダ漏れになってるのを蛇倉隊長がジト目で咎める。

「隊長…俺、どうしても乗れないんですか？」

「お前の操縦技術じゃまだ無理だな…。」

現在の俺のスキルではキングジョーは扱えない事を改めて突きつけられる。部活を終え、毎日ストレイジに直行してシユミレーションをしても、キングジョーは思うように動かせない現状に肩を落とす俺にヨウコ先輩が笑いながら

「乗りたかつたら、もつとシユミレーションで良いスコアを出しなつて!!」

と背中を叩き活を入れる。

「それにしても惜しかったな…。千歌ちゃん達A q o u r s はラブライブの結果、次点だったんだろ？」

そうなんツスよと返す俺。A q o u r s はあの時の結果はベスト2。全国大会には行けず涙を飲んだ結果だったが学校としては入学希望者が現れ、廃校を回避出来る兆しが見えた事でメンバー全員はモチベーションを崩す事無く練習に励んでいる。

「あつ、ヤバい時間が…!?!」

俺は格納庫にある時計を見て慌てて、ストレイジから出る。

「隊長、俺何時でもイケますんでパイロットの件を考えといて下さいね。じゃあ行つてきます!!」

そうだ、今日は俺にとって大切な日だ。良くも悪くも何かが変わる大切な日になつて

しまう…。

俺、蛇倉シヨウタは急いでストレイジを後にするハルキの背中を見送るが、奴の慌てっぷりに疑問を持ったユカに理由を尋ねられる。

「ハルキ何かあるんです？」

「ああ、親父さんの命日だから、墓参りに行きたいんだと。」

そうなんです…。と呟くユカに続き

「お墓がある場所、遠いんです？」

とヨウコも話に加わる。

「確か山梨の深間市って言ってたぞ。お母さんも山梨で看護師として働いてるらしくて、久しぶりに会うらしい。」

その数時間後、深間市の採石場に地響きと共に大きな咆哮が聞こえたと連絡が入る。この戦いがハルキが今後戦う上でのターニングポイントになる事など、今の俺には思いもしなかった。

俺、夏川ハルキが今から8歳だった頃の話だ。子供の頃の俺は父さんと一緒に良くキャッチボールをしていた。近所にいる千歌ちゃんも混じって内浦の浜辺で3人で遊ぶ事も多く、優しい笑顔を絶やさないう人だった。

「あつ！ボールが…。」

父さんがボールを取りに行くのにも、毎回雛鳥の様に付いて行き、砂浜に転倒してしまふ。

「いつてええ…！」

「ハルキ君大丈夫!？」

千歌ちゃんが心配する中、父さんが無言で手を差し伸べる。

「ありがとう。お父さんの手、大きいね…。」

差し伸べられた掌の感想に父さんはニツと笑うと、俺と側に来た千歌ちゃんの手を合わせる。第一関節分も差がある大きな掌と体温を感じながら俺と千歌ちゃんの頭を撫でる父さん。

「ハルキも千歌ちゃんも大きくなった！」

昔はこゝろんなに小さかったのになど茶化す父さんに「無い無い！」と突っ込む俺達はその後も日が完全に沈むまでずっと遊んでいた。

そんな事を思い出しながら山梨にある母さんの実家の仏壇に手を合わせる。今やっている事の報告を心の中で話している最中、母さんが

「ハルキ、お父さんに似てきたね！」

と声を掛ける。箆笥の上に飾られている親子の写真を見た母さんが

「この頃の可愛いアンタは何処に行つたの？」

と写真の中の俺と今の俺を見比べる。「ここに居るよ、可愛い俺は。」と反論する俺だったが軽く流され、皆とやつてるスクールアイドルの事について話を振られた。

「千歌ちゃん達と楽しそうにやつてるみたいだけどどうなの？気になる子とか居るんじゃないの？」

と茶化される。

「この子とかどうなの？隣に写つてる子。可愛いしお淑やかな感じじゃない！」

我夢先輩達とバーベキューをした時の写真の中にいる、俺と一緒にピースをしている梨子ちゃんを指す。

「否、別に……。確かに可愛いけどギャップが凄いなだよ!？」

と目を反らしながら強引に話を切り上げる俺を微笑ましそうに見つめている。大人になつても恋愛事情は気になるのか、詳しく聞かせると言わんばかりに詰め寄る母さんに距離を確保しようと後ずさる俺だったが、突如聞こえる地響きにお互いの顔が険しく

なつた……!

「で、状況は?」

俺、蛇倉シヨウタはユカに現状を問うている。

「出現した怪獣はレッドキング。深間市内の採石場で、作業中に地底で眠っていた怪獣を目覚めさせてしまったみたいです。」

テレスドンの時と同じ様に、現在の人間の都合で出現したケースかと考察する俺だったが、出現場所を聞いたヨウコが

「そこってハルキのお母さんの実家じゃ……。」

とハルキの現在地と合致する事を口にする。

「ユカ、ハルキに連絡しろ。ヨウコはキングジョーで出撃だ。」

バコさんにキングジョーの状況を確認し最終チェック中だとの返答を受ける。ユカからの連絡を受けたハルキも現場に急行する事を耳に入れた俺は作戦室のディスプレイをじつと眺めていた。

俺、夏川ハルキはユカさんからの連絡を受け現場に急行して避難誘導をするように指

示を受ける。

「母さんも早く避難して。」

そう言つて実家を飛び出した俺は怪獣の出現でパニックになる市民の避難誘導を行う。

「なんでこんな時に出て来るんだよ!!」

見境なく暴れる怪獣に舌打ちをしながらも市民を避難させる俺だったが、何処からか聞こえる泣き声に視線を動かし、立ち尽くす男の子を見つける。それを見た俺は8年前のあの日の事を否が応にも思い出してしまふのだった…。

8年前、後にギーストロンと呼証される怪獣が内浦に現れた時に恐怖で泣きじやくる俺を父さんが抱きかかえ、母さんと合流させる。

「お前達は先に逃げろ。俺は一人でも多くの人を助ける。」

父さんの職業である消防士としてのプライドなのか、俺達と一緒に逃げようとはしなかった。

「でもまだいっぱい人がいるのに助けられる訳が…!」

自慢の父さんでも大きな怪獣が迫る中、一人で助けられる人数なんて高が知れてると言いかけた俺に

「お前が母さんを助けるんだ！父さんはお前や千歌ちゃんに住んでいる町の皆を限界まで助けたい！」

涙を流す俺にいつもの様に笑いかけた父さんは「大丈夫！また会える。」と良い残し、逃げる人を掻き分けて走って行った。

「お父さ〜〜ん!!!」

その後、怪獣は自衛隊によって倒されたが父さんとはそれから二度と会う事は無かった。

「止めろおおッー!!」

現実に戻った俺は立ち尽くす男の子を助ける為、Zライザーを構えベータスマッシュに変身する。

踏み潰そうとするレッドキングを払い除け前に進ませない様に仁王立ちをし、男の子の安全を目視で確認する。

「ありがとうウルトラマンZ!!」

男の子のお礼に俺達は頷き、レッドキングと取っ組み合う。ゴモラ以上の怪力を誇るがこちらも負けじと猛攻を仕掛ける。

「いきなり現れて、町を蹂躪するんじゃねえっ!!」

レッドキングの薙ぎ払う尻尾をがっちりホルドし、お返しと言わんばかりに地面に叩きつけボディプレスをお見舞いする。怪獣が現れるから皆が危険に晒されているんだ。普段よりもこの事で頭に血が登った俺は馬乗りになりレッドキングの顔面を乱打する。だが持ち前のタフさを持つレッドキングも俺達を振り払い反撃をする。力と力の真つ向勝負では分が悪いと判断したが、のそんな中キャノン砲を乱射しながらヨウコ先輩が駆るキングジョーが合流してきた。

「乙様、一緒に戦わせて下さい!!」

先輩の共闘に俺達は頷き、レッドキングの腹部に同時に拳を叩き入れる。ベータスマッシュに勝るとも劣らない力を持つキングジョーが居ればこちらの方が圧倒的に有利。俺達が接近戦、ヨウコ先輩はペダニウム粒子法を発射し援護をする。途切れない猛攻でこのまま押し切れると思っていたが突如別の方向から大きな地鳴りが響き渡った!

この調子なら押し切れる…。私、ナカシマ・ヨウコが勝算有りと判断した時、コックピット無いから緊急のアラートが鳴り響く。

【緊急事態！レッドキングがもう1体現れました!!】

カメラに表示された場所は現在地から約10kmはなれた大きな岩山。そこに出現したもう1体のレッドキングがこちらに向かって歩を進めて来ている。

「隊長!!」

隊長からの指示を仰ぎ

【今戦っているレッドキングはウルトラマンZに任せて、お前はキングジョーでもう1体を迎撃しろ。】

隊長の指示に従い私はZ様にこの場を離れる事を告げる。

「すみませんZ様、こちらをお願ひ出来ますか?」

レッドキングを抑えながら私の声を聞いたZ様は大きく頷き了承したと合図を送る。私はキングジョーのブースターをフルスロットルに回し岩山に急行した。

第35話 守るべきもの 後編

私、ナカシマ・ヨウコは岩山に現れたレッドキングを牽制するためペダニウム粒子砲を周囲に撃ち込む。だがこの行為にレッドキングは引き下がる事無くキングジョーに向かって拳を振るってきた。

「大人しくしなさい!」

レッドキング以上の鉄拳を誇るキングジョーの左腕、ペダニウムハンマーを奴の顔面に叩き込み後退させる。だがキングジョーの性能が良すぎるのか操縦桿の些細なブレでこちらの体制が取りにくい事に毒付く。

「コイツ、反応が早すぎる。ウインダムと全く違うじゃない!」

【エンジンの出力はウインダムの5倍、反応速度は3倍になっている。これが今出来る技術の限界なの。】

ハイスペックなものも考えものだと思いながら、この反応の良さを逆手に攻め込むのが得策と考えた私はレッドキングに向かって接近戦を仕掛ける。ハルキの事も言えないが、私自身もこの機体を完璧に操れる訳では無い。体勢の取りにくさを逆手に取り、装甲の硬さを活かして攻撃をする。

「乙様を助けに行かなくちゃいけないんだから大人しく倒れなさい!!」
 不慣れな操縦に不満をボヤきながらレッドキングの戦いは続いていった。

ヨウコ先輩にこの場を任された俺、夏川ハルキと乙さんは力で拮抗するレッドキングにアルファエッジの速度で倒す作戦を取っている。光のヌンチャクのリーチを使い、一足一刀の間合いを維持しながら攻撃を仕掛けるも、レッドキングの強靱なタフネスはそれを物ともしなかった。

“キシャーツ!!”

おまけに殴打や蹴り、尻尾での足払いとまるで人間が中に居るのではないかと思う程小器用な戦い方もする敵に一旦距離を取り構え直す。

「この野郎……。鬱陶しいんだよ!! ヨウコ先輩も助けに行かないといけないのにつ!!!」
 『落ち着けハルキ、頭に血が上り過ぎだ!!』

冷静さを取り戻せと乙さんからの指摘を受け、攻めに行きたい気持ちを堪えて数歩後ろに下がる。

『だがこのままじゃ埒が明かない……。ウルトラ痺れるあの技で行くぞ!!』

その提案に乗った俺は腰のケースから3枚のメダルをズライザーにセットした。

“コスモス、ネクスス、メビウス”

『ライトニングジエネレード!!』

Zライザーを上に掲げ、雷撃がレッドキングに直撃する。

「動きが止まった!」

止めを刺す為、今度はジャック兄さん、ゾフィー兄さん、ウルトラの父のメダルをセツトし巨大な光輪を奴目掛けて投げ飛ばす。

『M70竜巻閃光斬!!』

腹部をZ字に斬られたレッドキングは遂に力尽き、俺は一旦息を吐く。

「手こずらせやがって……。」

だがヨウコ先輩はもう1頭のレッドキングと交戦中の為、急いでこの場を後にした。

キングジョーを強引に殴り飛ばしたレッドキングを確認した俺達はガンマフューチャーに姿を変え、魔法陣からのワープと同時に飛び蹴りをお見舞いする。乱打するレッドキングの拳にカウンターパーンチを食らわしながら光の玉を発生させ眩い閃光で目眩ましをする。

『キシャーッ! シャーッ!!』

『シユワッ!』

閃光に怯んだ隙に光弾を腹部に叩き込み追撃をしようとした所、Zさんがとある疑問を口にした。

『妙だな……。あのレッドキング、背中にある穴から離れない。』

言われて見ればアイツは岩でできたあの穴から付かず離れずの距離を保ちながら俺達と戦っている。先程戦ったレッドキングと比べ積極的に戦おうとしない様子に違和感を感じた疑問は穴に太陽光が差し込み、中にある“ある物”が明らかになった事での理由が判明した。

「あれは……タマゴ……………」

レッドキングの外皮と同じ色と形をした大きなタマゴ…。

『そうか……。自分のタマゴを守る為に…………』

「ちよつと待つてくださいい!? それじゃ、さっきのレッドキングは自分の子供を守る為に……………」

あの怪物もただ暴れていただけではない。自分の大切な子供の為に外敵となるものを追い払いたかったただけな事に気づいた俺は頭の中が真っ白になってしまった。

「俺は…なんて事を……………!!?!!」

怪物のせいで俺の父さんが、家族が死んでしまった。それと同じ事をあのレッドキング達にしてしまった俺は、見た目が違えど“怪物”そのものじゃないか!!

『おい、どうしたハルキ?!』

Zさんが心配するも、その声は聞こえない。そして俺の気持ちに連動するかの様に胸

のカラータイマーが凄まじい速度で点滅し始めた。

“キシャー……アアツ!!”

「Z様?!”

外敵をこの場から排除しようとするレッドキングに棒立ちの俺達を助ける為、ヨウコ先輩がキングジョーの右腕をレッドキングに向ける。

「駄目だ!!”

「ペダニウム粒子砲……発射!!”

俺の叫びなど届くはずもなく、キングジョーの最強兵装、ペダニウム粒子砲が発射される。

俺はレッドキングの親子を守る為、光のバリアで粒子砲を防ぐが、自身のエネルギーも少なく、いつもと同じ様に力が出ない事からいとも簡単にバリアが貫かれ、胸に直撃してしまう。

“ジュワツツ!!”

レッドキングの無事を確認した俺達は首を振り、早く離れろと伝えるとタマゴを抱え地中を掘って姿を消した。

戦いが終わり、キングジョーが破損した事でレッドキングの追跡が出来ない事をヨウコから報告を受け帰投する様に命じた俺、蛇倉シヨウタは監視映像からの事実をユカに伝える。

「2匹のレッドキングはタマゴを守る為に動いていたんだらうな。」

「じゃあウルトラマンはその為に庇ったって事ですか？」

ユカの疑問に首を縦に振り肯定するも

「だが、レッドキングはタマゴと共に消えた。次に現れた時、再び人間を襲うかもしれないという可能性を残してな……。」

それが、10年後なのか1年後なのか、はたまた明日なのかは分からない。だが家族を、親を無くしたレッドキングは人間達を恨み続けるだろう。奴を助ける為に庇ったみたいだが、そんな事しても何の解決策にはならないし、こんな調子ではハルキの心が持たない事など分かり切っていた。

戦いが終わり母さんと合流した俺、夏川ハルキは家の事を手伝うよと提案するも、家も母さんも無傷だったし心配するなど笑顔を向けられる。否、手伝う気持ちなんて本当は建前だ。先程の戦いなんて忘れたいだけで……。

「アンタも仕事や学校があるんでしょ？」

これを言われたら帰らざるを得ない。今度はA q o u r sの子も連れて来てねと言
う母さんに肯定し、駅に向かって歩を進める。

「これからどうすればいいんだ……。」

あのタマゴの親を殺し、自分のこれまでやってきた事が本当に正しい行為なのかが分
からないまま帰路を目指すのだった……。

第36話 叫ぶ命 前編

私、桜内梨子は今日も屋上でA q o u r sの皆と練習を続けている。ラブライブ予選では次点という結果になってしまったが予備予選という俗に言う敗者復活戦の制度が設けられている事を知り、パフォーマンスのクオリティーを上げる為、体力作りやダンスの基礎からもう一度練習し直しているのだが…。

「俺も練習に参加させて下さい。ダンスは無理だとしても、筋トレやランニング位は…!!」

「それは別に構いませんが…。」

頭を下げるハルキ君にダイヤさんが動揺する中練習が始まる。誰よりも走り、筋トレをし、体幹を鍛えと今までマネージャーとしてのハルキ君を見ていた私達はこの行動に大きな疑問を持ってしまった。

「ハルキ君、どうしたんだろう…?」

ルビィちゃんが今日の彼の様子にとどうとう疑問を花丸ちゃんや善子ちゃんに聞く。

「心境の変化じゃないズラ?」

「だからって最初から飛ばし過ぎでしょ! 私達の倍はトレーニングしてるわよ?」

付いて来れたのは果南ちゃんだけだったが、呼吸を整える間も無く次のメニューを一人でごこなそうとするハルキ君に3年生全員が無理矢理止めて休憩させる。程々に休み、自主練として筋トレを続けている彼を見ながら私も千歌ちゃんも、曜ちゃんも話に加わった。

「昨日ニュースで見たけど怪物が1匹逃げたらしいんだって。」

「だからってここまでするかな…？あんな無理矢理動いてる様な様子だけだ。」

「それ以外に何かあったのかも…。何かは分からないけど…。」

千歌ちゃんの予想に曜ちゃんが違和感を持つも、予想も付かず見守る事しか出来ない私だったがハルキ君の携帯から蛇倉隊長から連絡が入る。

「もしもし？」

【おお、梨子ちゃんか。至急ハルキに代わってくれ！】

携帯をハルキ君に渡し、険しい声に変わった途端屋上から出ようとした時、私は咄嗟にハルキ君を呼び止めてしまった…。

「戦えるの!?!そんな無理して動いている今の状況で?」

このまま特空機に乗り、ウルトラマンとして戦って勝てるのか、無事に生きて戻ってくるのか不安に駆られた私はハルキ君にそう問いかける。内心、行かないで欲しいと思う私にハルキ君は

「大丈夫ツスよ……。俺が戦わないと街の皆が危険な目に合うから……。」

そう言つてこの場から逃げるように、取り繕つた笑顔と何処となく悲しい顔にも見える複雑な表情を見た私は胸が締め付けられる様な感覚になり、そのままへたり込んでしまふ。怪獣の場所を調べたら富士山の付近……。この場では小さく動いている物を屋上から私以外の皆が見ていた。

スクランブル発進を受けた俺、夏川ハルキはセブンを駆り背中に大砲を乗せた様な怪獣を抑え込んでいる。キングジョーと互角相当の怪力を持つ怪獣の馬力に対応できず成す術無く倒れる俺に、ウインダムを操縦するヨウコ先輩から下がる様に指示が下るが、怪獣が吐く口からのレーザーに俺達は共倒れになってしまう。

「……、行きますよ乙さん!!」

まるで乙さんでは無く自分に言い聞かせる様に俺は乙ライザーを構え、変身するのであった。

「変幻自在……。神秘の光! テイガ先輩、ダイナ先輩、ガイア先輩!」

『ご唱和下さい我の名を! ウルトトラマン乙 (ゼーラット)!!』

「ウルトラマン……乙 (ゼーラット)!!」

変身した俺達：否、俺はこの戦いを今すぐにでも終わらせたいと思い、ジャック兄さん、ゾフィー兄さん、ウルトラの父のメダルをZライザーにセットする。

『待てハルキ、いきなり大技を使うな!!』

Zさんの忠告を無視し、ライザーから光と竜巻を放出させる。

「M70 竜巻閃光斬!!」

竜巻の向かい風で光輪が加速し、怪獣の腹部に命中。その好機を逃す事無く、俺はゼステイウム光線を撃とうとした時……。

“グルル…。グルルルツ………!!”

「ハツ………!」

先日戦ったレッドキングの顔が頭を過り、俺は光線の構えを解いてしまう。

『どうしたハルキ!? ハルキツ!!』

Zさんが気を確かに持てと叱咤するも胸のカラータイマーが点滅してしまふ。まだ1分も経っていないのだ…。

“グルルツ!!”

動揺している俺達を見た怪獣は好機と思ったのか自身の背中の大砲から光の粒子砲を放射する。

“シュワツ!?”

直撃を避ける為、乙さんが光のバリアで粒子砲を防ぐもあまりの火力に耐えられず吹き飛ばされてしまう。その後、地面を掘ってその場から逃げる怪獣を俺達もヨウコ先輩もただ見逃す事しか出来なかった…。

戦いを終えた俺達はストレイジの作戦室で栗山長官の説教を聞いていた。

「怪獣を取り逃がすとは…。何たる体たらくだ君達は!!」

「すみません…。」

「すみません!!」

長官がキンググジョーの状況をユカ先輩に聞いた所、出力が一定数を超えるとオーバーヒートを起こしてしまうらしく、現在制御システムを構築しているらしい。

「怪獣の行方はどうなっている。」

蛇倉隊長が見失った怪獣は何処に居るのか尋ねるも、音波や熱源探知機に反応せず、仮死状態になって体力を回復しているのではないかと言う見解らしい。だが、ユカ先輩が怪獣のサンプルを保存している冷蔵庫から大きな肉塊を取り出し、机に置いた。

「うわっ！何だコレ!?!」

声を上げる蛇倉隊長、ユカ先輩以外の俺達全員が腐った肉の匂いに鼻を抑え悶絶する。何でこんな物を冷蔵庫に突っ込めるのか！

「採取したあの怪獣の表皮です。遺伝子情報から地球外生命体と判明しました。改造した痕跡も見られ、宇宙人が作った生物兵器かもしれません!!」

嬉々として語るユカ先輩の「生物兵器」と言う単語に俺は顔を顰める。

「生物兵器……。」

生き物を改造して戦わせる為に作ったと言う事だ。元になった怪獣の気持ちなど知る事も無く自分勝手な人達の手で……。人種も顔も知らない誰かに嫌悪感を持ちつつ、ヨウコ先輩が富士の近くにあの怪獣が居たのか疑問を口にする。だがその疑問には答えたくないと言う様に胃を押さえ、この場を立ち去ろうとする栗山長官に

「話した方が良いんじゃないですか？栗山長官。」

理由を知ってる隊長が栗山長官に伝える様に声をかけると、腹を括った長官が俺達にあの怪獣が現れた経緯を話した。

「あの怪獣はコードネーム、グルジオ・ライデン。防衛軍の監視下にあつた怪獣だ。10年前、休眠状態で地球にやってきたものを隔離し、我々は長年調査、研究をしてきた。」
ストレイジの特空機はあの怪獣のデータを元に開発され、休眠状態の場所から付かず離れずといったこの場所にストレイジを建設した事も隊長が補足をする。

「それがいきなり覚醒してしまった。被害が拡大する前に、キングジョーで『殺す』んだ!!」

キングジョーで殺す…。この言葉の意味を今の俺は受け止められないでいた。

「ウルトラマンZでも苦戦した相手ですよ。ガイアやアグルといった同等のウルトラマンの増援も期待出来ません。そんな簡単に……。」

現状の戦力では難しい事をユカ先輩は抗議するが

「Z様には頼らない……。」

意を決したヨウコ先輩がストレイジだけの力で倒す事を長官に宣言する。まるで「俺の」ウルトラマンとしての力が当てにされていない事に悔しさを覚えつつも、長官が去った事で今回の作戦の方向性が決まりつつあった。

整備室に立っているキングジョーを見た俺は帽子を脱ぎ、頭を掻き毟っている。

「どうしたらいいんだ……。」

地球を守る組織が綺麗な事ばかりじゃ無い事だって分かっていた。こんなケースだって早かれ遅かれあって、尻拭いをさせられる事も覚悟していたし今回の作戦に反対な訳では無い。怪獣を倒すといういつもやっている事の筈だ……。でも

「どうした、悩んでるの?」

「いや、そんなんじや無いッスよ……。」

ぶつきらばうにヨウコ先輩に返すが

「Z様、大変だよね……。」

と言う言葉に耳を傾ける。

「毎回怪獣と戦ってくれて……。だからこそ、私達が強くならなきゃいけない。自分達の力で平和を、地球を守るようにね。」

本当は俺もZさんに頼る事無く地球を守る事が正しいのかも知れない。

「ヨウコ先輩、本当に怪獣を倒す事が平和を守る事なんスか？昨日のレッドキングも卵を守ろうとしただけです！ライデンだつて誰かに改造されて無理矢理暴れているだけじゃ……卵が孵つて……!!」

俺の言葉を遮りヨウコ先輩はあのレッドキングの今後の行動について予測を立てる。

「卵が孵つて、餌を求めた子供が街に出て来たら……。アンタはどうするの？」

「それは……。」

言葉に詰まってしまう。ストレイジとして、人々を守る為に戦つて倒す事が正しい筈なのにその分切り切っている答えが出ない……。

「アンタや千歌ちゃん、梨子ちゃんが大人になって、その子供が産まれてるかもしれない。その子やその周りの人達皆を守る事が私達の一番大切な任務なの。今この世界に怪獣の居場所はない。可哀想だけ……。」

人間だけを守れば良いのかをヨウコ先輩に問おうとした時、ヨウコ先輩は力強く

「だからこそ……ちゃんと言いたいんだ。命を奪う責任を……。」

真つ直ぐな目で俺を見るヨウコ先輩は俺に無言で問うて来た。お前にもその覚悟があるのか、今一度持つて戦えるのかを……。

ヨウコ先輩から覚悟を問われた俺はストレイジのトレーニングルームでひたすら体を動かしていた。

「ハア、ハア……ハアツ……!!」

これまで倒した怪獣を。ギガス、ネロンガ、ゴモラを。

「ハア……、ハアツ、ウツ……。」

ペギラをエレキングを、コツヴを、デスドラゴをキングオブモンスを、レッドキングを……。暴れたかった訳では無い。思い返せば人間のせいで目覚めて、怒っていただけなのも知れない。

「父さん……。そうだ、俺も!!」

父さんが身体を、命を張って俺達家族を守ってくれた。俺もそんな父さんを見て誰かを助けたいと思ってストレイジに入隊したんだ。初心を思い出した時、怪獣の出現を知らせる警報が鳴る。

「よっしやあッ!!」

出撃前に梨子ちゃんに言われた自分が戦えるのかも、ヨウコ先輩が言つてた命を奪う責任も覚悟も固まった。俺は頬を叩き自分に喝を入れ、作戦室に向かつて歩を進めるのだった。

俺、蛇倉シヨウタは車の廃棄処理場に現れ、貪り食うグルジオ・ライデンをモニター越しに見ながら高笑いしている。

「良く寝て良く食べるってか……。もう元気一杯だなー」

「何笑ってるんだッ！ 出撃させる!!」

俺の地球ジョークに怒った栗山長官に、尻拭いをさせやがってと思つたが、ユカが雄叫びを上げながらキングジョーの制御システムが完成したとの報告をする。早速作戦を全員に伝え、先ずはグルジオ・ライデンを都市から引き離す事を優先事項とする。

「データを見るに背中の大砲は連射出来ないと推測されます。」

ユカの予測から、この大砲を撃たせ、キングジョーのペダニウム粒子砲で相殺する。だがこちらでも2発が限界な事も伝え、ライデンの大砲に付いてある核が弱点であり、表皮も硬く無い事から接近してもう一度粒子砲を撃ち込むという手法で倒すプランを遂行する事を決定した。

「（後はアイツ次第なんだがな……）」

ハルキが怪獣を倒す事が出来なくなっている以上、この作戦の成功率はさほど高くは無いだろう。ヨウコが言っていた様に、ウルトラマンの力に頼る事無く怪獣を倒せるかどうかで、この先訪れる脅威に地球人が立ち向かえるかの1つの判断材料になるのだな……。

「今度こそ勝つよ。覚悟は決まった?」

ヨウコ先輩が俺、夏川ハルキに戦えるかを聞いてくる。

「オッスー大丈夫ツス……。俺もやれます!!」

良い返事だと返され、俺はウインダムの操縦桿を力強く握る。体も動かし、自分の中で覚悟を決めた。今度こそやってみせると誓い、作戦を開始する。先ずはヨウコ先輩のキングジョーが先行し、グルジオ・ライデンの出現場所に到着した後、機体を4つに分離させたセパレートモードに移行する。

腰部兼コックピットのコアシップから指揮を執り、頭部のヘッドファイターに装備されているペダニウム誘導弾をライデンに向かって発射。胸部と腕部を型取った戦車、ブレストタンクから750ミリ誘導弾を打ち込みつつ接近、ペダニウムハンマーを顔面に

叩き込み転倒、脚部のレッグキャリアーで人的被害が出ない荒地に輸送し投げ飛ばす。
「タンクモードに移行！」

掛け声と同時に分離したパーツが巨大な戦車に合体し、ライデンの口からのビームを
躲しつつ全ての兵装を一斉射する。

「グルル…、グルアアーツ!!」

雄叫びと同時にライデンの背中から光が灯り、キングジョーに向けられる。

「ヨウコ先輩、今です!!」

「ペダニウム粒子砲、発射ツ!!」

ライデンの砲撃とペダニウム粒子砲が相殺し、お互いに膠着状態となった!

【今だー!】

【ハルキ、行け!!】

「チェストローターツツ!!」

ユカさん、隊長の合図と同時に上空で待機していた俺はウインダムに装備されている
鋼刃鞭、拘束用アンカーの計4つをライデンに巻きつける。

「今です、ヨウコ先輩!!」

微動だにしないライデンを倒す為、ヨウコ先輩にバトンを託す。

「良くやった!キングジョー、ロボットモード!!」

先輩の掛け声と共にタンクモードが人型のロボットに変形していく。ロボットモードになったキングジョーがライデンに向かって歩を進めようと前進した瞬間…。

「グルルアアアツツ……!!」

拘束後、微動だにしなかったライデンが突如暴れ出し、アンカーを力任せに引き抜いてしまった!

「マズい!?!」

ライデンの口からのレーザーがキングジョーに発射される瞬間、俺のウインダムが盾になり、キングジョーへの損傷を最小限に防ぐ。だが転倒したウインダムのコックピットへライデンが鋭い牙を突き立てたのだった。

「うわっ、どうなってんだ!?! 動けよッ!!」

コックピット内での激しい衝撃に呻きながら牙を突き立てたライデンを振り払おうとするも、一向に反応しないウインダム。

「ハルキツ、脱出しろ!! ウインダムを食っているぞ!!」

ウインダムの電力をライデンは捕食しようとしている事を知らされた俺は、ズライザーを構える。今度こそ絶対に倒すという覚悟を決めて……。

第37話 叫ぶ命 後編

『行けるな？ハルキ!!』

「オッス!!」

ウルトラマンZに変身した俺、夏川ハルキはZさんの問いかけに力強く答える。命を奪う責任を誰かに押し付けず、背負っていく…。今度こそやってみせると心に決め、グルジオ・ライデンの攻撃を躲しながら自身の拳を打ち込む。

『バリアで防いでるだけじゃ勝てないからな…。』

「全部躲してこつちも攻撃ッス！」

ヒット&アウエイを心掛け、ライザーを片手に斬撃も絡めて追撃をする。

“グルル……”

動きが鈍ったライデンに大きく距離を取り、ゼステイウム光線を発射しようとした時
…。

「あっ……………」

ライデンの目から大粒の涙が流れていた…。

“グルル……、グルアアアツ!!”

何でこんな事に…、殺さないでと叫んでいる様な咆哮に胸が痛くなってしまふ。

「……………ッ！倒すんだ…、今度こそ絶対ッ！！」

十字に腕を組むという、簡単な行為が出来ない。アルファエッジから、乙さん本来の姿に姿が変わり、カラータイマーも高速で鳴り続ける。

“グルアアアッ！！”

ライデンの背中の砲撃が放たれようとしても身体が動かず棒立ちのままの俺達の前に、ヨウコ先輩のキングジョーが駆けつけた。

「乙様、下がって下さい！！」

俺達にそう伝え、背中の誘導弾でライデンの視界を封じながらフルスロットルで背中の核に0距離でペダニウム粒子砲を向ける。

「ペダニウム粒子砲…：発射ッ！！」

核ごと粒子砲を照射しライデンの身体が爆発する。だがキングジョーの装甲は傷一つ付く事は無く、俺達の前に姿を現したのだった…。

「よっしやあ〜！！」

ユカと栗山長官の勝利の雄叫びが作戦室に木霊す。

「怪獣を倒せる段階になってきたか…。」

俺、蛇倉シウタも本来なら素直に喜びたいが、それが出来ない状況に複雑な気持ちになっている。

「(ハルキは無理だったか…。)」

最後に止めを刺せなかったあの様子…。今度こそ本当に駄目みたいだったな。ライデンは人間が地球を守る上で突破しなくてはならない最初の壁。ウルトラマンの力はまだ必要だというのに…。

「(しっかりしろよ…。)」

知らず知らず握りしめた掌にくつきりと爪痕が残っていた。

「倒せなかった…。」

戦いが終わりヨウコ先輩がキングジョー越しに俺、夏川ハルキの生存の安否を確認する声を聞きながら呆然と立ち尽くしている。自分の中で覚悟を決め、戦った筈なのに実行出来ていない。否、覚悟なんて本当は出来ていなかった。無理矢理身体を動かし、その勢いのまま乗り切るというおめでたい考えのまま戦ったに過ぎない。

「どうしたらいいんだっ！怪獣を倒す事が平和を守る事なのに…。命を奪う事に責任を

持たなくちゃいけないのにつ……!!」

ライデンの目を見た時、きつと助けを乞うていたのかもしれない。ヨウコ先輩の事も正しいが、別の方法だつてきつとあるかもしれないのに…。

「どうしたらいいんだ……。あああッ!!!」

自分の手を叩きつけながら叫ぶも誰も答えてくれない。自分の心が挫けたのを自覚した俺はきつと虚ろな顔をしていた筈だ……。

第38話　メダルいただきます　前編

俺、ウルトラマンZはハルキと気持ちが合わなくなった事に頭を悩ませていた…。

この間までいい感じにやれてたのに…。

「ああつウルトラモヤモヤする。何なんだこの気持ちは…。」

自分の気持ち処理しきれないがハルキの事が自分以上に気になる。どうしたらいいんだろうか……。

俺、夏川ハルキは学校の体育館で筋トレをしている。

ストレイジではグルジオ・ライデンとの戦いが終わり、ストレイジでは緊急でキングジョーのメンテナンスが行われている最中だろう。

「91. 92. 93. 94. 95ッ……!!」

梨子ちゃんがカウントして、もう少しで腕立て伏せ100回に到達する時に

「よっ！元気にしてるか？」

「ヨウコさん！」

ヨウコ先輩の声にビックリした梨子ちゃんが声を上げ中断されてしまう。

「いやあ、休養を取れって言われて凹んでるかと思いきや元気そうじゃん。」

ヨウコ先輩の言う通り、俺はグルジオ・ライデンとの戦闘後、蛇倉隊長から数日の休養を命令された。

「オツス…、でもモヤモヤしてて……。」

「そっか、まあ立て続けに色々あったもんね。」

休養を取れと言われても休んでいるだけでは物足りない。体じやなく気持ちの問題な事は自覚しているし、蛇倉隊長はそれを見抜いての休養を取らせたのだと命令された時に考える。昨日はヨウコ先輩もゆっくり休めと言い、今日は手に持った大きなレジ袋を渡し「オーバーワークはするなよ。」と言い残し体育館を後にした。

「梨子ちゃん、もうそろそろ切り上げるから部屋にある財布とバイクの鍵を取ってきてくれないツスカ?」

今日は家まで送るツスよ?と言った所、了承してくれた事で部屋に入っていく。俺は時間短縮の為、先に体育館の電気を切り、ストレッチを始めようとした時に背後に人の気配がした為振り向く。

「(誰も居ない…)」

ヨウコ先輩も帰り、A q o u r s のメンバーは俺の様子を最後まで気にしてくれた梨子ちゃんしか残ってない無言だ。そして俺の背中を何者かが触り振り向くと……。

「……………!? 怪獣ッ!!」

暗くて分かりにくいのが全身が錆色の体に大きな口、触覚の先に目玉が付いた人型の怪獣が力無く立っていた。

「お腹…空いた……………」

「えっ? 喋った!?!」

随分可愛らしい声で喋り、人を襲う様子は無さそうな印象を持ったその怪獣は何か匂いを嗅ぐ様な仕草をする。そして……

「……な、何か凄く嫌な予感が……………」

怪獣の視線の先には俺の腰にあるメダルケース…。クンクンと鼻?を鳴らしながら俺に接近してくるソイツは我慢の限界が来た様に俺のメダルケースを奪おうとしてきた。

「うおっ! 何だお前!?!」

以外にも力が強い怪獣を引き離す為に俺も必死の抵抗の末突き飛ばす。だが腰のキイキイと鳴る違和感に視線を落とす。

「(ケースが空いてる……………!)」

最悪の事態を想定した俺は怪獣の顔、正確には口元を見ると……………。

「お金ッ! いただきます!!」

「ジャラジャラジャラッ!!」

「うわあああああッッッッ!!」

メダルが9枚食われてしまった……。

「こんばんは！ボク、カネゴンって言います。」

ハ「あつ、どうも。夏川ハルキッス。」

「桜内梨子です……。」

律儀に自己紹介をした怪獣、カネゴンに対し、俺と梨子ちゃんも返す。が……

「……じゃなくて！何で食べちゃったの!? 『あれ』は食べ物じゃ無いよ!」

「何食べたの……?」

ピンと来てない梨子ちゃんに

「メダルだよ!!メダル!!」

と血相を変えて説明する。

「えっ!?!ちよつと大丈夫なの?」

梨子ちゃんも事の重大さを理解したのか慌ててるも

「だって、お腹が空いて死にそうだったんだもん……。ボクね、お金が食べ物なんだ!」
と能天気に見えるカネゴン。

「メダルだったの！いいから早く出して!!」

俺はカネゴンの口をこじ開け嘔吐させようとするが頭を齧り付かれて失敗してしま
う。

「しゃあつ!!これで吸い出してやるッ?!」

「い、嫌だ!怖い怖い!!」

「大丈夫、お餅と同じだから。詰まった時には掃除機で吸い出すのが一番なのよ!」

怖がり、逃走するカネゴンを掃除機を持った梨子ちゃんと一緒に体育館を駆け回
るも、それを奪われまたも失敗…。

「ならこれだ!」

「くっ……アツハツハツハ!!」

「メダル、磁石で引つ付くの?」

梨子ちゃんのツツコミに堂々の無視をし、磁石の引力を使い、強引にメダルを出そう
とするも、カネゴンが暴れる為失敗……。

「……はい吸って。吐いて。ハルキ君もやるッ!!」

「これ便秘に効くからね。一気に出してしましましょう。はい吸って吐いて。」

「吸って、吐いて。吸って……おととととと!!」

便秘解消のヨガで無理矢理出す事を決行し、梨子ちゃんから冷めた目で見られたが

応実施。だがカネゴンがバランスを崩した事で俺と梨子ちゃんも共倒れこれで3連続失敗し打つ手が無くなってしまふ。

「あああつ！どうしよう!!落ち着け俺くくくつ!!」

作戦が失敗し、頭を抱え蹲る俺に

「あのお金、そんなに大事な物だったの…?」

とカネゴンが尋ねる。

「メダルね?ウルトラメダル。」

「オッス!Zさんから貰った大切な物なんだ!!」

説明をするとカネゴンが思い出すように

「Zさん…?もしかしてあれかな…、胸にZって書いてある大つきな人?」

と俺に聞き、知ってるのかを聞く。

「さつきメダルを食べた時、バババツと頭の中に見えたんだ!ハルキが、ウルトラマンZってやってた。」

知り合いかを聞かれ

「まあ、知り合いつていうか…。」

「まあね……。」

若干ドヤ顔になる俺と、同意する梨子ちゃんにカネゴンは頭に?マークを浮かべてい

た。

「ウルトラマンZはM78星雲、光の国から地球に来た正義のヒーローツス。」

Zさんの事を説明し、カネゴンが何で俺がZ（ゼーット！）って叫んでたのかを聞く。

「最初は俺と一緒に戦ってたんだけど怪獣にやられちゃって…。」

「ええっ!？」

カネゴンが俺とZさんがゲネガークに敗北した話に驚くも一緒に戦う事を決めた事を話す。

「最初に変身したのはアルファエッジ。ゼロ師匠、セブン師匠、レオ師匠の3人のメダルで変身するんだ。」

「師匠多くない?」

アルファエッジに使う師匠の話の多さにカネゴンは突っ込むも説明を続ける。

「俺も思った…。得意技は秘伝の宇宙拳法。俺も空手やってるからこの姿が一番動きやすいんだ!」

「素早い攻撃を活かしてこれまで色んな相手を倒してきたわよね。」

俺が一番動きやすい形態を話しつつ、梨子ちゃんもこれまで多くの怪獣を倒してきた事を補足する。

「つて事は…ハルキ、ウルトラマンなの？」

カネゴンの中にあつた疑問に梨子ちゃんがズッコケかけるが、俺は「まあ、半分はそうかな。」と答える。二人で一人だし…。

「凄い！ハルキ、ウルトラマンなんだ!!」

テンションが高くなるカネゴンを俺は宥めるが咳払いをした梨子ちゃんが強引に話を变えるのだった。

「そ、そうだ。ハルキ君がウルトラマンになった日の翌日に私はこの学校に転校してきたのよね。」

私、桜内梨子はウルトラマンZの話に興奮するカネゴンの気を逸らすためA q o u r sの始まりを話す事にした。

「(ナイス梨子ちゃん!)」

カネゴンに気づかれないようにハルキ君と互いにサムズアップを交わす。

「あの頃はピアノのスランプになつてた所を千歌ちゃんがしつこくスクールアイドルに誘つてきて…。」

「俺がその度に何度も梨子ちゃんに謝つてさ。」

千歌ちゃんが誘う、私が断る、ハルキ君が謝る、曜ちゃんが引きつった笑いを浮かべる。ループを何度も何度も繰り返すが、作曲の為に海に潜り、「海の音」を聞くことが出来た！

「ピアノに向き合う切っ掛けを作ってくれた千歌ちゃんと曜ちゃんと一緒にスクールアイドルを結成して、最初は学校でライブをする所から始まったのよね。」

スクールアイドルとして輝くためにもファーストライブをする事になった私達だったが

「理事長の鞠莉ちゃんも無理難題を出してくれたよなっと思ってツスよ。体育館を満員にしなくちやいけないのに、俺達の学校の生徒、100人前後しか居ないんすから。」

ハルキ君がこの時の最大の試練に苦い顔をする。廃校寸前の学校の体育館を満員にする事は生半可な事では無かったが、千歌ちゃんの熱意に感化された私達は折れる事無く準備を進めていった。

「マネージャーのハルキ君と4人で練習して、チラシも配って成功させるって思ってたのに、当日は大雨で人数も全く集まらなくて…。その状況で停電だからね!？」

ダンス練習やチラシ配りと、やれる事を全てやり、当日に臨んだが、悪天候で人も居ない状況、ブレイカーも落ちる三重苦に陥り心が折れそうになったけど…

「でもハルキ君と、ライブを見に来てくれたストレイジの隊員さん達が電力を復旧させ

てくれて、千歌ちゃんは歌い続けたからこそ最悪な状況を打破できたのよね。」

「今考えたら人が居ない理由が先走って15分前に始めたのが原因だったツスからね。俺達全員、時計を気にして無かったのがビックリだったツスよ?」

「いやいや、満員になる前提でステージでライブする気だったからね。でもこのファーストライブが成功して私達二年生4人でA q o u r s が始まったの。ううん、Zも含めて5人でね。」

ハルキ君とあの時の事を思い出しながら笑い合う。カネゴンも

「凄い!スクールアイドル楽しそう!!」

と興味を示してくれたけど、突然お腹を抑え呻き始めた。

「どうした?」

「なんか…苦しい……。」

心配するハルキ君と苦悶するカネゴンを見ながら、メダルを食べた事で食当たりを起こしたのでは無いかと思っただつたがカネゴンの大きなくしゃみと共に3つの「何か」が勢いよく口から飛び出した!

「痛つて〜え!」

「何か」がハルキ君の目にクリーンヒットし悶絶するがその正体を見た私が彼に目視させる。瞼を抉じ開けて……。

「おお！メダルだ!!」

痛み対する苦痛とメダルを取り戻せた事に対する喜びが混ざり、形容し難い表情になっていたが、吐き出されたメダルがゼロ・セブン・レオのメダル3枚だけな事にハルキ君は疑問を持つ。

「もしかして、ハルキ君がZの事を話したからよ！きつと。」

アルファエッジに使用するメダルの事と、特徴を話した事で回収出来たとするなら他の2つの姿のエピソードを話せば事態が解決するのではないかと提案すると、早速次の説明に入ろうとハルキ君は気合を入れる。しかし……

「お〜い、ハルキ居るか?」

体育館の入口で蛇倉隊長の声が聞こえ、私の心臓が止まりそうになった!

「隊長?!マズイ!カネゴン動かないで、喋らないでよ!!」

ハルキ君はカネゴンに動かない事を伝え、店員の営業スマイル宜しく蛇倉隊長に挨拶をする。カネゴンが蛇倉隊長に怪獣と認知されたら終わりだ……!!

「どうだ、休養は取れてるか?デカイくしゃみが聞こえたけど……」

気さくな笑顔でハルキ君と会話する蛇倉隊長に

「オッスー!まだ花粉飛んでるのかな……?」

とカネゴンのくしゃみをゴリ押しで通す。

「(そんな時期はもう過ぎたじゃない!?)」

そんな春の時期の症状を今になって出すのかと思っていたが

「そうか、お大事にな。」

と蛇倉隊長の天然? 発言にズッコケそうになりそうになる自分をどうにか抑える。

「あと、あれは…何だ?」

「(ヤバイ…!?)」

蛇倉隊長がカネゴンに疑問を持ち、ハルキ君が焦って私にアイコンタクトを送る。そして私は咄嗟に

「寝袋なんです! ハルキ君、時々これに頭を入れて寝てるんですよ!!」

「(うわあ、カネゴンの口にガッツリ頭入れてるじゃん…。仮にもスクールアイドルなのに…!?)」

寝袋の体でカネゴンの口を無理矢理開け、実演をする私。ハルキ君の内心は知らないが普段全くないような冷めた視線を私に向けていた…。

「そ、そうか…。まあ早めに帰れよ。あんまり2人で長居すると色々噂されるぞ?」

噂されると言うワードに私とハルキ君の顔が赤くなるが後ろめたい事はしてない事は語気を強く言った事で蛇倉隊長は了承してくれた。どうやら様子を見に来てくれたらしく、差し入れでお菓子を渡してくれて体育館を後にするのだった。

「あれ良いな……。」

俺、蛇倉シヨウタは寝袋……否、カネゴンを思い出しながら呟いた。アイツは無害な怪獣だから排除する理由はないと思い、俺もストレイジの戦力を思い返す。

「セブンガー、ウインダム、そしてキングジョー。漸く怪獣を倒せる所まで来たか。」

「……までの戦力を揃えるのに苦労したと思いつつ、現戦力最強のキングジョーの活躍を期待する。」

「特空機3号、キングジョーストレイジカスタム。元々の性能が高い宇宙ロボットがベースなだけに桁違いの能力だ。」

ウルトラセブンやギンガ、エックスとこれまでウルトラマンを苦戦させたロボット怪獣の代表格だ。

「この調子で開発が進めばその内ウルトラマンを超える力も……。」

その為の1歩がこの機体だ。それと同時に懸念材料も多いがな……

「もつと頑張つて貰わないとな……。」